女はみんな女神

ジーン・シノダ・ボーレン著
村本詔司＋村本邦子訳

女性ライフサイクル研究所

GODDESSES IN EVERYWOMAN:A NEW PSYCHOLOGY
OF WOMEN by Jean Shinoda Bolen.
copyright @ 1984 by Jean Shinoda Bolen
All rights reserved.
Japanese translation rights arranged with
John Brockman Associates, Inc. in New York
through The Asano Agency, Inc. in Tokyo.

母、メグミ・ヤマグチ・シノダ医学博士に捧げます。
母は次のことを決心してくれました。
すなわち、自分と違い、私が女の子として生まれたことを幸運に思い、
一人の女として望むどんなことでもできるように感じながら
大人になってゆくのを助けることを。

日本語版への序文　医学博士　ジーン・シノダ・ボーレン

『女はみんな女神』はまず合衆国で一九八四年に出版され、心理学、ユング理論、女性学、神学、音楽、詩、舞踏、美術、神話学を含むさまざまな分野に大きな影響を及ぼしました。今日でもそうです。しかし、もっとも重要でいまもなお続いているのは『女はみんな女神』を読む女性たちにたいする効果です。女性たちは本書を読むことで、ありのままの自分でいることを理解され、肯定され、力づけられたように感じるのです。本書で用いられているさまざまな概念はいまではおなじみのものになり、多くのサークルで日常会話の一部になっています。

本書で意図しているのは、女性たちが二つの強い影響、すなわち、自分のなかにある生得的なパターン（あるいは女神元型）と、どう振る舞うべきかについての家族や文化の外からの期待によっていかに人格が形成されるかの女性心理学と、女性たちのあいだの多様性と複雑さを説明する心理学を記述することです。本書では、女性が自分自身の元型的深みを認知し、それに従って生きるように励ましています。そのように生きることで初めて、人生は当人にとって意味あるものとなるからです。そこから、詩的あるいは神話的な人生について認識が生まれ、それが創造性を鼓舞し、日常生活に聖なる次元が存在することが理解できるようになります。

私が書いている事柄を理解するのに必要な神話はすべて、本書に書かれています。（他の神話にも似た神々や人間が登場しますが）私はギリシア神話を用います。私が教育を受けた西洋の伝統はギリシアの思想が基盤となっているからです。

私は日系アメリカ人です。祖父母たちは二〇世紀の初頭にアメリカ合衆国に移住してきました。祖父（ミノスケ・ヤマグチ医学博士）と両親（ジョゼフ・シノダ医学博士とメグミ・ヤマグチ・シノダ医学博士）はアメリカで教育を受け、私は文化的にはアメリカ人です。しかしながら、私は今日まで人種的にはアウトサイダーできました。このために私は、肌の下、すなわち心における自分自身と他の人々との相違点と類似点に注意を払うようになったのだと思います。

日本の女性の皆さんは本書に自分自身の姿を見出されるでしょう。そして、自分の強さ、美しさ、知性、傷つきやすさを強力に肯定されるはずです。本書は男性にとっては、自分にとって大切な女性、特に鋭い認識力を持つ女性の人生を理解し、また、ある特定の女神元型が自分自身の女性的性質のイメージであるかもしれないことを洞察する手段になります。心理療法家たちは、女神たちの元型が患者を理解するうえで、共感的でかつ治療的に有効な手立てになることを見出されるでしょう。本書は、ユング派とフェミニズムの両方の視点に立って書かれています。

私は最初に最後の章「女はみんなヒロイン」を書きました。この章で本書の核心となる考えが述べられています。私たちの誰でもが、自分の人生の物語と個人神話の中では主人公（ヒロイン）なのです。私たちは自分が何者であるのか、そして自分が何者になりうるかに関して文化がどのような影響を及ぼしているかをできるだけ知ることが大切です。なぜなら、問われているのは、私たち一人ひとりの生き方だからです。

サン・フランシスコにて

一九九〇年九月

まえがき　グローリア・スタイネム

本書を読んでいただきたいのは、特にかつての私のようにこのテーマにたいして反発をおぼえている人々である。結局のところ、父権制の過去の時代に由来するさまざまな神話の女神は、私たちが現在のいろいろな現実を分析したり、男女が平等の未来に到達するどのような助けとなりうるのであろうか。

私たちは信頼のおける友達がすすめる本なら買ってみたくもなる。ちょうどそれと同様に、本書の原稿を読んで得た私のインスピレーションも著者と知り合いになったことからきている。

ジーン・シノダ・ボーレンに私が会ったのは、彼女がERAを支持する精神科医という組織をつくろうとしていたときである。これは、法のもとでの平等な扱いが女性の精神的健康にとって欠くことができないということを仕事の経験から信ずるにいたったアメリカ精神医学界の男女のグループである。だからこそ彼らはアメリカ憲法の男女同権修正条項（ERA）を支持していた。

どんなグループも、多くのエネルギーを注ぐことから生まれてくるが、ジーンは明らかにこのグループの有能でインスピレーションに富むオーガナイザーであった。彼女はこのようなグループを心に描いて、自分の同僚たちの想像力をかき立てていただけではない。彼女は細かな手続きをふみながら、忙しくて自暴自棄ぎみの人々を一つのまとまりのある全国的な組織へと結集するという仕事を最後までやりとげることもしたのである。そのプロセスのなかで彼女は注意深く、世代や人種や職業の違う人々の橋渡しをし、正確で意味のある情報を研究し、どんなに激しく逆らっている敵対者にも人間としての尊厳と何らかの新しい理解を経験できるようにとりはからった。

行動しているジーンを見ていると、彼女がいまここにおいて働いている実践的で経験をつんだオーガナイザーであることは疑いえない。心の優しい革命家であり、人々の心を癒し、事態を冷静に受け止める精神は、フェミニズムの革命がよりよい世界をもたらすであろうということを証言してくれる。彼女は、わが国のもっとも特権的で影響力の強い専門家組織の内部に変革のセンターをつくるうえで力を貸してくれた。この専門家の組織を構成している八九パーセントは男性であり、さらに圧倒的多数が白人で、しばしば依然としてフロイトの男性優位の理論の制限を受けているのだが、そのなかで女性として、しかも少数民族の女性としてこの仕事を成し遂げたのである。アメリカ精神医学界の歴史が書かれるとき、それはおそらく精神科医間での一般的な社会的責任の歴史が書かれるときであろうが、この一人の小柄で、優しく小声で話す女性の行動が、重要な力となるのではないかと私は考えている。

『女はみんな女神』の初めの数章を読んだとき、ジーンの信頼のおける声が、明確で飾り気のない散文のどのセンテンスからも聞こえてくるような気がした。しかし、女神についての私の思いのなかには、ロマンティックな、あるいは警告するような予定調和を暗示するものがまだあった。集合的無意識にこのような元型を位置づけるユングやユング派の人々の考えは、あれかこれか、男性的か女性的かという両極性で終わり、そのために男も女も全体性が経験できなくなり、女はこのスペクトルにおいて必然的により報われることが少ない方へと追いやられ

てしまうのである。それだから、これらの元型が他の人々にどのように用いられるのか、あるいは私たち女性自身がその考え方を模倣し自分の限界を受け入れるように促されるのではないかと、心配したのである。

私の心配を吹き消しただけでなく、新しい理解の道を開いてくれたのは、それぞれの女神についての説明であった。

一つには、さまざまな観点から吟味し、組み合わせができる七つのコンプレックス元型があり、そしてそれぞれの女神が数えきれないほどのバリエーションをもっていることである。そのために、父権制社会に住む女性たちを苦しめている、処女か娼婦、母親か恋人、という単純な二分法が越えられるのである。なるほど、一人の力強い男に関わっているということだけで、それが誰かがわかるような女神もいる。結局、女神たちも私たちと同様、父権制のもとで生きていたのである。しかし彼女たちは、言い訳をしながらにせよ、あからさまにせよ、自分の力を示すこともしているのである。また、性的で知的なものから、政治的で精神的なものにいたるまで、自律性のモデルはいろいろとある。ごくまれだが、互いに助け合い、結束を強める女たちの例もある。

第二に、これらのコンプレックス元型は、一人の女性が置かれている状況で何が求められているか、また彼女自身のどの部分が未発達であるかに従って、結合し、呼び出すことができる。どのような女性の役割モデルに従って生きるかを垣間見るだけでも女性たちの人生にかなりの衝撃を与えるのが事実だとすれば、女性のなかにある元型を活性化し、呼び出すとしたら、それはさらにどれだけ深いものとなろうか。

最後に、自分を一人の女神あるいは何人かの女神の型にはめたり、それに限定せよということは何も言われていない。女神たちは相寄って、人間のさまざまな性質をあますところなく構成しているのである。実際どの女神も、一人の偉大な女神が断片化したために生じてきたのである。この偉大な女神こそ、かつて父権制以前の時代に少なくとも宗教と想像力において生きていた人間の女性の全体的な姿である。おそらくそのときもいまと同様、全体性をイメージすることがそれを実現する第一歩だったのであろう。

最低限言えるのは、これらの元型的な女神が、多くの行動パターンとパーソナリティ特性を記述し分析するうえで重宝な一種の速記法であるということであり、最大限言えるのは、女神たちが、私たちの必要としている自分のなかのもろもろの力や性質を思い描き、呼びおこす方法だということである。詩人で小説家のアリス・ウォーカーが『カラー・パープル』できわめて感動的に措いているように、私たちは神をイメージし、自分が危機を乗り越えて成長していくのに必要なもろもろの性質をその神に授けるのである。

本書は、それが与えてくれる認識の瞬間にこそ最高の価値がある。著者はそれを「ああ、そうか！」の瞬間と名づけている。それは、私たちがものごとを理解しそれを内面化し、自分自身が何を経験してきたかに気づき、それが真実であるがゆえに信頼できると感じ、それからもう一歩すすんで、「そうだ、そういうわけなのだ」という理解にいたる洞察の瞬間なのである。

読者はみなそれぞれ違ったふうに何かを学んでいくであろう。そしてこの「ああ、そうか！」は私たち自身のものでなくてはならない。私にとっては、最初の「ああ、そうか！」はアルテミスのことを読んだときに訪れた。アルテミスは他の女たちと結束し、自分自身は母親に似たくないと思いながらも母親を救った女神である。私は、自分が父権制社会では稀なこの元型の例であることにたいして誇らしく思うと同時に、やっとわかってもらえたと感じた。し

かし私は、自分がアルテミスのような、暮藤することにたいする恐れのなさとか、真の自律性はまだ発展させていないということも知った。ベルセポネーは、私たちのたいていが十代の頃に経験する感情を映し出している。彼女の強さも弱さも、もう一つの「ああ、そうか！」であった。特定の男性のものであれ、社会のものであれ、誰か他の人のイメージや期待が自分に投影されることを待ち望むという、よく知られた能力、いろいろなアイデンティティを「試してみる」という能力がそれである。アテーナーに典型的な、たえず読書をしたり自分の頭のなかで生活するという習慣や、ヘーラやデーメーテールやペルセポネーの散漫で受容的な意識とか、アプロディーテーが人間関係や創造的な仕事において持続性よりも激しさや自発性を重視するというのも、なるほどと思わせた。

他の女神たちは、自分自身に欠けていて発展させる必要がある性質や、周りの人々に見られる不可解な性質を理解するうえでいろいろと教えてくれる。たとえば私は、ヘスティアーが日常の雑用を瞑想的なやり方で処理するということから、日常的な雑用というものは、より象徴的で精神的な面から見ると、物事の順序を整理し分類することなのだということを学んだ。私はアテーナーとアルテミスが研ぎすまされた意識をもっていることを羨ましく思い、視野の周辺にあるいろいろな事柄に「注目したり」、あるいはそれらの本質を直観することを学んできていない男性のことがよくわかるようになった気がした。この二人の自立した女神の例から、葛藤と敵意は必要なものであり、積極的な意味すらもっており、個人的な意味で受け取るべきではないということを学んだ。

著者は元型をセンスよく分析している。それによってこれらの元型は、単純な搾取からなる父権的な枠組から解放され、誇張されてはいるが信ずるに値する現実の女性として私たちのもとに返されている。

これからは、たとえば、全体がその部分を合計したものよりはるかに大きく、各人が音楽の即興演奏をしている場合のような、魅力的で自発的な会話をしたいと思うとき、私はアプロディーテーの性質のことを考えるであろう。炉端と瞑想の生活に退きたいと思うとき、ヘスティアーが案内をしてくれるであろう。自分自身や他の女性たちが生きていくうえで葛藤に直面するだけの勇気に欠けるときはアルテミスのことを思い出すのである。

現実が先か、現実をイメージすることが先かは、もはやどうでもよい。ジーン・ヒューストンが『人間に可能なこと』のなかで次のように述べている。「私は神話がいままで一度も存在したことがないのに、いつもおこっている何かだと思ってきました。」

不平等な社会から私たちが自分を解放していくにつれて、神々と女神は同一のものになっていくのかもしれない。その間、本書は私たちがとるべき新しい道を提示してくれる。それは新しい物の見かた、成長の仕方である。

読者は、自分のなかに現実を呼びおこす神話を見出すであろう。

（ジャーナリスト、雑誌『ミズ』創刊者、元編集長）

女はみんな女神　もくじ

日本語版への序文　ジーン・シノダ・ボーレン――3
まえがき　グローリア・スタイネム――4
はじめに　どの女の心のなかにも女神がいる――8
1　内なるイメージとしての女神――17
2　女神を活性化する――27
3　処女神としてのアルテミス、アテーナー、ヘスティアー――36
4　狩猟と月、競争者と姉妹の女神アルテミス――45
5　知恵と工芸と策略の女神、父の娘アテーナー――68
6　炉と神殿の女神、乙女のままの伯母ヘスティアー――93
7　傷つきやすい女神としてのヘーラー、デーメーテール、ペルセポネー――113
8　結婚、コミットメント、妻の女神ヘーラー――119
9　穀物、養育者、母の女神デーメーテール――143
10　乙女と冥界の女王、母の娘ペルセポネー――167
11　錬金術の女神としてのアプロティーテー――188
12　愛と美の女神、創造的な女性と恋人アプロティーテー――196
13　どの女神が黄金のリンゴを得るか――220
14　女はみんなヒロイン――232
謝辞――248
付録　本書に登場するギリシア神話の神々と人間――249
付録　七人の女神一覧表――252
注　記――253
訳者あとがき――263
著者紹介――266

はじめに

どの女の心の中にも
女神がいる

どの女性も、これから展開していく自分自身の人生の物語においては主人公である。精神科医として私はこれまで何百もの個人的な物語を聞いてきた。そしてどの物語にも神話的な次元が存在するということがわかった。心がくじけたり、思うようにいかなくて精神科医のもとに来る女性もいれば、自分がもっと理解と変化を必要とする状況にはまりこんでいることに目ざとく気づいてやってくる女性もいる。どちらの場合も、女性たちは治療者の助けを求めているように思われる。自分自身の人生の物語において、よりよい主人公、ヒロインになるためにはどうしたらいいかを知るためである。しかしそのためには、女性は自覚的に選択をおこなって自分自身の人生をつくる必要がある。女性は文化のステレオタイプが自分たちに及ぼしている強力な影響に気づかずに生活してきたが、それと同様、自分の行動や感情に影響を及ぼしている自分のなかの力にも気づかないでいるのかもしれない。これらの力を私は本書でギリシアの女神たちの姿をかりて紹介していくことにする。

これらの強力な内的パターン、あるいは元型は、女性たちのあいだに存在する大きな違いの原因となっている。たとえば、幸せだと感じるために一夫一婦制、結婚、あるいは子供を必要とし、その目標が達成されないと悲しんだり、怒り狂ったりする女性がいる。彼女たちにとって、伝統的な役割は意味のあるものなのである。このような女性たちとはっきりと違うのは、自分にとって重要である目標を達成しようと努力するときに、自分が自立していることをもっとも重要と見なすタイプの女性である。その他、感情の強さと新しい経験を追い求め、その結果、一つの人間関係あるいは創造的な努力を経験したかと思うとまた次へと移っていくタイプの女性もいる。かと思えば、孤独を求め、自分の精神性こそいちばん大切なものであると考えるタイプの女性もいる。一つのタイプの女性にとっては人生を幸福にしてくれるものが、他のタイプの女性にとっては無意味であるかもしれない。これは、どの「女神」がはたらいているかによるのである。

さらに、一人ひとりの女性のなかにも多くの「女神」がいる。その女性の心が複雑にできていればいるほど、彼女のなかで多くの女神たちがはたらいている可能性が高くなる。彼女のなかのある部分にとっては意味あることでも、他の部分にとっては無意味なのかもしれない。

「女神たち」を知ることで女性は、自分自身および男性や女性、両親、恋人それに子供と自分との関係を理解できるようになる。これらの女神のパターンは、同じものがなぜある女性たちにとっては行動へと促したり、さらには駆り立てたり困らせたり、あるいは満足させたりするのに、他の女性にとってはそうでないのかをも理解させてくれる。

「女神」についての知識は、男性にとっても役に立つ情報となる。女性のことをもっと理解したいと思っている男性は、女神のパターンを用いることで、さまざまなタイプの女性がいること、そして女性から何が期待されるかを学ぶことができる。女神のパターンはまた、複雑な性格の女性や矛盾しているように見える女性を理解する助けにもなる。

「女神」についての知識はまた、治療者が、女性患者の対人関係や心のなかの葛藤についての洞察を得るうえでも役に立つ。女神のパターンはパーソナリティの違いを説明するのにも重宝である。何が原因で心理的な困難と精神医学的な症状が生じているのかについての情報を提供してくれるからである。実際それは、女性がある特定の女神のパターンに従ってどのように成長していくことができるかを教えてくれる。

本書は、女性心理学の新しいパースペクティブを述べるものであるが、それはこれまで三千

年以上にわたって人間の想像力のなかで生きつづけてきた女性のイメージ（ギリシアの女神たちから示されるものだが）に基づいている。この女性心理学は、一つの「正しい」モデル、パーソナリティのパターン、あるいは心理学的構造にはまる女性を「正常な」女性と定義するあらゆる理論と異なっている。女性たちのあいだに見られる正常なバリエーションの多様性を観察することに基づいている理論だからである。

女性に関して私が学んできたものの多くは、仕事のなかで得られたものである。私は精神科医でユング派の分析家として働いており、カリフォルニア大学の精神医学の臨床教授として、サンフランシスコのC・G・ユング研究所のスーパーヴィジョン分析家として訓練をつみ、教えている。しかし、本書で私が展開する女性心理学は、単なる仕事上の経験だけに由来するものではない。私が知っていることの多くは、女性としてのもろもろの役割を生きてきたということからきている。つまり、娘であり、妻であり、息子と娘をもつ母親だということである。私の知識はまた、女の友人たちとの会話や女性グループでの経験からも生じてきた。両方とも女性が自分のさまざまな側面を互いに映し出し合う状況であり、私たちは自分が他の女性の経験に反映されているのを見て、気がつかなかった自分のある側面、あるいは私たちが女性として共通にもっているものに気づいたのである。

女性心理学についての私の知識は、歴史のこの時点において女性であるという経験からも生まれてきた。一九六三年に私は精神医学の勉強を始めた。その同じ年の二つの出来事から一九七〇年代の女性運動がおこった。第一に、ベティ・フリーダンが『新しい女性の創造』（大和書房）を出版した。他の人間のために、そして男性を通じて生きてきた女性の空虚さと不満を表現したものである。フリーダンはこの不幸の源泉をアイデンティティの問題として記述し、その核心は成長の阻害もしくは回避にあるとした。彼女の主張によれば、この問題は文化によって助長されている。そこでは、女性は人間として成長し、自分の潜在力を実現しようという根本的な欲求を受け入れたり満足させるということが許されていないからである。彼女の本は文化のステレオタイプ、フロイトのドグマ、マスコミによる女性操作にたいして警笛を吹きならした。彼女の提示している時代がやってきたのである。それは抑圧された怒りの流出へと結びつき、女性解放運動が誕生した。後には女性のための国際組織であるNOWが組織されるにいたる(1)。

第二に同じ年、一九六三年にジョン・F・ケネディ大統領の女性の地位に関する委員会が報告書を出版し、合衆国における経済組織の不平等さが立証された。同じ仕事をしていても女性は男性と同じだけ支払われておらず、女性は雇用の機会も昇進も否定されていた。このまぎれもない不公平は、いかに女性の役割がおとしめられ、制限されてきたかをさらに示す証拠となった。

かくして私は、合衆国が女性運動の門出に立っていたときに、精神医学の道へ進んだのであった。私の意識は一九七〇年代に向上した。女性にたいする不平等や差別に気づき、男たちによって決められた文化の水準が、ステレオタイプの役割を忠実に守るか拒否するかによって女性に褒美を与えたり罰を与えたりしているということを学んだのである。その結果、私は北カリフォルニア精神医学会とアメリカ精神医学会の少数のフェミニスト仲間に加わったのである。

女性心理学への両眼的洞察

フェミニズムの視点を獲得しつつあった時期に、私は同時にユング派の分析家を目ざしていた。一九六六年に精神医学の医局勤務を終えた後、私はサンフランシスコのユング研究所に訓練プログラムを志願して入った。分析家の免許を取ったのが一九七六年である。女性心理学についての私の考えがこの間に着々と形成され、フェミニズムの洞察がユング派の元型心理学によって形を与えられたのであった。

ユング派の分析家とフェミニストの精神科医とのあいだを行きつ戻りつしながら、私は二つの世界の橋渡しをしていたようである。ユング派の同僚たちは、政治の世界や社会でおこりつつあることに、それほど悩まされてはいなかった。女性運動の重要性については、ほとんどの人たちが漠然と感じているにすぎないようだった。精神医学をやっているフェミニストの友人たちは、私のことをユング派の分析家と考えるとすれば、それを私の秘教的・神秘的興味と見なすか、あるいは女性問題とはほとんど関係のない二次的な専門分野と見なしていたようだ。私自身は、行きつ戻りつしているうちに、ユング派とフェミニズムという二つの視点を一緒にするならば、新しく深い理解が生じるということを発見した。この二つは女性心理学への両眼的な洞察を提供するものである。

ユング派の観点は私に、女性たちが内部からの強力な力、すなわち元型によって影響されているということに気づかせてくれた。この元型がギリシアの女神たちに人格化されるのである。フェミニズムが私に理解させてくれたことは、いかにして外界の力、すなわち（社会が女たちに従うように期待している役割である）ステレオタイプがある女神のパターンを強化し、それ以外のパターンを抑圧しているかということである。その結果今日では、私はすべての女性を「二つのもののあいだにある女性」と見るようになっている。つまり女性たちは内部から女神の元型に、外部から文化的ステレオタイプにはたらきかけられているのである。

自分に影響する諸力にいったん気づくようになると、女性は知識をもつことで力を得る。「女神たち」は目に見えない強力な力であり、行動を形づくり感情に影響を及ぼしている。女性のなかの「女神たち」についての知識は、女性の意識を向上させるための新しい領域である。どの「女神たち」が自分のなかで支配的な力となっているのかを知ることで、女性は、次のことについて自己認識を得ることになる。まず第一に本能の確かな強さ、第二に重要事項と能力、第三に他の人々からは勧められることのないような選択を通じて個人的な意味を見出す可能性についての自己認識である。

女神のパターンは男性との関係にも影響を及ぼす。なぜある女性がある男性との関係で困難や親しみを経験するかについても、それによっていくらか説明がつく。彼女が選ぶ男性は、世の中で権力をもち成功を収めている男性であろうか。障害がある創造的な男性であろうか。少年のような男性であろうか。どの「女神」が女性をある特別なタイプの男性へと駆り立てる見えない刺激となっているのだろうか。このようなパターンが人間関係の選択と安定性に影響を及ぼすのである。

関係のパターンも特定の女神たちの面影を帯びる。父と娘、男きょうだいと女きょうだい、

姉と妹、母と息子、恋人と恋人、母と娘、といったそれぞれのペアは、ある特定の女神にとって自然であるような配置を表している。

どの女性も、それについて学び、ありがたく受け入れるべき「女神」から与えられた天賦の才をもっている。あらゆる女性には「女神から与えられた」義務もあり、変化するためにはそれを認識し、乗り越えなければならない。根底にある女神元型によって決定されたパターンを生きぬくことに抵抗しようと思えば、そのようなパターンが存在していて、それが自分を通じて成就されようとしていることに気づかなければならないのである。

洞察の道具としての神話

神話のパターンと女性心理とのあいだに私が見出した最初の重要なつながりは、ユング派の分析家であるエーリッヒ・ノイマンの『アモールとプシケー』であった。ノイマンは女性心理を記述する手段として神話を用いた。ノイマンがするように神話と心理学的注釈を組み合わせると強力な「洞察の道具」になると私は思った。

たとえば、ギリシア神話のアモールとプシューケーでは、プシューケーの最初の仕事は、ごちゃまぜになった大きな山から種を選り分け、穀物のそれぞれの種類ごとに別の山をつくっていくというものだった。この仕事にたいする彼女の最初の反応は、あとの三つにたいしてと同じように絶望だった。私が着目したのは、さまざまな重要な仕事に悪戦苦闘している私の女性患者たちにこの神話がぴったりだということだった。一人は大学院生だったが、期末のレポートに圧倒され、どうやって山のような題材を整理していけばいいのかわからなかった。もう一人は抑うつ状態の若い母親で、自分の時間がどこへいったかを考え、重要事項を選り分け、絵をつづけていく道を見出さなければならなかった。二人の女性ともプシューケーのように、自分ができると思われる以上のことを求められていたが、それは自分で選んだ道でもあった。彼女らはどちらも自分たちの状況を反映する神話から勇気を得た。その神話は、彼女らが新しく要望されていることにどのようにしたら到達できるか洞察を与え、彼女らの闘いにより大きな意味を与えたのである。

女性が自分の取り組んでいる何かに神話的次元があるということに気がつくと、自分のなかにある深い創造的な心の琴線が触れられ、鼓舞される。神話は感情と想像力を喚起し、人類が共通に受けついできたものを構成しているもろもろのテーマに触れる。ギリシア神話（何千年後になってもなお語られている他のすべてのおとぎ話や神話もそうであるが）は、今日でも個人的に意味のあるものである。そこには、誰もが共有している人間的な経験に関する真理の円環が存在するからである。

神話が解釈されると、結果として知的もしくは直観的に把握された理解がおこってくる。たとえ理解されなくとも、神話は私たちが思い出す夢に似ている。それは象徴的に重要なものだからである。神話学者のジョセフ・キャンベルによれば、「夢は個人化された神話であり、神話は脱個人化された夢である」ということになる(2)。神話がいつも何となく私たちに馴染み深く感じられるのも不思議ではない。

夢が正しく解釈されると、夢みた人は「ああ、そうか！」という洞察のひらめきを経験する。その夢がどんな状況のことを言っているのかが明らかになるからである。夢みた人は直観的にそのことを理解し、その認識を心にとどめることになる。

誰かが神話の解釈にたいして「ああ、そうか！」と反応するとき、その特定の神話は、個人的に重要な何かを象徴的に指し示している。その人はいまや何かをつかみ、本当のことを見抜いたのである。このより深いレベルでの理解は、私が神話を語り、それからその意味を解釈しそれは心の琴線に触れる一種の学習である。その場合、女性の心理に関する理論が、自己認識、もしくは聴衆の男女が関わっている女性についての重要な認識になるのである。

私が女性心理学のセミナーで神話を用い始めたのは、一九六〇年代の末から一九七〇年代の初め頃であった。初めはカリフォルニア大学医学センター、ラングリー・ポーター精神医学研究所で、それからサンタ・クルスにあるカリフォルニア大学とサンフランシスコにあるC・G・ユング研究所で、次の十五年間は講演を通じてシアトル、ミネアポリス、デンヴァー、カンザス・シティ、ヒューストン、ポートランド、フオート・ウェイン、ワシントンD・C、トロント、ニューヨーク、それに私が現在住んでいるサンフランシスコ湾岸地区で聴衆から反応をもらい、自分の考えを発展させる機会を得た。どこで講演をしても反応は同じだった。臨床的素材と個人的経験と女性運動から得られた洞察を結びつけて神話を用いると、新しく、かつより深い理解が得られたのである。

私はプシューケーの神話から始めた。これは関係を第一にする女性に訴えるところのある神話である。二番目に語った神話は、克服すべき障害やマスターしなければならない課題があるときに、圧倒されるよりはむしろ挑戦されるように感じて、その結果、学校や外の世界でうまくやることができる女性を描いたものである。その意味をそれまで私は発展させてきたのだ。この神話のヒロインはアタランテーで、二つの役割をうまくこなし、自分を打ちのめそうとする男たちを出し抜く狩人で、ギリシア神話では狩と月の女神であるアルテミスに比べられるほどの美しい女性であった。

このような教え方をするともちろん、他の女神たちはどうなのかという質問が出てくる。それで私は女神たちの守備範囲がどの程度のものであり、何を表現しているかを書物を通じて調べ、思いをめぐらした。そして私自身「ああ、そうか！」の反応を経験し始めることになった。たとえば、嫉妬深く復讐に燃えている女性が私の治療室に入ってくる。すると私は彼女のなかに、怒りに燃え、おとしめられたヘーラーがいるのがわかる。ヘーラーは結婚の女神でゼウスの妻である。夫の女遊びに挑発されてこの女神は、「もう一人の女」を見つけ出しては殺そうという努力を何度も繰り返したのである。

この患者は夫の浮気をつい最近知ったばかりの女性であった。それ以来彼女は、もう一人の女のことが頭にこびりついて離れなかった。いろいろと復讐の空想をし、その女のあとをつけ、仕返しをしてやろうという思いに捕らわれて、狂わんばかりであった。ヘーラーに特徴的なことだが、彼女の怒りは夫には向けられなかった。夫こそ彼女に嘘をつき、裏切っていた張本人であるのに。夫の裏切りがヘーラー的反応を呼びおこしていたということを理解するのは、患者にとってきわめてためになった。彼女はいまや、自分がなぜ怒りに「駆られて」いると感じ、それがどのように自分にとって破壊的であるかということを理解した。そしていま必要なのは、復讐のヘーラーになることよりはむしろ夫に、彼の行動に直面させ、自分たちの結

婚の問題を真正面から見つめることであると理解できたのである。

思いがけないことに、その頃、ある女の同僚が、私の支援していた男女同権修正条項に反対だと言った。私は怒りをおぼえ傷ついたが、そのとき突然、その状況にたいする「ああ、そうか！」の洞察が訪れた。私たち一人ひとりの心のなかに何人もの女神がいて、いくつかのタイプがぶつかり合っていたのである。その瞬間この問題について私は、元型的な大姉御（ビツグシスター）で女たちの保護者であるアルテミスのように行動し、感じていたのである。これと対照的に私の相手はアテーナーのようだった。アテーナーは、ゼウスの頭から完全に大人の姿で飛び出してきて、それ以後、英雄たちのパトロンを務める女神で、父権制の擁護者であり、まさに「父の娘」なのである。

別の機会に私はパティ・ハーストの誘拐の記事を読んでいた。地下世界の主ハーデースにさらわれ、レイプされて囚われの身になったペルセポネーの神話が再び、しかし今回は新聞の大見出しで、演じられているのがわかった。当時、ハーストはカリフォルニア大学の学生で、現代の裕福なオリュムポスの神々の箱入り娘であった。その彼女が誘拐され（あるテロリスト集団（SLA)のリーダーの手で地下世界に連れこまれたということだが）暗室に閉じ込められ、何度もレイプされたのである。

まもなく私は「どの女のなかにも女神がいる」ことがわかりかけてきた。どの「女神」がいるかを知ることで、ドラマティックなことだけでなく日々の出来事がより深く理解できるようになることに気がついた。たとえば、一人の女が食事を準備し家事をおこなう時、どの女神が影響を及ぼしているのだろうか、というぐあいにである。

ある単純なテストがあるということに私は気がついた。夫が一週間家を留守にしているとき、女性は自分のために食事をどのようにし、家にどういうことがおこるだろうか。ヘーラー型の女性、あるいはアプロディーテー型の女性が一人で夕食を食べるとしたら、それは悲しく佗しいことであるに違いない。たぶん、厚紙の容器からコテージチーズを取り出して食事をすませるであろう。一人でいるときは、冷蔵庫や戸棚のなかにあるもので間に合わす。夫がいるときにこしらえるご馳走とはたいへんな違いである。彼女は彼のために料理をするのである。もちろん、自分が好きなものよりは彼が好きなものをつくる。彼女はご馳走をつくる良妻（ヘーラー）であり、もちまえの母性的性質から彼の世話をしたくなり（デーメーテール）、彼を喜ばせることをし（ペルセポネー）、あるいは彼にとって魅力的な女性であろうと努める（アプロディーテー）からである。しかし影響を及ぼしている女神がヘスティアーであるなら、自分が一人のときも自分のためにテーブルをセットしてご馳走をつくることだろう。そして家は普段どおりきちんと片づけられているはずである。もし他の女神が家事に動機を与えているならば、夫が戻ってくる直前まで家のなかはほったらかしにされているはずである。ヘスティアー型の女性は、たとえ男がいなくても自分のために新鮮な花を活けようとする。彼女の住まいが居心地よく感じられるのは、彼女がそこに住んでいるからであり、誰か他の者のためにそうしているからではない。

次に、「他の人々もこのように神話を通じて女性の心理を知ることを、有益で重宝だと見なすだろうか」という問いが湧いてきた。それにたいする答えは、私が「どの女のなかにも女神がいる」について講演をしているときに訪れた。聴衆は、洞察を得る道具として神話を用いることにゾクゾクした興奮をおぼえ、刺激され、好奇心をそそられた。これは人々が女性を理解

する一つの方法であり、感動を呼びおこす類の方法であった。これらの神話について語っていくにつれて、人々は私が話していることを理解し、感じ、それに耳を傾けるようになった。私が神話を解釈すると、人々は「ああ、そうか！」の反応をしたのである。男も女も神話の意味を個人的真実として理解し、自分たちが以前から知っており、またいま気づきつつある何かを確かめた。

私は専門家の組織の集まりでも話し、精神科医や心理学者たちと議論した。本書のいくつかの部分は、まず国際分析心理学会、アメリカ精神分析アカデミー、アメリカ精神医学会、アメリカ精神医学会女性研究所、トランスパーソナル心理学会で話されたものである。私の同僚たちはこのアプローチが臨床的に有益であることを認め、「女神」を理解することで得られる性格パターンと精神医学上の症状にたいする洞察を評価してくれた。彼らのたいていの者にとって、これはユング派の分析から聞かれる女性心理学に関する最初の説明であった。

ユング派の同僚たちしか気づいていなかったが、私はユングの概念のいくつかとは異なる女性心理学に関する新しい考えを提唱し、また元型心理学によってフェミニズムのもろもろの観点を統合しようとしていた。また現在もそうしようとしている。本書は一般読者のために書かれてはいるが、精通したユング派の読者なら、もろもろの女性元型に基づく女性心理学が、ユングのアニマとアニムスの理論の一般的妥当性に挑戦している（第3章「処女神」を見よ）ことに気づかれるであろう。これまでにも多くのユング派の著者が、元型的存在としてのギリシアの神々や女神たちについて書いてきている。私は彼らの知識と洞察に恩恵を被っており、彼らの研究を引用している（注記を見よ）。しかし、七人のギリシアの女神を選び、心理学的にどのように機能するかに従って彼女らを三つの集団にカテゴリー化するにあたって、私は心のなかのもろもろの葛藤を理解する手段だけでなく、新しいタイプ論をもつくりあげた（本書全体がそうである）。このタイプ論のなかで私は、ユングの理論ですでに記述されている集中した意識と分散した意識に気づき、さらに、第三の様態としてアプロディーテー意識という概念をつけ加えた（第11章「錬金術の女神」を見よ）。

さらに二つの新しい心理学上の概念が導入されているが、十分には考察されないままになっている。なぜなら、もしそれをさらに展開していくと、本書のテーマからはずれるからである。

第一に、「女神」は、なぜ女性たちの行動とユングの心理学的タイプの理論のあいだにいくつかの不一致点があるかを説明してくれる。ユングの心理学的タイプによれば、人はあれかこれかのどちらかだと考えられている。つまり、態度が外向的か内向的か、物事を評価するスタイルとして感情を用いているか、それとも思考を用いているか、物事を認識するにあたって直観を通じてであるか、それとも感覚を通してであるか、というぐあいにである。さらに、これら四つの機能（思考、感情、直観、感覚）の一つがもっとも意識的に発達していて、頼りになると考えられている。それはどれであれ、それと対をなすもう一方のものが、もっとも信用がおけないか、もしくはもっとも意識されていないと考えられている。ユングの「あれかこれか、およびもっとも発達しているものと、もっとも意識されていないもの」というモデルの例外となるものは、ユング派の心理学者であるジューン・シンガーとメリー・ルーミスによって記述されている。私は、女神元型が女性たちにおける例外の存在を説明してくれるのではないかと考えている。

たとえば、ある女性が「ギアを変え」、自分のある一面から他の一面に向かうとき、彼女は一つの女神パターンからもう一つの女神パターンに移行すると考えられる。たとえば、ある場面では彼女は細かな点にまで注意が行き届く外向的で論理的なアテーナーであるが、別の状況では、「静かな水が深く流れている」内向的で炉を守るヘスティアーなのである。多くの面をもっている女性は、ユングの言うどのタイプに属するのか決めるのが困難であるが、それはこのような女神パターンの移行がおこるからである。あるいは彼女は美容上の細かな点には鋭く気がつく（これはアプロディーテーの影響によるものである）のに、ストーブがまだついていたり、ガスのメーターがほとんど壊れていることに気がつかないかもしれない（この種の詳細な点はアテーナーなら見落とすことはないであろう）。一つの機能（この場合では感覚）がどうして高度に発達していながら無意識であるのかという逆説は、どの「女神」が支配しているかという点から説明される（第14章「どの女神が黄金のリンゴを得るか」を見よ）。

第二に、臨床的観察からであるが、ある女神元型が一人の女性の自我を圧倒してさまざまな精神医学的症状を引きおこす力は、歴史においてその女神に賦与されてきた力とパラレルな関係にあることに私は気づいてきた。といっても、古代エジプトの一人の偉大な女神からいくつかの段階を経てギリシアの女神たちにいたるまでには影響力が減少してきているが。ギリシアの女神たちは娘あるいは処女の女神なのである（第1章「内なるイメージとしての女神」を見よ）。

本書は治療者にとって役に立つ理論を展開し、情報を提供するものであるが、同時に、女性たち、特にもっとも身近で大切な、もしくはもっとも神秘的に思われる女性をよりよく理解しようと願っているすべての人、さらに自分のなかの女神を発見したいと願っている女性たちのために書かれた。

1

内なるイメージとしての女神

一人の壊れそうな女の赤ちゃんが私の友人アンの腕に抱かれた。生まれつき心臓に欠陥のある「ブルー・ベイビー」だった。この小さな子どもを抱いてその顔を見つめたアンは、心を動かされた。彼女も自分の胸骨の下にあるハートに深い痛みをおぼえていた。まもなく彼女とその赤ん坊は一つの絆をつくりあげてしまった。その後、アンはその子を定期的に訪れ、できるだけ長い時間をかけて接触を維持した。赤ん坊は開胸手術を生きのびなかった。数カ月だけの人生であったが、アンには深い印象を残した。最初の出会いのとき、赤ん坊はアンの心の奥深くに横たわっている感情に満たされた、ある内的イメージに触れたのである。

一九六六年に、精神科医で著述家のアンソニー・スティーブンズは、ギリシアのアテネ近くにあるメテラ乳児センターで子どもの愛着欠乏症を研究した。彼が乳母たちと孤児たちとのあいだにおこっているのを観察したものはアンの体験とよく似ている。スティーブンズは、赤ん坊と赤ん坊を世話する乳母とのあいだに互いに喜び合いひきつけ合うことを通じて、ある特殊な絆が形成されるのを見たのであるが、それは恋におちるのにも似たプロセスであった。

スティーブンズが観察したものは「戸棚式愛の理論」が偽りであることを示している。この理論は、母子の絆は世話をして乳を与えることを通じて次第に形成されてくると仮定している。ところが彼は次のことを発見したのである。三分の一以上の子どもたちは、絆が形成される前に子どもを少しも、あるいはまったく定期的に世話していなかった乳母にひかれていたのである。後になると、乳母は子どものためにもっと世話をやくようになるのが常であるが、それはふつう、乳母が愛着を相互的なものにしていくようになるからである。だがそれだけではなく、子どもは、「自分」の乳母がそばにいるとき、他のいかなる乳母からも世話されることをしばしば拒むからでもある(1)。

新しく母親になると自分の生まれたばかりの赤ん坊に直接的な愛着の感情を経験する女性がいる。自分が産んだばかりの、可愛い、よるべのない赤ん坊を抱いていると、この子どもにたいするすさまじいほどの保護的な愛情と深い優しさの気持ちが、自分のなかにこみあげてくる。私たちならその場合、赤ん坊がこのような女性たちの心のなかに母親元型を呼びおこすと言う。しかし、新しく母親になった他の女性たちにとっては、母性的な愛情は何カ月もの時間をかけて育ち、赤ん坊が八カ月か九カ月になるころにはっきりとした形になる。

赤ん坊ができても自分のなかの「母親」が活性化しないとき、その女性はふつう、他の母親なら感じている何かを、あるいは他の子どもに関して自分がこれまで感じてきた何かを感じていないということを知っている。子どもは、「母親」元型が活性化されないとき、根本的な結びつきがないのを淋しく思い、「母親」元型が活性化することを切望しつづける。（といっても、ギリシアの孤児院にいる乳母たちにおこったように、元型的な母子のパターンは、生物学的には母親でない女性を通じて充足されうる。）愛着が満たされることを求める気持ちは、大人になってもつづく可能性がある。私と一緒に女性グループにいたある四九歳の女性は、自分の母親の死のことを語るとき、さめざめと泣いた。なぜなら、母親が死んだいまとなっては、切望していたあの結びつきがもうけっして発展しようがなくなったからである。

「母なるもの」は深く感じられた一つの存在様式であり、子どもが女性の心のなかに活性化することができるものであるが、ちょうどそれと同じようにどの子どもも「母なるもの」を求めるように「プログラミング」されている。母親も子どもも（それゆえ人間すべてということになるが）、母親イメージは母性的な行動や感情と結びついている。心のなかにはたらいてい

るこの内なるイメージ（行動と感情的反応を無意識的に決定しているイメージ）が元型なのである。

「母なるもの」は女性の心のなかで活性化されうる多くの元型（内的に規定されている潜在的な役割）の一つにすぎない。さまざまな元型が認められるとき、私たちは、自分や他の人々の心のなかで何がはたらいているかを、より明瞭に理解することができる。本書で私が紹介しょうと思っているのは、女性の心のなかにはたらいている、ギリシアの女神たちとして擬人化されているいくつかの元型である。たとえば、母性的な女神であるデーメーテールは、母親元型を体現しているものである。他の元型としてペルセポネー（娘）、ヘーラー（妻）、アプロディーテー（恋人）、アルテミス（妹と競争者）、アテーナー（策略家）、それにヘスティアー（炉を守る者）があげられる。もちろん、元型を表す名前として、女神はイメージが当の女性の感情にぴたりと一致するときのみ助けとなる。というのは元型は実際には名前をもたないからである。

C・G・ユングは元型の概念を心理学に導入した。彼は元型を、集合的無意識に含まれている本能的行動のパターンとして理解した。集合的無意識は、個人的ではなく普遍的な無意識の一部であり、多かれ少なかれいたる所で、そしてあらゆる個人において同じ内容と行動様式をそなえている(2)。

夢に現れる多くのイメージやテーマと同様に、神話やおとぎ話も元型の表現である。世界中に多くのさまざまな文化が存在するにもかかわらず、そこで語られている神話がよく似ているのは、あらゆる人々の心のなかに共通の元型的パターンが存在するということから説明される。初めから存在するパターンとして、元型は私たちがどのように行動し、他の人々にどのように反応するかに影響を及ぼしているのである。

元型としての女神

私たちはたいてい、かつて学校でオリュムポスの山の神々や女神たちについて教えられ、彼らを描いた彫刻や絵画を見てきている。ローマ人たちは同じ神々を崇拝し、神々に自分たちのラテン流の名前をつけた。オリュムポスの神々と女神たちはきわめて人間的な属性をもっている。彼らの行動、感情的反応、容貌、神話は、人間の行動や態度に類似するもろもろのパターンを提供してくれる。神々が私たちにとって馴染み深いのは元型的であるからでもある。すなわち、私たちすべてが共有している集合的無意識から、それとして認めることのできる存在と行動のモデルを表現しているのである。

神々のなかでももっとも有名なのはオリュムポスの十二神である。ゼウス、ポセイドーン、ハーデース、アポローン、アレース、ヘーパイストスの六人の男の神々、それに、ヘスティアー、デーメーテール、ヘーラー、アルテミス、アテーナー、アプロディーテーの六人の女神たちである。十二神の一人ヘスティアー（炉の女神）はディオニューソス（葡萄酒の神）に置きかえられ、かくして男女のバランスは七人の神々と五人の女神に変わった。これから本書で私が描く女神元型はオリュムポスの六人の女神（ヘスティアー、デーメーテール、ヘーラー、

アルテミス、アテーナー、アプロディーテー）これに、ペルセポネーが加わる。ペルセポネーの神話はデーメーテールの神話と切り離せないからである。

私はこれら七人の女神を三つのカテゴリーに分けた。すなわち、処女神、傷つきやすい女神、それに錬金術（あるいは、変容）の女神である。処女神は、古代ギリシアではまとめて分類されていた。他の二つのカテゴリーは私が考案したものである。意識のあり方、主要な役割、動機となっている要因が各グループを区別する特徴である。他の人々にたいする態度、愛着への欲求、人間関係の重要度も各カテゴリーでそれぞれ際だった相違を見せている。この三つのカテゴリーをすべて表現している女神たちは、一人の女性の人生のどこかで表現されることを求めている。それによって女性は深く愛し、有意義に行動し、官能的で創造的になることができるからである。

本書で扱う最初のグループは、処女神、すなわちアルテミスとアテーナーとヘスティアーである。アルテミス（ディアーナ）は狩りと月の女神であった。彼女は荒れ野を支配していた。百発百中の弓の名手であり、まだ幼い、あらゆる生き物の保護者であった。アテーナー（ミネルヴァ）は、知恵と工芸の女神であり、同じ名の町アテーナイの守護神であり、多数の英雄の保護者であった。通常は武装して描かれ、最高の戦略家として知られていた。炉の女神ヘスティアー（ウェスタ）はオリュムポスの十二神の中でもっとも知られていない。彼女は炉の中心にある火として家庭や寺院にいた。

処女神たちは、女性が自立し自足している性質を表現している。他のオリュムポスの神々と違って、これら三人の女神は恋に落ちることがない。誰かに情緒的に愛着して、自分が大切だと思っているものから離れることはない。彼女らは犠牲になって苦しむこともなかった。元型としては、女性の心のなかにある自立への欲求、個人的に有意義なものに意識を集中する能力を表現している。アルテミスとアテーナーは目標指向性と論理的思考を表し、課題達成指向の元型となっている。ヘスティアーは、内面に、つまり女性のパーソナリティの精神的中心に注意を集中させる元型である。これら三人の女神は積極的に自分の目標を追求する女性元型である。彼女らによって、女性の特性について私たちがもっているイメージは拡大され、そこに能力と自足を含むことになる。

第二グループ（ヘーラー、デーメーテール、ペルセポネー）を私は傷つきやすい女神と呼ぶ。ヘーラー（ユーノー）は結婚の女神であった。彼女は、オリュムポスの主神ゼウスの妻である。デーメーテール（ケレース）は穀物の女神である。彼女のもっとも重要な神話では、母親としての役割が強調されている。ペルセポネー（プロセルピナ）はデーメーテールの娘である。ギリシア人は彼女のことをコレー（乙女）とも呼んでいる。

三人の傷つきやすい女神は、妻、母艶、それに娘という女性の伝統的な役割を表している。彼女らは関係志向の女神元型であり、そのアイデンティティと幸せは、誰かと重要な関係をもてるかどうかにかかっている。彼女らは親和と絆への女性の欲求を表現しており、他の人々に調子を合わせるために、傷つきやすくなる。これら三人の女神は男の神々にレイプされ、誘拐され、支配され、あるいはおとしめられる。愛着が壊れたり侮辱されると、それぞれに特徴的な仕方で苦しみ、心の病気に似た症状を示した。しかし彼女らのいずれもが発展を遂げ、それによって人間の女性たちに、喪失にたいする反応の本質とパターンと、三つの女神元型のいずれにも、もとから含まれている苦悩を通して成長する潜在力にたいする洞察を与えてくれるこ

ともする。

愛と美の女神アプロディーテー（ウェヌス）は第三の独立したカテゴリーに入り、錬金術の女神である。アプロディーティーは女神たちのなかでもっとも美しく、抵抗しがたい魅力をそなえている。多くの情事を重ね、その無数の密通からたくさんの子孫が生まれている。彼女は愛と美、エロティックな魅力、官能性、セクシュアリティ、それに新しい生命を生み出した。自分で選んだ関係のなかに入り、けっして犠牲者になることはなかった。それゆえ、処女神のように自律性を維持し、傷つきやすい女神のように関係のなかに生きる。彼女の意識は集中していると同時に受容的であり、それによって彼女と相手の両方が感化される相互的な交流が可能となる。アプロディーテー元型に動機づけられると、女性は、人間関係において持続性よりは強烈さを追求し、創造的なプロセスを重視し、変化へと開眼するようになる。

系譜

これらの女神たちがどういう存在であり、他の神々とどのような関係を結んでいるかをよりよく理解するために、まず彼女らを神話の文脈に置いてみることにしよう。ここでわれわれが世話になるのは、神々に関する無数の伝承を初めて整理しようとしたヘーシオドス（紀元前七〇〇年頃）である。彼の主著『神々の系譜』は、神々の起源と血統を説明したものである(3)。

ヘーシオドスによれば、初めにカオスがあった。これが出発点である。カオスからガイア（大地）、暗黒のタルタロス（地下世界の深みの極まり）、それにエロース（愛）が生まれた。

女性の大地ガイアは息子ウーラノスを産んだ。彼は天としても知られている。それから彼女はウーラノスと交わって子どもを産んだが、なかでも十二人のティーターンは、有史時代のギリシアで崇拝されていた古い、原始的な自然の力である。ヘーシオドスが描く神々の系譜では、ティーターンはギリシアを支配した初期の王朝であり、オリュムポスの神々の両親にして祖父母でもある。

ギリシア神話における最初の父権的あるいは父親的存在であるウーラノスはその後、自分がガイアとのあいだにつくった子どもたちを恨むようになった。それで、彼らが生まれるやいなや、彼女のからだのなかに彼らを埋めてしまったのである。このためにガイアは大変な苦痛と苦悶を経験し、自分の子ティーターンの子供たちに助けを求めた。彼らはみな怖がって介入しなかったが、末っ子のクロノス（サートゥルヌス）は例外であった。彼は助けを求めるガイアの叫びに応え、彼女から貰った鎌と彼女が考え出した計画で武装して、自分の父親を待ちかまえた。

ウーラノスがガイアと交わるためにやって来て、彼女のうえにからだを広げようとしたとき、クロノスは鎌を取って父親の性器を切り取り、海に投げ込んだ。クロノスはそれでもっとも強力な男神になった。彼とティーターンたちは宇宙を支配し、新しい神々をつくった。多くは、川、風、虹といった自然に存在する諸要素を表している。その他に怪物たちがいるが、それは悪もしくは危険を擬人化したものである。

クロノスは姉のティーターンであるレアーと交わった。そこからオリュムポスの神々の最初の世代であるヘスティアー、デーメーテール、ヘーラー、ハーデース、ポセイドーンとゼウスが生まれた。

またしても、父権制の先祖（こんどはクロノスであるが）は自分の子どもたちを葬り去ろうとする。自分の息子に乗り越えられる運命にあるという警告を聞いて、そうはさせまいと決心した彼は、どの子が生まれてもすぐに飲み込んだ。そのため、生まれたばかりの子どもが息子であるのか娘であるのか見もしないのである。しめて三人の娘と二人の息子を食ってしまった。

子どもたちの運命にたいする悲しみに打ちひしがれてはまたもや妊娠してしまうレアーは、最後の子どもを救い、クロノスがウーラノスを去勢し自分の五人の子どもを飲み込んでしまったことを罰するためにガイアとウーラノスに助けを求めた。レアーの両親は彼女に、お産の時が近づいたらクレータに行き、赤ん坊をくるむ布に石を包んでクロノスを騙すように言った。クロノスは、それが子どもだと思って急いで飲み込んでしまった。

この命を助けられた末っ子がゼウスであり、彼が実際後になって父親を打ち負かし、死すべき者（人間）たちと神々を支配するようになった。秘密のうちに育てられた彼は後になって父親を計略にかけ、兄たちと姉たちを父親のからだのなかから取り戻した。彼らに助けられながらゼウスは支配権をめぐる長期にわたる戦いに乗り出すが、クロノスとティーターンたちが敗北し、彼らがタルタロスの穴倉に閉じ込められて戦争は終わった。

三人の兄弟神（ゼウス、ポセイドーン、ハーデース）は勝利の後、宇宙を自分たちのあいだで分割支配した。ゼウスは空を、ポセイドーンは海を、そしてバーデースは地下世界を獲得した。大地とオリュムポスの山は共通の領土と考えられたが、ゼウスは自分の支配をこれらの領土にまで拡大することになった。三人の姉妹（ヘスティアー、デーメーテール、ヘーラー）には固有の権利がなかったが、それはギリシアの宗教が父権的な性質のものであることによっている。

密通を通じてゼウスは、次の神々の世代の父親になった。アルテミスとアポローン（太陽の神）はゼウスとレートーの子どもたちであり、アテーナーはゼウスとメーテイスの娘、ペルセポネーはデーメーテールとゼウスの娘、ヘルメース（使者神）はゼウスとマイアの息子であり、アレース（戦いの神）とヘーパイストス（鍛冶の神）はゼウスの正妻ヘーラーの息子たちであった。アプロディーテーの起源には二つの物語がある。一つの物語では彼女はゼウスとディオーネーの娘であり、もう一つの物語では彼女はゼウスより前に生まれている。ゼウスは人間の女セメレーとの情事でディオニューソスの父親となった。

本書の終わりに登場人物の特徴が示されている。神々と女神たちを参考のためにリストアップし、彼らの伝記をスケッチしたものであるが、それによってギリシア神話の人名録がたどれるようになっている。

歴史と神話

これらのギリシアの神々と女神たちを生んだ神話は歴史上の出来事から生まれた。それはゼウスと英雄たちを賛美する父権的な神話であり、母親を母体とする宗教をもった人々が、戦士である神々を崇拝し、父親に基づく神学をもつ侵入者たちと出会い、服従させられたことを反映している。

ロサンゼルスにあるカリフォルニア大学でヨーロッパ古代史の教授をしているマリア・ギンブタスはヨーロッパ最初の文明を「古ヨーロッパ」と記述している(4)。男性的な宗教が発祥する前、少なくとも五千年さかのぼれば（おそらく二万五千年さかのぼったとしても）、古ヨーロッパは偉大な女神を崇拝する母権中心的で、定住し、平和で芸術を好み、大地と海に囲まれた文化であった。埋葬された遺跡から集められた証拠によれば、古ヨーロッパは階層がなく平等主義の社会であったが、半遊牧的で馬に乗るインド・ヨーロッパの人々が遠い北東から侵入してきて、それを破壊したのである。侵入者たちは父権中心的で、移動し、戦争が好きで、イデオロギー的には空を志向し、芸術には無関心であった。

侵入者たちは自分たちがよりすぐれた人々であると考えた。それは、先の定住者が偉大な女神を崇拝し文化的にはもっと発達していたにもかかわらず、その人々を征服することができたからである。アスタルテー、イシュタル、イナンナ、ナット、イーシス、アシュトレト、アウ・セト、ハサー、ニナ、ナンム、ニンガルなど、たくさんの名前で知られていた偉大なる女神が女性の生命力として崇拝され、自然や多産性と深く結びつき、生命を創造したり生命を破壊したりする両方の側面に責任をもっていた。ヘビ、ハト、木、月は、その聖なる象徴であった。歴史神話学者ロバート・グレイブズによれば、父権的な宗教が生じる前は、偉大な女神が不死で変化することがなく全能と見なされていた。彼女は子供に父親を与えるためにではなく、快楽を求めて恋人をもった。父権はいまだ宗教的な思想に導入されておらず、（男性の）神はまったくいなかったのだった(5)。

あいつづくインド・ヨーロッパ語族による侵入の波によって、偉大なる女神の退位が始まった。これらの波が始まった年代はさまざまな権威筋によって紀元前四五〇〇年から二四〇〇年のあいだとされている。女神たちは完全に抹殺されたわけではなく、侵入者たちの宗教のなかに吸収されていった。

侵入者たちは自分たちの父権的な文化とその戦士的な宗教を征服した人々に押しつけた。偉大なる女神は侵入者たちの神々に従属するものなり、もともと女神のものであった持物や力は奪われて男の神に与えられた。レイプが初めて神話に現れるようになり、偉大なる女神の象徴であるヘビを男性の英雄たちが殺すという神話が生じた。ギリシア神話に反映されているように、かつては一人の偉大なる女神に与えられていた特質や象徴や力は、たくさんの女神たちに分割された。神話学者ジェーン・ハリソンが言及していることであるが、偉大なる母の女神はたくさんのより小さな女神たちに断片化し、かつて彼女に属していた持物をより小さな女神たちが受け取ることになった。ヘーラーは神聖結婚の儀式を、デーメーテールはその神秘を、アテーナーはヘビを、アプロディーテーはハトを、アルテミスは「野性的なものの女主人」（野

性の生命）としての機能を得た(6)。

『神が女性だったとき』の著者マーリン・ストーンによれば、偉大なる女神の退位はインド・ヨーロッパ語族の侵入によって始まり、のちに興ったユダヤ教、キリスト教、イスラム教によって最終的に成就された。男性神が重要な位置を占めた。女神たちは背景にうすれ、社会における女性たちもそれにならった。ストーンは「私たちは、女たちの儀礼を抑圧することが、これまでどの程度まで実際に女たちの権利を抑制することであったかに驚かされるかもしれない」と述べている(7)。

歴史上の女神と元型

偉大なる女神は生命の創造者かつ破壊者としてあがめられ、自然の多産性と破壊性をとりしきっていた。偉大なる女神はいまもなお集合的無意識のなかに元型として存在している。私はしばしば患者たちのなかに、ものすごい偉大なる女神がいるのを感じてきた。ある患者は産後偉大なる女神に自己同一化していた。しかもその恐ろしい側面においてである。グウェンは若い母親であったが、赤ん坊が生まれてから精神病になってしまっていた。彼女は自分が世界を焼きつくしてしまったと確信しており、幻覚があり抑うつ状態であった。彼女は病院の娯楽室を歩きまわり、自分の罪と悲しみで惨めな気持ちになっていた。私が彼女に付き合おうと調子を合わせると、自分が「世界をむさぼり食い、破壊してしまった」と言っていたものだった。彼女は妊娠中、偉大なる女神に自己同一化していたが、それは生命の創造者としての肯定的な側面においてであった。ところが出産後は、自分自身が創造するものを破壊する力をもち、また実際に破壊してしまった偉大なる女神であると感じていた。それを感情的に非常に強く確信していたので、世界がいまなお存在しているという事実を無視していた。

この元型は肯定的な側面においてもなお生きている。たとえば、生命の支持者としての偉大なる女神のイメージをもっているのは、自分が生きていられるのは特定の女性と結ばれているからだと確信している人である。その女性は偉大なる女神と「誤解」されている。これは非常によくある思い違いである。この人間関係の喪失があまりにもすさまじく、自殺にまでつながるとすれば、生命は文字どおりそれに依存していたことになる。

偉大なる女神が崇拝されていたころにもっていた力に似て、元型的な偉大なる女神はどんな元型よりも大きな影響力をもっている。彼女は非合理的な恐れを呼びおこし、現実をゆがめることができる。ギリシアの女神たちは偉大なる女神よりも力は弱く、より専門化されている。それぞれの女神たちは各自の領域をもち、力はその領域に限定されていた。女性の心のなかでも、ギリシアの女神たちは、偉大なる女神と比べて力は弱い。感情的に圧倒したり現実をゆがめたりするといった力がより少ないのである。

女性のなかで共通した主な元型的パターンを表現している七人のギリシアの神々のうち、アプロディーテーとデーメーテールとヘーラーは行動を命ずるもっとも強い力をもっている。この三人は他の四人よりも、偉大なる女神に密接に関わっているのである。アプロディーテーは多産の女神としての機能を偉大なる女神より小さくした変形である。デーメーテールは偉大な

る母としての機能において、偉大なる女神の小型版である。ヘーラーは天の女王としての偉大なる女神の小型版である。しかしながら、それぞれは偉大なる女神の小型版である一方で、彼女らは自分たちが「当然支払われるべきものを要求する」ときには有無を言わせない心のなかの本能的力を表している。このことは後の章で見ていくことにしよう。

これら三人の女神たちのどれかにはたらきかけられている女性は、抵抗することを学ばなければならない。アプロディーテー、デーメーテール、ヘーラーの命令に盲目的に従うことは女性の人生に不幸な影響を与えうるからである。古代ギリシアの女神たちと同様、これらの元型は、命に限りある女性のもっとも重要な興味や他者との関係に注意を払ったりしない。元型は時間の外側に存在し、女性の生活や欲求の現実性には無関心である。

残った四つの元型のうち三つ、すなわちアルテミス、アテーナー、ペルセポネーは「乙女」の女神であり、娘たちの世代に属する。これらの女神は偉大なる女神からもう一世代離れている。そのために元型としての彼女らはそれほど圧倒的ではなく、主に性格のパターンに影響を与える。

すべての女神のうちでもっとも年老いており、もっとも賢く、もっとも尊敬される女神であるヘスティアーは、権力をまったく敬遠する。彼女は女性なら当然尊ぶべき精神的領域を表している。

ギリシアの女神と現代の女性

ギリシアの女神たちは、三千年以上にもわたって人間の想像力のなかに生きつづけてきた女性のイメージである。女神たちは女性がどんなものであるかといったことを表しているパターンあるいは表象であり、歴史的に女性に行使を許されてきた以上の力と多様な行動を示す。彼女たちは美しく力強い。女神たちは自分にとって重要なことによって動機づけられている。本書での私の主張は、女神たちは本来そなわっているパターン、すなわち元型を表しており、それが女性の人生行路を形づくるものだということである。

これらの女神たちはそれぞれお互いに異なっている。どの女神もよい特質と、潜在的には悪い特質の両方をもっている。神話は彼女らにとって何が重要であるかを示しており、彼女らに似た女性なら何をするかということをメタファーで表現している。

私はオリュムポス山のギリシアの女神たちを、複雑でたくさんの側面をもつ女性の内部の多様性と葛藤を表すメタファーであると考えるようになった。オリュムポスの女神たちはそれぞれ独自の存在であるが、何人かは互いに対立し合っている。女神たちのすべてがあらゆる女性の心のなかに潜在的に存在している。何人かの女神たちが一人の女性の心のなかで優位を争っている場合は、自分のどの側面をいつ表現するべきなのかということを決定しなければならない。さもなければ最初に一つの方向へ引っぼられ、また別な方向へ引っぱられるということになってしまうだろう。

ギリシアの女神たちは私たちと同じように父権社会に生きていた。男の神々が地上、天上、大洋、地下世界を支配していた。それぞれの独立した女神たちはこの現実に自分なりの方法で

適応していた。男性から分離したり、男性の一人として参加したり、内部に引きこもるといったぐあいにである。特定の関係を重んじる女神たちは、いずれも傷つきやすく、男の神々と比較すると弱かった。男性の神々は彼女が望むことを否定することもできるし、彼女を圧倒することもできたからである。このように女神たちは、父権文化における人生を映し出すパターンを表しているのである。

2

女神を活性化する

古代ギリシアの女性たちは、自分の職業や人生の段階が、尊敬する特定の女神の支配のもとにあるということを知っていた。機織り手はアテーナーの保護が必要であり、若い娘はアルテミスの保護のもとにあり、既婚女性はヘーラーを崇拝していた。女性は助けを必要とする女神をおがみ、祭壇に供え物をした。子どもを産む女性は安産であるようにとアルテミスに祈った。また家が温かい家庭となるように、炉床の上にヘスティアーを招いた。女神たちは強力な神であり、儀式や崇拝、奉納や生贄などをして敬意が払われた。女性は女神にそれぞれふさわしいしい敬意を払った。そうしなければ神の怒りをかい、仕返しがくると恐れていたからである。

今日の女性の心のなかにも女神たちは元型として存在し、古代ギリシアにおけるように自分たちの当然受けるべきものを引き出し、自分のしもべを支配する権利を主張する。自分がどの女神の支配を受けているのかを知らない場合でさえ、女性が人生のある時期あるいは一生涯を特定の元型に忠誠を「誓う」ということもありうる。

たとえば、ある女性は十代のとき、男に狂い容易に夢中になってしまったかもしれない。そして早い時期にセックスを経験し、望まぬ妊娠という危険を冒していたかもしれない。その場合彼女はそうとは知らずにアプロディーテーの影響下にあったのである。アプロディーテーは愛の女神で、その衝動は合一と繁殖へと向かい、幼い少女を知らぬ間に捕らえるのである。あるいはアルテミスの保護下にあったかもしれない。アルテミスは禁欲生活を重んじ、野性を愛した。その場合彼女は馬に狂った思春期を過ごすか、あるいは荷物を背負って徒歩旅行をするガール・スカウトの一員だったかもしれない。若いアテーナーだったとしたら、本の虫になったり、科学で張り合っていたかもしれない。それは知恵の女神に動機づけられて、承認を得ようとしたり、よい点数をとろうとしていたのである。また初めて人形遊びをしたときから彼女は蕾をつけ始めたデーメーテールで、自分自身の赤ん坊をもった場合のことを空想していたかもしれない。あるいは草原で花を摘む乙女ペルセポネーのように、自分を連れ去ってくれる誰かを待っている、目標をもたない若い女性だったかもしれない。

女神たちはすべて、あらゆる女性の心のなかにある潜在的パターンであるが、それぞれの個人のなかでこれらのパターンのいくつかが活性化（エネルギー化・発展）しており、他のものは活性化していないのである。（普遍的なものである）元型的パターンと（私たちのなかで機能している）活性化させられた元型との違いを説明するためにユングはよく結晶の形成のアナロジーを使った。元型とは、結晶が形成された時にどんな形や構造をもつかを決定する目に見えないパターンのようなものである(1)。実際結晶がひとたび形成されると、いまやパターンが認知できるようになり、それが活性化された元型に対応するのである。

元型は種のなかに含まれている「青写真」とも比較できるだろう。種からの成長は土壌や気候条件、ある栄養素があるかないか、庭師の側に心遣いがあるかないか、容器のサイズと深さ、それ自身がさまざまな変化に耐えられるかどうかといったことによっている。

同じようにどの女神あるいは女神たち（同時に数人が存在するかもしれない）が、ある特定のときに特定の女性のなかで活性化されるかといったことも、さまざまな要素が相互作用して結びついた効果によっている。その要素とは女性の素質、家族や文化、ホルモン、他の人々、選択したわけではない環境、選択した活動、人生の段階などである。

本来の素質

赤ん坊は生まれたときから人格特徴をもっている。活動的であるとか、わがままであるとか、落ち着いているとか、好奇心旺盛であるとか、一人で時間を過ごせるとか、社会的であるとかなどである。これは他の女神元型よりもある女神元型とうまくやっていけることを示している。幼い女の子が二、三歳になるまでには、すでに特定の女神の典型的性質を示す。母親が望むことなら何でも満足しておこなう従順な子と、自分から進んで近所を探索しようとする子とでは非常に異なっている。ちょうどペルセポネーとアルテミスが違っているように。

家族環境と女神

家族の子どもにたいする期待はある女神を支持し、他の女神を抑制する。両親が娘に「砂糖とスパイスでできていれば、めでたしめでたし……」（訳注－童謡の一節）とか、「お母さんの小さな助っ人」であることを期待するならば、その子のペルセポネーとデーメーテールの性質にたいして褒美を与え、強化していることになる。自分が何を望んでいるかを自覚しており、男兄弟と同じ特権や機会をもつのを期待する娘ならば、単にアルテミス型の自己であろうとしつづけているだけなのに「わがまま」と呼ばれたり、単に男の子たちの一員としてアテーナー型の自己でいるというだけなのに「女の子らしくしなさい」と言われるかもしれない。さらに最近では、幼い女の子は逆の承認と否認パターンのなかにいるかもしれない。本当はそうしたいのに、家にいたり、ままごとをしたりしないように仕向けられ、そのかわりに両親が娘に望んでいるサッカーや早期教育に参加させられている。

子供のもって生まれた女神のパターンは家族の期待と相互に影響し合う。しかし、家族が特定の女神を認めない場合、少女はそれでも自分なりの感じ方をやめないであろう。自分の行動が自然ではないということを知り、自己評価が傷ついたとしてもである。「彼女の女神」が家族に気に入られている場合でも、なおかつ妨害は存在するかもしれない。たとえば、ペルセポネー型であるために他者の指示に従う傾向がある女の子は、何年かのあいだ他人に喜ばれるという報酬を受けた後、自分が望んでいることは何なのかを知るのに困難をおぼえるかもしれない。まだ蕾の状態なのに学年を飛び越えるアテーナーは知的能力を高めるために仲間との友情を犠牲にする。一人の女性をある女神に従わせるのに、先天的なパターンと家族が「共謀する」場合、発達は一面的なものになる。

自然に生じてくるものを発展させることにたいして家族が褒めたり勇気づけたりするならば、女の子は自分が大事に思っていることをするとき、気持ちよく感じるだろう。女の子の女神のパターンが家族に反対される場合には逆のことがおきる。反対されても、もって生まれたパターンが変わるわけではない。少女は自分がある特性や興味をもっていることをやましく感じるだけである。もし本当の自分とは違うふりをするならば、彼女は自分を裏切っていると感じる。

女神にたいする文化の影響

許されている女性の役割という形で、文化はどの「女神たち」を支持するだろうか。女性のステレオタイプは女神元型の肯定的もしくは否定的なイメージである。父権社会において認められる役割はしばしば娘（ペルセポネー）、妻（ヘーラー）、母（デーメーテール）だけである。アプロディーテーは「売春婦」とか「妖婦」と非難されるが、それはこの元型の官能性とセクシュアリティをゆがめ、おとしめるものである。ヘーラーが自己主張したり怒ったりすれば「がみがみ女」になる。過去においても現在においても、女性が独立心や知性あるいは性を積極的に表現することを否定する文化がある。だからアルテミス、アテーナー、アプロディーテーのいかなる徴候も抑えられなければならないのである。

たとえば、古代中国では、纏足の習慣は、女性が身体的に不具であるとともに、自立を許さない役割によって心理学的にも制限を受けているということを意味していた。このような状況のもとでは、ある種の女神たちは、ただ神話のなかだけでしか生きることができなかった。『チャイナタウンの女武者』(2)（晶文社）という小説のなかでマクシーヌ・ホン・キングストンは中国の女性がいかにおとしめられ蔑まれているかを書いているが、それは今日にいたるまでつづいている。これと対照的に彼女は、中国の逞しい女兵士が主人公の神話を語っている。その神話からわかることだが、たとえ女神のパターンを現実の生活で生きられることはなくとも、その女神はなおおとぎ話や神話や女性の夢に表現されうるのである。

女性の人生は、その時代が認める役割と理想化されたイメージで形成される。これらのステレオタイプはある女神のパターンを他の女神のパターンより優先する。アメリカ合衆国では「女はどうあるべきか」についての期待が過去数十年のあいだに大きく変わった。たとえば、第二次世界大戦後のベビー・ブームは、結婚と母性を強調した。これは、連れ合いになりたいというヘーラーの欲求をもっている女性や、デーメーテールの母性本能をそなえた女性の時代であったが、家族を養い育てるのでなく、すぐれた実績をあげたいと望んでいるアテーナー型やアルテミス型の女性にとってはつらい時代であった。女性は「……夫人」という学位（M. R. S. Degree）を獲得するために大学に行き、いったん結婚するとしばしば学校を中退した。郊外で「一緒に暮らすこと（togetherness）」が理想であった。アメリカの女性は子供を二人でストップせずにさらに三人、四人、五人、六人と産んでいった。一九五〇年までに合衆国の出生率は初めて（このときだけであったが）インドの出生率と同じになった。

二十年後の一九七〇年代は女性運動の十年であり、アルテミスとアテーナーにとって有利な時代であった。業績をあげたいと願っている女性たちはいまや時代に支持されていた。フェミニストとキャリア・ウーマンは舞台の中心にいた。かつてないほどのたくさんの女性が、大学でビジネス、医学、法律の学位を得ようと努力した。「死が私たちを引き離すまで」という結婚の誓いはますます破られ、出生率は低下した。その間、妻になりたいというヘーラーの欲求や子どもを産みたいというデーメーテールの欲求に動機づけられている女性たちは、ますます孤立無援の状況のなかで生活していくことになった。

ある女性たちのなかにある特定の元型的パターンが時代からもてはやされると、彼女たちは自分にとって内面的に意味のあることをおこない、外界からの賛同を得ることができる。制度からの支持が非常にものをいうのである。たとえば、アテーナーのような生まれつき論理的な精神をそなえた女性は、知性を発展させるために高等教育を受けようとする。ヘスティアーのように精神面に重きをおく女性は、宗教集団に多く見られる。

女神にたいするホルモンの影響

ホルモンがドラマティックに変わるとき（思春期、妊娠期間、および更年期）ある元型が他の元型を犠牲にして昂進する。思春期になって乳房や性器を発達させるホルモンは、アプロディーテーに特徴的な官能性とセクシュアリティを刺激する。からだが発達すると若いアプロディーテー型の女性になる女の子がいる。乳房が発達して月経が始まるが、男の子たちに見向きもしない女の子もいる。行動はホルモンだけでは決まらない。ホルモンと女神元型の相互作用で、行動が決定されるのである。

妊娠すると黄体ホルモンが大幅に増加し、それによって妊娠が生理学的に維持される。だがまたしても、これにたいして女性はそれぞれ違ったふうに反応する。ある女性はからだが子供のために大きくなっていくにつれて情緒的に満たされるようになる。彼女らは母神、デーメーテールを体現しているような気がするのである。そうかと思えば妊娠のことをまるで忘れているかのように、ほとんど一日たりとも仕事をしない日がない女性もいる。

発情ホルモンと黄体ホルモンが分泌されなくなることによって月経が止まる更年期は、ホルモン変化のもう一つの時期である。女性がこれにたいしてどのように反応するかもまた、どの女神がはたらいているかによる。空の巣症候群をわずらい、悲嘆にくれているデーメーテール型の女性からすれば、人類学者のマーガレット・ミードが言ったように、P・M・Zすなわち「ポスト更年期の楽しみ（post menopausal zest）」がどっと押し寄せてくる女性たちはまったく別人種のように思われる。この急激な高まりは、新たにエネルギーを得た女神が長いあいだ待ち望んでいた転機をやっと迎えることができるときに訪れると言えよう。

月々の月経の期間中でさえ、「女神の移行」を経験する女性がいる。ホルモンと元型が相互作用して心に衝撃を与えるからである。この変化に敏感な女性たちは、サイクルの前半では自立している女神たち（特に外向的で世の中に出ていくことを重視するアルテミスやアテーナー）により強くひかれていることに気がつく。そしてサイクルの後半になると、妊娠のホルモンである黄体ホルモンが増加するため、「巣づくり」傾向がより強くなるように感じられ、家にいつもいたいという気持ちや誰かに甘えていたいという気持ちがより顕著になるということに気がつく。デーメーテール、ヘーラー、ペルセポネーあるいはヘスティアーがもっとも強く影響を及ぼすことになるのである(3)。

最初に一人の女神が優勢になり、それからもう一人の女神が優勢になるにつれて、ホルモンと女神の移行から葛藤と混乱が生み出される。その古典的なパターンは、自立心に富むアルテミス型の女性であり、彼女は、結婚に抵抗している男性か結婚相手ではないと自分が感じてい

る男性と一緒に暮らしている。二人で暮らすことは彼女のスタイルに合っている。ただし、それはホルモンが移行するまでである。どこかでサイクルの後半に入ると、妻になりたいというヘーラーの欲求がホルモンからの支持を受ける。結婚していないことが、いまや恨みや拒絶されているという感情を呼びおこし、そのため、月ごとに喧嘩や軽いうつ状態がおこり、そして月経が終わると、予想していた通り、これらの状態も消えていく。

人びとと出来事が女神を活性化する

ある人や出来事によってその元型が呼び出されるとき、ある女神が活性化され急に生命をもち始めるかもしれない。たとえばある女性は、他人のよるべなさが抗いがたい刺激となって自分のしていることをやめ、世話をするデーメーテールになってしまうのである。この変更は彼女の仕事に不幸な結果をもたらしうる。彼女は非常にしばしば仕事をやめてしまうからである。あまりにも多くの時間を個人的な電話で他人の悩みに耳を傾けることに費やしてしまい、あわれみの心から東奔西走し、いまにも火がつかんばかりである。別の女性は、フェミニストの集会で自分が一人前の申し分ないアルテミスに変身し、女性たちの領域にたいする侵入者に復讐しようとしていることに気がつくかもしれない。自分のなかに女同士の連帯と力が沸き立ってくるのが感じられるからである。また別の女性はお金の問題で、これまで呑気で他人まかせの人間であったのが、金にうるさいアテーナーに変わり、どれだけが自分の取り分であるかを気にかけて、契約のことをやかましく言うようになるであろう。

誰かと恋愛状態になると、変化のために、女性はこれまで自分のなかで優位を占めていたものが脅かされることになる。元型的レベルにおいてであるが、内的には、従来のパターンがもはや通用しなくなるかもしれない。アプロディーテーが活性化されると、アテーナーからの影響力が衰え、新たな恋愛に比べて仕事で業績をあげることがそれほど重要でなくなってくる。あるいは、男が浮気をすれば、結婚こそすべてというヘーラーの追求する価値が乗り越えられてしまうかもしれない。

ある女神の否定的側面が状況の力で活性化されると、精神医学的症状がおこる。子供や大切な人間関係を失うと、女性は何もしなくなってただ座り、深く物思いに沈んで取りつくしまもなく悲しんでいるデーメーテールになることがある。あるいは、夫がある魅力的な女性――仕事の同僚であれ、雇い人あるいは隣人であれ――に接近していくと、嫉妬深いヘーラーが呼び出され、不信感に満ちて妄想的になり、実際には存在しないのに、そこに欺瞞や裏切りを見ることになるかもしれない。

「おこない」が女神を呼びさます

「おこなうことは、なることだ」という諺は、ある行為を選ぶことによって女神たちがどのように呼びおこされたり展開されうるかということを表現している。たとえば、瞑想を実践す

るとふつう、内向的で内面に焦点が当てられている女神であるヘスティアーの影響力が呼びさまされたり、強められたりする。瞑想自体と同様に、瞑想の効果も主観的なものであるため、通常は違いに気づく唯一の人間はその女性自身である。彼女は一日に一回か二回瞑想をしてから日々の仕事をどんどんこなしていくが、いつもより精神が「集中している」のが感じられ、静かで気持ちのよい時間を楽しむかもしれない。これはヘスティアーの特徴である。他の人々が変化に気づくときもある。たとえばある患者を見守っていたソーシャルワーカーは、彼女が瞑想することで以前に比べて冷静になり、悩みが少なくなり、他の人々のことを思いやるようになっていることに気がついたのである。

瞑想の効果が徐々に現れてくるのとは対照的に、サイケデリックなドラッグを服用すると、知覚が急激に変化するかもしれない。その効果は一時的なものではあるが、そこから長期にわたる人格変化がおこる可能性がある。たとえば、論理的で実用主義の女神であるアテーナーに支配されている女性が、ドラッグを服用するなら、自分の感覚を楽しみ、一種の気分転換を経験するかもしれない。見るものがより強烈で美しくなり、音楽に完全に引き込まれ、自分が官能的であると感じられ、自分は頭だけで生きているのではないということを実感する。このようにして彼女はアプロディーテーと知り合いになると言えよう。現在の直裁的な刹那における強烈な体験を楽しむからである。あるいは星を見つめて自分が自然と一体であることを感じ、月の女神で荒れ野を支配する狩人のアルテミスになるかもしれない。あるいはドラッグ体験で「地下世界」に入りこんでしまい、無意識のつかみどころがなく非合理的な内容を経験することになるかもしれない。自分の経験が、地下世界へのペルセポネーの誘拐と似たものであれば、抑うつ状態に陥り、幻覚を経験したり、恐怖におののいたりするかもしれない。

ハイスクールを終えてもなお学業をつづけることを選ぶ女性は、アテーナーの性質をさらに発展させようとしている。研究し情報をまとめ、試験を受け、論文を書くことはすべてアテーナーの論理的な精神が必要である。赤ん坊を産むことを選ぶ女性は、母性的なデーメーテールがよりいきいきと現れるように招いている。リュックサックをかついで荒れ野に向けて旅をすれば、アルテミスが表現されることになる。

女神を呼び出す

ホメーロスの讃歌の多くは、ギリシアの神々が現れることを請い求める祈りである。たとえばあるホメーロスの讃歌は、ある女神の外見や性質やおこないを述べることによって聞き手の心のなかにイメージをつくり出す。そうすると女神は招かれて姿を現し、家のなかに入って祝福を与えたりする。古代ギリシア人たちは今日の私たちにとっても参考となるものを知っていた。すなわち、女神たちは、イメージすることで呼び出せるのである。

女神を個別に扱っている章では、読者は、自分がある特定の女神とはあまり馴染みがないということに気がつくであろう。自分にとってきわめて重宝であるはずの元型が未発達であったり、一見自分のなかに「欠けている」ということが見出されるかもしれない。その女神を「呼び出す」ことは可能である。意識的に努力して、彼女の存在を見、触れ、感じ、想像を通して

彼女に焦点を当ててから彼女の特別の力を頼むのである。たとえば、次のような祈りがある。

●アテーナーよ、いつまでもこの状況ではっきりものを考えられるように力をお貸しください。
●ペルセポネーよ、私が心を開いて受け入れられるように力をお貸しください。
●ヘーラーよ、本気になって関わり、忠実であれるよう、力をお貸しください。
●デーメーテールよ、辛抱強く寛大であることをお教えください、よい母親であれるよう力をお貸しください。
●アルテミスよ、遠くにあるあの目標に集中していられるようにしてください。
●アプロディーテーよ、私のからだを愛し、楽しめるよう力をお貸しください。
●ヘスティアーよ、おそばにいてくださり、平和と平穏をもたらしてください。

女神と人生の段階

個々の女性は人生においてたくさんの段階を通ると思われる。人生のそれぞれの段階は、その段階ごとにもっとも関係の深い女神あるいは女神たちをもつことになる。あるいは一つの女神のパターンを生き抜き、それに従いながらさまざまな段階を次から次へとくぐり抜けていくかもしれない。女性が自分の人生を振り返るとき、いつある女神あるいは何人かの女神たちが他の女神よりももっと重要で影響を及ぼしていたかということを認識できることがよくある。

若いときには教育に専念してきた人もいるだろう。医学部にいたときの私がそうである。アルテミス元型が私を目標へと集中させつづけたのである。一方私は臨床的ならびに実験的知見に基づいた診断を可能にするさまざまな手続きや事実を学べるようにアテーナーの力に祈った。それとは対照的に、卒業後すぐに結婚し子供をもうけた私のクラスメートはヘーラーとデーメーテールの力を頼んだのである。

中年は過渡期にあたり、しばしば女神の変化を招く。三十代半ばから四十代半ばのどこかで、それまでずっと力をふるっていたもっとも強力な元型はしばしば激しさを失い、他の女神が現れるのを許す。結婚や子供、職業、創造的な努力、男性、あるいはいくつかの結合など、女性の成年前期に心をとらえていたどんなものでも、それに注がれてきた努力の結果は明白になっている。別な何かにもっとエネルギーを使えるようになり、そのことが別の女神を招いて影響を受けることになる。アテーナーが影響を及ぼして学校を卒業させることになるだろうか。あるいは子供をもちたいというデーメーテールの欲望が勢力をふるうのだろうか。それはいまか、あるいは永久にこないのか。

次に、もう一度人生後期の変換期がやってきて、女神がそこでもまた代わるかもしれない。更年期のあと変化がおこるかもしれない。未亡人になるとか、定年退職するとか、あるいは年を取ったと感じるときがそうである。夫に先立たれて、生まれて初めて金銭のやりくりをしなければならなくなった女性は、隠れていたアテーナーを発見し、自分もけっこう投資のことが理解できるようになるだろうか。独りになることを望んではいなかったのに、ヘスティアーを

知ったいまとなっては、それが快い孤独に変わっただろうか。あるいはデーメーテールがはぐくむべきものを失って、いまや人生が無意味で空虚なものとなっただろうか。他のどんな人生の段階でも同じであるが、各個人にとってどんな結果が生じるかは心のなかでどの女神が活性化されるか、自分が生きる状況はどんな現実か、自分が何を選択するかにかかっている。

3

処女神としての
アルテミス
アテーナー
ヘスティアー

ギリシア神話の三人の処女神とは、狩猟と月の女神であるアルテミス、知恵と工芸の女神アテーナー、炉と神殿の女神であるヘスティアーである。この三人の女神たちは女性の心理の独立した側面、積極的な側面、無関係さの側面を人格化している。アルテミスとアテーナーは外へ向かい、何かを達成することを志向する元型であり、他方ヘスティアーは内側に向かっている。どの女神も才能をのばしたり、興味あるものを追求したり、問題を解決したり、他人と競争したり、理路整然と言葉で、あるいは芸術的な形を通じて自己表現したり、自分の環境を整えたり、観想的生活をしたりといったような女性の内的衝動を表している。これまで「自分だけの部屋」を欲しがっていたり、自然のなかでくつろげると感じていたり、あるものがどうやって動いているのかといったことを発見するのを楽しんだり、孤独がいいと考えていたりする女性ならばみな、処女神の一人と関係がある。

処女神がもつ側面は、男性によって所有されない、あるいは「貫かれない」女性の部分である。すなわち、男性を求める欲求や男性によって確認されたいという欲求にかかわらず、男性とは完全に分離し、女性自身の権限で存在しているものである。女性が処女元型を生き抜いているとき、それが意味するのは彼女の重要な部分が心理的に処女であるということであり、物理的に文字どおり処女であるというわけではない。

処女（virgin）という言葉の意味は、処女地（virgin soil）、処女林（virgin forest）などのように「男によって」汚されていない、純粋である、堕落していない、使われていない、耕されていない、触れられていない、はたらきかけられていない、ということである。あるいは、純毛（ヴァージン・ウール）のように、あらかじめ加工処理されていないという意味でもある。ヴァージン・オイル（virgin oil）とは、オリーブや木の実を最初に圧縮してできた油のことであり、熱を加えずに（比喩的には情動や情熱の熟に触れられていないということである）抽出されたものである。ヴァージン・メタルは、純金（ヴァージン・ゴールド）のように、天然の形で生じたものであり、合金であったり、混ぜ物があったりしないものである。

男の神々によって支配されている宗教体系や歴史的時期においては、アルテミス、アテーナー、ヘスティアーは例外として目立つ。彼女らはけっして結婚せず、男の神々や人間たちによって圧倒されず、誘惑されず、レイプされず、辱められることもなかった。彼女らは「手をつけられておらず」不可侵のままであった。これに加えて、すべての神、女神、人間のなかで、この三人だけが愛の女神であるアプロディーテーの、他の場合ならばけっして抵抗することのできない力に動かされなかった。彼女らは情熱を煽られたり、エロティックな欲望やロマンティックな感情をかき立てられたりすることがなく、愛や性、惑渉によって動かされなかったのである。

処女神の元型

アルテミス、アテーナー、ヘスティアーの処女神のどれかが支配的な元型となっているとき、女性は（ユング派の分析家エスター・ハーディングが『女性の神秘』で書いたように）、「自己充足（one-in-herself）」している。彼女の心の重要な部分は「どんな男にも属さな

い」。ハーディングが記述しているように、その結果、「処女つまり自己充足している女性は自分のしたいことをするのである。それは誰かを喜ばせたいとか、（自分自身を含めて）誰かに好かれたいとか認められたいという欲望からでもないし、誰かに力をふるいたい、誰かの興味や愛を得たいといった欲望からでもない。自分のすることが正しいからそうするのである。彼女の行動は実際、因習に囚われないものであるだろう。慣習的にいえば、イエスと言う方が適当であると同時に簡単なときでも、彼女はノーと言わなければならないかもしれない。しかし処女である彼女は結婚しているかいないかにかかわらず、処女でない女性なら情況に適応したり、楽な方に自分自身を合わせたくなるような考えに影響されない。(1)」

女性が自己充足しているのなら、他の人が考えていることとはまったく別に、自分自身の内的な価値に従いたいという欲求、意味のあることや自分の願いを実現することをしたいという欲求に動機づけられるであろう。

心理学的に言えば、処女神は、女性がどうあるべきかということにたいする集合的（男性によって決定された）社会的、文化的期待によっても、彼女にたいする個々の男性の判断によっても影響を受けることがなかった女性の部分である。処女神の側面は、ありのままの女性、女性が重んじるものの表す純粋な本質である。それがくもりなく、汚れないままであるのは、彼女がそれを明かさず、神聖で汚れのないままに保つからであり、男性の基準に合致するように修正することもなくそれを表現するからである。

処女元型は、ひそかにあるいは明らかにフェミニストとして現れるかもしれない。女性ならふつう追求することを思いとどまらされるような野心として表現されるかもしれない。たとえば、それまでどんなパイロットも行ったことがないようなところへ飛びたいという飛行家アメリア・イアパートの望みのようにである。あるいは、女性であるという自分自身の経験から作品を創造する詩人、画家、音楽家として創造性が現れるかもしれない。たとえば、アドリエンヌ・リッチの詩やジュディ・シカゴの絵画やホリー・ニアーが自作自唱するバラードがそれである。処女元型は瞑想の実践や助産術として表現されることもあるかもしれない。

多くの女性たちが「女性のものである」形式をつくり出そうと共に力を合わせている。女性の意識向上（コンシャスネスレイジング）グループ、山頂の女神崇拝、女性の相互扶助医療クリニック、キルティングのふとんをつくる女性の集まりなどは、女性のグループを通じて現れ出ようとする処女神の元型の表現なのである。

鋭く焦点を合わせた光のような意識の質

三つの女神のカテゴリー（処女神、傷つきやすい女神、錬金術の女神）のいずれも特徴的な意識の性質をもっている。焦点を合わせた意識は処女神に典型的である(2)。アルテミス、アテーナー、ヘスティアー型の女性は、自分自身に大事なことに注意を集中する能力を有している。彼女らは自分がしていることに熱中する力をもっており、焦点を当てる過程で、手がけている仕事、あるいは長期的展望のもとに据えられた目標とは関係ないことは、すべてたやすく排除してしまうことができるのである。

私は焦点づけられた意識を、鋭く焦点に当てた、意図的に方向づけられた強烈な光線になぞらえることができると思う。そのような光線は焦点になったもののみを照らし出し、それ以外はすべて暗闇あるいは陰のままになるからである。それはスポットライトのような性質をもっている。もっとも集中度の高い形では、焦点づけられた意識はレーザー光線のようでさえあり、その分析能力によって非常に鋭く貫いたり解体したりするために、信じられないほどに正確であったり破壊的であったりする。ただしそれは、集中度や焦点を合わせる対象によるが。

周りの人々の要求に妨害されず、食べ物や眠りにたいする自分自身の欲求にさえ留意せずに問題解決や目標達成に集中することができる女性は、達成をもたらしてくれる集中力を有している。彼女は自分が取り組んでいるどんなものにたいしても「脇目もふらない注意」を払う。「一つのことだけを考え」、そのおかげで心に決めたことをすることができる。外部にある目標やあるいは手じかにある仕事のどんなものにでも集中するとき（それはアルテミスとアテーナーの特徴であるが）、焦点は達成へと方向づけられている。

ダニエル・スティールは集中した意識の実例であり、彼女の十七冊の小説は十八カ国語に訳され、四千五百万部以上売れている。彼女は自分自身のことを「期待以上によい成績をあげている人」で、「非常に熱心なのです。私はふつう二時間から四時間しか眠らず、一日十二時間仕事をします。この調子で週七日、六週間やっていくのです。(3)」（そうすると小説が完成する）と言っている。

焦点が内へと向かい、魂の中心へ向かう場合（それはヘスティアーの焦点の方向である）、この元型が力をもっている女性は長い期間瞑想することができ、彼女を取り巻く世界によって妨害されることもなければ、特定の立場を保つための色々な不愉快な事柄によって妨害されることもない。

存在と行為のパターン

競泳の選手、活動的なフェミニスト、科学者、統計学者、法人組織の取締役、管理人、女騎手になりたいという自分自身の傾向に従っている女性、あるいは修道院やアシュラム（ヒンズー教の隠遁者の家）に入る女性は処女神の性質を例示している。自分の才能をのばし、個人的な価値をもつものを追求することに集中するために、処女神型の女性はしばしば伝統的な女性の役割を避ける。その場合、いかにしてそうするか（つまりいかに自分自身に忠実であり、かつ「男性社会」に適応して生きていくか）という挑戦を突きつけられる。

神話において、三人の処女神は似た挑戦に直面しながら、それぞれ異なった解決法を発展させた。

狩猟の女神であるアルテミスは、町を捨て、男たちとの接触を避け、自分が組織する妖精の群と一緒に野生のなかで時間を過ごした。彼女の適応様式は男性とその影響からの分離であった。アルテミスに似ているのは、自分が何者であり、自分にとって大切なものが何であるかをはっきりさせるつもりで、意識向上グループに参加してフェミニストになったり、女性の要求に応えるために女性が経営している共同体や会社で働いている現代女性たちである。アルテミ

ス型の女性は「荒々しい個人主義者」とも表すことができる。男性からの、さらには他の女性からの個人的な支持や是認がなくとも、一人で邁進していき、自分に大切なことをしていくのである。

それとは対照的に知恵の女神であるアテーナーは、自分がなすことを男性と平等のものとして、あるいはよりすぐれたものとして男性のなかに加わった。彼女は戦場ではもっとも冷静であり、もっともすぐれた策略家でもあった。彼女の適応策は男性との同一化である。彼女は男性の一員のようになったのである。アテーナーのやり方は、物質的現実の世界に参加したり、伝統的には男性の職業とされる世界で成功を納めている多くの女性がとってきたものである。

最後に炉の女神であるヘスティアーは、男たちから引きこもるという内向的な適応のやり方に従った。彼女は内界に引きこもり、外見上は誰だかわからない存在となり、一人にされた。この様式を採択している女性は、欲しくもない男性の興味をひかないように自分の女性性を軽く見、競争的な状況を避けてひっそりと生きる。彼女は自分の人生に意味を与えてくれる日常的な仕事や瞑想を重んじ、それに力を注ぐのである。

三人の処女神は他者との経験によって変化させられることがなかった。自分の感情にも、他のいかなる神々にも圧倒されることがなかった。苦しむことで傷つくこともなければ、関係によって影響を受けることもないし、変化を受け入れることもなかったのである。

同様に女性が自分自身の行路に精神を集中すればするほど、他者によって深く影響を受けることがなくなるであろう。そのように集中することで彼女は他者との結びつきからだけでなく、自分自身の感情生活や本能生活からも切り離される可能性がある。心理学的に言えば、「貫かれる」ことがなければけっして誰も彼女の心に「到達」することはできないのである。実際、誰も問題にならないし、彼女は感情的な親密さとは何かを知らない。

それゆえ人間の女性が処女神のパターンに同一化する場合、彼女は一面的でしばしば孤独な人生を送ることになり、真の「重要な他者」と出会うことがないかもしれない。しかしながら、女神は自分の役割に制限されたままでいるが、人間の女性は人生の初めから終わりまで成長したり変化したりすることができる。もともとは処女神に似てはいても、誰かに自分を賭けることをヘーラーから教えられるし、母性本能のうごめきを感じてデーメーテールから学ぶし、あるいは恋におちて、アプロディーテーもまた自分の一部であったという予期せぬ発見をするかもしれない。

新しい心理学理論

アルテミス、アテーナー、ヘスティアーを肯定的で能動的な女性性のパターンとして描くことで、私は心理学の伝統的な仮説に挑戦している。フロイト派の見解に立つかユング派の見解に立つかで、処女神の特徴である性質は症状や病理とされるか、そうでなければ女性の心のなかの十分意識された男性的要素よりも劣るものの表現として定義されてきた。これらの理論は処女神のパターンに適合している女性の行動を抑圧し、自尊心を傷つけてきた。フロイトの理論に親しんでいる女性たちは、たとえば赤ん坊よりもキャリアを欲しがっているという理由で

自分たちが不自然であると考えてきた。そしてユングの理論に馴染んでいる女性たちは、ユングが女性の客観的にものを考える能力を劣っていて独善的なものであると感じていたことを知っているので、自分の考えをはっきり言うことを躊躇してきた。

ジークムント・フロイトの女性心理学の理論は、男根中心的であった。彼は女性のからだや心に何があるのかといった観点ではなく、女性には解剖学的に何が欠如しているのかといった観点から女性を記述した。彼の見解では(4)、ペニスをもっていないことで女性は損なわれ、劣ったものになっていた。結果的に彼の感じからすれば、標準的な女性はペニス羨望に苦しみ、マゾヒスティックであり、ナルシスティック（自己愛的）であり、超自我があまり発達していない（すなわち良心が劣っている）ということになった。

フロイトの精神分析の理論は女性の行動を次のように解釈した。

●有能で自信のある女性、世の中で何かを成し遂げる女性、自分の知性や能力を現実化する機会を楽しんでいるかのように見える女性は「男性コンプレックス」を露呈している。フロイトによれば、彼女はあたかも自分が去勢されていないことを信じているかのように振る舞っている。もちろん実際は去勢されているのにである。どんな女性も実際はすぐれることを望んでいない。卓越したいという欲求は男性コンプレックスの徴候であり「現実」の否認である。

●赤ん坊を欲しがる女性は、実際はペニスを欲しがっており、この願望を昇華して、ペニスへの願望の代わりに赤ん坊への願望に置きかえているのである。

●ある女性が男性に性的に魅力をおぼえるのは、彼女が自分の母親にペニスがないことを発見したからである。（フロイトの理論では、女性の異性との性愛は次のような外傷的な瞬間にさかのぼる。すなわち、幼い少女だった頃、自分にペニスがないことを発見し、それから母親にもないことを発見し、そこで彼女のリビドーは母親から離れて、ペニスがある父親へと向かったときである。）

●フロイトの見解によれば、男性に期待されるのと同じくらい性的に積極的な女性が自分のセクシュアリティを楽しんだり、自分の官能的な性質を表現しているということはありえない。彼女は強迫的なやり方で振る舞い、去勢不安を軽減しようとしているのである。

C・G・ユングの女性心理学の理論(5)は彼が女性を単なる男性の欠如と受けとっていたのではないという点でフロイトの理論より、女性にとっては「より親切」であった。彼は男性と女性とで染色体の構成が異なっていることに対応する精神構造を仮説した。ユングの見解では、女性は女性的な意識人格と（アニムスと呼ばれる）無意識のなかの男性的要素をもっており、一方、男性は男性的な意識人格と無意識のなかの女性的構成要素であるアニマをもっているのである。

ユングにとって、受容性、受動性、養育的態度、主観性は女性の人格の特徴である。合理性、精神性、きっぱりと非個人的に行動する能力は男性的な属性である。彼は男性がもともとこれらの分野において才能を与えられていると考えた。同じような人格特性を持つ女性は、それがどれほど発達していても、男性でないという理由でハンディキャップを負っている。女性がよくものを考えたり、世間で才能を発揮しているならば、彼女は単に男性的なアニムスがよく発達しているにすぎないのである。ユングの定義によれば、アニムスは男性よりも自覚に乏しく、それゆえ男性よりも劣ったものである。アニムスは敵対的であったり、権力欲に駆り立

てられたり、非合理的に強情であったりもする。これらはユング（そして現代のユング派）がアニムスのはたらきぐあいを記述する際に強調しがちな特徴である。

ユングは女性がもとから欠陥をもつ存在と考えていたわけではなかったが、もともと男性よりも創造的ではなく、客観的になったり行動したりする能力が劣っていると考えていた。一般的に言って、ユングは、女性が女性みずからの独立した欲求をもっているというよりはむしろ、男性に尽くしたり男性と関わる存在だと考えていた。たとえば、創造性に関して言えば、彼は男性を創造者、女性を男性の創造的プロセスにおけるアシスタントと見なした。「男性は、彼の内なる女性的性質から完全なる創造物として仕事を生み出す」が、「女性の内部にある男性的側面は創造的種を生み、それが男性の女性的側面を豊かにする能力を持っているのである。(6)」

彼の理論的立場は、達成しようとする女性の努力を挫くものであった。ユングは「男性的な職業を選んだり、男性のように勉強したり働いたりすることで、女性は自分の女性的本性を直接傷つけるということはないにせよ、それと完全には合致しないことをしているのである(7)」と述べている。

女神のパターン

女神を正常な女性的行動のパターンと考えるならば、妻であるヘーラーや母であるデーメーテールよりも生まれつき知恵のあるアテーナーであったり、競争心に富むアルテミスに近いような女性は、活動的であったり、客観的に物事を見定めたり、目標達成志向であっても、自分のことを女らしいと評価できる。彼女は自分にもっともよく似ている特定の女神の雛形なのである。彼女のことを、フロイトなら男性コンプレックスに悩んでいると診断するであろうし、ユングならアニムスに同一化していて態度が男性的だと示唆するであろう。だが実際はどちらでもない。

女神のパターンがアテーナー型やアルテミス型の女性は、依存性、受容性、養育性などといった「女性的な」属性は彼女のパーソナリティの側面ではないかもしれない。長続きのする関係を形成し、影響を受けたり、愛や慰めを与えたり受け入れたり、他者の成長を支持したりする人間になろうと思うならば、これらの性質を発達させる必要があろう。

沈思黙考するヘスティアー型ならば内面に焦点が合わされるために、他者から感情的に距離を置きつづける。離れてはいるが、彼女の静かな温かさは他者をはぐくみ、支える。アルテミスやアテーナーと似てはいるが、彼女が発達させねばならないのは、個人的に親密になる能力である。

これらの成長の課題は、ヘーラー、デーメーテール、ペルセポネー、アプロディーテー型の女性の発達的欲求とは異なっている。これら四人の女神のパターンが素質となって、女性は人間関係を結ぶ。このような女性のパーソナリティはユングが記述した女性にぴったりとあてはまる。彼女らは、精神を集中しつづけること、客観的であること、主張することを学ぶ必要がある。それは、彼女らのパターンではもともと強くない性質だからである。これらの女性は生

活においてアニムスを発達させ、アルテミス元型やアテーナー元型を活性化しなければならない。

女性のなかでヘスティアーが支配的元型である場合、彼女はこれらの関係志向の女性たちとともに、世間でたくましく生きるためにはアニムスを発展させ、能動的な元型であるアルテミスやアテーナーをもつ必要がある。

男っぽいアニムスか、それとも女らしい元型か

主観的な感情や夢の形象は、女性の積極的な関心の焦点が男っぽいアニムスと女らしい女神のパターンのいずれに結びついているかを決定する助けとなる。たとえば、ある女性が自分自身の自己主張的な部分をまるで本来の自分と何か異質のものであるかのように感じているとしよう。つまり、「タフであったり」「男のように考えたり」する（このどちらも彼女には「しっくりと」感じられない）必要があるような困難な状況に立たされる女性は自分自身のなかにある男性に救いを求めるのである。その場合、危急に際して手腕をふるい彼女を助けているのは、アニムスなのである。普段以上の馬力が必要になったときには補助エンジンのようなものが求められる。つまり、アニムスは予備としてとってあるのである。この予備というあり方が特にあてはまるのは、ヘスティアー、ヘーラー、デーメーテール、ペルセポネー、アプロディーテーがもっとも強力なパターンとなっている女性である。

しかしパーソナリティの側面のうち、アテーナーやアルテミスがよく発達している女性はごく自然に主張したり、よくものを考えたり、自分が何を達成したいかを知っていたり、あるいは気軽に競争するであろう。これらの性質は異質なものと感じられるどころか、自分が女性としてあることの本来的な表現のように感じられる。「彼女のために」そうしてくれる男っぽいアニムスの性質のようには感じられないのである。

アルテミスやアテーナーの元型をアニムスと区別する第二の方法は夢である。夢は、これらの処女神が女性の積極的な態度の源となっているのか、それとも自己主張や目標追求がその女性の男性的な側面から来ているのかを示してくれる。

アルテミスやアテーナーが支配的な元型である場合、その夢み手はしばしば馴染みのない場所をたった一人で探検している。彼女は英雄の役割で、障害と闘ったり、山を登ったり、未知の国や地下の景色のなかに危険を冒して入っていったりする。たとえば「私は幌屋根のついた自分の自動車を運転し、追跡してくるどんな人からも逃れようと夜の田舎道をとばしている」「私はバビロンの吊り庭のような不思議な町のなかによそ者としている」「二重スパイのような者で、私はそこにいるべきではないとされており、周りの誰にでも私が何者かがわかると危険なことになるであろう」といった夢である。

夢のなかで体験される困難や旅の気楽さは、夢み手がこの世を自分で決心して生き、自分の才能を発揮させようとするときに直面する内外の障害に関係していることを示す。夢でのように彼女は、自分自身の道を決定すると自然に感じられるのである。彼女は有能になり、本当の自分を大切にしようとしているのである。

自己主張の性質が発達の初期の段階にある場合、夢み手に、しばしばもう一人の人物が同伴する。この同伴者は男であったり女であったり、誰だかはっきりとはわからない存在であったり、誰だかはっきりとわかる人であったりする。同伴者の性別は、出現しつつある能力が「男性的なもの」（アニムス）と考えられるか、それとも「女性的なもの」（処女神）と考えられるのかを決めるうえで助けとなる象徴的なコメントである。

たとえば、夢み手がアルテミスやアテーナーの性質を発展させつつあり、しかもまだ教育や職業の初期の段階にいるならば、もっともありがちな夢の同伴者はしばしば曖昧な特徴しかもたない、漠然とした見知らぬ女性である。後に同伴者はその教育や仕事の方向が夢み手と似ていて、単にもうちょっと先を行っている女性や、社会でひとかどの者になった大学のクラスメートであるかもしれない。

夢の冒険のなかに出てくる同伴者が男であったり少年であったりする場合、夢み手はしばしば因習的な女性であり、傷つきやすい女神、あるいは後に見るようにヘスティアーやアプロディーテーと同一化している。これらの女性たちにとって、男性は行為を象徴しており、そのために彼女らは自己主張や競争という特質を夢のなかでは男性的なものと定義づけているのである。

こうして女性が躊躇しながらもアニムスや自分自身の男性的な側面に助けられながら、仕事場や象牙の塔に入っていくとき、その側面は夢のなかではぼんやりとしか見ることのできない男性で表される。おそらくは幼い男の子か（まだ発達途上の）青年であろう。そしてその彼は見知らぬ所、しばしば危険な所で自分とともにいる。彼女がよい成績をとったり昇進したりして、自分の能力にもっと自信をもつようになると、夢の場所はより親しみのあるものとなり、夢の象徴はよく知った人になったり、あるいは夢のなかではよく知っているように思われる人になっていく傾向がある。たとえば、「私は、昔のボーイフレンドと一緒に、入り組んだ長いバス旅行をしています」とか「私は、男の人が運転する車に乗っており、その人はいま誰だか思い出せないが、夢のなかでは私の非常によく知っている人です」というぐあいである。

私が本書で展開してきた新しい理論は、ユングが導入した概念である元型のパターンの存在に基づいている。ユングが記述した女性心理学のモデルを捨てたわけではないが、それは何人かに当てはまるにしてもすべての女性に当てはまるわけではないように思われる。傷つきやすい女神たちとアプロディーテーに関する章ではユングのモデルがさらに洗練される。一方、このすぐ後につづくアルテミス、アテーナー、ヘスティアーに関する三つの章では、ユングの概念を越えた新しいパターンが提出される。

4

狩猟と月、競争者と姉妹の女神アルテミス

女神アルテミス

ローマ人にはディアーナとして知られているアルテミスは狩の女神であり、月の女神であった。ゼウスとレートーの娘であり、背が高く愛らしい。彼女は野生の森や山や牧場や森の空き地をニンフや猟犬の群とともに歩き回った。短いチュニックをまとい、銀の弓で武装し、箙（えびら）を背負い、弓を放てば、百発百中であった。彼女は月の女神であるから、光の使者としても表され、手に松明をもっていたり、頭の周りを月と星が囲んでいたりする。

野生の生命、特に若い野生の生命の女神であるアルテミスはその特質を象徴する多くの野生動物と結びつけられた。牡鹿、雌鹿、野うさぎ、うずらはすべて彼女の捕えにくいという性質を分けもっていた。雌ライオンは狩人としての彼女の王位と勇敢さを例示しているし、獰猛なイノシシは破壊的な側面を表していた。熊は若者の保護者としての彼女の役割を表すのにふさわしい象徴であった（アルテミスに身を捧げ、彼女の保護下にあるギリシアの思春期にある少女たちは、そのおてんば娘の時期をアルクトイつまり「雌熊」と呼ばれていた）。最後に言うべきこととして、野生の馬は仲間を連れて広い場所を徘徊するが、アルテミスもまたニンフを連れてそうした。

系譜と神話

アルテミスは太陽の神であるアポローンより先に生まれた双子の妹であった。彼らの母親レートーは自然神であり、ティーターン神族の娘であった。父親はオリュムポスの最高神ゼウスであった。

レートーが子供たちを産もうとするとき、大きな障害が生じた。彼女はどこに行っても受け入れてもらえなかったのである。みながゼウスの法律上の妻であるヘーラーの執念深い復讐を恐れたからである。レートーは最後には不毛の地であるデーロス島に隠れ家を見つけ、アルテミスを産んだ。

アルテミスは生まれるやいなや、陣痛が長びいてアポローンを産むのに苦労していたレートーを助けた。ヘーラーの恨みのためにレートーは九日九夜ひどい痛みに苦しんだ。アルテミスはこのように母親の産婆でもあったので、出産の女神とも考えられた。女性たちは彼女のことを「どんな痛みにも捉えられることのない、痛みのさなかの助っ人」と言った。彼女らは赤ん坊が誕生するかあるいはアルテミスの弓で「安らかに死なせてもらう」かのどちらかで痛みが終わるようにと祈った(1)。

アルテミスが三歳のとき、レートーは彼女をオリュムポスへ連れて行き、ゼウスや親戚の神々と会わせた。詩人カリマクスは「アルテミスへの讃歌」のなかで彼女が魅力的な父親ゼウスの膝の上に座っている様子を描写している。ゼウスは「身をかがめて彼女を愛撫しながら言う。私がこのような子どもたちをもつことを女神たちが許してくれるならば、嫉妬深いヘーラーの復讐にも困ることはほとんどない。可愛い娘よ、おまえの望むものすべてを与えてやろう(2)。」

アルテミスは弓と矢、一緒に狩をする一群の猟犬、自分に付き添うニンフ、それを着て自分

だけの場所である山や荒れ野を走り回るのに適した短いチュニック、それに永遠の貞節を欲しいと頼んだ。ゼウスはすべてを受け入れ、さらに自分自身で決定するという特典も与えた。

それからアルテミスは森や川へ行き、もっとも美しいニンフたちを選んだ。また、海の底へ行き、ポセイドーンの職人であるサイクロープを見つけ出し、銀の弓と矢をつくってもらった。最後に手に弓をもって、ニンフたちを従え、笛吹きである自然の神、半分は人間で半分がヤギのパーンを探し出して、彼のもっともすぐれた猟犬の何匹かを欲しいと頼んだ。夜がきているにもかかわらず、新しい贈り物の力を試してみたくてうずうずし、彼女は松明の光で猟をした。

神話ではアルテミスは、すばやくかつ断固として行動をおこし、自分の助けを求めて祈る人々を保護したり助けたりしている。また彼女に背く人々を罰するのも非常にすばやかった。

あるとき彼女の母親レートーがアポローンを訪れるためデルポイへ行こうとしている道の途中で、巨大なティテュオスが彼女をレイプしようとした。アルテミスはすぼやく母親を助けに駆けつけ、弓と矢で鋭く狙いを定め、彼を殺した。

別なとき、尊大で分別のないニオペーがレートーを侮辱するという過ちを犯してしまった。つまりニオペーは多くの美しい息子や娘たちをもっているのに、レートーはたった二人しか子どもがいないと言って自慢したのである。レートーがアルテミスとアポローンに、この侮辱に復讐するように頼むと、彼らは即座にそれをやってのけた。弓と矢を使い、アポローンはニオペーの六人の息子を、アルテミスは彼女の六人の娘を殺した。そしてニオペーは泣く石の柱に変えられた。

注目すべきことだが、アルテミスは繰り返し母親を助けにやってきている。このようなことが知られている女神は他にいない。他の女たちも彼女に救いを求めれば助けられた。森のニンフ、アレトゥーサは、レイプされそうになったとき、アルテミスの名を呼んだ。アレトゥーサは猟から帰り、服を脱いでさわやかに水浴びしていたのだが、そのとき、川の神が彼女を欲しくなり、恐怖で逃げる裸のニンフを追い求めたのである。アルテミスは彼女の叫び声を聞き、靄の雲のなかで彼女を助け、彼女を森の泉に変えてしまった。

アルテミスは自分に背く者にたいしては無慈悲である。愚かなアクタイオーンはこのことを思い知った。森をさまよっているうちに、狩人アクタイオーンはたまたま女神とそのニンフたちが隠れて水溜まりで水浴びしているところに出くわし、その光景にポカンと見とれてしまった。この侵入に腹を立てたアルテミスがアクタイオーンの顔に水をはねかけると、彼は鹿に変わってしまった。彼は自分自身の猟犬の餌食となり、追われた。あわてふためいて逃げようとしたが追いつかれ、八つ裂きにされてしまった。

アルテミスはもう一人の狩人オーリーオーンをも殺すことになった。彼に恋をしていたのにもかかわらずである。アルテミスがオーリーオーンを好きになったことに腹を立てたアポローンの企みによってアルテミスの知らぬうちに事件がおこった。ある日アポローンは、オーリーオーンが海を渡り、彼の頭がちょうど水に隠れたところを見つけた。それから少し離れたところにアルテミスを見つけ、海のなかの暗いものを指さし、彼女にはそれを撃つことができないだろうと言った。兄の挑発にそそのかされ、彼女は自分がオーリーオーンの頭を狙っているとは知らずに弓を放って殺してしまった。のちにアルテミスはオーリーオーンを星座の一つとし、自分の猟犬の一匹を彼に与えた。それが大犬座のシリウスであるが、シリウスは彼に付き

添い天をわたる。このように彼女の愛した一人の男は、彼女の競争心という性質の被害者となったのであった。

アルテミスは狩の女神としていちばんよく知られているが、月の女神でもある。彼女は夜にくつろぎ、月の光や松明の光に照らされて荒れ野を歩き回った。月の女神という側面では、アルテミスはセレーネーやヘカテーと結びつけられた。三人の女神は月の三人組と考えられてきた。セレーネーは天上を、アルテミスは地上を、ヘカテーは不思議で神秘的な地下世界を治めたのである。

アルテミス元型

狩猟と月の女神であるアルテミスは、女性の独立心を人格化したものであった。彼女が表している元型は、女性が自分自身の選択で自分自身の目標を追い求めることを可能にする。

処女神

処女神アルテミスは恋におちることがなかった。彼女はペルセポネーやデーメーテールのように誘惑されたりレイプされたりせず、けっして夫と妻というペアの片われではなかった。処女神元型としてのアルテミスは、一種の完全さ、自己充足性、「自分のことは自分でできる」という態度を表している。女性はこれによって、自信と独立心をもってみずから機能することができる。アルテミス元型は男性がいなくとも充実していると女性に感じさせる。男性からの是認を必要とせずに自分の興味を追求し、自分にとって重要なことに取り組むことができる。彼女のアイデンティティと価値観は、自分が誰であり、何をするかに基いており、自分が結婚しているかどうかとか、誰と結婚しているかといったこととは関係ない。「ミズ」と呼ばれることに固執するのは、男性からの独立と分離を強調する典型的なアルテミス処女神の性質を表している。

目標を狙う射手

自分が選んだ宝庫を追求する狩の女神として、射手としてのアルテミスは、近いものであれ、遠いものであれ、どんな標的をも狙うことができ、自分の矢が百発百中であることを知っていた。アルテミス元型は女性たちに、自分たちにとって大切なものならどんなものにでも精神を集中し、他人が何を求めているのであれ、他人からどんな競争をしかけられるのであれ、それに惑わされずに自分のコースを突き進んでいく能力を与える。仮に競争があるとしても、それはそれで「狩」の興奮を高めることになる。障害物があったり獲物の逃げ足が速くても、目標に焦点を合わせて、どこまでも追求していくということが、実績を生み出すアルテミスの性質である。この原型があればこそ、女性は自分で選んだ標的に的中することが可能になるのである。

女性運動の元型

アルテミスは女性運動が理想化しているもろもろの性質を表している。すなわち、達成力と有能さ、男性や彼らの意見からの自立、それに、力がないために犠牲となっている女たちや幼い者への思いやりである。女神アルテミスは、自分の母親が出産するのを助け、レートーとアレトゥーサをレイプから救い、もう少しでレイプしそうだったティテュオスと侵入者の狩人アクタイオーンを罰した。彼女は、若い、特に前思春期の少女たちの保護者であった。

こういったアルテミスの関心は、これまでにレイプ・クリニック、防衛術、性的いやがらせ（セクシャル・ハラスメント）を受けている女性たちにたいする援助、それに虐待されている女性たちのための避難所（かけこみ寺）を組織してきた女性運動の関心とよく似ている。女性運動は安全な出産と助産術を強調し、インセストとポルノグラフィーに関心を寄せ、女性たちと子供たちにたいする虐待を防止してこのような虐待をなす者たちを罰しようという欲求に動機づけられている。

姉妹

女神アルテミスは一群のニンフたちに付き添われていた。ニンフたちは山や森や川に結びついている小さな神々である。彼女と共に旅をして、広大な荒れ地を探検し狩猟をする。家事とかファッションとか、女たちはこれこれをしている「べきだ」という観念には縛られず、男性や男性の好みにふりまわされることがなかった。彼女たちは「姉妹」のようであり、アルテミスは「大姉貴」として彼女たちを統率し、彼女たちは彼女に救いを求めることができた。アルテミスがインスピレーションを与えている元型であるのだから、女性運動が女性たちの「姉妹性」（シスターフツド）を強調してきたのも不思議ではない。

雑誌『ミズ』の設立者で編集者であるグローリア・スタイネムは、アルテミス元型のもろもろの側面を体現している現代女性である。スタイネムは、彼女に女神のイメージを投影する人々にとって、現実以上の神話的な人格になってしまっている。世間の目からすれば、グローリア・スタイネムは女性運動のリーダーであり、心の目からすれば、仲間たちに囲まれながらひときわ輝いている長身の優雅なアルテミスである。

女性運動が目標とし追求しているものに賛同する女性たちはしばしば、アルテミスの人格化としてのグローリア・スタイネムを賞賛し、彼女に同一化する。この同一化は特に一九七〇年代の初頭について言える。その頃は非常に多くの女性たちが、彼女のトレードマークである飛行士風グラスをかけ、長い髪をなびかせて真中で分けた彼女のヘアースタイルを真似たものである。十年後になると、表面の対抗意識は、彼女のように個人的な実力と自立心をそなえた魅力的な女性になろうという努力に取って替わられている。

スタイネムの役割と容貌をとり囲んでいるアルテミス風の神秘は、彼女が独身であることによってさらに高められている。ロマンティックに何人かの男性たちと結びつけられてはきたが、彼女は結婚をしていない。まさに「いかなる男性のものでもない」「自己充足的な」処女神を現している女性である。

スタイネムは、女性たちが彼女に助けを求め、それを大姉貴のように彼女が与えてくれるという意味で、アルテミスの伝統に立っている。私は、アメリカ精神医学会（APA）の年次大会に来てもらったとき、彼女からの支持をじかに感じとった。彼女は私たち会員がAPAにはたらきかけて、同権修正条項（ERA）を批准していなかったいくつかの州による女性運動のボイコットを

撤回させようと努力しているのを助けてくれたのである。私は、多くの男たちがグローリア・スタイネムにどれほどの力を認めているかを見て深い感銘を受けた。彼らは「彼女の機嫌を損ねてしまうと」、まるでアクタイオーンの運命をともにするかのように反応したのである。彼女に反対した男性の精神科医のなかには、実際、（根拠のない）心配を表明する者がいた。もしこの「女神」が力を行使して自分たちを罰し破壊しょうとするならば、自分たちが財政的に破綻するか、研究資金を失うことになるかもしれないと言うのである。

自然復帰を叫ぶアルテミス

アルテミスは野性と飼い馴らされていない性質に親しんでいるので、自然との合一に責任のある元型である。それはある種の女性が、荷物を背負い、樹木の茂る山々に入っていき、月や星のもとで眠りにおち、人の住まない浜辺を歩き、砂漠の向うを眺め、自分自身が自然との精神的合一にあるような気がする場合に感じられるものである。

リン・トーマスは『バッグパッキング・ウーマン』のなかで、自分のアルテミス的性質を通じて野性を重んじる女性の知覚について措写している。

まず最初に、壮大さと静寂、まじりけのない水と距離……もろもろの関係や日常のきまりきった仕事から離れていられるというチャンス……それにエネルギーにも恵まれている。野性的であるということで私たちはその特別のエネルギーと一つになる。いまでも思い出されるが、あるとき私はアイダホのスネーク・リバーの川岸に横たわり、自分が眠れないことに気がついていた。……自然のもろもろの力が私をとらえていたのである。私はイオンと原子の舞踏にのみこまれていた。からだはあたり一面に充満している月からの引力に反応していた(3)。

月光のヴィジョン

狩人のアルテミスが標的にしっかりと目を定めて焦点を明確にするということは、アルテミスに結びついている二つのものの「見かた」の一つである。「月光のヴィジョン」もまた、月の女神であるアルテミスの特徴である。月の光に照らされている風景は音もなく、細かな部分はぼんやりとしていて美しく、神秘的である。人は思わず星々がきらめいている夜空や、自然の壮大でパノラマのような光景に目を奪われる。月の光に照らされてアルテミスに触れる人は、しばしのあいだ自分を忘れて自然の一部になり、自然につつまれ、自然と一体になる。

『荒野の女たち』のなかで、チャイナ・ギャランドは、女性たちが荒野のなかへと入っていくとき、自分の内面に向かって入ってもいるのだということを強調している。「荒野のなかに入っていくということは、私たちすべての心のなかにある野性に入っていくことでもある。このことこそ、このような体験がもっているもっとも深い価値であるのかもしれない。つまり、自分が自然界と親類関係にあることがわかるのである(4)。」アルテミスに従って荒野のなかへ入っていく女性たちに特徴的なことであるが、彼女たちは自分が以前に比べてより内省的になっていくのを発見する。しばしば、彼女らの見る夢はいつもに比べてよりいきいきとしており、それによってますます内面を見つめるようになる。いわば、「月の光」によって内なる大地と夢の象徴を見るのであり、それは、昼の明るい光ではもっとも高い評価を受けている触れ

ることができる現実と対照をなすものである。

アルテミスを育てる

アルテミスと同一化した女性たちはただちに、自分がこの女神と親しい関係にあるということを認める。他のタイプの女性たちも彼女と知り合いになりたいという欲求に気づくことになるかもしれない。しかし他の女性たちは、アルテミスが自分のなかに存在しているということを知っており、彼女が自分自身のより影響力をもつ部分になってほしいという欲求を自覚している。どのようにしたら私たちはアルテミスを育てることができるのか。あるいはこの元型を強めることができるのか。またどのようにすれば、私たちの娘たちの心のなかでアルテミスを育つようにすることができるのであろうか。

アルテミスを発達させるという目標を実現するためには、ときには劇的な方策をとらねばならないことがある。たとえば、ある才能に恵まれた女性作家は、仕事が自分にとって重要であったにもかかわらず、男性が生活のなかに入りこんでくるときはいつでも、繰り返し仕事を放棄した。どんな男性でも初めは彼女の心を夢中にさせてくれた。じきに彼は、彼女にとってなくてはならない存在になった。彼女の生活は彼をめぐって回転し、もし彼が疎遠な態度をとったり拒否的な姿勢を示すと、彼女はますます狂ったようになった。ある友人が、彼女は男性中毒にかかっていると評した。その後、彼女はこのパターンを理解し、もし執筆を大事に考えるつもりがあるならば、「冷たい七面鳥」（コールドターキー）のようになって、しばらくのあいだ「男絶ち」をしなければならないだろうと思い、そう決心した。彼女は町から引っ越して、ときたまにしか昔の友達に会わなかった。その一方で、自分の心のなかに孤独、仕事、そしてアルテミスを育てたのである。

若くして結婚する女性はしばしば、娘であることから妻であることに（元型的にはペルセポネーからヘーラーに）移行する。そして、離婚して生まれて初めて一人で生きるようになって、やっと、アルテミスのもろもろの性質を発見して受容するようになるのかもしれない。このような女性は、バカンスに一人で出かけ、楽しい時間を過ごせることを知るであろう。また、毎朝何マイルも走ることに喜びをおぼえたり、女性たちを助けるグループのメンバーであることに喜びを見出したりもする。

あるいは、ある女性は次から次へと男性関係を結び、新しい男性が現れてくるまでの時期はむなしく感じられる。そのあと、「男たちをあてにすることをあきらめ」、けっして結婚はすまいと、深刻な結論を出してから初めてアルテミスを育てることになる。ひとたび、この可能性を直視して自分の人生を友人たちや自分にとって大切な事柄を中心につくりあげてゆくだけの勇気をもつと、自分自身で十分だという全体感をおぼえる。これは、アルテミス元型を発達させることから生じる思いもかけない幸せな状態である。

女性たちのためにつくられた荒野という名のプログラムはアルテミスを呼びおこすが、それは特に集団体験を単独の英雄的な旅と結びつけるものである。外国に出かけたり、女性たちのためのヴィジョンの追求に乗り出す女性たちはアルテミス元型を育てているのである。同様に、娘たちが、スポーツで競い合ったり、女の子だけのキャンプに出かけたり、新しい場所の探究の旅に出かけたり、交換学生として異文化のなかで暮らしたり、あるいは平和部隊に加わるとき、彼女らは自己充足するアルテミスを発展させるような経験をしているのである。

アルテミス型の女性

アルテミスのもろもろの性質は早くから現れる。通常、アルテミス型の赤ちゃんは新しい対象をくいいるように見つめ、受動的であるよりはむしろ能動的である。自分で選んだ課題に集中するこの能力を、人々はしばしば次のように言う。「この女の子は、二歳にしては驚くほどの集中力を持っている」とか「一度こうと言ったらきかない子どもだ」とか「約束には気をつけなくてはならないね。この女の子は象のような心をしている。忘れずにいつまでも覚えているだろうから」新しい領域を探索しようとするこのアルテミス的傾向は、ふつう、努力しておき上がり、赤ちゃんベッドの柵を越えて、赤ちゃん用の遊び場の囲いから抜け出て、より広い世界へと出ていくときから始まる。

アルテミスには、自分の主張や原理に強くこだわる傾向があった。自分より小さい者の弁護をかってでたり、「それは正しくない！」と激しく主張して、不正を正すための何らかのキャンペーンにのりだすことがある。アルテミス型の少女が育てられる家庭で、息子たちの方が可愛がられ、男の子により多くの特権が与えられて家の雑用をすることが期待されないとき、この不平等を「既成事実」としておとなしく受け入れることはしない。未来のフェミニストの姿が初めてかいま見られるのは、家庭で幼い女の子が平等を要求するときである。

両親

自分が一人の人間として何者であるかということに満足をおぼえ、自分が一人の女性であることを喜びながら、一方で自分自身の人生を着実に追求するアルテミス型の女性はしばしばこれまで、レートーからの愛情とゼウスからの賞賛に相当するものを経験しており、彼らに支えられて自分のアルテミス的な潜在力を「現実のものにする」ことができる。アルテミス型の女性が競争して実績をあげることに成功しても葛藤なくやっていかれるためには、両親からの承認がきわめて重要である。

支えになってくれる多くの父親はゼウスのようであり、彼女が自分のしたいことができるように数々の「才能」を授けてくれる。おそらくこの才能は、はっきりとした形で手にとることはできないものであろう。つまり、父親と関心を共有していたり、似た点をもつことで、彼が認知し励ますことになるのである。あるいは、特殊な訓練や技能といった、よりはっきりした才能であることもある。たとえばテニスのチャンピオンであるクリス・エバート・ロイドは父親でプロのテニスプレーヤーのジミー・エバートからコーチを受けた。彼女はまだ六歳だったときに、父親から彼女専用のテニス・ラケットをもらったのである。

しかし、アルテミス型の娘が伝統に従わない母親と父親を持つとき、人生はもはやオリュムポスの山とは似ても似つかぬものになる。ギリシア神話にはこれに相当するものがないからである。両親が育児も家事も平等におこない、二人ともが仕事をしているとき、アルテミス型の娘には、自分のアルテミス的性質を重視し、これを発展させてくれる成長のモデルがいる。さらに彼女は、母性性とかもろもろの人間関係と両立しない性質を気にかけずに行動できる。

問題がおこってくるのは、アルテミス型の娘が、両親の期待どおりの少女になってくれないということで、両親から批判されたり拒否されるときである。おとなしくておっとりとした赤ちゃんのような女の子を望みながら、実際には活発で「私を閉じ込めないで」と言う子どもをもつ母親は、娘に失望するか、裏切られたように感じる。娘が自分の後をまとわりつき、助けを求めて走ってきたり、「お母さんがいちばんよく知っているのよ」ということにおとなしく同意するのを期待している母親は、アルテミス型の娘をもてば、期待が裏切られたように感じるであろう。まだ三歳になったばかりでも、「可愛い自立女性（リトル・ミス・インディペンダント）」は、お母さんと一緒に家にいたがらず、近所で年上の男の子たちと遊びたがる。彼女はフリルのついた服を着たり、母親の友達から可愛いと言われることを好まない。

後になってアルテミスが親の許可を必要とするような何かをしたいと思うとき、彼女は親と衝突するかもしれない。男の子たちがしていることでも、「女の子だから」という理由でできないとなれば、彼女は大声で抗議するであろう。抗議が聞きとどけられなければ、腹を立てて閉じこもるかもしれない。承認してもらえず、反対されることで、彼女の自尊心と自信が傷つけられる。特に自分の崇拝していた父親が彼女のことを女らしくないといって批判し、自分のことを「特別の少女」のようにはけっして扱わず、それと同時に彼女の考えや能力や努力を軽蔑したり批判するときはそうである。

臨床実践で私は、このような父親たちが自分のアルテミス型の娘と対立するとき何がおこるかを聞かされる。典型的には、娘は外面的には反抗的な態度を維持しながら、内面的には傷ついているのである。外見上、彼女は強くて、父親の考えには影響されず、自分が自立できる時機を待っている。そこからどういうことがおこるかはさまざまであるが、あるパターンに従っている。つまり、自分の能力に関して葛藤をおぼえ、しばしば自分をだめにしてしまうのである。自分自身への疑いの念こそ彼女の最悪の敵なのであるが。表面上は、彼女の追求しようとしているものに制限を加えようとする父親の権力にうまく抵抗はした。だが、彼女は自分の心のなかに父親の批判的態度を組み込んでしまっているのである。心の深いところで彼女はいまなお、自分はあまりよい娘ではないという気持ちと闘っており、新しいチャンスが提示されるとためらい、自分の能力を発揮せず、たとえ成功したとしてもなお、自分は何か欠陥があるのだと感じている。このパターンは、娘より息子により高い価値をおき、娘にはステレオタイプどおりの女性になることを期待する家族と文化によってつくり出される。

私のセミナーに出席しているあるアルテミス型の女性は次のように言った。「母が望んでいたのはペルセポネー（従順な、母親の可愛い娘）です。父が欲しがっていたのは息子でした。けれど、生まれたのは私だったのです。」アルテミス型の娘をもつ母親のなかには、自分が重要とは見なしていない目標を追求しているということで、娘を拒否したり批判したりしている者がいる。娘はふつう、このような反対に出会っても意志を曲げることはないが、それにもかかわらず、ひそかに傷ついている。しかし、母親の否定的態度はふつう、父親の否定的態度ほどには重みをもたない。父親の方がより大きな権威をもっているからである。

アルテミス型の娘が抱えるもう一つの共通した母娘関係の困難は、娘の目から見れば受動的で弱々しいように映る母親に関するものである。彼女らの母親は、いままでは抑うつ状態で、アルコールや不幸な結婚の犠牲になっていたり、あるいは未熟であったのかもしれない。このような母娘関係のなかにいるアルテミス型の娘たちは、母親との関係を言い表すとき、「私の

方が親でした」と言う。さらに話しこんでいくと、母親が自分より強くないこと、そして母親の人生を変えるほど自分が十分に強くないことにたいする悲しみが明らかになる。女神アルテミスはいつも母親のレートーを助けることができたのだが、自分の母親を救おうとするアルテミス型の娘の努力はしばしば失敗に終わっている。

自分の弱い母親を尊敬できず、軽蔑することは、アルテミス型の娘の処女神的な性質を強める。母親に似るまいと決心することで、依存感情を押し殺し、自分の傷つきやすさを表現することを避けて自立を誓うのである。

アルテミス型の娘が伝統的な役割に縛られてきた母親にたいする尊敬を欠くとき、彼女は一種の呪縛状態に追い込まれる。母親との同一化を拒絶することで、彼女はふつう、女性的と見なされているもの、つまり柔和さ、受容性、結婚願望および母性性を拒否することになる。彼女は不全感に悩まされるが、今度はそれが彼女の女性としての同一化の領域でおこるのである。

思春期と大人になりたての頃

子どもの頃のアルテミス型の女性は典型的には、根っからの競争好きで、忍耐心と勇気をそなえ負けん気が強い。何が目標であれ、それを追求するためには自分の限界までつき進もうとする。彼女がガール・スカウトの一員ならハイキング、登山、野宿、乗馬、キャンプファイアーのための薪割りに懸命になるであろう。あるいは、アルテミス自身のように弓矢の名手になるかもしれない。間違いなくアルテミス型のティーンエイジャーは「馬が大好きな」少女であり、彼女の世界は馬をめぐって回転する。『緑園の天使』という古典映画のヒロインはまさに元型的な思春期のアルテミスを人格化したものである。

アルテミス型のティーンエイジャーは自立の傾向と探究心が旺盛な少女である。彼女は森のなかに分け入り、山々を登り、次の角には、そしてまたその次の角には何があるかを見たがる。「私を閉じ込めないで」と「私を踏みつけにしないで」が彼女のスローガンである。子供の頃は、同年齢の者に比べて同調したり、妥協することが少ない。人々を喜ばせたいとはあまり思わないからであり、自分が何を望んでいるのかを知っているからである。しかしこの確固とした態度は彼女にはね返ってくるかもしれない。人々が彼女のことを「強情だ」「頑固だ」とか「女らしくない」と考えるかもしれないからである。

アルテミス型の女性は、家を離れて大学に行くと、自立の楽しみを満喫し、興味のあることならどんなことにでも挑戦して競争する。通常彼女は、気の合う仲間のグループを見つけて、彼らと「一緒にやる」。もし政治的な人間なら、選挙に立候補するかもしれない。

そしてもしからだを鍛えることが好きな女性なら、彼女は実際一日何マイルも走り、自分の強さと魅力を大いに楽しみ、走りながら自分の精神が内省的状態に入りこんでいくのを喜びとするであろう。（私はいままで自分のなかに強いアルテミス的傾向をもたないでマラソンをしたことがある女性に会ったことがない。なぜなら、アルテミス的傾向こそマラソンに必要な目標追求、集中力、競争心および意志を結合させるものだからである。）アルテミスは女性スキーヤーにも見られる。彼女らは山をおりていくコースの地図を本能的に見てとり、もろもろの困難という挑戦を受けながらも、ためらいなく前進する心とからだの傾向を常にもっている。

仕事

アルテミス型の女性は、自分にとって個人的に価値のある仕事に努力を注ぐ。競争によって拍車がかかり、（ある程度までであるが）反対に出会っても、ひるむことがない。援助職や法律の分野に入ったアルテミス型の女性はふつう、ある理想に従って自分の職業を選択している。ビジネスの世界なら、おそらく自分がこれぞと思う製品から手がけたり、自分がやりたいと思っている何かをするうえで役に立つ製品から手がけていることだろう。創造的な分野ならきっと個人的なヴィジョンを表現しているに違いない。政治の世界に入っているなら、主義を唱えて、非常によくあることだが、環境問題や女性問題にタッチするであろう。自分が抜きん出ているものに報酬が与えられるならば、名声であれ、権力であれ、金であれ、世俗的な成功が訪れるかもしれない。

しかしながら、多くのアルテミス型の女性が追求する関心は、なんら商業的な価値がなく、出世につながりもしなければ、有名になったり、懐具合がよくなったりもしない。反対に、ときには、その関心があまりに個人的であるか、既成のレールからはずれていて、あまりに時間をくうために世間での成功や人間関係のコネができないことは受け合いである。しかしそれを追求するということは、女性のなかのアルテミス的要素にとっては個人的な充実感を与えてくれる。たとえば、無視されてしまった原理を唱える人や、改革をしても評価されない人や、誰も耳を傾けているようすのない「荒れ野で叫ぶ声」はたいていアルテミス型の女性であり、誰からも励ましを受けたり、商業的成功を納めていないのに創作をしつづける芸術家も同様である。（芸術家の場合、創造性に影響を及ぼし、主観的経験を強調するアプロディーテーがアルテミスに加わっている）。

アルテミス型の女性は伝統に従わないため、自分自身の内部あるいは他の人々との関係で葛藤が生じて、それが彼女の努力の足伽になることがある。たとえば、家族が彼女の追求しているものを娘にはふさわしくないと見なすならば、彼女が望んでいるものは「立ち入り禁止区域」となるかもしれない。彼女が追求したがっている進路の選択は、つい最近まで女性たちには閉じられていたものであろう。もし女性運動の時代に先立って「あまりにも早く生まれすぎた」なら、彼女はさまざまな障害と支持が得られないために打ちのめされ、自分のアルテミス的青春は打ちくだかれていたはずである。

姉妹のような対女性関係

アルテミス型の女性は他の女性たちと友愛感覚をもっている。ニンフの友達に囲まれていた女神と同様にアルテミス型の女性も、他の女性たちとの友情を非常に大切なものと考えている。このパターンは小学校にまでさかのぼる。彼女らは「親友」であり、自分たちの生活で重要であるものなら何であれ、それを分かち合ってきたのであり、友情はついには何十年にもわたることもある。

仕事の世界ではアルテミス型の女性は、たやすく「昔からの女同士のネットワーク」の仲間入りをする。支援集団、他の女性たちとのネットワーク、年下の女性たちとの師弟関係は姉妹元型の自然な表現である。

個人主義者で集団を避けるアルテミス型の女性でさえ、女性の権利となるとほとんどいつも支援してくれる。こうした態度は、自分にこの世界で女性にどのような運命が割り当てられているかということについての自覚と共感を育てるように教えてくれた母親との類縁関係を反映しているのかもしれない。あるいは、自分たちの母親のまだ生きられておらず、挫折させられている思考内容に関係しているのかもしれない。一九七〇年代のアルテミス型の女性は、自分自身の母親がしたい、あるいはなりたいと思っていながらできなかったことをしていたのであり、またなろうとしていたのである。彼女らの母親が大人になってまだ間もないころは、第二次世界大戦後のベビー・ブームのためにアルテミスの表現がそれほどあまり許されなかった時期である。アルテミス型の女性の背景のどこかに、しばしばフェミニズムを志向する娘を支える母親の姿を見ることができる。

アルテミス型の女性は、もともとフェミニストの傾向があり、フェミニストたちが信奉する主義主張はそれを反映したものである。アルテミス型の女性は、自分が男性と平等であると感じている。彼女はこれまで、男性と競争してきて、自分が演じると考えられているステレオタイプの役割が不自然なものだという感じを抱いてきた。自分の能力を隠すこと、「自分がどれほどきれるかを男に悟らせるな」とか「（議論にせよテニスにせよ）男に勝たせろ」というのは彼女の性に合わないのである。

セックス

アルテミス型の女性は、いつまでも純潔を保ち、セクシュアリティが発達せず表現されないままであるという点で、女神に似ていると言えよう。しかし、今日ではこのパターンはまれである。もっと頻繁に見られるのは、アルテミス型の女性は大人になるまでに、未知の世界を探究し、新しい冒険を試みようという傾向の一部として性的体験をするパターンである。

アルテミス型の女性のセクシュアリティは、伝統的な仕事本位の男性に似ている。両者とも、人間関係は二の次である。仕事や創造的なプロジェクトや主義が第一である。それゆえセックスは、情緒的な親密さとコミットメント（ヘーラーが提供する動機づけ）の身体的表現とか、自分自身の官能的性質を深く表現する本能（そのためにはアプロディーテーが必要とされる）であるよりはむしろ、レクリエーションとしてのスポーツのようであったり、身体的な経験であったりする。

もしレズビアンであるなら、アルテミス型の女性は通常、レズビアンのコミュニティやネットワークをつくっている。異性愛であれ同性愛であれ、アルテミス型の女性は女友達との強い友情を大切にしているが、アルテミス型のレズビアンは性的な親密さを、人間関係の根拠としてよりはむしろ友情のもう一つの次元と見なしているようである。

アルテミス型のレズビアンは、自分と瓜二つの鏡のイメージのような恋人とほとんど双子のような関係を結ぶか、それともニンフのようで、自分よりは柔和でより「女らしく」はっきりとした個性をもたない女性にひきつけられるかのどちらかである。異性愛の場合もそうだが、同性愛の場合も、「父親的な」パートナーに包まれたり、支配されたり、あるいは自分自身が親の役割をとることを期待されるような関係を避ける。

結婚

アルテミス型の女性にとって結婚は、大人になってまだ間もない頃には、縁遠い話である。その頃は仕事や主義主張に没頭しているからである。おまけに、「落ち着く」ということは、動きまわっているアルテミス型の女性にとっては何ら心ひかれるものではない。もし魅力的で人気のある女性なら、その分野で頑張っても、一人ぼっちではなく、さまざまな男性とデートしていい気分になるというチャンスがある。男と結婚するより、男と一緒に暮らすことのほうを選ぶかもしれない。結婚しないままでいることもあろう。

結婚するとしたら、その相手はしばしば、クラスメートや同僚や競争者である。ふつうその結婚は平等主義の性質をもっている。近頃では、結婚したからといって苗字を変えずに旧姓のままでいることもある。

兄妹のような対男性関係

女神アルテミスには双子の兄アポローン、多くの顔をもつ太陽の神がいた。彼は彼女の男の連れ合いである。彼が支配するのは都市であり、彼女が支配するのは荒れ野である。彼は太陽の神であり、彼女は月の女神である。彼が従えるのは家畜であるのにたいして、彼女の方は野生動物である。彼が音楽の神であるのにたいして、彼女は山々で円舞するためのインスピレーションそのものである。オリュムポスの第二世代として、アポローンは父たちの世代であるよりはむしろ息子たちの世代の一員である。一方で彼は合理性と法律に関係しており、他方で予言の神として（彼に従う女予言者たちはデルポイで予言をしていた）非合理的なものとも結びついていた。妹と同様、アポローンも両性具有的であり、両者とも、ふつうは異性に結びついている性質や関心をもっている。

アルテミスとアポローンの双子性は、アルテミス型の女性が、友人であれ、同僚であれ、夫であれ、男性たちと結ぶ関係にごくありふれて見られるモデルである。さらに、アルテミス型の女性が心ひかれる男性はしばしば、審美的で創造的、治癒的、あるいは音楽的な側面をそなえた人格のもち主である。彼の仕事は、援助職か、もしくは創造的な分野のどちらかであると言えよう。ふつうは彼女と同等の知性をもち、関心を共有したり、補い合ったりする。アルテミスとアポローン関係の一つの例は、ジェーン・フォンダ（女優、活動家、フィジカル・フィットネスの唱導者）と彼女の夫トム・ヘイドン（リベラルな政治家）の関係である。

アルテミス型の女性は、支配したがる男性や、「俺がターザンで、おまえがジェーンだ」という関係にはまったくひかれない。母息子的な関係にも興味を示さない。彼女の生活の中心に自分をおいてくれと主張するような男性を避ける。女神自身が身体的に実際そうであったように、彼女も心理的に超越しているものであるから、「可愛い女」の役割を演じることをばかばかしく感じる。

しばしば、アルテミスとアポローンのような関係では、家の外で追求する興味が一致する。二人ともスキーヤーであったりランナーであったり、フィジカル・フィットネスに夢中であるかもしれない。もしアルテミス型の女性が一緒にバックパッキングやスキーや、その他パートナーと一緒にやりたいと思っていることが何であれ、それができなければ、関係の本質的な要素が欠けていると感じるであろう。

アルテミスとアポローンのような関係からはセックスなしでも気持ちのよい結婚が生じるかもしれない。そこでは、二人は互いにとって最良の友達なのである。たとえば、アルテミス型の女性のなかにはゲイの男とさえ結婚し、各パートナーが関係のなかで相手の仲間関係と自立を認めることを重視するものもいる。その後そのアルテミス型の女性は、別のタイプの女性と恋愛して自分たちの兄妹的な結婚を解消し、前の夫とは最良の友達でいつづけた。

アルテミス型の女性が結婚に深くて重要な性的要素を認められるようになるためには、もう一人の女神、アプロディーテーが影響を及さなくてはならない。そして、その結婚が一夫一婦的で自分自身を賭けたものになるためには、ヘーラーも心のなかに存在しなければならない。この二人の女神がいなければ、アルテミスとアポローンのような関係は容易に兄妹関係になってしまう。

平等な者同士の関係のパターンのほかに、アルテミス型の女性にとって共通する第二の人間関係のパターンは、自分を養い育ててくれる男性たちに熱を上げるということである。このような男性は、彼女が「安らぎを求めて帰っていく」人物である。彼は彼女に、もろもろの感情を熟慮し、敏感になるようにと教える。彼はしばしば、彼女が子どもを産んでくれることを望んでいる人物である。

アルテミス型の女性が入りこむ関係でも、彼女たちの性格と両立したり相補的にはたらかない性質のものは、しばしば幼少期の父娘の葛藤を繰り返している。このような夫は彼女の努力を支持せず、彼女を傷つけたり批判したりする。父親との関係についても言えることだが、彼女は反抗的になって自分の仕事をつづける。しかし彼女の自尊心は傷つけられている。そうでなければ、彼女の精神は打ちのめされ、最終的には、自分がどうあるべきかについての彼の考えに調子を合わせることになる。

あるいは、アルテミスとオーリーオーンの神話に似てアルテミス型の女性が強い男性に恋をしても、その関係のなかから競争的要素を締め出すことができないかもしれない。関係は競争的要素を殺すからである。もし彼が何か世間で認められることをしても（彼のことをそのことで嬉しくなるよりはむしろ）彼女は彼の成功に腹を立て、それをけなすならば、競争心が、彼が彼女にたいして抱いている愛情を台なしにするであろう。あるいは、彼女の愛をだめにするのは男の側の競争心かもしれない。たとえば、彼は彼女の業績にたいして、それが自分に勝つこととか自分を追い越すこととして反応するかもしれない。二人とも競争をやめることができないなら、スキーの競争からトランプのジン・ラミーにいたるまで、彼らのあいだに持ち上がるいかなる種類の勝負も深刻なものになる傾向がある。

アルテミス型の女性が「自分の理想とするタイプの女性」である男性たちはしばしば、双子あるいはうまの合う女性として彼女にひかれる。彼女は自分のかたわれなのである。あるいは彼らは、彼女の自立心が強く自己主張が旺盛な精神と意志力にひかれるかもしれない。そういった特徴が彼ら自身には未発達なのであろう。あるいは、自分自身のなかのある理想に対応する純粋さを具現する彼女にひかれるのかもしれない。

双子のモチーフは非常によくある魅力の根本に横たわっている。ここでは男性は一緒にいれば自然に感じられる自分の女性のかたわれにひきつけられるのである。自分が人生からの挑戦を追求するときに誰かに傍にいてもらえるとしたら、それはまさに彼女なのである。

アルテミスに、自分自身のなかでは未発達な尊敬すべき性質を見る男性は、彼女の意志力と

独立心にひきつけられる。彼は、ふつう「女らしくない」と考えられているもろもろの性質の根底に彼女を据える。彼にとって彼女はその強さのゆえに美しいのである。彼が理想化する女性たちは、（アルテミスにたいするローマ式の名前であるディアーナとして偽装している）奇蹟の女性に似ている。

私の息子が八歳だったとき、私は彼の友達がある女の子の大胆不敵な離れ業について賞賛しながら話しているのをふと耳にした。彼はその女友達が、遠慮のない勇気のある子で、自分を救いにきてくれることをあてにできると考えていた。「誰かが僕に手だしをしたら、あの子を呼ぶんだ。すぐにきてくれるよ。」精神科医として働いているときにも、私はアルテミスを理想的なイメージと考えている男性が、自分の愛する女性の偉業や業績を語る際に、同じように賞賛の口調で語り、彼女との関係に同じように誇りをもっているのを聞いたことがある。

三つめの種類の男は、アルテミスに混じりけがないところ、つまり彼女が処女であり、純朴な自然と同一化している点にひきつけられる。ギリシア神話では、このようにひきつけられることがヒッポリュトスによって人格化されている。彼はハンサムな若者で、女神アルテミスにみずからを捧げ、禁欲生活を送っていた。愛の女神アプロディーテーは彼の純潔さに腹を立て、次々と悲劇的な出来事がおこるように仕掛けた。しかしその神話についてはアプロディーテーの章で取り上げよう。このような男性、つまりアルテミスと同じくらいに純粋であるように見える女性にひきつけられる男性は。世俗的なセックスに気分を害する。彼らは若いヒッポリュトスのように、思春期後半か青年期初期にあり、童貞であろう。

子ども

アルテミス型の女性はほとんど大地の母というタイプではありえず、妊娠したり赤ん坊の世話をしたりといったことは彼女の願いを成就することにはならないであろう。実際、妊娠は、運動選手のように優雅で少年っぽい姿であることが好きなアルテミス型の女性にとっては、不快なものであろう。彼女は母親になろうとする強い本能的な力を感じない（そのためにはデーメーテールが現れる必要がある）。しかし彼女は子どもが好きである。

アルテミス型の女性は自分の子どもをもてば、しばしばよい母親になる。ちょうど彼女を象徴する雌熊のように。彼女は自立心を育てる母親になり、子どもたちにいかにして独力でやっていくかを教えるが、彼らを守るためには獰猛にもなりうる。アルテミス型の女性の子供たちのなかには、母親が自分たちのためなら死ぬまで闘うだろうと確信している者がよくいる。

アルテミス型の女性は自分の子どもをもたなくても、自分独特のマザリングのエネルギーを（たとえば若い伯母のそれを考えてみればよい）他の人々の子どもたちに注ぐことで快く感じる。ガール・スカウトの顧問になったり、継母になったり、「アメリカのビッグ・シスターズ」のメンバーになったりすることで、そのような機会が与えられる。彼女らはこのような役割をとることで女神アルテミスに似てくる。女神アルテミスは大人の女性になる入口にいる少女たちを守ったのである。

アルテミス型の母親は、子どもたちが赤ん坊だったころや、まだ頼りないよちよち歩きの子どもだったころを振り返ってなつかしんだりはしない。彼女らは子どもたちがもっと独立することを楽しみに待つのである。活発で探索好きな少年少女は、アルテミス型の母親が熱烈な仲間であることを知る。アルテミス型の母親は子どもがシマヘビを家にもって帰れば喜ぶし、子

どもたちとキャンプやスキーに行くのが大好きである。

しかし、面倒がおこり始めるのは、アルテミス型の女性が依存的で受動的な子どもをもった場合である。このような子どもをあまりにも早く独立させようとしすぎると、もっとしがみつかせた場合より、事態はさらに悪くなる。子どもは拒絶されたように感じ、自分をアルテミス型の母親の水準に達しない出来の悪い子どもだと感じてしまう。

中年期

アルテミス型の女性は、自分の人生においてそれ以外のどの女神の側面をももち合わせていない場合、三五歳から五五歳のあいだに中年期の危機を迎えることになる。アルテミスは、自分自身で選んだゴールをひたすら追求する目標志向型の若い女性にぴったりのパターンである。しかし中年期になると変化が生じる。いまや彼女が探検すべき「未知の野性の地」は少なくなっている。彼女は自分の狙った目標を達成することに成功して停滞期に入っているか、失敗している。

アルテミス型の女性は中年期に入ると、狩猟の女神としてのアルテミスからよりも、月の女神としてのアルテミスから強く影響を受け、内面に向かうにつれ、もっと内省的な時期を迎えることもあるだろう。更年期の空想や夢が刺激となって外向的なアルテミス型の女性は内界を旅するようになるかもしれない。その旅の途中、過去の「亡霊たち」と直面し、長いあいだ無視してきた感情やあこがれを発見することもある。更年期の内向性へと向かう衝動はヘカテーと関係している。ヘカテーは年老いた老婆で、暗い月、幽霊、無気味なものの女神であった。ヘカテーとアルテミスは地上を歩きまわる月の女神である。この二人の女神の関係は年配のアルテミス型の女性に見られる。彼女らは若いときに別の目的に向かって探検したのと同じような意味で、精神の領域、心理学的領域、あるいは魂の領域へと入っていく。

晩年

女性がアルテミス的な性質を老年期に入ってまでもちつづけることも珍しくはない。彼女の若い頃の活動性はけっしてやまない。落ち着いてしまうということがないのである。心あるいはからだは、どちらも常に動いている。彼女は新しいプロジェクトに乗り出したり、見知らぬ国々を探検する旅人である。若者を好む傾向や若者のように考える能力が保持され、中年期にあっても「中年のように」感じることはないし、老年期にあっても「老人のように」感じることがない。

この地域では知られている二人の北カリフォルニア女性はアルテミスのこの側面を人格化している。一人は博物学の教師エリザベス・タービリガーで、いま七〇代であるが、彼女は生徒の群をひきつれて、牧場や森や小川や山に行く。わくわくしながら木の根の近くに半分だけ顔を出した珍しいきのこを見つけ出したり、美しいヘビをもちあげたり、丘の斜面に生えた食用植物を指さし、みんなにマイナーレタスを手渡して味見させたりする。そのようにして彼女は自分の情熱を分かち、関心を示す大人たちと同様、連続した次の世代の子どもたちに自然の不可思議へと関心を向けさせるのである。

妖精のように年をとったアルテミスの二人目はフランシス・ホーンである。彼女の探究は人

間の本性に向けられている。彼女は七〇歳で心理学の博士号を取った。七五歳で『私は一つのことを望んでいる(5)』を出版した。それは自伝で、彼女の探索を描いており、自分が永続する価値のあるものを見出したと書きとめている。

ジョージア・オキーフはもっともよく知られたアメリカの女性アーティストであるが、彼女もまた人生においてずっとそうしてきたように、九〇代でもずっとアルテミスでありつづけた。彼女は野性の地南西部に情熱を抱き、そこを精神的に好む傾向にあった。そして集中した目的意識を持つことを通じて自分の人生のゴールに辿りついたのである。オキーフは「私は自分が望んできたことはすべて知ってきた。しかしほとんどの人々はそうではない(6)」と言っている。彼女の考えるところによれば、彼女の成功はあくなき挑戦（アグレッシヨン）という性質によって可能になったのであり、それが「私の望むものはどんなものをも自分のものとする」ことへとつながった。アルテミスに似たオキーフは、確かにはっきりとした目標をもち、自分の追い求めていることを達成したのである。

一九七九年、九二歳のオキーフは、画家ジュディ・シカゴの『ディナーパーティ』に入れられている唯一の現存女性となった。それは歴史上重要な三九人の女性への記念品として磁器の食器や刺繍のテーブルクロスなどによってテーブル設定がなされたものである。オキーフの食器は他のいかなる者の食器より高くテーブルからとびでている。これはシカゴの見解によれば、オキーフが「完全に自分を自分で所有するという野望をほとんど成功させた」ということを表している(7)。

心理的困難

女神としてのアルテミスは、自分の選んだ領域を自分の選んだ仲間と一緒に歩きまわり、自分のしたいことをした。犠牲になる女神たちと違い、アルテミスはけっして苦しまなかった。しかし彼女は自分の感情を害したり、自分の保護下にある者たちを脅す他者をこらしめた。これに似たことがアルテミス型の女性についても言える。つまり、彼女らに特有の心理上の困難のために、通常は自分自身よりはむしろ他者を苦しめる。

アルテミスとの同一化

目標を追求したり仕事に集中して「アルテミスとして」生きることは、アルテミス型の女性にとってはまったく申し分のないことかもしれない。特徴的なことであるが、彼女は自分の人生に欠如を感じないであろう。自分にとって深い意味をもつ仕事にエネルギーの相当部分を投入することができているのならば、なおさらそうである。彼女はたえず動きまわっているというライフスタイルをもつ傾向があり、それを楽しむ。「家庭という基盤」は重要ではない。ヘーラーやデーメーテールあるいはその両方が元型として力を及ぼしているのでなければ、家族や社会からの圧力などおかまいなしに、結婚も子どももさしたる欲求ではない。密接で自分の存在を賭けるような情緒的親密さはないが、男性や女性の友人たちときょうだいのような関係を持続させ、他の人々の子どもたちとの付き合いを楽しめる。

アルテミスに同一化することで性格が形成されると、女性は挑戦されたり、個人的に報いのある関心事に熱中したくなってくる。そうでないと元型は妨げられ、適切な表現を見出せなくなり、アルテミス型の女性自身は、やりたいことができないと感じ、最終的には抑うつ的になってしまう。これが第二次世界大戦後ベビーブームの時代に生じた多くのアルテミス型の女性たちの状況であった。彼女たちは自分たちが手にすることができる役割に適応しようとして失敗したのだった。

女神アルテミスが他者にたいしてどんなに破壊的でありうるかを思いおこすならば、アルテミスに無意識的に同一化している女性がもろもろの行為を通じて他の人々を傷つけたり痛めつけたりすることがあるということがわかってもそれほど驚くことでもないだろう。このような否定的な潜在力を以下のパラグラフに列挙してみよう。

傷つきやすさにたいする軽蔑

彼女の側に「追求」の要因がある限り、アルテミス型の女性は男性に興味をもつかもしれない。しかし彼が感情的にもっと密接になったり、彼女との結婚を望んだり、あるいは彼女に依存するようになったりすれば、「狩猟」の興奮は終わってしまう。さらに彼が彼女を必要とすることで「弱み」を見せたならば、彼女は彼にたいする興味を失い、軽蔑を感じるようになるだろう。その結果、アルテミス型の女性は、男性がある程度感情的に距離を保ち、常に身近にいるのでない限りにおいてのみうまくゆくという一連の人間関係をもつだろう。このパターンが生じるのは、女性が「自己充足性」という処女神の要因に同一化し、自分自身の傷つきやすさや他者を必要とする欲求を否定するときである。変化するためには、特定の他者を愛し信頼することが自分にとって非常に価値のあることだということを発見しなくてはならない。

男の肩をもっていうならば、それまで彼女は人魚のような存在であった。彼女の半分は美しい女性であるが、もう半分は冷たく非人間的なのである。ユング派の分析家であるエスター・ハーディングは処女神型の女性のこの側面についていくつかの観察をしている。「月の冷たさと月の女神の無情さは、女性的性質のこの側面を象徴している。温かさを欠き、冷淡であるにもかかわらず、おそらく部分的には非常に無関心であるからだろうが、女性のなかのこの非個人的エロティシズムは、しばしば男性を魅惑するのである。(8)」

そしてアルテミス型の女性は、ひとたび彼に関心をもたなくなると、彼女を愛してくれている男にたいして残酷になる。彼女は彼に肘鉄砲をくらわし、彼を不要な邪魔者として扱うかもしれない。

破壊的な怒り――カリュドーンの猪

女神アルテミスは野生の猪によって象徴されるような破壊的な側面をもっていた。猪は彼女に捧げられた動物の一つである。神話では、彼女は腹を立て、破壊的なカリュドーンの猪を野に放った。

ブルフィンチの『ギリシア・ローマ神話』に書かれているところによれば、「その猪の……両眼は血と火で光り、その強毛は恐ろしい槍のように逆立ち、その牙はインド象のようであった。成長しつつあったトウモロコシが踏みつけられ、ブドウやオリーブの木はずたずたに倒さ

れ、羊や牛の群れは残酷な敵によって激しい混乱状態におちいった。(9)」これは猛り狂う破壊をいきいきと描いたものであり、非常に腹を立てたアルテミス型女性のメタファーである。

アルテミスの怒りをしのぐのはヘーラーの怒りのみである。どちらの女神もその感情の強さの点では似ているように見えるが、怒りの方向と原因は異なっている。ヘーラー型の女性は「他の女」に腹を立てる。アルテミス型の女性は、自分をみくびったり、自分が重んじているものにたいして敬意を払わなかったという理由で、男あるいは男一般に腹を立てることの方が多いようである。

たとえば一九七〇年代の女性運動における意識向上はおおむね建設的な変化をもたらした。しかし、多くのアルテミス型の女性が女性一般にたいする社会の不正な制限や品位をおとしめるような態度に気づいたとき、しばしば特定の原因に釣り合わないような強烈な敵意をもって反応した。一九七〇年代の前半、用心深い傍観者たちは、カリュドーンの猪が男性優越主義者の豚と出会ったとき賢明にも邪魔にならないよう道をあけたのであった。さらに、多くの女性たちもまたこのような意識高揚セッションの後、猛り狂ったアルテミス型の女性によって傷つけられたり、「がらくた扱い」された。

カリュドーンの猪の神話では、ヒッポメネースと競ったアタランテーが、手に槍をもち、突進してくる猪と対面した。その猪は自分を退治しようとしたたくさんの男の英雄たちをすでに殺していた。その皮は鎧よりも強かった。その獣を止めるのも自分がやられるのもいまや彼女次第であった。彼女は獣がほとんど自分に突きかかってくるまで待ち、注意深く狙いを定め、槍を投げるとそれは命中し、猪の唯一の弱点であった目を貫いた。

アルテミス型の女性の破壊的な怒りはアタランテーがやったことによってのみ止めることができる。アルテミス型の女性は自分自身の破壊性と直接向き合わなければならない。それを自分自身の一面と見なし、それがみずからを滅ぼし、自分の人間関係を荒廃させてしまうまえに止めなければならない。

内なる猪と直面するには勇気が要る。そうすることは、その女性が自分自身や他者にたいして与えてきた損害がいかなるものであったかを直視することを意味しているからである。彼女はもはや自分を公正で力強いとは感じることができなくなる。謙遜は彼女を人間性へと立ち戻らせる教訓となる。彼女は自分もまた復讐する女神ではなく、やはり欠点のある人間の女性だということをいやというほどに気づかされる。

うちとけなさ

アルテミスは「はるか彼方のアルテミス(10)」と呼ばれてきた。感情的な速さはアルテミス型女性の特徴である。彼女はあまりにも自分自身の目標に精神を集中して迷いがないために、自分のまわりの人々の感情に気づかない。彼女が無頓着である結果、彼女のことを気にかける人々は自分が無視され排除されたように感じ、傷ついたり腹を立てたりする。

またしても彼女は変化するためには、意識的に自覚するようにしなければならない。ここでアルテミス型の女性は他の人々の言うことを聞き、注意を払う必要がある。そうすれば、彼らの側でも、彼女がお気入りの計画にかかりっきりになることをやめ、他の人々に注意を向けることができるようになるまで待とうと最善をつくしてくれるだろう。（しかし、その前提とし

てアルテミス型の女性は、自分のしていることにすでに気づいており、自分がまたもやそうしているということを思いおこさせてくれる人々を評価できなければならない。そうでなければ、彼女が自分のしていることに夢中になっているときに、彼らがそのことを持ち出せば摩擦は避けられない。）アルテミスは「いま見えたかと思うと、もう見えない」と言われる女神であり、野生の動物がしばしばいま見えたかと思うと次には消えてしまうのと同じように、文字どおり森に消えてしまう。情緒的な遠さが、強烈な精神集中のためについ生じてしまうのならば、自分にとって重要な人々と触れ合い、彼らの近くに存在していたいと切に願うことで、この傾向をやわらげることができる。この救済策は断続的な「行動消失」にも適応できると同時に、その日暮らし的な基盤にも適応できる。

無慈悲

アルテミスはしばしば無慈悲であった。たとえば、狩人アクタイオーンは偶然彼女の領域に侵入したが、女神の裸体にポカンと見とれるなどということが致命的な罪であるということを知る良識が彼には欠けていた。そのためアルテミスは彼を鹿に変え、彼は自分の猟犬によって八つ裂きにされてしまった。また思い上がったニオペーが、アルテミスとアポローンの母親であるレートーをおとしめると、その双子たちはすぐさまレートーの誇りを守った。情け容赦なしにである。

間違ったことにたいして憤慨したり、他者に誠実であったり、表現する力をもっていたり、行動をおこすという性格はアルテミスやアルテミス型女性の非常によい性格である場合もある。しかし、彼女らが割り当てる罰の無情さにはぞっとさせられるものがある。ニオペーの十二人の子どもたちはすべて双子の射手によって殺され、その結果ニオペーは自慢すべきものをすべてなくしてしまった。

無慈悲が見られるのは、アルテミス型の女性が他者の行為を完全に白か黒かという見地で判断する場合である。この見地からいくと、完全によいか完全に悪いかというのが単に行為にたいしてだけでなく、その行為をする人についてもあてはまってしまう。このようなわけでアルテミス型の女性は、自分が復讐したり罰したりする場合、自分は公正だと感じるのである。

この態度が変化するためには同情と共感を発展させる必要がある。それは成熟とともにやってくるであろう。多くのアルテミス型の女性は自信満々で傷つけられることがないという感じを抱きながら大人の時代に入る。しかしながら彼女たちも苦しみ、誤解を受け、何かに失敗するといった人生経験を積んで、共感能力も成長するであろう。アルテミス型の女性が、傷つけられるとはどんな感じかを知りもっと理解できるようになったり、人々は自分が考えているよりももっと複雑なものだということを知ったり、間違いを犯しても他者をも自分をも許せるようになるならば、人生経験を通じて学んだこれらの教訓によって彼女はもっと情け深い人になるだろう。

重大な決定― ― イーピゲネイアを生贄にするか、それとも救うか

アルテミスについての後の神話は、アルテミス型の女性にとっての重大な選択を語る。これはイーピゲネイアの神話であり、その選択はイーピゲネイアを救う者かそれとも彼女に死をも

たらす者かというアルテミスの役割を含むものである。

トロイア戦争の話では、ギリシアの船団がトロイアへ向けて出航する前にギリシアの港であるアウリスに集まった。そこでは凪で艦隊が止まってしまった。帆走するだけの風がおこらなかったのである。その凪が神の仕業であると確信した（ギリシア軍の指揮官である）アガメムノーンは、遠征隊の予言者に相談した。予言者は、アルテミスが怒っており、その怒りをやわらげるにはアガメムノーンの娘イーピゲネイアを生贄にするしかないと宣言した。最初はアガメムノーンも抵抗を示したが、時がたつにつれて、人々がますます腹を立てて始末におえなくなったので、彼は妻のクリュタイムメーストラーをだましてイーピゲネイアを自分のもとに寄こさせた。ギリシアの英雄であるアキレウスに嫁がせるのだという口実をもうけたのである。しかし実際は、彼女は生贄のために準備された。彼女の命と引き替えに艦隊が戦場へ行けるような順風を得ようというのである。

次におこったことについては二つの異なった言い伝えがある。一つの言い伝えによれば、アルテミスの要求に従ってイーピゲネイアの死がもたらされたというものである。別の言い伝えによれば、アルテミスが生贄のちょうどその瞬間に仲介に入り、かわりに雌鹿を捧げさせ、彼女をタウロスの国に連れて行き、そこでイーピゲネイアはアルテミスの神官の一人になったというものである。

これら二つの結末は、アルテミスには二つの影響力があることを表している。一方で彼女は家父長制から女性と女性的な価値を救う。家父長制は女性をおとしめ押しつぶすものだからである。他方、彼女は目標に集中しすぎるあまり女性の生贄を要求し、伝統的に「女性的なもの」と考えられてきたものをおとしめることもする。「女性的なもの」とは、受容的で慈しみ深く他者と関わり他者のために喜んで犠牲になろうとする性質のことである。どんなアルテミス型の女性もイーピゲネイアのような部分をもっているように思われる。つまり若くて信じやすく、傷つきやすさを表す美しい部分、親密になれること、他者に依存することなどである。自分にとって重要なことを狙いながら人生を生きていったとしても、彼女は自分自身のこの側面を守り育てることができるであろうか。あるいは、可能な限り集中して厳しく明快であるために、自分自身のこのイーピゲネイアの部分を殺すことを要求するのであろうか。

成長の道

アルテミスを越えて成長するためには、あまり意識されていない、受容的で、関係志向的な潜在力を発展させなければならない。傷つきやすくなり、他者を愛し深く気づかうことを学ぶ必要がある。それは人間関係の内部で生じるであろう。ふつうは、自分を愛してくれる男性との関係、あるいはしばしば他の女性との関係で、また子どもをもつことによって。

この前進が生じるのは、アルテミス型の女性が「追い詰め」てしまった後だけである。それは彼女が一連の目標を狙ってきて、それらを達成したり失敗したりした後、あるいは狩のスリルの後、競争の後、また追求していたものが陳腐となってしまった後である。彼女を愛する男性はそのときまで、そしてアプロディーテーの何らかの助けを得ることができるまで待つ必要

があるかもしれない。

アタランテーの神話 ― 心理的成長の比喩

アタランテーは、その勇気と狩や足の速さという能力ではどんな男にもひけをとらないという女英雄であった(11)。彼女は生まれるとすぐ山頂に捨てられたが、一匹の熊に見つけられて育てられ、美しい女性に成長した。メレアグロスという名の狩人が彼女の恋人であり仲間となった。この双子のような二人組は有名な狩人となり、ギリシアじゅうに名を轟かせた。特にカリュドーンの猪狩りで果たした役割についてはそうである。メレアグロスはその後すぐに彼女の腕のなかで死んだ。アタランテーはそこで、二人が一緒に歩きまわった山野を去り、父親と会って彼の王位を継ぐ者と認められた。

いまや多くの求婚者が彼女の手をとろうとやってきたが、アタランテーは彼らすべてを追い払った。彼らのうちから誰かを選べという叫びがあがると、彼女は競走で自分を打ち負かすことができた男と結婚すると言った。しかも彼が勝つならば彼女は彼と結婚するが、もしも負けたなら彼はその命を失うことになるというのである。次から次へと競走が繰り広げられたが、足の速いアタランテーは常に勝った。

最終的に運動にはあまり向いていないヒッポメネースが彼女を心から愛し、おそらくは自分の命を犠牲にすることになるだろうが、それでも競走に参加しょうと決心した。競走の前夜、彼は愛の女神であるアプロディーテーに助けを祈った。アプロディーテーは彼の嘆願をききいれ、レースで使うようにと三つの黄金のリンゴを彼に与えた。

第一のリンゴ……時が過ぎることへの気づき

競走が始まると、ヒッポメネースはアタランテーの道に第一の黄金のリンゴを投げた。彼女はその輝くばかりの美しさに心をひかれ、それを拾いあげようとして速度を落とした。彼女が自分の手のなかの黄金のリンゴにじっと見とれているあいだに、ヒッポメネースは先を行った。彼女はリンゴに映し出された自分の顔を見たが、それはリンゴの曲線でゆがんでいた。「私も年をとったら、こんなふうになるんだわ」と彼女は思った。

多くの活動的な女性は時が過ぎるのに気づかず、中年に入って競争に挑戦したり、目標に近づくこともそろそろ終わりに近づいた頃、初めてそれに気づく。このような女性は、生まれて初めて自分が永遠に若いのではないということに気づき、自分のいる道、自分がたどりつこうとしているところについて内省するのかもしれない。

第二のリンゴ……愛の大切さへの気づき

それから彼は第二のリンゴを道の真ん中に投げた。アタランテーは再び競走に熱中し始め、やすやすとヒッポメネースに迫ってきていた。彼女がアプロディーデーの第二の黄金のリンゴをとろうと立ち止まったとき、死んだ恋人メレアグロスの記憶がわきおこってきた。肉体的感情的親密さにたいする憧れは、アプロディーテーによってひきおこされる。これが時の経過を自覚することと結びつくと、アルテミス型の女性がふだん集中していたことが、愛と親密さに対する新たな受容に変わるのである。

第三のリンゴ……生殖本能と創造性

いまやゴールというときにアタランテーはヒッポメネースに追いつこうとしていた。彼を抜

かし、いまや勝利というときに、ヒッポメネースは第三の黄金のリンゴを投げた。アタランテーは一瞬躊躇した。ゴールへ駆け込んで勝利を得るべきか、それともリンゴを拾って負けるべきか。アタランテーがリンゴを拾うことを決めたちょうどそのとき、ヒッポメネースはゴールに駆け込み勝利を得て、アタランテーを妻にかちえた。

（デーメーテールに助けられ）アプロディーテーの生殖本能によって、多くの活動的で目標に突進する女性たちは三〇代後半にペースを落とすようになる。キャリア志向の女性たちはしばしばふいに子供をもちたいという強迫的な衝動に捕らえられる。

この第三の黄金のリンゴは生物学的な創造以外のものも象徴しているかもしれない。中年以降は、達成することがそれほど重要ではなくなるのかもしれない。そのかわり、アプロディーテーによって表される生殖ということが、経験を何らかの形で個人的表現に変えていくという方向性に向かわせる。

他者にたいする愛を通じてアプロディーテーが知られるならば、アルテミス型の女性の（そうであることに満足しているとはいえ）一面的な態度は、全体性の可能性へと移りかわっていくかもしれない。内面に目を向け、自分にとって何が重要であるかじっくりと考え、外界へと焦点を当てると同時に、内界へも方向づけられるようになるだろう。また自分が独立への欲求だけでなく、他者との親密さへの欲求ももっていることに気づく。ひとたび愛を認めるならば、アタランテーのように彼女も、自分にとってもっとも大切なものは何かを決める決心の瞬間をもつことになろう。

5

知恵と工芸と策略の女神、父の娘アテーナー

女神アテーナー

アテーナーは知恵と工芸のギリシアの女神であり、ローマではミネルウァと呼ばれていた。アテーナーもアルテミスのように処女神であり、純潔と禁欲に身を捧げていた。彼女は堂々とした美しい戦いの女神であり、自分の選んだ英雄たちと、彼女と名前を同じくする都市アテーナイを守っていた。オリュムポスの女神たちのなかで鎧に身を包まれて描かれているのは彼女だけである。ヘルメットの面頬は彼女の美しきがわかるように後ろにあげられ、腕を盾で覆い、手には槍をもっている。

戦争時には戦術を、平和時には家庭の技術を統括する女神というその役割にふさわしく、アテーナーは片手に槍をもち、もう一方の手には鉢または錘をもって示されることもある。彼女は都市の保護者、軍隊の後援者であり、機織り・金細工・製陶・洋裁の女神であった。ギリシア人たちはアテーナーが人間に馬を馴らす馬勒を与え、造船の技術を吹き込み、すき・まぐわ・牛のくびき・戦車のつくり方を人々に教えたと信じていた。オリーブの木は彼女がアテーナー人たちに与えた特別の贈り物であり、そこからオリーブの栽培が始まった。

アテーナーはしばしばフクロウとともに描かれる。フクロウは、彼女の二つの特徴である知恵と大きな目と結び付いている鳥だからである。二匹のからみあったヘビが、彼女の盾や衣のへりの図案として措かれている。

アテーナーがもう一つの存在とともに描かれるとき、それは決まって一人の男性である。たとえば、彼女は座っているゼウスの隣にいて、自分の王を護衛する兵士の構えをしている。あるいは、『イーリアス』と『オデュッセイア』に出てくるギリシアの中心的な英雄であるアキレウスかオデュッセウスのどちらかの背後か傍らにいたりする。

アテーナーに関係する軍事ならびに家事の技能としては、計画と実行があり、それらは合目的的な考え方を要求する活動である。策略と実際性と目に見える結果は彼女特有の知恵を示すものである。アテーナーは合理的な考え方を重視し、本能と自然にたいする意志と知性の支配を表す。彼女の精神は都市に見られる。（アルテミスとは対照的に）アテーナーにとっては、野性は飼い馴らされ従わされねばならないのである。

系譜と神話

アテーナーはオリュムポスの神々の集団に劇的な仕方で加わった。彼女は十分に成熟した女性として、きらめく黄金の鎧を身にまとい、一方の手に鋭い槍をもち、力強い鬨の声をあげてゼウスの頭のなかから飛び出したのである。別の神話では、彼女の出産は帝王切開のようである。ゼウスは陣痛が進むにつれて激しい頭痛に悩まされた。そこで鍛冶の神であるヘーバイストスに助けられた。ヘーバイストスは諸刃の斧で彼の頭をたたき、アテーナーが出られるように道をつくったのである。

アテーナーは自分にはゼウスという一人の親しかいないと考えており、彼と永遠に結びついている。彼女は父親の右腕となる女性であり、オリュムポスの神々のなかで、彼が自分の権力の象徴である稲妻とアイギス（盾）を授けた唯一の神である。

この女神は自分にメーティスという母親がいるということを認めなかった。実際は、自分に母親がいるということに気づいていなかったようである。ヘーシオドスが語っているところによれば、メーティスはゼウスが王として迎えた最初の妻であり、大洋を表す神で、知恵をもっていることで知られていた。メーティスがアテーナーをみごもったとき、ゼウスは彼女を罠にかけてからだを小さくして飲み込んだ。メーティスには二人のきわめて特殊な子供ができるであろうと予言されていた。一人は、勇気と賢明な助言という点でゼウスに匹敵する娘であり、もう一人はすべてを征服する心をもち、神々と人間たちの王となるであろう男の子であった(1)。ゼウスはメーティスを飲み込むことによって運命をねじまげ、彼女がそなえていたもろもろの性質を自分の性質としてひきついだ。

神話ではアテーナーは英雄的な男性の保護者・助言者・パトロンそして同盟者であった。彼女が助けた英雄をリストアップしていくと、一冊の「英雄人名録」ができあがる。

そのなかには、ゴルゴーンのメドゥーサを殺したペルセウスがいる。この女の怪物は髪がヘビで、真鍮の爪をもち、彼女に見つめられた人間は石になってしまった。アテーナーは鏡を使ったトリックを示唆し、それによってペルセウスは自分の盾にゴルゴーンが映し出されるのを見て、彼女を直接見ずにすますことができたのである。それからアテーナーは、彼がメドゥーサの首を切るときも、剣を握っている手を誘導して彼を手助けした。

アテーナーはまた、イアーソーンとアルゴナウテースたちが、黄金の羊を捕らえる旅に出掛けるまえに自分たちの船をつくるのを助けている。彼女はベレロポーンに黄金の馬勒を与えて、それによって彼は翼のはえた馬ペーガソスを馴らすことができた。そしてヘーラクレースのもとにやってきて、彼が十二の仕事をしているあいだ彼を助けたのである。

トロイア戦争では、アテーナーはギリシア人の味方になって非常に積極的に働いた。彼女は自分のお気に入りの男性、特にギリシアの兵士のなかでももっとも恐れられている力強いアキレウスの面倒を見た。後には、オデュッセウスが故郷へ帰るための長い旅をするときに彼を助けている。

個々の英雄を擁護して戦い、ゼウスのもっとも身近にいるオリュムポスの神であることとならんで、アテーナーは父権制の側に立っている。西洋文学での最初の法廷場面では、彼女はオレステースに票を投じている。オレステースは父親（アガメムノーン）の仇打ちをするために、母親（クリュタイメーストラー）を殺したのであった。アポローンはオレステースを弁護して、母親は父親から植えつけられた種をはぐくむだけの存在だと主張し、男性は女性を支配するという原理を宣言し、その証拠としてアテーナーの誕生をあげた。彼女は、女の子宮のなかから生まれることさえなかったからである。陪審員の票は、アテーナーが決定的な票を投じて決着がついた。彼女はアポローンの側に立ち、オレステースを釈放し、父性原理を母性的な絆の上においたのである。

アテーナーの神話にふくまれている有名な物語で、死すべき人間の女性に関係しているものは一つしかない。この女性はアラクネーで、アテーナーは彼女を蜘蛛に変えてしまった。工芸の女神としてのアテーナーは、アラクネーという名の傲慢な機織り娘から挑戦を受けた。二人はすばやく、かつ巧みに仕事をした。つづれ織りが仕上がると、アテーナーは競争者の非のうちどころのない仕事ぶりを賞賛した。だが、アラクネーが大胆にもゼウスの愛の裏切りを描いていることに怒り狂った。つづれ織りには、レーダーが一羽の白鳥（ゼウスの偽装）を抱いて

いる。彼は、愛を交わすために白鳥に姿を変えて、すでに結婚している王妃の寝室に入りこんでいたのである。別のパネルにはダナエーが措かれていた。ゼウスは黄金の雨に身を変じて彼女を孕ませた。三番目のパネルは乙女エウローペーを描いていた。彼女はみごとな白い牡牛に変装したゼウスに誘拐されたのである。

つづれ織りのテーマのためにアラクネーの仕事は帳消しにされてしまった。アテーナーは、アラクネーが描いたものに非常に腹を立てたので、その作品をずたずたに引き裂き、アラクネーを追い込んで首を吊らせた。それから少し哀れみをおぼえてアラクネーを生きさせることにしたが、蜘蛛に変身させた。アラクネーはそのために永遠に、一本の糸にぶらさがって糸を紡ぐように呪われたのである。（生物学では、蜘蛛はこの不幸な少女にならってアラクニッドarachnidsとして分類されている。）大変な父親の弁護者であるアテーナーがアラクネーを罰したのは、挑戦そのものが生意気であったというよりはむしろ、ゼウスの欺瞞に満ちた神にあるまじき行動を公けにしたからであるということに注目すべきである。

アテーナー元型

知恵の女神としてのアテーナーは、勝利へと導く戦略と実際的な解決によって知られた。元型としてのアテーナーは、論理的な女性が示すパターンである。彼女たちは心よりはむしろ頭に支配されているのである。

アテーナーは一つの女性元型である。つまり、よく物事を考えること、感情的な状況のさなかでも冷静でいられること、葛藤のまっただなかにいても如才なく振る舞うことは、ある種の女性たちにとっては自然にそなわっている特性なのである。このような女性はアテーナーのようであり、「男のように」振る舞っているのではない。彼女の男性的側面、あるいはアニムスが彼女に代わってものを考えているのではない。彼女は自分ではっきりとよく考えているのである。論理的思考を意味する元型としてのアテーナーという概念は、女性の思考は男性的なアニムスによってなされるというユングの前提に挑戦する概念である。なぜなら、アニムスは女性的な自我とは別個のものであると考えられているからである。自分の心が、アテーナーに結びつく女性的な性質としてどんなに鋭くはたらいているかということが認められるならば、女性は自分が男性的（すなわち、性別不適応）ではないかと心配するかわりに、自分についての肯定的なイメージを発展させることができる。

アテーナーが、単一の支配的なパターンであるよりはむしろ特定の女性のなかではたらいているいくつかの元型の一つにすぎないのならば、この元型は他の女神たちの同盟者でありうる。たとえば、ヘーラーに心を動かされて、自分の人生を完全なものと感じるために一人の連れ合いが欲しいと思うようになるならば、アテーナーはこの状況を評価し、自分にふさわしい男性を獲得するための方策を立てるうえで力を貸してくれる。あるいは、アルテミスが女性の健康を考える集団とか女性学センターにとって指針を与えるインスピレーションの源泉となっているならば、そのプロジェクトが成功するかしないかは、アテーナーの政治的慧眼にかかっているかもしれない。感情の嵐のまっただなかにあって、女性が自分のなかにいる元型として

のアテーナーに呼びかけることができるならば、その合理性に助けられて自分がどういう立場にいるかということについての自覚を得たり、またそれを保つことができるであろう。

処女神

傷つけられないこと、そして無傷のままでいるということは、アルテミスを特徴づける性質であるが、これはアテーナーにも当てはまる。アテーナーが女性の心を支配するとき、アルテミスかヘスティアーに似ている女性のように、彼女もまた自分のなかで優位を占めているものに動かされている。アルテミス元型と同様、アテーナー元型も女性を、他人の欲求よりはむしろ自分にとって大事なものに焦点を向けるようにさせる。

アテーナーは、男たちと一緒にいることを求める処女神であるという点でアルテミスやヘスティアーとは異なっている。男たちと袂を分かったり引っ込むよりはむしろ、彼女は男性的な行動と権力のまっただなかにあることを好む。処女神の要素に助けられて、自分が密接に協力している男たちと感情的にあるいは性的にややこしい関係になることが避けられる。エロティックな、あるいは親密な感情を発展させなくとも男たちの仲間や同僚あるいは腹心の友になることができるのである。

アテーナーは一人前の大人としてオリュムポスの神々の一員となった。神話では、世の中の重要な事柄にたいして興味をよせる女神として描かれている。それゆえアテーナー元型は、アルテミス元型よりも年長で成熟した処女神の形である。アテーナーが世の中の現実をあるがままに受け取り、プラグマティズムの態度をとり、「大人の」（すなわち伝統的に支持されている）基準に同調し、ロマンティシズムや理想主義が欠けているということから、アテーナーは「ものわかりのよい大人」の縮図ではないかという印象ができあがる。

策略家

アテーナーの知恵とは、兵力を展開する将軍や、競争者の裏をかくビジネス界の実力者の知恵である。彼女はトロイア戦争における最高の策略家であった。彼女の機転と介入によってギリシア人たちは戦争に勝つことができた。アテーナー元型は、ビジネス・学問・軍事あるいは政治の世界で大きく発展する。

たとえば、アテーナー元型のはたらきが見られるのは、修士号をもって経営陣に参画し強力な助言者と結んで、会社の出世街道を驀進する女性である。メリー・カニングハムはベンディックス社の社長で重役会の議長である男性の有能な部下としてまたたく間に副社長に昇進したが、これはアテーナーのコースをたどっている。二人の関係が注目をあびて都合が悪くなると、彼女はさっさと辞めて、もう一つの大きな勢力であるスケンレー社の重要な地位に納まった。この賢明な動きは、戦略的な後退に匹敵するものであり、敵の砲火を浴びてなされた決定的な行動である。

政治的、経済的にものを考えることが重要であるような状況ではどこでも、アテーナーの慧眼により女性は如才なく世の中をわたり歩いていける。戦略的にものを考えるという自分の能力を使って、計画をさらに推進したり、登り坂にある野心的な男性の仲間兼助言者になるかもしれない。いずれにしても、アテーナー元型は、「最低線」がどこにあるかを知っている女性の心を支配している。彼女らの知性は実際的で実用的な事柄に向けられており、その行動は感

情で決められたり、感傷にゆれ動くことはない。女性は自分の心のなかのアテーナーとともに何がなされねばならないかをつかみ、自分が求めているものをどのようにして達成すべきかをつかみだす。

外交（それは策略、権力、および欺瞞的な戦術を含むのだが）は、アテーナーが輝く領域である。クレア・ブース・ルース（有名な美人で劇作家、下院議員、イタリア大使、アメリカ軍名誉将官）はアテーナー的な性質をもっていた。彼女は野心家であり、男性の世界で道を切りひらいて進んでいくために自分の知性と同盟者たちを使った。その理由で彼女は賞賛もされ、かつ批判もされた。（彼女の結婚相手は『タイム』誌の創立者ヘンリー・アール・ルースであり、まさに彼自身の領域ではゼウスのような存在であった。）崇拝者の目には、彼女は敵の砲火を浴びてもクールでいられることで賞賛に値したが、批判する者たちは彼女を「冷淡な」陰謀家と呼んだ(2)。

同様にアテーナー的と言えるのは、学問の世界で成功している博士号をもった女性である。地位を獲得するためには、研究をおこない、それを出版し、いろいろな委員会のために働き、助成金を受けとることが必要である。つまり、いまはどういうゲームがおこなわれているかを知り、得点をかせがなくてはならないのである。一歩先んじるためには、男も女も助言者とスポンサーと仲間が必要である。ふつう知的な能力だけでは十分ではない。そこでは如才なさと政治的判断が問題になっている。研究をしていくために必要な助成金と地位を得ようと思うならば、何を研究したり教えたり調査するか、どのキャンパスに腰をすえるか、どこの学部の教授職を狙うか、助言者に誰を選ぶか、こういったすべてのことが決断にあたってものをいうのである。

ロザリン・ヤーローは、放射性免疫における発見（体内のホルモンや他の化学物質の量を測定するための放射性アイソトープの使用）でノーベル化学賞を受賞した女性であるが、彼女は自分がこれまでおこなってきたことを完成させるためには、才気換発なアテーナーでなければならなかった。彼女は自分の手と脳をはたらかせる（アテーナーの知恵と工芸の側面を組み合わせる）ことの喜びを語っている。ヤーローは発見をもたらす実験手続きを考案するためには鋭敏な策略家でなければならなかった。この能力は出世するうえでうまく立ちまわらなければならないときに、彼女に有利にはたらいたに違いない。

女職人

工芸の女神であるアテーナーは、役に立つとともに美的にも目を楽しませるものをつくり出すことに関係していた。彼女は機織り女としての腕前でもっともよく知られている。そこでは手と心が一緒にはたらかねばならないのである。タピストリーや織り物をつくるためには、自分がつくるものをデザインし計画し、一つずつ手順を踏んでいかねばならない。このアプローチはアテーナー元型の一つの表現である。見通し、計画、技術のマスター、および忍耐がそこで強調されているからである。

糸を紡ぎ、布を織り、家族たちが着るものすべてを実際につくってきた開拓時代の女性は、家庭の領域でアテーナーを具現した。夫と手をたずさえながら、彼女たちは自然を支配し、国境を西へ西へと押し進めながら、野性から国土を手にいれるよう骨折ってきたのである。生き残り、成功するためにはアテーナー的な特性が必要であった。

父の娘

「父の娘」の元型としてアテーナーは、権威と責任感と権力をもっている強力な男性― 家父長的な父親あるいは「ボス」の元型にぴったりの男性― にごく自然に引き寄せられていく女性を表している。アテーナーは女性に、関心を共有し、似たようなものの見方をする強い男性とのあいだに師弟関係を形成するようにし向ける。相互的な忠誠を期待する。アテーナー自身のようにひとたび彼に忠誠を誓うと、彼のもっとも熱烈な擁護者あるいは「右腕」となるとともに、彼の信任を受けて、彼の特権をうまく行使し、彼の特権を他の者たちに乱用されないように監視する。

自分が仕えているボスのために人生を捧げる多くの献身的で実務的な秘書はアテーナー型の女性である。自分が選んだ偉大な男への忠誠心はゆらぐことがない。リチャード・ニクソンの個人秘書をしていたローズマリー・ウッズがウォーターゲートのテープにたいしておこなったあの十八分間の消去のことを考えると、私はアテーナーの手がはたらいていたのではないかと考える。事実を取り除くという「知恵」を思いついて、それを何の罪も感じずに消し去ってしまっているとしたら、まさにアテーナーそっくりということになるであろう。

父の娘という性質のためにアテーナー型の女性は、家父長の権利や、伝統とか男性の権力の正当性を強調するもろもろの価値の擁護者になる。アテーナー型の女性は通常、現状を支持し、すでに確立されている規範を行動の指針として受け入れる。このような女性はふつう政治の面では保守的である。変化に反対するからである。アテーナーは、うだつがあがらない者、しいたげられた者、あるいは反抗する者にたいしてまったくと言っていいほど共感する心を持ち合わせていない。

たとえば、フィリス・シュラフリーは、ラドクリフ出身の修士号をもつファイ・ベータ・カッパ（訳注― 学業成績優秀な大学生および卒業生で組織する会）の一員であり、異常なくらいに秩序だって理路整然とものを考える女性であるが、彼女は、先頭に立って男女同権修正条項に反対した。ERAは彼女が異議を唱えるまでは批准は避けられないように見えていた。フィリス・シュラフリーが一九七二年十月にストップ・ERAという組織をつくる前年の十二カ月の間にERAは三十の州で批准された。しかしひとたび彼女が自分の軍隊を戦場に投入すると勢いはぴたりと止まった。次の八年間で批准されたのは五つの州だけであり、すでに批准した三五の州のうちの五つの州が批准を撤回する方向に票を投じた。その伝記の著者からは『声なき多数者の恋人(3)』（サイレント・マジョリテイ）と呼ばれているシュラフリーは、元型的な父の娘という役割を演じ、父権的な価値を擁護するという点で今日のアテーナーである。

中庸

アテーナー元型が強いとき、女性は何事もほどほどにおこない、「中庸」の内部で生きようとする自然な傾向を示す。これこそアテーナーの理想であった。過剰はふつう、強烈な感情や欲求、もしくは情熱的、正義感の強い、臆病な、あるいは貪欲な性質の結果である。これらすべては合理的なアテーナーとは反対のものである。中庸は出来事を監視し、効果に注意を払い、非生産的になってきたならば、即座に行動のとり方を変化するというアテーナーの傾向によっても支持される。

鎧を着たアテーナー

アテーナーは素晴らしい黄金の鎧に身を包んで、オリュムピア競技の場面に到着した。そして実際「鎧を着ている」のはアテーナーの特性である。このような女性は知的防衛に身を包んでいることで、自分自身のであれ、他人のであれ、苦痛を感じることをしない。情緒的な困難あるいは厳しい内ゲバのさなかで、感情に無感覚なまま、現在何がおこっているのか観察し、分類し、分析し、そして次に自分が何をするのかを決める。

競争社会において、アテーナー元型は、アルテミス元型よりも決定的な利点をもつ。アルテミスも目標を狙い、競うが、短いチュニックを着ていた女神アルテミスは鎧を身につけてはいない。元型がアテーナーというよりむしろアルテミスである女性は、個人としていかなる予期せぬ敵意や欺きを受けることになるかもしれない。彼女は傷つけられたり暴力を受けたりするかもしれないし、感情的になって効果をあげにくいかもしれない。同じ状況でアテーナーは何が生じているかを冷静に見定める。

アテーナーを育てる

もともとアテーナー型ではない女性たちは、教育や仕事を通じてこの元型を育てることができる。教育はアテーナーの性質を発展させることを要求する。まじめに学校教育を受けるならば、女性は訓練された勉強の習慣を発展させることになる。数学、科学、文法、研究調査、レポートを書くにはアテーナーの技術が必要である。仕事にも同じような効果がある。「プロフェッショナルに」振る舞うとは、女性が客観的で非個人的であり、技術を身につけていることを意味する。他人のために深く感じる女性は、たとえば医学や看護の道に入ると、自分がアテーナーの領域に入って感情に支配されない観察や論理的思考や技術を学ぶ必要があるということに気づくかもしれない。

すべての教育はこの元型の発達を刺激する。客観的事実を学ぶこと、明確に思考すること、試験にそなえること、テストを受けることすべてが、アテーナーを呼び出す練習になる。

アテーナーは必要から発展していくこともありうる。虐待する家族のなかにいる幼い女の子は、自分の感情を隠し、身を守る鎧を身につけることを学び、鈍感になり、自分の感情と接触しなくなるであろう。そうしなければ安全が脅かされるからである。生き残るために観察し、策略を練ることを学ぶかもしれない。犠牲になっている女性が、生き残ったり逃げたりする手段を考え始めるときはいつでもアテーナーが活性化されるのである。

『ホメーロスの神々(4)』の著者であるヴァルター・F・オットーは、アテーナーを「いつも近くにいる女神」と呼んだ。彼女は自分の英雄たちのすぐ後ろに立っており、それ以外の人々には見えなかった。彼女は助言を囁き、節度を忠告し、ライバルに勝つよう味方した。女性が感情的な状況のさなかで明確な思考をする必要があるとき、また特定の職業や教育の場で男と同じ条件で弟争するときには「いつも近くにいる」アテーナーの元型が「もっと近くにくるよう」招かれる必要がある。

アテーナー型の女性

日常的な見かけからいって、もっともよくアテーナーを人格化しているように思われるある種の確固たる外向型のアメリカ女性がいる。彼女は実際的で単純で、自分のことを気にせず、自信たっぷりであり、混乱することなく物事をやってのける。典型的には、アテーナー型の女性は（ヒュギエイアという側面において健康の女神でもあった）アテーナーと同一化するのにふさわしく、健康状態がよく、心理的な葛藤がなく、身体的に活発である。私の心の目には、彼女は「プレッピー」のような恰好をして、清潔にみがきたてられた女性のように見える。アテーナー型の女性の心は、「プレッピー」な服装の意味ある部分に類似している。つまりそれは、実際的で長持ちし、いつまでも品質を保ち、流行の変化に影響されないのである。

郊外に住むアテーナー型の女性ならば、流行をとりいれた「プレッピー」な服装をするかもしれない。「ダウンタウン」のヴァリエーションといえば、ビジネスで成功する女性が着る特別誂えのスーツとブラウスである。郊外で着る普段着もダウンタウンで着るビジネス用もブルックス・ブラザーズに影響されている。多くのビジネスマンや金持の私立学校に通う少年たちが好む上流階級のイギリス風スタイルである。円いピーターパン・カラーやボタンダウン・シャツは年齢も性もないことを奨励するアテーナー型女性にぴったりの服装である。

子ども時代

アテーナー型の子どもは幼いアルテミス型の子どもと同じく集中力を持つが、彼女の場合、それに知的な傾向が付け加わっているのが決定的である。たとえばアテーナーは三歳で他人から教えられもしないのに本を読むかもしれない。年齢にかかわらず彼女がひとたび本を発見すると、おそらくそれをかぎ分けられるのだろう。本を読んでいるのでなければ、父親の後を追い掛け「どうしてなの、パパ」とか「パパ、どうやってこれが動いているの」とか、もっとも典型的には「パパ、見せて」などとたずねる（彼女は通常「ママ、どうして」とはたずねない。ただし、母親がアテーナー型の場合、彼女が求めているような論理的な答えを与えてもらえるので、母親にきくこともありうる）。アテーナー型の女の子は好奇心旺盛で、情報を欲しがり、物事がいかにして動いているのかを知りたがる。

両親

アテーナー型の娘が人生に成功している父親のお気に入りの子どもとして成長し、父親が「あの子は私に似ている」ということを誇りにするとき、彼女が自分の持ち前の性向を発達させる手助けをしている。彼女の役割のモデルとなる人物が祝福を与えると、能力にたいする自信は、「生得の権利」になる。このような娘は頭がきれるとか、野心的であることに何の葛藤もおぼえずに、着実に成長していく。大人になると、心おきなく権力を行使し、権威をふりまわし、自分の能力を見せつける。

しかし、アテーナー型の女性すべてに、自分を気に入ってくれるゼウス的な父親がいるわけではない。このような父親がいないとき、発達に欠くことのできないはずみが欠けることにな

る。アテーナー型の女性のなかには、父親が非常に成功していてあまりに忙しいために、目をかけてもらえない者がいる。ゼウス型の父親のなかには自分の娘が伝統的な娘のよう振る舞うべきだと主張する者もいる。彼らは、「おまえの可愛い頭を、そんなくだらないことでいっぱいにしてはいけないよ」とからかいながら言ったり、「女の子は、こんなもので遊ぶんじゃない」とか「これは、おまえには関係のないことなんだ。これは仕事なんだ」と言って彼女を叱りつけるかもしれない。その結果、彼女は自分のあるがままでは受け入れてもらえないのだという気持ちを抱いて大人になり、たとえビジネスや専門の分野に入ってはいけないと言われているわけではなくとも、しばしば自分の能力にたいする信頼に欠けていたりする。

アテーナー型の女性の父親がゼウスと非常に違っている場合（おそらくビジネスで失敗した男性、飲んだくれ、書いても歌われることがない詩人、あるいは出版してもらえない小説家、といった類であろう）彼女のアテーナーとしての発達は、ハンディキャップを負うことになる。彼女は本当なら達成できているはずの目標に到達しようとしないかもしれない。たとえ他人の目には成功しているように見えようとも、自分自身は、しばしばいつかは「正体を見破られる」詐欺師だと感じたりする。

自分自身がアテーナー型の女性でない限り、アテーナー型の娘をもつたいていの母親は、自分の努力が認められていないと感じたり、自分の娘がまったく違った種族の人間であるように感じたりする。たとえば、関係志向型の女性はみな、自分のアテーナー型の娘とうまが合わないように感じるであろう。いろいろな人々のことや気持ちを語っても、娘は関心を示さない。一方、娘は何がどのようにはたらくかを知りたがっているのに、母親はちっとも理解していないか、少しも知ろうとしたがらないことに気がつく。この二人の性格はあまりにも違っているので、その結果、アテーナー型の娘は自分の母親を能なし扱いするかもしれない。ある母親は、自分の娘の「年が十なのに三十歳のような口のきき方をする」ということに気がついた。娘の口ぐせは「お母さんったら、もっと現実を考えなさいよ」だった。この母親がさらに言うには、「娘といるとまるであの子が大人で私が知恵遅れの子でもであるような気がしてくることが時どきあります」とのことである。

これとならんでアテーナー型の娘にとって不幸なことは、娘にどこか間違っているところがあるのではないかという印象を抱かせる母親との経験である。たとえば、このような母親は、「おまえはまるで計算機じゃないか」とか「自分が女の子だというふりをしてごらん」と言う。

アテーナー的な性質を発展させて成績がよく、しっかりした自尊心をそなえている女性にはふつう、ゼウスとメーティスをモデルにした両親（前景には人生に成功した父親、背景にははぐくんでくれる母親）がおり(5)、家族では長男の立場にいる。しばしば家族における彼女の地位は、何らかの欠如のためにころがりこんできたものといったところである。彼女は一人っ子であったり、何人かの女の子の一番上であるかもしれない。あるいは、兄が心理的もしくは身体的に障害を負っていたり、自分の父親にたいして激しく失望してきたのであろう。その結果、彼女は息子にたいする父親の期待の受け皿で、関心を分かち合う仲間となるのである。

自分についてのイメージが肯定的で、野心に関してなんの葛藤もおぼえないアテーナー型の女性は、ともにキャリアをもつ両親の娘であるか、人生に成功している母親の娘であるかもしれない。彼女は、母親を役割モデルにして、自分のあるがままにたいして親からの支持を得な

がら大人になるのである。

思春期と大人になりたての頃

　アテーナー型の少女は、複雑なメカニズムに関心を払う。ものごとをどのように整理するかを知っており、コンピューターの授業では、コンピューターがどのようにはたらくかをたちどころに理解し、コンピューターの言語に親しみをおぼえる。彼女たちは魚が水を得たようにコンピューター・プログラミングに熱中する。なぜなら、細部に注意を払いながら直線的かつ明晰にものごとを考えるからである。彼女たちは株式市場について勉強し、貯蓄と投資をおこなう女性である。

　アテーナー型の少女は、「たいていの女の子はバカかうすのろだ」と考え、前思春期の男の子たちと同じ態度を表現するのはありがちなことである。ゲテモノにびっくりするよりは、その分類に熱中することの方がはるかに多い。彼女は、他の女の子たちが「可愛いミス・マフエット」（訳注_童謡に出てくる怖がりの少女で、クモが出てきただけで逃げ出す）流の反応をすると困惑する。アラクネーを罰したアテーナーを見習う少女にふさわしく、どんな蜘蛛が「自分の傍に腰をかけても」、ミス・アテーナーはたじろぐことがない。

　若きアテーナーは裁縫、機織り、レース編みに秀でるかもしれない。さまざまな工芸を楽しみ、それ以外には共通点がないと感じている母親や、他の伝統的な女の子たちと興味を分かち合うはずである。彼女たち以上に若きアテーナーは、新しいデザインをつくったり、技術をあみ出すといった挑戦を楽しみ、自分のために人形の服や可愛いものをこしらえることには、それほど興味がないであろう。職人のように自分の技術からつくり出されるものに楽しみをおぼえ、実際性と、高い品質を評価する心にうながされて彼女は、自分自身の服をつくるのである。

　他の多くの少女たちと違って、アテーナー型の少女は問題のある娘ではない。注目すべきことだが、金切り声をあげたり、泣きわめくといった光景にはお目にかからない。ホルモンの変化は、アテーナー型の少女の行動や気分にほとんど影響を与えないように見える。彼女は、知性が自分と同等の男の子たちと一緒にハイスクールの日々をすごす。チェス・クラブに入部したり、学校の年報の仕事をしたり、サイエンス・フェアで競争したりする。数学が好きで抜群の成績を修めたり、化学や物理学やコンピューターの実験室で時間をすごすかもしれない。

　社会的な意識をもつと、外向的なアテーナー型の女の子は、何を着るかとか、どの社交上の繋がりを維持すべきかに注意を払いながら、自分の観察力を用いる。彼女らは、社会で競争して人気を獲得しても、感情的には「全精力を投入する」ことをせずにいられる能力が自分にはあると語る。

　アテーナー型の女性は前もって計画する。たいていは、ハイスクールを出てから自分は何をするかについて、かなりのことを考えている。もしこのような女性が大学に進学するだけの経済的余裕があるならば、自分がどこの大学に行けるかを考え、自分で賢明に選んでいるはずである。たとえ家族が彼女を大学に進学させることができなくても、彼女は奨学金や経済的援助によって自分の道をきりひらくであろう。ホレーショ・アルジャーの女性版は、いつも決まってアテーナー型の女性である。

　アテーナー型の女性は大学が自由な雰囲気であると感じる。どんな教育を提供するかとか、

どんな学生団体から成っているかといったことから自分にふさわしい学校を選び、そこに飛び込むので、高校にいたときよりももっと自由であると感じられる。典型的にはアテーナー型の女性は共学の学校を選ぶのだが、これは彼女らが男性と調和し、男性に敬意を払っているからである。

仕事

アテーナー型の女性は何かを自分自身でつくろうとする。彼女は目標に向けて懸命に働き、あるがままの現実を受け入れ、それに適応する。したがって、青年期は生産的な時期である。権力と業績の世界で策略を用いながら論理的に思考することは、彼女がアテーナーと結び付いていることを示している。

家庭（これもアテーナーの領域である）では家事に秀でており、実際的な精神と審美的な目を駆使して効果的に家を管理する。

もし高校を出てそのまま仕事に就かなければならないならば、アテーナー型の女性はしばしば、ビジネス教育コースをとったり、夏にバイトをしたりして準備する。それによって良い機会が提供されるからである。アテーナー型の女性はシンデレラの役を演じて、結婚によって救われることを期待しない。「いつか私の王子様が現れるだろう」というような空想はおよそアテーナー型の女性には無縁である。

もし結婚して家庭を持つならば、普通、有能なマネージャーになるであろう。買い物であれ、洗濯であれ、家の管理であれ、彼女は効果的なシステムをつくり出す。たとえば、台所では、あそらくあらゆるものが使いやすい場所に置かれていることであろう。誰も、アテーナー型の女性にフローチャートについて教える必要がない。彼女はごく自然に物事をまとめる。一週間前から買い物の予定を立て、安売りの時期を狙って食事の献立を計画する。予算の範囲内で金をうまく使うという課題は、彼女にとっては一つの挑戦なのである。

アテーナー型の女性は優秀な教師になることができる。彼女は物事をはっきりとうまく説明する。正確な情報を必要とするようなテーマならば、あらかじめそれをつかんでしまっているはずである。彼女の長所は、複雑な事柄をステップ・バイ・ステップ式に説明できるということであろう。アテーナー型の教師は、もっとも厳しい教師の一人であろう。「弁解を許さない」教師で、最大限の成績を求める。「泣き言」を聞かされても動じず、甘く点をつけることはしない。知的な面で自分に挑戦してくる学生に対してはベストをつくす。おちこぼれ学生よりは成績の良い学生を可愛がり、彼らにより多くの時間をかける（これと違って母性的なデーメーテール型の教師は、助けをもっとも必要とする学生により多くエネルギーを費やす）。

アテーナー型の女性職人は、美的に快い対象を機能的に扱う。商売の才能もあるため、自分の作品をつくるだけでなく、それを見せたり、売ったりすることにも関心を払う。手先が器用で、つくるものが何であれ、必要とされる技能をものにしていて、自分が腕の立つ職人であることを誇りにしている。同じものからいろいろなヴァリエーションをつくることを楽しんだりもする。

学問の分野でアテーナー型の女性は、有能な研究者になるであろう。論理的にアプローチし、細部に対して注意を払うことができるので、実験やデータ集めは彼女にとってはお手のものである。彼女が興味を持つのは、思考の明晰さと事実を重視する分野である。彼女は数学や

理科が得意で、ビジネス、法律、工学、医学の分野に入ってゆくであろう。これらは伝統的に男性の職業とされているが、そこで彼女は、その分野の数少ない女性であることを居心地よく感じる。

距離を取るか、忘却するかの対女性関係

アテーナー型の女性は通常、親密な女友達がいない。このパターンは、すでに思春期の頃に気づかれているかもしれない。親友と言えるような絆がなく、またそれ以前にもないのである。思春期になるとたいていの人々は、刻々と変化する自分のからだ、両親の問題、不確かな未来といった問題に関する心配、秘密、憧れ、不安を友人と分かち合う。男の子、セックス、ドラッグは女の子たちにとっては第一の関心事である。詩や創作の衝動のまっただなかにいたり、死、狂気、神秘主義、あるいは宗教的葛藤についての思想に没頭する女の子もいる。それらはすべて、同じ関心を持つ友人と話し合う話題であるが、アテーナー型の娘のようにロマンティックでない観察者や懐疑的な合理主義者と話し合うことではない。

さらに、ギリシア神話では、アテーナーには、イオダマーとかパラスと呼ばれている妹のような友達がいた。二人の少女は競争をして遊んでいたが、アテーナーの槍が偶然友達に当たって死んでしまい、死のゲームとなった。（一つの言い伝えでは、「パラス・アテーナー」という名は彼女の友人に名誉を授けるためにつくられたとのことである）。神話と違って、もしアテーナー型の少女が他の少女との友情を結ぶだけの潜在力を感情移入の欠如のために殺さなかったとしても、どうしても勝ちたいという彼女のアテーナー的欲求がそうしてしまうかもしれない。実際の人生で女友達がぞっとさせられるのは、アテーナー型の友人が自分たちの友情の大切さを忘れ、その代わりにときには欺瞞さえ用いて、勝つことに専心するときである。友情を殺してしまう彼女のパーソナリティのある面が露呈するときである。

他の女性とのつながりのなさは、子供の時期に自分の父親を崇拝して彼に愛着し、自分と母親がパーソナリティや知性の面で異なっていることに気づくことで始まる。そしてこの傾向は、親密な女友達がいないことによってさらに複雑なものになる。その結果、アテーナー型の女性は他の女性とはうまが合わないと感じるようになる。伝統的な女性にもフェミニストにも親しみを感じない。フェミニストとは表面的には似ている。特にキャリア・ウーマンであればそうである。だが、姉妹性（シスターフツド）はたいていのアテーナー型の女性には無縁のことである。

神話では、オレステースの裁判で父権制の側に決定的な票を投じたのはアテーナーである。いまの時代では、男女同権修正条項や中絶権に反対することによって、フェミニズムの立場を敗北に追い込むのに決定的な役割を果たすのは、しばしばアテーナー型の女性であった。私がERAの発議者であった頃、アテーナー型の女性の言動がいかに効果を及ぼしたかが思い出される。あるアテーナー型の女性がよく立ち上がって、響きわたる声で「私は女よ。だからERAには反対だわ」と叫び、そして、たいてい黙りこんでいる男性の反対者は、彼女の陰から冷やかしたものである。いつの場合も、父権性の擁護者としての役割を果たしている点から言っても、また、普段から男性たちがもっとも居心地よく感じる女性の同僚としての地位にいるという点から言っても、彼女はフィリス・シュラフリーの地方版であった。

アラクネー（あえてゼウスの数々の誘惑とレイプを公表したためにアテーナーによって蜘蛛

に変えられた機織り娘）に似た話は現代にも見られる。学生や秘書は、自分の教授や雇い主から受けるセクシャル・ハラスメントの悩みをどっさり抱えている。あるいは娘は、家族のなかで近親姦がおこなわれているのを発見して、自分の（しばしぼ立派で有名な）父親に鋭く目を光らせたり、患者は、精神科医が自分と性的関係を持つというあるまじきおこないをしたと報告するかもしれない。このような女性は、アラクネーのように抹殺される。私的なところで自分の地位をかさに着て、傷つきやすい女性たちを脅迫し、誘惑し、自分の思いのままにする強力な男性の行動を暴露するからである。

アテーナー型の女性はしばしば、訴えが向けられる先の男性に対してよりはむしろ、訴えをおこす女性に腹を立てる。本当は挑発したのだと言って犠牲者の女性を非難する。もっと典型的に言うならば、女神自身のように、女性がみんなの目に触れるような行動をすることでその男性が批判を受けることに激怒しているのである。

フェミニストは成功しているアテーナー型の女性に対して怒りをおぼえている。なぜなら、アテーナー型の女性は、一方で女性に関する政治的問題では父権制の立場に立ちながら、他方で教育、機会、昇進にたいする女性運動の影響からもっとも利益を引き出しているように見えるからである。男性が支配する状況で最初に進出していたり、そこで認められるのは、フェミニストが「女王蜂」と呼んでいる女性である。このような女性は自分の「姉妹」が先を越す手助けをしない。実際、彼女らは、女性が全般的に向上するのをより困難にするのである。

英雄だけがお呼びの対男性関係

アテーナー型の女性は、成功する男性に心が傾く。大学では学部のスターに、そしてビジネスでは、上昇気流に乗っていていつかは会社のトップに立つ男性にひかれる。彼女は、誰が勝つかを見分ける不気味な能力を持っている。（しばしば、成功している年上の男性指導者に助けられながらではあるが）自分で追求するにせよ、より伝統的に、野心的で有能な男性の伴侶、妻、秘書あるいは同盟者としてにせよ、彼女の心をひきつけているのは権力である。（前国務長官のヘンリー・キッシンジャーが言ったように）、アテーナー型の女性にとっては、「権力は最善の催淫剤である」。

アテーナー型の女性はバカな真似を許さない。夢ばかり見ている者に我慢できず、現実離れしたものを追い求めている男性に何の感銘も受けず、優柔不断の男性に同情しない。屋根裏で腹を空かせている詩人や芸術家をロマンティックな人だとは思わず、一人前の男のふりをしている永遠の青年に少しもひかれない。アテーナー型の女性にとっては、「心が優しい」とか「繊細な」といった形容詞は、「失敗者」を言い表すためのものである。男のこととなれば、英雄だけしか問題にならない。

アテーナー型の女性は通常、自分で男性を選ぶが、それは次のいずれかの仕方である。成功や成功するだけの潜在力についての自分なりの基準に合わない男性とのデートや仕事の機会は断るか、そうでなければ、ある特定の男性に目をつける。後者の場合、それとなく戦略を用い、男の方は気づかないままでいて、彼女を選んだのは自分だと思いこんでいる。その男の人柄を知って感受性豊かに交渉を進める彼女は、本能的にタイミングを見計らって、結婚や仕事上の同盟関係をテーマに持ち出す。

もしビジネスの面で彼に面倒を見てもらうか、彼の秘書になるつもりなら、彼女は機会を捉

えて自分がいかに有能で勤勉であるかを彼に印象づける。ひとたび彼の側近になれば、彼にとってなくてはならない存在になろうと努める。それは、いったん達成されるならば、情緒面と仕事の面の両方で満足をおぼえる役割である。「オフィス・ワイフ」や「右腕」になることによってアテーナー型の女性は、自分が権力の座におり、「偉大な男性」から選ばれて彼と同盟関係にあるのだという感覚を得る。実際、彼女は彼に対して生涯、忠誠を捧げるであろう。

アテーナー型の女性は、戦略論議を好み、内幕を知りたがる。彼女の助言と忠告はきわめて冴えていて重宝であるが、情け容赦のないものになる可能性がある。彼女が重視するのは、自分が欲しいものを追求し、強くて、才能豊かで、今日の権力闘争で勝利を収める男性である。アテーナー型の女性のなかには、自分が関わる男性が「狡猾なオデュッセウス」に似ていればいるほど、良いと考える者もいる。

セックス

アテーナー型の女性は頭で生きており、しばしば自分の肉体から離れている。彼女は肉体を自分の役に立つ部分ぐらいにしか考えておらず、それが病気になったり傷ついたりするまでからだの存在に気づかない。典型的に言えば、官能的なあるいはセクシーな女性でもなければ、煽情的あるいはロマンティックな女性でもない。

彼女は恋人としてよりはむしろ友人や指導者として男性を好む。アルテミスと違って、セックスをレクリエーションのスポーツやアバンチュールと考えることはめったにない。アルテミス型の女性と同様、性がエロティックな魅力や感情的なコミットメントの表現となるためには、元型としてアプロディーテーかヘーラーがはたらくことが必要である。そうでなければ、セックスは、ある特定の人間関係に初めから含まれている「合意事項」か、もしくは計算づくの行為である。どちらにしても、いったん性の面で能動的になろうと心を決めると、巧みなセックスの仕方を学ぶ。

アテーナー型の女性はよく、大人になっても長いあいだ独身のままでいるが、彼女の関心は人生での成功に焦点が当てられている。もし、自分が選んだ偉大な男性の献身的な秘書やアシスタントであるならば、彼女は独身の「オフィス・ワイフ」のままでいるかもしれない。

既婚女性がアテーナーに同一化したままでいるならば、性にたいする彼女の態度は大ざっぱに言って、他の身体機能にたいする態度と同じであろう。つまり、規則的にいとなまれる、自分にとってよい何かなのである。それもまた、妻としての自分の役割の一部だからである。

アテーナーは、レズビアンのあいだによく見られるように思える。これは、アテーナー型の女性が家父長制に忠誠を誓い、英雄と親しく関わり、姉妹感情に欠けているということを考えれば、意外に思われるかもしれない。アテーナー型のレズビアンは、自分と同じ鋳型にはまったパートナーを選ぶ傾向がある。彼女たちは恋人同士になる前は同僚であり、二人とも高い実績を誇る専門家の女性であろう。

その関係を見ると、アテーナー型のレズビアンは、相手の「英雄的な」性質と性向を賞賛したり、相手の知性にひきつけられているのだろう。二人を結びつけているのは、情熱であるよりはむしろ仲間意識や忠誠心である。彼女たちのセックスはだんだん少なくなっていくはずである。彼女たちは自分たちの関係に同性愛的な性質があることを他の人々に知らせないようにする傾向がある。彼女たちの関係はしばしば長続きし、仕事上の必要から別れねばならなく

なっても、なお続いていく。

結婚

女性は仕事の面で成功する機会があまりなかったので、アテーナー型の女性は「いい結婚」をしてきた。彼女たちの結婚相手は、自分が尊敬する仕事熱心で業績中心主義の男性であった。以前と同じく今日でも、アテーナー型の女性の結婚は情熱的に一体になるものであるよりはむしろ仲間同士のパートナーシップといったものになる傾向がある。

たぶん彼女は、彼をものの見事に射止めて、実際二人はうまが合うだろう。彼女は彼の味方、援軍であり、彼の経歴や仕事にいきいきと関心を払い、どうしたら出世できるかについて彼と一緒に戦略を練り、必要なら彼の味方にたって仕事をする妻である。アキレウスが怒りのあまり自分の指導者アガメムノーンにたいして剣を抜こうとしたときに、アテーナーは彼を背後から引き止めた。アテーナー型の女性も夫が未熟なあるいは衝動的な行為に出ないように彼を懸命に引き止めるであろう。

夫が年上で、結婚の時点ですでに人間ができており、非常に複雑で専門的な知識を必要とすることがらに関わっているならば、アテーナー型の妻は主に社会的な同盟者としての役割をとるであろう。その場合彼女の仕事は社会的に価値あるものとなり、上手に客をもてなし、重要な社会的関係を保つための彼の右腕たる女性になることである。

夫に助言したり、夫を出世させるために客をもてなしたりということを別にしても、彼女は非常に有能に家事をこなしていく。細かなことに目がいきとどき、実際的な考え方をするから、家計や仕事のやりくりは簡単なことである。子どもや後継者を産んで育てることはパートナーシップの一部と心得ている。

アテーナー型の妻とその夫はいろいろな出来事について、最高級の会話を交わす。しかし感情に関するコミュニケーションは実際上ないと言えよう。彼女と同様に彼も感情を無視しているからか、そうでなければ彼女が感情を解しないということを彼が学んでいるからである。

ヘーラー型の女性もアテーナー型の女性もともに、ゼウスのように権力と権威をもっている男性にひきつけられる。しかし、彼に期待するものと、その絆の性質は非常に異なっている。ヘーラー型の女性の手にかかると、彼は彼女の人生を成就してくれる個人的な神のような存在になってしまう。彼女が彼にたいしておぼえる愛着は、深くて本能的な結びつきの感情である。彼が浮気をしていたということを知ると、彼女は芯から徹底的に傷つけられ、相手の女性に怒り狂う。その女性の方が自分よりも重要な存在になっているように思われるからである。

これと対照的に、アテーナー型の女性は、実際のところ性的な嫉妬を何も感じない。彼女は自分の結婚を、お互いに得をしあうパートナーシップと見ている。忠誠を与え、また期待はするが、これをセックスの面での貞節と同じものとは考えないであろう。また、自分が一時的な魅力で首をすげかえられるなどとは、彼女にとっては信じがたいことでもある。

ジャックリーヌ・ケネディ・オナシスはアテーナー型の女性のように見える。彼女は上院議員ジョン・F・ケネディと結婚し、彼はアメリカの大統領になった。その後、彼女は、世界でもっとも金持で無慈悲で権力をもっている男の一人であるアリストテレス・オナシスの妻になった。二人の男はともに、婚外関係をもっていることで知られていた。ケネディは情事は数しれず、一方オナシスはオペラ歌手のマリア・カラスと長いあいだ婚外関係にあることは世間

で広く知られていた。ジャックリーヌ・ケネディ・オナシスが完璧な役者でない限り、彼女は他の女性たちにたいして復讐心をもっていたようには思われない。嫉妬と怒りは見られないし、それに加えて力のある男性たちを選んだということは、彼女がアテーナー型の女性であるということを示している。結婚自体が脅かされるのでないかぎり、アテーナー型の女性は夫に愛人がいるという事実を合理化して受け入れることができる。

しかしながらアテーナー型の女性は、夫が他の女性に関心をもっているということの重大さをひどく過小評価することがある。これが彼女の盲点である。つまり自分自身が感情に触れることがないので、他の人にとって感情が重要なものだということを予測できないのである。さらに彼女は、夫にとっては特別な意味をもつかもしれない傷つきやすい感情とか、精神的価値といったことにたいして同情や共感を欠いている。このような理解の欠如が彼女の不意をつき、期待に反して夫は彼女と別れ、他の女と結婚したがるといったことになるのである。

離婚を決心するアテーナー型の女性は、自分が「とっても好んでいる」夫を、ほとんど感情的になったり、悲しんだりすることなく捨ててしまうことができる。ある知り合いの株式仲買人の三一歳の女性のケースで、私はこれをはっきりと感じた。彼女も夫もともにバリバリと仕事をしていたが、やがて、実行的手腕のある夫の方が馘になった。夫は積極的に仕事を探すよりも家じゅうをモップで掃除し始めた。すると、彼女は次第に彼と一緒にいるのが嫌になってきて、彼を軽蔑するようになっていった。一年後彼女は彼に離婚したいと申し出た。彼女の態度は商売人の態度にそっくりだった。つまり、仕事の責任を果たすことのできない人を馘にしたり、その仕事にもっと適した人がやってきたら働き手を変えてしまう商売人の態度である。彼女は彼に告げることに気が進まず悲しい気持ちになり、実際に直面することを辛いと感じていたが、彼女の基本姿勢は、彼は去るべきだというものであった。そしていったんその嫌な仕事が終わってしまうと彼女はほっとした感じを味わった。

彼女の方が離婚をそそのかすにせよ、そうでないにせよ、アテーナー型の女性は如才なくその状況に直面する。ふつう、恨みや辛さなしに清算交渉がなされる。彼女は彼が誰か他の女性のために彼女の元を去った場合ですら、個人的にはすさんだ気持ちにならない。離婚した夫と親しい間柄を保ち、商売上の関係をもちつづけることすら可能である。

夫婦の両方が真剣に職業に打ち込む二重職業結婚は、比較的新しい現象である。アテーナー型の女性は、たいていの女性よりも、この種の結婚で成功するようである。アテーナーの精神があって初めて、働く二人のパートナーが長期の目標を目ざし、標準的な九時から五時までの仕事に従うだけではないスケジュールを組む兵站術を計画し、実行することができる。その一方で、出世しつつある人々、あるいは知的職業につく人々が身につけるような服飾や社会的態度を保つのである。アテーナー型の女性は、伝統的な役割に関してより保守的になる傾向があり、信条として平等主義的な要求を持ち出す傾向が少ないように思われる。したがって、夫婦ともに職業をもつ結婚においてアテーナー型の女性は、家事を監督し、有能な手伝いを雇って、自分自身の仕事も家庭も大事にするスーパーウーマンという印象を与える。そして夫の同盟者であり、重要な腹心の友としての役割を果たす。

子ども

アテーナー型の女性が母親になると、子どもたちに話をすることができ、子どもたちと一緒

に何かを企てたり、見るべきものがあれば見せに連れていったりできる年齢に子どもたちが成長するのをいまかいまかと待ちこがれる。「大地の母」であるデーメーテールは本能的に母親となることを求め、赤ん坊を抱くことを好み、子供たちが全然成長しなければいいのにと望んだりする。これとは対照的に、アテーナー型の女性なら、自分が赤ん坊の両親であることを確信できる限り、「子宮を借りる」ことに飛びつくだろう。そんな選択が可能だとすればの話であるが。実際彼女は代理母を利用し、家政婦や、子どもたちの面倒を見てくれる子守を雇う。

競争心に富み、外向的で知的好奇心旺盛な息子をもてば、アテーナー型の母親は輝く。息子は彼女にとって、発達途上にある英雄の蕾であり、教えたり、助言したり、鼓舞したり、抜きんでるように刺激したりする彼女の能力を呼び出す。彼女は息子のなかのステレオタイプな男性の行動を強化する傾向があり、早いうちから「強い男は泣かない」というメッセージを与えがちである。

アテーナー型の母親はまた、自分に似た娘、つまり母親と同じく物事にたいする論理的アプローチをもつ独立心に富む娘ともうまくやっていく。このような女性は、自分に似た娘にとっての役割のモデルでありコーチになることができる。しかしながらアテーナー型の母親で、自分とはまったく違った娘をもつ場合もある。たとえばこのような娘は、ものごとがどのようなぐあいにはたらくかといったことよりも、人々が何を感じているかといったことにもとから関心をもち、自己主張できなかったり知的でなかったりするかもしれない。アテーナー型の母親は伝統的な娘とはあまりうまくいかない。彼女は、自分に似ていない娘を面白がったり、受け入れたり、許容したりするかもしれない。あるいは、娘を嫌って息子を愛するかもしれない。いずれにせよ、娘はアテーナー型の母親に感情的な遠さを感じ、自分のあるがままを評価されていないという感覚を抱く。

アテーナー型の女性は、息子にせよ娘にせよ、たやすく感情に押し流される子どもを扱うのが苦手である。当然のことながら子どもの方がもっと過酷である。彼女の基準を受け入れるならば、子どものときには泣き虫の赤ん坊だと言われ、大人になれば過敏だと言われ、自分自身の価値をおとしめながら成長するにちがいない。アテーナー型の女性の実践志向のために、夢みがちな空想家の子どもとの関係が耐えがたくもなる。

アテーナー型の母親は子どもたちに、期待どおりのことをし、人生において感情をかき立てられるような出来事を乗り越えて出世し、「よい兵士」になることを期待する。自分と同じようにである。

中年期

アテーナー型の女性にとって中年期は、人生の最良の時期である。ものごとをあるがままに見る能力があるおかげで、彼女はめったに幻想を抱いて幻滅させられることがない。すべてが計画どおりに進むならば、彼女の人生は整然としたやり方で展開することになる。

人生も半ばにさしかかると、アテーナー型の女性は自分がどのような状況にいるかを見定めようとする。彼女はあらゆる選択肢を考え直して、それから整然と次の段階へと移っていく。仕事が第一であるなら、彼女はいま出世の途上にあり、いまや自分の軌道、つまり自分がどれだけの高い地位にのぼることができるか、自分の状況はどれだけ安定したものであるか、ある助言者と関係をしていることで自分はどこにいくことができるかなどを理解することができ

る。彼女が母親で、子どもが大きくなっているならば、子どもに手がかからなくなるにつれて、自分は何に時間を費やすことができるかの計画を立てるであろう。

しかし、アテーナー型の女性は中年になって思いがけない危機に陥ることがある。感情のカオスが整然とした生活に割り込んでくるかもしれない。中年の結婚の危機のまっただなかにあって、それが心の平静さをゆるがし、彼女をより深い感情にさらすことになるかもしれない。しばしば夫の危機が彼女の危機を誘発する。両方にとって同盟が成功を納めていた仲のよい結婚生活も、いまや彼にとっては不満足なものとなる。彼は、いまや結婚に情熱が欠けていることを感じ始め、自分をロマンティックかつエロティックにかきみだす別の女性にひかれるのを感じるであろう。妻がいつまでもアテーナー型の性質そのままであるのなら、彼女は分別をもってそれに直面するであろう。しかしながら、中年期は、他の女神たちがたやすく活性化され、生まれて初めて意外な反応をするといったこともあるかもしれない。

更年期はアテーナー型の女性を悲しませる原因にはならない。彼女はけっして自分を第一に母親として定義したことはなかったからである。また、若さや美しきもアテーナー型の女性の自尊心にとって本質的なものではない。彼女の自尊心は、その知性や有能さ、彼女がいなければ何も始まらないといったことに基づくからである。したがって年をとるということは、アテーナー型の女性にとって喪失ではない。逆に彼女は大人になってまだ間もないときよりも中年期の方がもっと力強く、役に立ち、影響力をもつために、他の女性たちが老け、魅力を失っていくことにくよくよ悩んでいるときに、彼女の自信と充実感はその頃に高められさえするかもしれない。

晩年

アテーナー型の女性は、何十年にもわたってほとんど変化しない。彼女は生涯を通じて精力的で実践的な女性でありつづけ、初めは家庭や仕事で、その後はしばしば社会のボランティアとして元気に仕事をする。彼女は伝統的な制度を支持し、しかもそれはかなり保守的なものであることが非常に多い。既婚のアテーナー型女性で中流ないし上流階級にいる中年期の女性は、ボランティアの慈善事業や教会のバックボーンである。彼女は病院義勇軍、ユナイティッド・ウェイ救済基金や赤十字を運営する助けをし、年をとるにつれてますます重要な存在になっていく。

子どもたちが成長し家を出てしまっても、アテーナー型の女性は空っぽの巣を嘆くことはない。いまや彼女には以前にもまして計画や勉強や仕事の時間ができ、楽しい。大人になった子どもたちとの関係はふつう温厚なものである。彼女は、子どもたちが独立して自給自足するように励まし、押しつけがましかったり、依存させようと促すことはしないために、子どもや孫と問題をおこすことがない。彼らはふつう、彼女を尊敬し、しばしば彼女のことが好きである。彼女は指示することはせず、あまり感情を表現することもないが、家族との休日や行事を維持するだけでなく、家族と触れ合い、いろいろな出来事について語り合ったりすることもつづける。

老年期には多くのアテーナー型の女性が社会の尊敬を集める大黒柱となる。中には少数だが、「運動靴をはいた小さな老女」になるものがいる。ビジネス感覚を備え、株主総会で細かい質問をしてからかわれてきた女性である。彼女たちはけっして他の人々の非常識や混乱した

考えによって気をくじかれることもなく、彼女たちの頑張りは権威ある男たちにとって悩みの種である。

未亡人になるアテーナー型の女性はふつうそれを以前から予期している。アテーナー型の女性は自分の余命が男性の余命よりも長いことを知っている。彼女は年上の男性と結婚したため、ふいに未亡人になっても茫然とするというようなことはない。彼女は自分自身のお金を管理し、株市場に投資したり、家族や自分自身のビジネスをつづける未亡人となる。

未亡人あるいは未婚のアテーナー型の女性は、しばしば積極的で忙しい生活をつづけながら一人で暮らす。彼女の自己充足的な処女神の性質が老年期にうまく役立つ。若いときと同じように自給自足でき、活動的でいられるのである。

心理的困難

合理的なアテーナーは度を失なったり、心を奪われたり、セルフ・コントロールできなくなったりすることが一度もなかった。彼女は中庸のうちに生き、情動や非合理的な感情に圧倒されたことがない。（ヘスティアーを除き）他のたいていの女神は、自分の感情を他者に向かって解き放って、苦しみを与えるか、そうでなければ自分自身が犠牲となり苦しむ。彼女らに似た女性たちもまた、苦しみを与えるか、あるいは自分が苦しむ可能性をもっている。しかしアテーナーは違っていた。彼女は傷つくことがなく、非合理的で圧倒するような情動に動かされることがなく、その行為は衝動的というよりも十分に考えぬかれたものである。アテーナー型の女性はアテーナーの属性を分かちもっているから、彼女もまた他者の犠牲となることもなければ、自分自身の感情の犠牲になることもない。彼女の問題は心理学的には彼女自身の性格特性から、つまり「防護具と鎧」を着ていることから生じてくる。一面的に発達しているために、彼女は成長する必要のある自分自身の側面から切り離されているかもしれない。

アテーナーとの同一化

「アテーナーとして」生きるということは、頭で生きるということ、そして目的をもって世の中で行動するということを意味している。そのように行動する女性のあり方は一面的になる。つまり彼女は仕事のために生きるのである。他者との仲間関係を楽しみはするが、彼女には感情的な強さやエロティックな魅力、親密さ、情熱、エクスタシーが欠けている。深い絶望や苦悩からも免れている。なぜなら、それらは他者との結びつきや他者を必要とすることに結びつくものだからである。もっぱら合理的アテーナーだけに同一化してしまうと、女性は多岐にわたって、しかも強烈な人間としての感情から切り離されてしまう。彼女の感情はアテーナーによって上手に調節され、中ぐらいの範囲に限られてしまう。このようにして、彼女は自分自身を、他の人の深い感情に共感したり、強烈な感情を表現する芸術や音楽に影響されたり、神秘的な体験によって感動させられたりすることから、みずからを切り離してしまうのである。

アテーナー型の女性は頭で生きているので、十分にからだで生きるという体験をし損ねる。

彼女は官能性について、またその限界まで自分のからだを追いつめてゆくことがどんな風に感じられるかについてほとんど知らない。アテーナーのために本能的レベルの「上」にいる女性は、十分に強い母性的本能、性的本能、生殖本能を感じない。

アテーナーを乗り越えて成長するためには、女性は自分自身の他の側面を発展させる必要がある。アテーナーのために制限されていることを悟り、他の女神たちの観点を受け入れるならば、少しずつアテーナーを乗り越えながら成長することができるだろう。人々が彼らにとって深い意味をもつが、自分にはまだよくわからない感情と経験について語っているとき、彼らが何について語っているのかを努めて想像する必要がある。証明を欲しがったり、懐疑的であったりするために他者から、そして、いまだ発展していない魂や感情の深さにたいする潜在能力からも自分が隔たってしまうのだということに気づかねばならない。

アテーナー型の女性は、ときには思いがけない仕方で、あるいは心に傷を受けながらアテーナーを乗り越えて成長することがある。まわりからプレッシャーをかけられて無意識からの感情の洪水に見舞われるときである。たとえば、子供が病気のおそれがある場合とか、誰かに傷つけられる場合である。怒り狂う母熊のように獰猛な防衛本能が元型的深みから生じるなら、彼女はこのアルテミスのもつ側面が自分の部分であることを発見する。あるいは彼女の同僚同士といった結婚生活が他の女性によって脅かされる場合、仕事に精出す合理的アテーナーでいつづける代わりに、ヘーラーの傷つき、復讐心が優勢になるかもしれない。また、サイケデリックなドラッグを服用し、自分を畏怖の念で満たす意識の変性状態へ飛びこんでしまうこともあろう。

メドゥーサ効果

アテーナー型の女性は、他の人々を脅かし、自分と違うタイプの人々の自発性や活力、創造性をなくさせてしまう可能性をもっている。これがメドゥーサ効果である。

女神アテーナーは、胸当ての部分に彼女の権力の象徴であるアイギス、ゴルゴーンの頭で飾られた山羊皮、メドゥーサの頭を身につけていた。これは髪の代わりにヘビをもつ怪物で、その恐ろしい姿を見る者はみな石に変えられてしまった。ゴルゴーンもまたアテーナー型の女性の一側面を表している。比喩的に言って彼女もまた他者のためになされる経験を殺してしまい、会話から生命を抜き取り、人間関係を静的な絵に変えてしまう力をもっている。事実や細部に焦点を当て、論理的な前提や合理性を欲しがるために、会話は無味乾燥な詳細の記述にかわってしまう可能性がある。また彼女はすべてを台無しにしてしまうほど無神経であったり、そうやって雰囲気を深い個人的なものから表面的でよそよそしいものへと劇的に変化させることができる。アテーナー型の女性はその批判的な態度と分析的な質問によって、自分でそのつもりがなくても他の人の主観的経験をおとしめてしまう。彼女は他の人が非常に重要だと考えている魂の問題や道徳的な問題に共感せず、人間関係について抱えている問題に容赦なく、いかなる弱点にたいしても批判的になる。このような共感の欠如は致命的なものである。

純粋に社交的な場面では、この生命力を奪うメドゥーサ効果は、単にうんざりさせたり激怒させたりするだけであろう。しかしながら、アテーナー型の女性が権力をもち、判断を下す立場にある場合、彼女は、人々を恐れさせ、石化させるゴルゴーン・メドゥーサの力を十分に発揮するかもしれない。たとえば、重大な会見をおこない、深刻な結果をもたらすかもしれな

い。ある人が「ゴルゴーンの目をもったアテーナー」によって綿密に検査されるとき、その人は分析的で非個人的な心の目で拡大されて見つめられているような感じをいだくだろう。質問は情け容赦なく不完全な点を明らかにしていくような方向性をもっているように思われる。解剖していくような知性と石の心のように感じられるものに直面して、その人は「石に変えられる」ように感じることだろう。

私の同僚はかつて、進級の評価を決める会議でゴルゴーン・メドゥーサと出会った不運な経験のことを語ってくれた。現在この同僚は治療者として、非常に重症の患者を相手にすぐれた仕事をしている。非合理的行動の背後にひそんでいる象徴的意味や感情を直観的に理解することができる彼女は見事に患者に対処している。しかしながら彼女は、アテーナー型の女性との面接について次のように述べている。「頭のなかが真っ白になったような気がしたわ。しばらくのあいだ文字どおりショックのあまり口もきけず、理路整然とものを考えることも、言葉をさがすこともできなかったわ。……結局、まったくどうにもしょうがなかったの」出世や教育の可能性を台無しにしてしまう権力をもつ人に決めつけるような仕方で吟味されると、石のように固くなってしまうような人がいるが、たいていの場合、その相手はゼウスの元型をになって「アイギス」を身につけている男性である。しかし女性が権力に近づいていくにつれ、女性もだんだんアイギスを着るようになるかもしれない。そしてアテーナーとして振る舞うならば、メドゥーサ効果を発揮しても不思議ではなかろう。

メドゥーサ効果をもっているアテーナー型の女性は、自分の否定的な力についてしばしば無自覚である。自分では脅えさせたり恐れさせたりするつもりはなく、仕事をうまくやっているにすぎない。事実を集め、前提を検討し、証拠事実によってその素材がどのように構造化され、支持されているかに挑戦しているだけである。しかしはからずも彼女は、私たちは分析するとき殺人をしているのだ、というゲーテの観察どおりのことを実行しているのかもしれない。その客観的態度や辛辣な質問によって彼女は、親しい心の交流をつくり出そうとする努力をうとんじている。このようにして彼女は、あらゆる物事の核心、あるいは人の魂がそのなかでこそ分かち合われるはずの真のコミュニケーションが持つ潜在力を切り捨ててしまうのである。

ときどき私は純粋に知的なアプローチをとる患者と話をすることがある。彼女は私に、自分の人生について事実だけからなる報告をし、情動なしに出来事を暗唱し、感情はまったく無視する。私は彼女と関係を保つのに努力しなければならないことに気づく。「生命」がないとき、つまり生じたことに伴っている感情の強烈さというものがないときにつくり出される退屈さに打ち克つために悪戦苦闘しなければならないのである。彼女のなかでは生命がなくなっているもののために私は無感覚にさせられる。自分自身が「石になってゆく」のを感じるとき、私はすぐさま、これは彼女があらゆる人間関係にもたらしている問題であるということを知る。このために彼女の人生は親密さを欠き、しばしば孤独になるのである。比喩的に言って、胸当てにメドゥーサのアイギスをつけたアテーナーの鎧を着ている女性はどんな傷つきやすさも示さない。うまく鎧を着た（ふつうは知的な）防衛がはたらいており、彼女の権威や批判的なまなざしのために他者は感情的に近づくことができなくなるのである。

自分自身、他者にたいして及ぼしているメドゥーサ効果に困っているアテーナー型の女性は、アテーナーはゴルゴーンの胸当てを身につけてはいるが、はずすこともできるということ

を思いおこせばいい。アテーナーと同じようにアテーナー型の女性も「鎧とアイギスをはずす」ならば、もはやメドゥーサ効果がなくなるだろう。彼女が他者にたいする審判席に座ったり、他の人々が感じたり考えたり生きたりしているやり方を、いいとかだめだとか評価するような権威が自分にあるとひそかに主張したりすることをしなくなると、メドゥーサのアイギスはなくなるのである。他者から学ぶべきこともあるし、他者と分かちもつべきものもあるということに気づき、仲間の一人になったとき、彼女はゴルゴーンの胸当てとメドゥーサ効果を投げ捨てていることであろう。

狡猾さ――「何をしてもうまくゆく」

到達すべき目標や解決すべき問題を抱えているアテーナー型の女性は、ほとんど決まって、「どうすればいいのか」とか「うまくゆくだろうか」といったことをたずねている。自分の目標を達成したり、ライバルを蹴落とすとき、「狡猾」になったり、無節操になったりすることがある。

狡猾さは女神アテーナーに特徴的なものである。たとえば、トロイア戦争で、ギリシアの英雄アキレウスと、彼に劣らず高貴なトロイアの英雄ヘクトールが対決するというクライマックスの場面がある。そのときアテーナーは決断と「きたない策略」を用いてアキレウスに勝たせた。彼女は、ヘクトールがアキレウスに相対したとき、彼をだまして彼の弟が助立ちにやってきたと思い込ませた。自分のただ一本の槍を投げて、もう一本の槍を「弟」から貰えるものと振り返って初めて、ヘクトールは自分が一人であって、死が近いということを悟ったのである。

この女神は、「これはフェアか」とか「これは道理にかなっているだろうか」といった問いには関知しなかった。重要なのは、それが戦略として効果的であるということであった。アテーナー型のこの暗黒の側面はこのアテーナーの側面に関係している。

彼女が他の人々の行動を見積もるとき、効率が主な基準である。正邪とか善悪といった感情価値に心を配るということは、彼女の性質から言って考えられない。それゆえ、誰かが道にはずれたり、あるいは道徳的ではない行動をしたときに、どうして個人的に害を被るわけでもない人々が腹を立てるか、理解に苦しむことになるのである。また、なぜ誰でもが、「ものごとの原則」や所期の目標に到達するためにはいかなる手段が使われるべきかということについて骨折って議論するのかも理解できない。

それで、彼女が一九七〇年代の学生で、自分のクラスメートたちが街にくり出して、ベトナム戦争やカンボジア侵攻に抗議したり、ウォーターゲートの発覚に腹を立てているとしても、それには関わらないであろう。まさにアテーナー型と言うべきであるが、彼女が他の人々の気持ちに影響されて心を動かされることもなければ、自分の気持ちが動転することもないとき、他の人たちは彼女が道徳的に無関心であると考えるだろう。しかしそのようなことはおかまいなしに、彼女は教室や実験室にこもって、自分の出世を追求するのである。

成長の道

他の女神たちを心のなかで育てることによって一人の女神のために生ずるもろもろの制限を越えて成長するということは、あらゆる女神のタイプに共通の可能性である。しかしアテーナー型の女性には、特有の追求可能な方向もいくつかある。

内面に向かう

世の中に出ているアテーナー型の女性は、ビジネス、法律、あるいは政治の権力をめぐるゲームにとらえられて、始終働いており、「自分の商売の話に夢中になり」、職場から仕事をもち帰ることになるかもしれない。しばらくすると、自分の心がけっして休まることがない、「車輪がいつも回転している」という気持ちにおそわれるであろう。仕事のためにすべてが犠牲になっていることに気がつき、もっとバランスが欲しいという気持ちになると、仕事の女神であるアテーナーは、心を仕事から解放する心理学的な手だてを提供してくれる。

あらゆる仕事のなかで、アテーナーにもっとも緑が深いのは機織りだった。アテーナー型のビジネス・ウーマンが機織りのことを話題にとりあげて、こう言った。「思いつく限りのなかでもっとも気がやすまるものです。機織りのリズムのなかに入っていると、無我夢中になって心が空っぽになります。手が忙しくはたらき、ついには美しい壁掛けができあがるんですから」

編物をすると、仕事にたいする心配から解放されるアテーナー型の女性もいるかもしれない。彼女が自分で編みあげる服は実際的であると同時に、創造性が輝いている。もっとも上質の材料を、専門のデザイナーによるものと変わらないコートやドレスができあがる。同じ材料を使った既成晶を買えば、十倍の値段がすることだろう。そのことに気をよくする彼女はいつまでも辛抱強く編んで、半分真面目に、それを「治療」と言う。なぜなら、そのおかげで仕事のいろいろな問題から離れて、別の精神状態に入れるからである。

ろくろで粘土をこねても、アテーナーのこの側面に触れることができる。実際、どんな策略を弄しても、アテーナーはそこから自分の外向性にたいする内的なバランスを獲得するのである。

子どもの部分の再発見

女神アテーナーが子どもであったことは一度もない。彼女は大人として生まれてきたからである。このメタファーはアテーナー型の女性の実際の経験からかけ離れてはいない。思い出せる限りのもっとも早い時期から、「ものごとを理解し」たり、「何をやらせても様になっていた」ということが思い出される。しかし、言葉のうえでは幼いながらも、即物的精神をそなえた女の子はしばしば、主観的経験の領域全体を見失っていることがあり、それを大人になって初めて求めることになるかもしれない。彼女はこれまで一度も経験したことがない子ども、つまり新しい何かに混乱させられたり喜んだりすることができる子どもを自分のなかに発見する必要があろう。

アテーナー型の女性が自分の子ども的な自己を発見するためには、（彼女が子どものときからそうしてきたように）「分別ある大人」の仕方で新しい経験にアプローチしていくことをやめねばならない。そうではなく、人生にたいしてあたかも自分が大きく目を見開く子どもであ

り、すべてが新しく発見されるべきものであるかのように接近する必要がある。子どもは何か新しいことに魅惑されると、そのすべてに没頭する。アテーナーとは違って子どもは、それが何であるべきかといった先人見をもたず、懐疑的であったりすることもなく、その経験に着古しの変わりばえのしないラベルを貼ってファイルに入れて片づけるといったこともしない。誰かが自分の経験したことのないことについて話しているとき、アテーナー型の女性は耳をかたむけ、述べられている場面や感情をできる限り想像するということを学ばねばならない。彼女が感情的状況のさなかにいるのならば、そこにとどまるように努め、他者に励ましてもらうべきである。失われた子どもを取り戻すためには遊んだり、笑ったり、泣いたり、抱き締められたりする必要がある。

母親の発見

神話では女神アテーナーは母のない娘であり、親はただ父親ゼウス一人だけであることを誇りにしていた。彼女は自分の母親がメーティスであり、ゼウスに飲み込まれたのだということを知らなかった。比喩的に言えば、アテーナー型の女性はいろいろな意味において母親がいないのである。彼女たちは母親を発見し、重んじ、自分が母親の保護を受けるのを許す必要がある。

アテーナー型の女性はしばしば自分自身の母親を見下げてきている。彼女は自分自身のなかにある母親と類似した性質を評価することができるようになるためには、その前に母親の強さを知る必要がある。彼女はしばしば（女神デーメーテールによって人格化される）母性元型との関係を欠いている。これこそ深く本能的なレベルで母性や母たることを体験するために自分自身のなかに感じなければならない関係なのだが。『女神』の著者であるクリスティーヌ・ドーニングはこの仕事を「アテーナーのリ・メンバリング（re-membering）」と呼んでいるが、彼女はそのことを「女性的なるもの、母、メーティスとの関係の再発見」という意味で語っている(6)。

アテーナー型の女性にとって知っておくと助けになるのは、ギリシア神話が今日の形をとる以前に支持されていた母権的な女性的価値が、今日はびこっているような父権的文化によって飲み込まれてしまったのだということである。彼女の知的好奇心は、彼女を歴史や心理学からフェミニズム思想へと導くであろう。この新しい視点から彼女は自分自身の母親や他の女性、そして自分自身についていままでとは異なった仕方で考え始めるかもしれない。このようにしてフェミニストになるにいたったアテーナー型の女性も多い。アテーナー型の女性がいったん自分の考え方を変えると、人々との関係も変化するのである。

6

炉と神殿の女神
賢女
乙女のままの伯母
ヘスティアー

女神ヘスティアー

ヘスティアーは炉の女神であり、もっと明確に言うならば、丸い炉のなかで燃えている火の女神であった。彼女はオリュムポスの神々のなかでいちばん知られていない神である。ヘスティアーとそれに相当するローマ神話のウェスタは、画家や彫刻家たちによって人間の形で表されたことがなかった。そのかわりこの女神は、家庭や神殿や都市の中心で燃えている炎のなかに存在していると考えられていた。ヘスティアーのシンボルは円である。彼女の最初の炉は丸く、神殿もまた丸かった。家庭でも神殿でもヘスティアーが入ってくるまでは供え物はされなかった。彼女がそこにいるとき、家庭も神殿も神聖なところとなる。ヘスティアーは、明かりや暖かさ、料理のための熱を提供してくれる聖なる炎と同じように、魂のレベルで感じとられる現前であったことは明らかである。

系譜と神話

ヘスティアーはレアーとクロノスの第一子として生まれ、第一世代のオリュムポスの神々の長女であった。また、第二世代の神々にとっては乙女のままの伯母であった。生まれから言えば彼女は、十二人のオリュムポスの神々の一人であったが、彼女をオリュムポス山に見出すことはできず、ぶどう酒の神であるディオニューソスが目立ってきて、彼女の代わりに十二人の神の一人になったときにも、なんの抗議もしなかった。ギリシア神話で重要な部分を占めている恋愛沙汰や戦争において、彼女はどんな役割もとることがなかったので、ギリシアの出身としてもっとも知られることの少ない神である。しかしヘスティアーは非常に敬われ、神々にたいして人間たちがつくった捧げ物のうちでも、もっともよい物を受け取っていた。

ヘスティアーの短い神話は、三つのホメーロス讃歌にごく大ざっぱに描かれている。彼女は「あの尊敬すべき処女ヘスティアー」として描かれている。アプロディーテーが服従させたり、説得したり誘惑したり、さらには「快いあこがれの気持ちを目覚めさせる」ことのできない三人の処女がいたが、彼女はその一人である(1)。

アプロディーテーのためにポセイドーン（海の神）とアポローン（太陽の神）がヘスティアーに恋することになった。二人とも彼女を求めたのだが、ヘスティアーは彼らをきっぱり拒否して、自分は永遠に処女のままでいるという大いなる誓いをたてた。すると、『アプロディーテーへの讃歌』が伝えているように、「ゼウスは彼女に結婚の贈り物の代わりにある美しい特権を与えた。すなわち、彼は彼女に、家の中心に座らせて、捧げ物のなかでももっともよい物を受け取らせたのである。神々を祀るどの寺院を見ても彼女は崇められ、あらゆる死すべきもの（人間）のあいだでも彼女は尊敬される女神である。(2)」ヘスティアーに捧げられた二つのホメーロス讃歌は、彼女を家や寺院のなかに招き入れるための祈りである。

儀式と崇拝(3)

他の神々や女神と違ってヘスティアーは、彼女を描いた神話や肖像を通じては知られていない。ヘスティアーの意義は儀式のうちに見られ、火で象徴される。家が住みかとなるためには

ヘスティアーの現前が必要とされた。男女が結婚すると、花嫁の母親は自分の家のかまどで松明に火をつけて、新たに結婚したカップルの前に、それを彼らの新居へと運び、そこで最初の火を灯したのである。この行為によって新居が聖化された。

子どもが生まれると、ヘスティアーの第二の儀式がおこなわれた。子どもは五歳になると、炉の周りをまわらされた。これは子どもが家族に加わるということを象徴するものであった。つづいて祭りの聖なる宴がおこなわれた。

同様に、どのギリシアの都市国家も、聖なる火を祀った共同の炉が、中心となる建物にあった。ここで客人たちは公的にもてなされたのである。そしてどの植民地も、本国の都市から新しい都市の火を灯すために、聖なる火をもってきていた。

それゆえ、新婚夫婦や新しい家庭か故郷をつくり出すことに着手するときはいつでも、ヘスティアーが聖なる火として一緒にやってきて、古い家庭を新しい家庭と結びつけた。これはおそらく、連続性と関係性、意識の共有と共同のアイデンティティを象徴するものであろう。

後になってローマでは、ヘスティアーは女神ウェスタとして崇拝された。そこでは、ウェスタの聖なる火はローマのあらゆる市民を統合して一つの家族にした。彼女の寺院では、ウェスタの乙女たちが聖なる火の番をした。女神の処女性と匿名性を体現するために必要とされたのである。ある意味で彼女らは女神が人間となって現れたものである。彼女たちは彫刻にも絵画にも表すことができないヘスティアーのイメージを生きていたからである。

ウェスタの処女に選ばれた少女たちは、ふつうまだ六歳にもならない非常に幼い頃に寺院に連れこまれた。イニシェーションを受けたばかりの者は同じ服を着せられ、髪を刈られ、彼女たちの様子で目立ったり個性的なところはすべて抑えられた。彼女たちは他の人々から隔離され、敬われ、ヘスティアーのように生きることが期待された。もし処女のままでいなければ、悲惨な結果が待ち受けていた。

男性と性的関係をもったウェスタの処女は、女神を汚したことにされた。罰として彼女は生き埋めにされ、光と油と食物と寝るための場所がある、小さな、空気の通らない地下の一室に埋葬された。その上の地面は平らにされて、まるで何もないかのように見えた。このようにして、ヘスティアーの聖なる炎の体現としてのウェスタの処女の生命は、彼女が女神を人格化することをやめると、窒息させられ、土によって覆いかぶされたのである。炉でくすぶっている石炭を消すように。

ヘスティアーはしばしば、ローマ人にはメルクリウスとして知られている使いの神ヘルメースと対にされた。彼は雄弁で狡猾な神であり、旅人の保護者、案内人であり、演説の神、商人と泥棒のパトロンである。彼を表した初期のものとして「ヘルム（herm）」と呼ばれる柱のような石がある。家庭には、ヘスティアーの丸い炉が内部にある一方で、ヘルメースの男根状の柱が敷居にあった。ヘスティアーの火が暖かさをもたらし、家庭を聖なるものとする一方で、ヘルメースが豊饒を招き入れ、悪を寄せつけないようにドアのところに立っていた。寺院では、この二神が結びつけられもしていた。たとえばローマでは、メルクリウスの社は、ウェスタの寺院へと通じていく階段の右に建っていた。

このように家々や寺院ではヘスティアーとヘルメースが結びつきながらも、それぞれ別個の重要な機能を果たした。ヘスティアーは、人々が寄り合って家族を構成して、帰っていくべき場所としての避難所を提供した。ヘルメースは戸口に立っている守護者であり、世間の道案内

人であり道連れであった。世の中で大事なことは、コミュニケーション、事情に明るいこと、頭の回転が速くて、幸運に恵まれるということだったからである。

ヘスティアー元型

家や寺院に女神ヘスティアーが存在してくれるということは、日常生活になくてはならないことであった。一人の女性の人格のなかにヘスティアーが元型的に現前することも同様に大切であり、それによってその女性は自分が無傷で健全だという感覚が生じてくる。

処女神

ヘスティアーは三人の処女神のなかでも、最年長である。アルテミスとアテーナーと違って、世の中に出かけて野性を探究したり、一つの都市を建設するというような冒険はしない。炉床内部に納まって、家や寺院にとどまっているのである。

表面的に見るならば、名も知れないヘスティアーは、機敏に行動するアルテミスや、鋭い精神の持ち主で黄金の甲冑を身につけているアテーナーとは少しも共通点がないように見える。しかし、興味の領域や行動の仕方がどれほど異なっていようとも、本質的につかみどころのないもろもろの性質は、三人の処女神に共通のものである。いずれも、処女神の特徴となる自己充足的性質をそなえている。男の神や人間の犠牲になったものは一人もいない。彼女たちのいずれもが、他人の欲求や他人にたいする欲求のために気を逸らされずに、自分にとって大事なことがらに焦点を合わせ、それに精神を集中する能力をもっていた。

内面に焦点づけられた意識

ヘスティアー元型は他の二人の処女神と同じく、意識が焦点を合わせられている。（ラテン語で「炉床」を意味する語はfocusである。）しかし内面に焦点が向けられている点が異なっている。外面志向のアルテミスやアテーナーは、いろいろな目標を達成したり、計画を遂行することに焦点が合わせられている。ヘスティアーが精神を集中させるのは自分の内的で主観的な経験である。たとえば、彼女は瞑想するとき、それに完全に没頭している。

ヘスティアーは、内面を見つめて、何がおこっているのかを直観的に感じとって物事を理解する。ヘスティアー流のやり方でいけば、私たちは個人的に意味のあることに焦点を合わせることによって自分のもろもろの価値と触れ合えるようになる。この内的な焦点づけを通して、状況の本質を理解することができるのである。また、他の人たちの性格を見抜いたり、行動のパターンを理解したり、その意味を感じることもできる。私たちの五感は無数のこまごました物事のために混乱させられそうになるが、そのまっただなかにあって、この内面のパースペクティブは精神に明晰さを与えてくれる。

内面志向のヘスティアーはまた、自分自身の関心事に心を向けるにつれて、自分をとりまくもろもろのものから感情が離れ、それに気がつかなくなるということもある。この離脱も、三人の処女神に象徴的なものである。さらに、他の人々から引きこもるという傾向に付け加えて

言うならば、ヘスティアーの「自己充足性」が求めているのは静かな心の安らぎであり、これは孤独のうちにもっともたやすく見出されるものである。

炉を守るもの

　炉の女神としてのヘスティアーは、家事を雑用よりはむしろ意味深い活動と見なしている女性の心のなかではたらいている元型である。ヘスティアーにとって炉の守りは、女性が自己と自分の家に秩序を与える手段である。日常の仕事をなしとげることで内的調和の感覚を獲得する女性は、ヘスティアー元型のこの側面に触れている。

　家事のこまごましたことがらに心を向けるということは、心を中心的に向ける活動であり、瞑想に等しい。ヘスティアー型の女性は、もし自分の内的プロセスをよくわきまえているならば、『禅と家事の術』と題した一冊の本を書くこともできよう。彼女が家事をおこなうのは、それが自分にとって大切だからであり、またそれをすることが喜びだからである。彼女は自分がしていることから、ある内面の平和をおぼえるだろう。それは宗教生活を送っている女性にとって、あらゆる活動が「神への奉仕」としてなされるのに似ている。もしヘスティアーが元型であるなら、彼女は自分の仕事をなしとげるとき、内面に快いものをおぼえる。これと対照的に、アテーナーは達成感をおぼえ、アルテミスは雑用がすんでやれやれと思い、他のことをするだけである。

　ヘスティアーが現前するとき、女性は、時間がたっぷりあるという感覚を抱いて、せっせと家事をおこなう。彼女は時計に目をやることがない。なぜなら、スケジュールに従ったり、「間にあわせようと」仕事をするのではないからである。その結果、ギリシア人たちがカイロスと呼んだもののうちにある。つまり「時間というものにあずかっている」のである。これは、（時がたつのを忘れさせるほとんどあらゆる経験がそうであるように）心をはぐくんでくれる。洗濯物を分類したり、皿を洗い、散らかっている物を片付けるとき、彼女は急がされることなく、平和な気持ちで、一つ一つの仕事に没頭できているのを感じる。

　炉を守るものたちは名も知られないままに背景にとどまっている。彼女らはしばしば当たり前のものと見なされ、とりたててニュースにするほどの有名人ではない。

寺院の炉を守るもの

　ヘスティアー元型は宗教集団、とくに沈黙を尊ぶところで強力となる。その霊的修行が瞑想に基づいているカトリックのもろもろの黙想修道会や東洋の諸宗教は、ヘスティアー型の女性にとって恰好の舞台となる。

　ウェスタの処女と尼僧はヘスティアーの元型的パターンを共有している。修道院に入る若い女性たちは、自分のこれまでのアイデンティティを放棄する。彼女たちのファースト・ネームは変えられ、苗字はもはや使われなくなる。同じ服を着て、利己心を捨てるように努力し、独身生活をおくり、宗教的奉仕に人生を捧げる。

　東洋の諸宗教がますます多くの西洋人の心を引きつけるにつれて、修道院だけでなくアシュラムにも、ヘスティアーを体現した女性たちの姿を見ることができるようになってきている。修道院であれアシュラムであれ、そこでの修行は何よりも祈りや瞑想に焦点が合わせられている。その次に集団の維持（あるいは家事）が重視される。といっても、この仕事もまた崇拝の

一つの形式であるという態度でなされる。

たいていの寺院のヘスティアーたちもまた、自分たちの宗教集団の日々の霊的であるとともに家事に関わる儀式につつましやかにあずかる匿名の女性である。これらの集団の重要な女性メンバーはヘスティアーを他の強力な元型と結びつけている。たとえば、神秘家アヴィラの聖テレジアは、自分のエクスタシー体験を書き著したことで有名であり、アプロディーテーの側面をヘスティアーと結びつけている。ノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサは、母性的なデーメーテールとヘスティアーが結びついているようである。精神的な動機から出発しながら、すぐれた行政能力を発揮する尼僧院長は、ヘスティアーに加えて強いアテーナー的な特徴を兼ねそなえている。

宗教的儀式が家庭でおこなわれるとき、ヘスティアーの家庭的側面と寺院的側面が一緒になる。たとえば、あるユダヤ人の女性がシダー（訳注　ユダヤ人のエジプト脱出を記念する過ぎ越しの祝いの第一夜の祝い）の晩餐を準備しているのを見る機会があったが、私はそこにヘスティアーの姿をかいま見ることができた。テーブルをセットしているとき、彼女は神聖な仕事に没頭していたのである。それは、カトリックのミサで祭壇の少年と司祭のあいだでおこる沈黙の交流と同じくらい意義深い儀式であった。

老賢女

第一世代のオリュムポスの神々の姉的存在として、また第二世代のオリュムポスの神々にとっては永遠に若々しい伯母的存在として、ヘスティアーは名誉ある長老の位置を占めていた。彼女は親族たちの陰謀や寮争に関わることなく、その上にとどまり、利郡的な情熱に心奪われることを避けた。この元型が女性の心のなかに現前するとき、いろいろな出来事がおこっても彼女の心に及ぼす影響は他の人々の場合と同じではない。

内面に現前するものがヘスティアーであれば、女性は人々や事件、財産や特権や権力に「執着」しない。彼女はあるがままで十分に満たされていると感じる。その自我はどっちつかずということがない。自分が何者であるかということが重要ではなくなっているために、自我は外的な環境に縛られない。そのため、何がおころうとも、それに一喜一憂することがなくなる。彼女には次のものが存在するのである。

実用性を追求する欲望からの内なる自由、
業と苦からの解脱、内外の強制からの解脱、
されど、それをとりまいているのは、
思慮という静かな、かつ動いている白い光の恵み。
T・S・エリオット「四重奏(4)」

ヘスティアーの解脱はこの元型に「賢女」という性質を与える。彼女は酸いも甘いも味わい、くじけることのない精神と、経験に鍛えられた人格によって生き抜いてきた長老のようである。

女神ヘスティアーは、あらゆる神々の寺院で敬われていた。ヘスティアーが他の神々（あるいは元型）と「寺院」（あるいはパーソナリティ）を共有し合うとき、彼女は彼らの目標と目

的にその賢明なパースペクティブを提供する。それゆえ、自分の連れ合いが不倫をしていることを発見して苦しむヘーラー型の女性が、もしヘスティアーも元型としてもっているならば、それほど傷つけられることはない。他のあらゆる元型が過剰になったとしても、ヘスティアーの賢明な助言で事態は改善される。そのとき私たちは、真実を伝えたり、霊的な洞察を与えてくれる女神がそこに現前しているのを感じる。

内的中心性、霊的照明および意味としての自己

ヘスティアーは内的中心性の元型である。彼女は、活動に意味を与える「静止点」であり、それによって女性が外界のカオス、無秩序、あるいは通常の日常的な喧噪のまっただなかに根づくことを可能にする内なる照合点である。自分のパーソナリティのなかにヘスティアーがいることで、女性の人生は意味をもつようになる。

中心にある聖なる火をぐるりと取り囲んでいるヘステイアーの炉床は曼荼羅の形をしており、これは瞑想に使われ、全体性を象徴するイメージである。曼荼羅のシンボリズムについてユングは次のように書いている。

その基本的モチーフは人格の中心、心の内部の一種の中心点の前兆である。それにあらゆるものが関係し、それによってあらゆるものが配置され、それ自身エネルギーの源泉である。この中心点のエネルギーは、現にあるところのものになろうというほとんど抵抗しようのない強制力と衝動という形で現れる。ちょうどあらゆる有機体が、環境がどうであろうとも、その本性に特徴的な形をとるように駆り立てられるのと同じである。この中心は、自我（ego）として感じられたり考えられたりするのではない。もしそう言ってよければの話であるが、自己（self）として感じられたり考えられたりするのである(5)。

自己は、外にあるあらゆるものの本質に私たちを結びつけている一体性との関係を私たちが感じるときに内面で体験されるものである。この霊的レベルでは、「結合」と「解脱」は、逆説的ではあるが同じなのである。私たちが暖かさと光の内なる源泉と触れ合っている（比喩的に言うならば、霊的な火に暖められ、照らされている）ように感じるとき、この「火」は、私たちが自分の家庭で愛している人たちを暖め、遠くに離れている人々と触れ合わせ続けてくれるのである。

ヘスティアーの聖なる火は、家族の炉床と寺院内部にたてられた。女神と火は一つであり、家族と家族、都市国家と植民地を結びつけていた。ヘスティアーはとりわけ、精神の絆そのものであった。この元型が霊的な中心化と他の人々との結びつきをもたらしてくれるとき、それは自己を表現している。

ヘスティアーとヘルメースの元型的二元性

柱と円形の環はそれぞれ、男性原理と女性原理を表すようになってきている。古代ギリシアでは柱は、家のドアの外に立っているヘルメースを表す「ヘルム」であった。一応、家のなかの丸い炉床はヘスティアーを象徴した。インドや東洋の他の地域では、柱と円は（男女のように）「交わって」いる。まっすぐに立った男根のリンガムは女性のヨニあるいは環を貫通して

いる。子供の輪投げのように、リンガムはヨニの上に覆いかぶさっている。東洋ではこのように柱と円が融合し合っていたのだが、ギリシアとローマはこれらと同じヘルメースとヘスティアーの二つの象徴を関係づけながら、離れさせていた。この分離をさらに強調するために、ヘスティアーは最年長のオリュムポスの神であるとともに、けっして貫通されることを求めない処女神でもある。彼女はヘルメースの乙女のままの伯母であり、ヘルメースは最年少のオリュムポスの神であると考えられている。二神が一体になることなど、ほとんどありそうにない。

ギリシアの時代以来、西洋文化は男性と女性、心とからだ、ロゴスとエロス、能動的と受動的の二重性の分裂あるいは分化を強調してきた。これらの対のすべてはそれぞれ、一方が優れていて他方が劣っているものとなった。ヘスティアーとヘルメースがともに家庭と寺院で崇められていたとき、ヘスティアーの女性的なもろもろの価値は、もし仮にあるとするならば、それだけより重要なものであった。彼女は最高の栄誉を得ていたのである。そのころは、相補的な二元性があった。だが、ヘスティアーはそれ以来おとしめられ、忘れられてしまっている。彼女の聖なる火はもはや見張りをされず、彼女が代表していたものはもはや尊ばれていない。

ヘスティアーの女性的な価値が忘れられ、尊ばれなくなると、内なる聖所（意味と平和を見出すために内面に向かうこと）と聖所と温もりの源泉としての家族の重要性が減少したり失われたりする。これに加えて、その根底にある他者と結びついているという感覚が消えてしまう。都市や国や地球の市民たちが共通の精神的な絆で結ばれたいという欲求が消えるのと同様である。

ヘスティアーとヘルメースの神秘的なつながり

神秘的なレベルでは、ヘスティアーとヘルメースの元型は中心にある聖なる火のイメージを通じて結びついている。ヘルメース＝メルクリウスは錬金術の霊のメルクリウスであり、火の元素として描かれた。このような火は神秘的な知識の源泉と考えられ、象徴的には大地の中心に位置づけられている。

ヘスティアーとヘルメースは霊と魂の元型的観念を表している。ヘルメースは魂に火をつける霊である。この連関で言えば、ヘルメースは炉床の中心にあってくすぶっている石炭に吹きかけて、それを燃えあがらせる風のようである。同様に、もろもろの観念も深い感情を燃えあがらせることができるし、またいろいろな言葉も、これまでははっきりと知られていなかったものを意識させ、従来はぼんやりとしか認識されてこなかったものをはっきりと照らし出すことができる。

ヘスティアーを育てる

ヘスティアーは、「瞑想のような気持ちで家事をおこなう」ことから生じる静かな孤独と秩序感に見ることができる。このようなあり方でいるとき、女性はどの仕事にも全面的に没頭し、せかされずにそれをおこない、そこから生まれるハーモニーを楽しむだけの時間をもち合わせている。どんなにヘスティアーらしくない主婦でも、この元型に支配されていた頃を思い出すことができる。たとえば、一日かけて押し入れを片づけようとすると、捨てる服もあればしまっておく服もある。いろいろな出来事を思い出したり、予感したりしながら、所持品と自分自身の両方を分類していくことになる。片づけが終わると、目の前にあるのはごく普通の押

し入れだが、それは家事をおこなう者が誰であるかということを映しており、そのようにして一日が過ぎていく。あるいは、古い写真を丹念に調べ分類しラベルを貼り、アルバムに貼ることに喜びと満足をおぼえるときに、ヘスティアーを経験する女性もいるだろう。

ヘスティアー型でない女性でも、「ヘスティアー」、つまり自分自身の内面的で静かで中心に向かっている部分とともに時間を過ごすことを決心することができる。そうするためには、時間と空間を見つけなければならない。とくに他者志向型の女性の場合はそうである。なぜならその生活は活動と人間関係であふれており、「これまで一度も一瞬の平和を味わったことがない」ことを自慢にしながら、そのことに愚痴をこぼしているからである。

ふだんはそのはたらきが見られていないヘスティアーを招いて毎日の家事の一部にするということは、ヘスティアー的な態度に切り換えようという気持ちから始まる。女性はある仕事をしようと決心してしまえば、そのための時間を十分もたねばならない。たとえば、洗濯物をたたむことは多くの女性にとって同じことの繰り返しにすぎず、彼女たちはいらいらした気持ちでその仕事を急いでおこなう。ヘスティアーの流儀を採用すると、衣服をたたむ機会を、自分の心を静かにする時として歓迎するであろう。ヘスティアーが現前するためには、どんなに簡単そうに思われることであろうとも、ある仕事に、そして今度はある領域とかある部屋というぐあいに、その時どきに一つのことに精神を集中させる必要がある。彼女は、まるで日本の茶の儀式をおこなっているかのように、その仕事をすることに没頭しなければならない。一挙手一投足に落ち着きが感じられねばならない。そうして初めて、全体にゆきわたる内面の静けさが心のふだんの騒がしさにとってかわるのである。達成すべき基準はその女性自身のものでなければならない。つまり、その仕事が、彼女にとって意味のあるものとどのように一致してなされるかということである。まさにこの点で彼女は処女神であり、他人の欲求や基準の奴隷であったり、時間に追い回されている存在ではない。

瞑想をおこなうと、この内向的で内面に焦点が当てられている元型が活発となって強められる。瞑想はひとたび始められると、しばしば日常的に実践されるようになる。なぜなら、それは全体性と中心性の感覚、平和と照明の内的源泉、ヘスティアーへの接近をもたらしてくれるからである。

ある女性たちにとっては、ヘスティアーの現前が感じられるとき、詩が生まれる。詩人で著述家のメイ・サートンが言っていることだが、自分にとってこのような著作が「可能になるのは、ただ恩寵の状態にあるとき、心の奥の深い水路が開かれるときだけです。そしてその水路が開かれ、私の心が深くゆり動かされると同時にバランスを獲得するとき、そのときに詩が私の意志を越えた贈り物として生まれてくるのです。(6)」彼女が記述しているのは自己元型の経験である。これは常に、自我と努力を越えたもの、恩寵の贈り物であるように感じられる。

訪れる孤独を通してヘスティアーを発見する

ほとんど誰でもが、自分の生涯において選ぶことなく訪れる孤独の時期というものを経験している。このような時期はふつう喪失、悲しみ、孤独、および他の人々への憧れとともに始まる。たとえばフリーの著述家アーディス・ホィットマンの夫は彼女をそそくさと抱擁して、いそいで家をあとにして、心臓発作におそわれ、二度と戻らぬ身になった。七年後、彼女は、孤独の思いがけない賜物について書いている。彼女の言葉はヘスティアーと結びついているもろ

もろの感情と結びついている。

雨あがり、最初に細い日の光がさすように、かすかではあるが、少しずつ増していくあたたかさがある。それは悲しみ自身と同様、予期せぬ孤独に特有のものだ。思い出がそれをあたためてくれる……自分が誰であるかが次第にわかってくることでも孤独はあたためられる。人々にとりかこまれて生活しているときには、自分にとって自然な情熱と洞察力のある部分が、たわいないおしゃべりのザルの目を通して漏れていってしまう。もっとも勇気のいる瞬間、現在進行しつつあることが人間としての究極の仕事だ、と思われる。つまり魂を形づくっていく仕事だ。生命の力は内部から生じ、内部へと帰っていく。祈り、瞑想せよ。自分自身の内にある、この光り輝くところに手をのばすのだ(7)。

ヘスティアー型の女性

ヘスティアー型の女性は、静かで控え目な人柄であるという点でこの女神の特質を分かちもっている。彼女がいると、暖かく平和な秩序が満ちた雰囲気がかもしだされる。ふつう彼女は、孤独を楽しむ内向的な女性である。最近私はあるヘスティアー型の女性の家を訪問したが、すぐさま彼女の性格と雰囲気と炉床の女神とのあいだにある関係を感じた。家は清潔で、活気に満ち、整頓されていた。花々がテーブルをひきたて、焼きたてのパンが冷まされていた。捉えどころのない何かがその家を静かな聖域、平和な場所のように感じさせ、私はカリフォルニアのタサジャラにある禅マウンテン・センターを思い出した。そこでは俗世間が消え失せ、時間を超越したおだやかさがみなぎっているのである。

子ども時代

子ども時代のヘスティアーは、ペルセポネーと非常によく似て見える。どちらも愛想がよく、「扱いやすい」子どもである。あの「恐ろしい二歳児」のときでさえ、頑固なところや自己主張といったところは、ほとんど見せない。しかしながらこの二つのタイプの少女のあいだには、微妙な違いがある。ペルセポネーは自分が何をしたらいいかという手がかりを他者から得て熱心に相手の機嫌をうかがう。ヘスティアーは他者が自分に言う事をおこない、ただただ従順であるように見えるが、放っておかれると満足して指図なしに遊ぶ。ヘスティアー型の少女は静かで自己充足的な性質をもっている。傷ついたり動揺したりすると、母親のところへいくのと同じように、自分の部屋へいって孤独のなかに慰めを見出す。人々はときとして彼女が伝えているある種の内的現前にひきつけられる。それは、幼い子どもを包んでいる「老いた魂」の性質であり、知恵あるいは静穏さを物語っている。

ヘスティアー型の少女は自分自身に注意を引きつけようとしたり、他者からの強い反応を呼びおこそうとはほとんどしない。部屋をきちんと片づけておくとき、そのことで褒められるかもしれない。人と打ち解けずに一人でいるならば、家族に加わったり世の中に出ていくよう圧力をかけられるかもしれない。

両親

女神ヘスティアーはレアーとクロノスの第一子として生まれたが、クロノスが最初に飲み込み、最後に吐き出した子どもである。したがって彼女はきょうだいのなかでもいちばん長いあいだ父親の暗く重苦しい腹のなかに囚われていたことになるし、一人ぼっちでそこにいた唯一の子でもある。彼女の子ども時代は幸福とは言いがたかった。クロノスは専制君主的な父親で、子供たちにたいして何らあたたかい感情を抱いていなかった。レアーは無能で無力であり、最後の子どもが生まれるまでは、子どもたちにたいする父親の虐待をとめようにもなすすべを知らなかった。すべての子どもたちのなかでヘスティアーは、どんな方法であれ、独力で切り抜けていく力をもっとも備えていた。

私が実践において見てきたヘスティアー型の女性のなかには、この女神と似た幼少期を過ごしてきた者がいる。つまり、虐待をし、専制的である父親と、（たいていが抑うつ的な）無力な母親をもっていた。多くが子ども時代を通して家族のなかで心理的に一人ぼっちであった。子どもたちの欲求は無視され、個人としてのいかなる表現も父親の支配欲求に「飲み込まれて」しまうような家だからである。この種の環境では、ほとんどの子どもたちが両親と張り合う。特に男の子の場合はそうだが、より強い者がより弱い者、小さい者をいじめたり制圧する。あるいは家から抜け出したり、町を好んだりする。娘は、無力ではあっても母性的な子供はデーメーテールのパターンに従い、妹の面倒を見ようとし、あるいはヘーラーのパターンに従って、それ相応の年になるとすぐボーイフレンドとくっついてしまうであろう。

しかしながらヘスティアー型の娘は、自分には馴染めないと感じられる辛く葛藤に満ちた家族生活あるいは学校環境のさなかにおいて、慰めを求めて感情的に引きこもり、内界に退くであろう。彼女はしばしば両親からと同様、きょうだいからも疎遠で孤立しているように感じる。そして実際、彼女は彼らと違っているのである。彼女は気づかれないように努め、表面的には受動的であるが、周りの者たちとは違っているんだという内的確信をもっている。あらゆる状況においてでしゃばらないように努め、他者のなかにいても孤独を大切にする。このようにして彼女は女神自身と同じように実質的に「ペルソナのない」人になっていく。

これと対照的に、支持的な両親をもつ普通の中流階級の家族出身のヘスティアー型の娘は、それほどヘスティアー風には見えないかもしれない。保育学校の時から彼女は「恥ずかしがりやのところとか、臆病なところとかを乗り越える」ように言われてきている。実は、そのようにして他の人々はしばしば彼女の本性にレッテルを貼っているのであるが。かくして彼女は社会的に適応できるペルソナ、つまり愛想よく社会的であるようなあり方を実際に発展させる。彼女は学校でうまくやったり、バレーから女子サッカーにいたるあらゆることに参加したり、小さい子どもたちにたいして母親のように振る舞ったり、高校生にもなればデートに出かけるようにと励まされる。しかしそれはうわべだけであり、本当のところ彼女はヘスティアーに忠実に従っているのである。彼女は独立していて世俗から離脱しており、集中することから生じてくる情緒的な平穏さという性質をもっている。

思春期と大人になりたての頃

十代のヘスティアーは、社会問題や高揚した情熱、同年輩の者たちとの仲間関係には関与し

ない。この点で彼女は女神ヘスティアーと似ている。女神ヘスティアーもオリュムポスの他の神々が夢中になっている恋愛や戦争には、まったく加わらなかった。その結果、彼女は活動の周辺部にとどまる社会的孤立者であり、他者から見れば自己充足的で、好き好んで孤立している非参加者となろう。あるいは自分のパーソナリティの他の側面を発達させてきた場合には、友人をもち、学校や社会の活動に参加しているかもしれない。彼女の友人たちは議論で自分の味方になってくれないために憤慨したり、もっと競争的であってくれたらと願ったりするが、彼女の静かなあたたかさと落ち着きを好んでいる。

思春期はヘスティアーにとって宗教的な確信を深める時であるかもしれない。宗教的召命に従いたいと考えれば彼女は両親と直接対立することになろう。家がカトリックだと、娘が修道女になるという使命を感じる場合に喜ぶが、多くの家では、娘が信仰をこのように大真面目に受け取ることにがっかりする。もっと最近の話では、ヘスティアー型の女性たちは、一九七〇年代以来アメリカで栄えてきたさまざまな東洋の宗教にひきつけられるようになった。ヘスティアー型の娘たちが、アシュラムにひきつけられ外国語で歌い、新しい名前を受け入れるとき、多くの両親は警告を発し、自分たちのおとなしく扱いやすいヘスティアー型の娘の決心を変えさせるのはたやすいことだろうと考えるが、それは誤っている。それどころか、ヘスティアー型の娘たちは、処女神の確信と集中力をもっているために、両親の望みに従うよりは自分にとって重要なことをやっていくのである。

カレッジに行くヘスティアー型の女性は、大きな大学の匿名性や自分自身の場所をもつ機会をありがたく思う。しかしヘスティアーだけが作用している女性は、カレッジに行くだけの個人的理由を持つことが少ない。というのも、知的な挑戦とか、夫を見つけるとか、職業の準備をすることはヘスティアー型の女性の関心事ではないからである。これらの動機のためには他の女神たちが現れてくる必要がある。カレッジに行っているほとんどのヘスティアー型の女性は、他の元型も重要であるか、他者がそうするように期待しているからである。

仕事

競争的な仕事の地位はヘスティアー型の女性にとって、なんの利益にもならない。ヘスティアー型の女性には野心や精力が欠けており、認知されることを望んでもいなければ、権力に価値をおいてもいないし、敵に勝つための策略などには無縁である。その結果ヘスティアー型の女性は、事務所における伝統的な女性の仕事をしていることが多い。そこでは彼女は目立たずに認められているか、あるいは着実に仕事をし、頼りがいがあって、事務所内の政治やゴシップとは縁のないところにおり、秩序とあたたかさを提供してくれる「貴重な人」として評価される。ヘスティアー型の女性はコーヒーをサービスし、事務所に女性的な色あいを加えることを楽しむ。

ヘスティアー型の女性は静けさや忍耐が要求される職業に秀れているかもしれない。たとえば、写真家が好んで使いたがるモデルはヘスティアー型の女性である。というのは、彼女の目には「内を見ている」何かがあり、自分のことを気にもとめない優雅さや完全に自分のポーズに没頭していて「落ち着き払った猫」を思わせる静けさがあるからである。

多くのヘスティアー型の女性は、逆にレンズを覗く側であってもうまくやる。ヘスティアーの辛抱強さともの静かさは、絶好の瞬間、意味深長なジェスチャー、自発的なポーズを待たな

ければならない写真家に必要な性質だからである。ヘスティアーは一人の女性のなかにある他の元型と「チームを組む」ことによって彼女の仕事にヘスティアー的な性質をつけ加える。たとえば、私がいままでに聞いたなかでもっとも素晴らしい幼稚園の先生は、母性的なデーメーテールとヘスティアーが調和している人であるように思われた。彼女の同僚は、努力せずとも彼女の周りにつくりあげられていくように見える基本的秩序に驚いている。「彼女は、いまだかつてくたくたになったことは一度もありません。たぶん子どもたちは彼女から静謐さをつかむのでしょう。私にわかることといえば、どういう風にかはわかりませんが、彼女は注意を自分に向けようとして競っている部屋いっぱいの子どもたちを、いきいきとしたあたたかいグループに変えてしまうということです。彼女はけっして急いでいるようには見えません。こちらで十分に目をかけてあげたかと思うと、またあちらでは子供を抱っこし、ゲームとか本とかをすすめてみたりします。そうすると子どもたちは落ち着いてしまうのです。」

対女性関係

　ヘスティアー型の女性には、時どき一緒にいて楽しい良い友人が数人いることがよくある。たぶん、友人たちは自身ヘスティアーの性質をいくぶんもっており、ヘスティアー型の友人を、自分のヘスティアー的側面を表すことができる聖域として頼りにできるのであろう。ヘスティアー型の女性は噂話にも、知的な、あるいは政治的な討論にも関わり合わない。彼女の天性は共感に満ちたあたたかい心で耳を傾け、友人がどんな厄介なことを彼女にもちかけようと、その真ん中に居続け、彼女の炉であたたかい場所を提供するのである。

セックス

　ある女性が支配的な元型としてヘスティアーをもっているならば、彼女にとってセックスはそれほど重要なものではなくなる。興味深いことに、このことはたとえ彼女がオーガズムを経験してもなお言える。ヘスティアー型の女性とその夫はどちらも、セックスが始められるまで、性欲は眠っている。一人の夫が言ったことだが、セックスが始まると、「彼女は野性的に感じるのです。」あるヘスティアー型の女性は「彼が積極的な時には月に一回、そうでない時には二か月ごとに一回セックスをする」男性と結婚した。彼女はほんの少しの前戯だけでもオーガズムを感じることを発見した。彼女は「それがおこれば」セックスを楽しみ、それがなくとも「完全に満足していた。」このような女性には、ヘスティアーのパターンが支配的である。アプロディーテー的な性は愛の行為の最中に引きおこされて前面に出るが、そうでなければ現れてこない。

　オーガズムを感じないヘスティアー型の女性は性を、夫に提供することを楽しむ「素晴らしい、あたたかな経験」と考えている。「彼が私のなかに入ってくるのが心地よい。彼を身近に感じ、嬉しく感じるのです。」夫にとって彼女とのセックスは「家に帰るようであり」、「避難所」である。

　レズビアンの関係にあるヘスティアー型の女性も同じパターンに従う。セックスはそれほど重要ではない。彼女のパートナーも性の面で積極的であるよりは、むしろ受動的であり、お互いに相手がセックスをリードするのを待つ場合、彼女らの関係は性的表現を伴わなくとも何カ月、さらには何年も続くことがある。

結婚

ヘスティアー型の女性は「良妻」という古風な観念にぴったり合う。彼女は家のなかの世話をよくする。彼女は自分自身についても夫についても野心的ではなく、彼と競争したりすることがなければ彼に小言を言ったりすることもない。彼女は浮気をせず、乱交もしない。夫の貞節はヘーラーの場合と違い彼女にとっては重要なものではないが、彼女自身も貞節に関してはヘーラーと似ている。貞節を破ろうとするような誘惑はない。アプロディーテーによって影響されない限りであるが。

ヘスティアー型の妻は、依存的な妻で、伝統的な役割を生きることに満足しているように見えるかもしれない。しかし見かけから判断すると誤るだろう。彼女は内的な自立を保っているからである。彼女の一部はひそかに、自己充足的な処女神のままでいる。彼女は感情的に満たされるために男を必要とはしない。彼がいなければ彼女の人生は違ったものになるであろうが、人生の意味や目的は失わないであろう。

伝統的な結婚をしている女性の「仕事についての記述」は、どの女神がもっとも活性化されているかによって異なってくるように思われる。ヘーラーが強調するのは「妻」であるし、デーメーテールは「母」であり、アテーナーは効率よくなめらかに家事をさばいていくことを強調し、その結果、彼女はまさに「ハウスワイフ」と呼ばれることになる。ヘスティアーならば自分の仕事を「ハウスメーカー」と呼ぶだろう。

対男性関係

ヘスティアー型の女性は、良妻になりそうな、もの静かで控え目で、自己充足的な女性にひきつけられる男性たちを魅惑する。このような男性たちは、自分自身を家長でパンの稼ぎ手という伝統的な役割にあるものと考えている。セクシーな女性や、母親的な役割をやってくれたり、自分を鼓舞してくれるような女性を望んだり、あるいは向上的なパートナーとなる女性を望む男性たちはヘスティアー型の女性には近づかない。

ヘスティアー型の女性は、女性を聖母マリアか売春婦のどちらかだと考えている男性たちをひきつけることもよくある。これらの男性は、女性に性的な経験がなかったり、セックスに興味を示さなかったりする場合「よい」と分類し、したがって「聖女」とする。男性にひきつけられたり性的に反応したりする場合は「悪い」かまたは「だらしない」と分類されるのである。この種の男性は前者と結婚し、後者と情事をもつ。この種の男と結婚するとヘスティアー型の女性は、性的な喜びが未開発のままになるであろう。夫の方は、自分なりの欲望を感じて性的に反応する妻を望んでいないからである。

満足度の高い多くの伝統的な結婚は、ヘルメース型の夫とヘスティアー型の妻の組み合わせである。ヘルメース型の夫は、外の世界で機敏に交渉するビジネスマン・旅行者・伝達者・企業家であり、ヘスティアー型の妻は家庭の暖炉を燃やし続ける。この組み合わせは、両方にとって非常にうまくはたらく。どちらも、自分が個々にやっていることに大きな満足を見出し、この満足が間接的に相手の行動を支持する。彼は自分自身が家のことでわずらわされなくともいいことを喜ぶ。彼女は上手にそれをやり、しかも彼のためにするのではない。彼が世の中へ出かけていく合間に、あたたかで平和な家庭を常に提供するが、彼は彼女が家にいながら独立した精神をもっているという、この調和を好む。

彼女の方は、家庭がどうあればいいかを自分で決められることを喜び、自分にとって重要なことを何でもできる時間と空間を与えてくれる経済的な支持が気に入っている。ヘルメース型の夫もしじゅう動きまわり、新しい提案を考え出し、取引きし、新しい可能性をさぐり、自分自身の慧眼や本能を信頼する性質をもっている。そして一般的に世の中でいちばん信頼しているのは自分自身なのである。彼はイメージか策略を考え出すのを助けてくれるヘーラー型の妻やアテーナー型の妻を必要としないし、欲しがりもしない。というわけで彼は妻が仕事で旅行に行くのについてきたり、カクテルパーティーに我慢して付き合うことを期待しないことが多い。こういったことは、彼のヘスティアー型の妻にとっては非常に好都合である。

彼女は家で楽しむことを好み、家の雰囲気をつくり出し、お客のために家をととのえ、食べ物をつくり、自分は縁の下の力もちになる。他方彼女より外向的な夫の方は、会話をうまくリードして、お客に直接関わっていくであろう。彼女が何時間も準備に費やすのは当然のことと考えられ、一晩の楽しみのために彼女がどれだけの貢献をしたかは、評価されないままになるかもしれない。女神ヘスティアーと同じように、彼女が中心であるにもかかわらず無名のままでとどまるというのは、ヘスティアー型の女性の運命のように思われる。

子ども

ヘスティアー型の女性は、素晴らしい母親になることができる。彼女の心のなかでデーメーテールも同様にはたらいている場合は、なおさらそうである。内界に向いている場合、少し近づきにくくなるように思われることもありうるし、彼女の愛はあまりにも非個人的で外に現れない影のようなものになるかもしれない。しかし、ふつう、彼女は子どもたちに愛情深く、受容的な態度で注意を払う。子どもたちに過大な期待をよせることはないので、子どもたちは、あるがままの自分であることが許される。彼女は当然のこととして子どもたちを上手に世話し、あたたかく安心できる家庭環境を提供する。ヘスティアーの子どもたちは逃げ出したり、反抗したりする必要がない。大人になってセラピーを受けるとしても、徹底的に取り組むべき大きな母親の問題というのはない。

しかしながら子どもたちが社会的なニュアンスや競争場面に直面するのを助けるとなると、彼女はあまり役には立たない。野心を助長したりキャリアをのばすといったことについても同様である。

中年期

ヘスティアー型女性の人生航路は中年期までに定まるようである。結婚していれば彼女はハウスメーカーとして、その役割に満足している。結婚しなければしないで、独身という立場をいっこうに．気にしないし、男をつかまえようとして外出することもないので、「老嬢」とか「オールドミス」の雰囲気を身につける。事務所で働いたり、修道院やアシュラムで生活している場合には、そこでの「定住者」として静かに自分の役割を果たしている。

ヘスティアー型の女性が正式に修道院やアシュラムに入り、名前を変え、ある特定の霊的な道に自分の人生を捧げるのは、中年期であろう。彼女にとってはそれは自然な移行であり、すでに実践していた献身への関わりが深まることである。彼女の親類にとっては、その決心はまったく予期せぬものであるかもしれない。というのは無口なヘスティアーは、自分の人生の

このような側面がいかに重要かを彼らに言いふらしたりするようなことは、これまで一度もなかったからである。

晩年

ヘスティアー型の女性には何か「年老いて賢い」と感じさせるものが常にあり、彼女は恵み深く年をとっていく力をもっている。彼女は一人で生きることに適しており、生涯そうしてきたかもしれない。典型的な老嬢としての伯母という役割で、他の家族のメンバーから必要なときには助けを求められるであろう。

伝統的な役割をとる女性が直面する二つの主な情緒的危機は、巣が空になることと未亡人になることである。ほとんどのヘスティアー型の女と性は妻であり母であるけれども、そのどちらの役割にたいしても深い欲求をもっているわけではない。その結果、これらの役割を失ったとしても、ヘスティアー型の女性はデーメーテールやヘーラー型の女性たちのように、抑うつ状態に陥ることはない。だが外界との直面はヘスティアー型の女性にとって、むずかしいことである。離婚したり未亡人になることで、「ハウスメーカーとして免職」されてしまい、しかも経済的なあてがない場合は、彼女らは生来の性質からいっても経験からいっても、世の中に出て成功するための準備があまりなされていない。そうなると彼女らは品のいい貧乏人という身分になるであろう。

ヘスティアー型の女性は年をとると、社会保障によってなんとか生計を立てていかねばならないかもしれないが、精神的にも貧困になるということはまったくない。しばしば彼女は、晩年を一人で生き、自分の人生を悔やむこともなければ死を恐れることもない。

心理的困難

内的な知恵の元型であるヘスティアーは、否定的な側面をもっていない。したがってヘスティアーが通常の潜在的な病理学的パターンを現さないということも驚くにあたらない。彼女は他の神々や人間たちに関わり合わなかった。この解脱のパターンのために女性は淋しく孤立することになるかもしれない。しかしながらヘスティアー型の女性にとっての主な困難は、ヘスティアーに欠けていることと関係している。オリュムポス山の神々や女神たちすべてのなかでも、彼女は人間の形で表されることがなかった。つまりイメージやペルソナを欠いていたのである。そしてロマンティックな情事とか葛藤などとは関わらなかった。これらの領域を歩んでゆく実践や技量を欠いていたのである。

ヘスティアーとの同一化

「ヘスティアーとして」生きるということは、家の中心的な位置にいながら、自分を消して無名で実体のない者である、ということを意味する。多くの女性は、この役割がいろいろな点で不利であることを知っている。彼女たちの仕事は当然のことと考えられながら、彼女たちの気持ちは考慮に入れられないのである。ヘスティアー型の女性は特徴として自己主張をせず、

自分が軽んじられたり、おとしめられたと感じても、それを口に出したりはしない。家事は静かな喜びと内的秩序の源なのだが、すぐに誰か他の人がその秩序を乱して散らかしたりするならば、その意味が失われる。炉を守るヘスティアーは、努力が無意味で自分にとって無駄だったと感じられるとき、精根つきはててしまう。

情緒的に距離を置くヘスティアーに同一化すると、女性の直接的な感情表現は押し殺されてしまう。ヘスティアー型の女性は他者にたいする愛や関心を、思慮深い行為を通して間接的に表現する。「静かな水は深く流れる」という諺は、表面下にあるヘスティアーの内向的な感情を言い表している。ヘスティアー型の女性は自己表現しないので、彼女にとって非常に重要である人々も、自分が彼女にとってそれほど重要であるとは気づかないかもしれない。たしかにヘスティアーは孤独を大切にしている。しかし彼女が深く心をくだいている人々が彼女の気持ちに気づかず、彼女を放っておくならば、孤独は孤立になってしまうかもしれない。同じように、悲劇的なのは、ヘスティアー型の女性から愛されたいと望んでいる誰かが、実際彼女から愛されていたのに、それを確信をもって知ることができないときである。彼女のあたたかさは、それが言葉や抱擁という形で表現されない限り、非個人的で距離を置いたものであるように見える。彼女の愛する人々に特別に向けられているのではないのかもしれない。ヘスティアーを越えて成長するためには、自分にとって特別な意味を持つ人々にわかるように自分の感情を表現することを学ばなければならない。

おとしめられるヘスティアーの価値

修道院あるいは結婚制度（どちらも一生を賭けるものとして存在する場合）のなかには、ヘスティアーの魂がすくすくと育つ安全な場所があった。しかし安全で安定した一生の場がなければ、ヘスティアー型の女性は決定的に不利な立場に置かれることになるかもしれない。彼女は自分自身が甲羅のないカメであるかのように感じているのに、出世争いで勝つことを期待される。生来ヘスティアーはいろいろなことに参加することを好まないし、立身出世のために努力することもしない。政治上の大義に煽動されず、野心を欠いている。彼女は世の中に出て名を成そうとせず、そういうことを気にもかけない。というわけで名をあげている人や、うまくやっている人、社会の裁決者たちは彼女を簡単に無視し、低い評価をしがちである。彼らは、人を目に見える基準ではかり、彼女にはそれが欠けていると判断するからである。

評価の低さはヘスティアー型の女性の自尊心に否定的な効果をもたらす。他の人々の判断基準をとり、それを自分にも当てはめようとするならば、自分自身が世間からはずれ、不適応で、無能と感じるかもしれない。

成長の道

ヘスティアー型の女性の困難が生じるのは、家庭や寺院という聖域から、世の中に踏み出すときである。自分より速く、かつ競争心の旺盛な他の人のペースに直面した内向型の彼女は自分のパーソナリティの他の側面を発展させるまでは、見当違いの感じを与えるであろう。

社会的に適合しやすいペルソナを形成する

（ラテン語では「仮面」を意味する）ペルソナという言葉は、かつては俳優が演じる役割が直接それとわかるように舞台の上でつけた仮面のことをさしていた。ユング心理学においてペルソナとは、個人が世間にたいして示す社会適応の仮面のことである。私たちが自分自身を他者に示すやり方であり、他者からどんなふうに見られるかである。うまく機能するペルソナをもった人は豊富なワードローブを持つ女性のようなもので、そこから場や、自分の性格、地位、年齢にふさわしい着物を選ぶことができるのである。どのように振る舞い、何を話し、他者といかに交渉し、自分自身をどんなふうに示すかといったことはすべて、私たちのペルソナの仕事なのである。

ヘスティアー型の女性はその性質からいって、誰が、どうやればよい印象を与えられるかといったペルソナ・レベルの事柄には関心を示さない。しかしながら彼女が修道院に引きこもり、二度と世間に出ようとしないのでなければ、他者と接触して、少し話をして、面接され評価されることは避けられないだろう。競争の文化においては誰でもがそうなのであるが、彼女には、これらの技能は生まれつきあるのではなく、学ばなくてはならない。しばしばそれは非常に苦痛に満ちたプロセスである。大きな集まりに行かなければならないとき、彼女は自分が不適格で、臆病で恥ずかしく、愚かしいと感じる。適切なペルソナをもっていないと感じているのである。まるで「何も着ていない」かのように。この苦痛は、自分が裸か、部分的にしか服を着ていないという悪夢に反映される。比喩的なその夢と対応するかのように、彼女は時どき、あまりにも自分をさらけ出す。多くを露わにしたり、正直すぎて、他の人々であれば同じ状況で隠したままでいるはずのことでも見せてしまうのである。

会見や評価のために人前に姿を出さなければならないヘスティアー型の女性は、意識してペルソナをつくり、ふだんなら概略だけでしか述べない自分の考えをできるだけしっかり言葉にしなければならない（それは「書類上の」ペルソナと考えることができるだろう）。どの特定の場でも、自分が「誰」であると考えられるかについてできる限り明確なイメージをもつことが必要である。たくさんのペルソナを試すだけの覚悟をしておかなければならない。ひとたびそれを十分に「身につけて」しまえば、自分自身ごく自然に感じられるスタイルを発見するであろう。

アルテミス、アテーナー、アニムスの助けを借りて自己主張能力を獲得する

ペルソナに加え、ヘスティアー型の女性は自己主張能力を獲得する必要がある。他者とやりあったり世の中でうまくやっていこうとするならば、自分のパーソナリティに積極的な側面をつけ加えねばならないのである。女神ヘスティアーは権力を求めて競争したり、黄金のリンゴをめぐって競争したりはしなかった。関係の外にとどまり、オリュムポス山を避け、トロイア戦争の背景に立たず、いかなる人間たちを後押したり、救ったり、罰したり、助けにきたりもしなかった。しかし女神と違ってヘスティアー型の女性は人々のなかにいる一個人であり、家や寺院の壁の外に出て行かなければならない。だが、心の他の部分が彼女を助けて積極的に自分を表現し、主張できる人間にするのでなければ、その経験のための十分な準備ができているとは言えない。積極的な女性の元型であるアルテミスやアテーナーは、女性のアニムス、すなわちパーソナリティの男性的な側面と同様に、これらの能力を経験させてくれる。

ヘスティアー型の女性は競争的な活動や、サマーキャンプ、女性グループ、戸外でのスポーツに参加したり、学校でうまくやっていたならば、アルテミスとアテーナーの性質が発達していたかもしれない。ヘスティアーが元型としてはたらいている女の子は、人生の早いうちから自分が人々のなかにいることにも適応しなければならず、外向的であれという期待にも沿わなければいけないということに気づく。そのうちに彼女は他の元型を呼びおこし分化させていくだろう。結果として、アルテミスやアテーナーの性質を自分のパーソナリティのなかに組み込んでいくことができる。

ヘスティアー型の女性は、自分の存在の核（つまり女らしく家庭的で、もの静かで内気なヘスティアーであるということ）が、外界での経験に影響を受けないままでいると感じるかもしれない。あるいは競争社会へ適応していくうちに、男性的な態度すなわちアニムスを発展させているのだと感じるかもしれない。十分に発展したアニムスは、はっきりと物を言ったり主張したりする必要があるときに、彼女に代わって話してくれるよう呼び出すことができる内なる男性のようなものである。しかしながら彼がどんなに有能であろうと、彼女にとって「異質」（あるいは「私でないもの」）と感じられるであろう。

ヘスティアー型の女性と彼女のアニムスとの関係は心のなかでのヘスティアーとヘルメースの関係に似ており、ギリシア人の家庭における彼らの重要性と配置に対応している。ヘスティアーは家の中心にある炉によって表され、一方ヘルメースを表している「ヘルム」つまり柱石はドアの外に立っていた。ヘルメースは旅人に同伴する神であるとともに、敷居を守る神でもあった。ヘスティアーとヘルメースの両方が、ある女性の内的側面であるならば、ヘスティアーが内的な私的あり方であり、ヘルメースは、うまく世渡りをしていく外的なあり方であろう。

自分のなかのアニムスであるヘルメースが、世間との仲裁に入ってくれていると感じている女性は、自分自身のなかの男性的な側面があり、それを使って世の中へと冒険に出て行き自己主張したり、はっきりものを言ったりすることができるという感じをもっている。アニムスは見張りの役も果たしていて、断固として彼女のプライバシーを守り、望まぬ侵入を避けてくれる。ヘルメース型のアニムスがいるならば、彼女は非常に有能で抜け目なく、競争場面でもうまくやることができる。しかしながら、そのアニムスによって女性が自己主張できるとしても、いつでも、それ（「彼」）がいて、助けてくれるというわけではない。たとえば友人だと期待しながら電話に出たのに、意に反して土足で踏み込んでくるような質問をする攻撃的なセールスマンであったり、彼女の時間を捧げさせようとするしつこい慈善家であったようなときである。このような場合、彼女のアニムスも不意をつかれて、途方に暮れながらつきあうはめになってしまう。

エミー賞を得た劇作家、詩人であり、『女性と自然』の著者であるスーザン・グリフィンは、ヘルメースとヘスティアーの同盟が彼女のなかの二つの非常に異なった側面を説明していると考えている。家にいると彼女はソフトな存在で、台所の周りでぶらぶらするヘスティアー型の女性であり、自分の家を避難所にする。この非常にマイ・ホーム主義者のスーザン・グリフィンは、はっきりとものを言い、頭の回転が速く、政治に通じたかつての『ランパーツ』（訳注―ルポものと革新的姿勢で知られる雑誌）の編集者とは対照をなしている。彼女の役者の側面は、人前に出ると、激しやすいと同時に利口な「メルクリウス（ヘルメース）」となる

のである。

中心を手放さず、ヘスティアーに忠実でいる

アポローンとポセイドーンはどちらもヘスティアーの処女性、つまり彼女の自己充足的完全性を奪おうとした。しかしながら彼女は彼らの欲望に屈するよりもむしろ永遠の純潔を誓った。アポローンとポセイドーンを拒絶することでヘスティアーが抵抗しているものは、比喩として重要であり、女性を自分の中心から追いやってしまう可能性のある観念や感情の力に対応するものである。

ヘスティアーは自己（セルフ）を象徴している。それは直観的に知られる女性のパーソナリティの精神的中心であり、彼女の人生に意味を与えるものである。このヘスティアー的な中心性は「アポローンに屈伏する」ならば価値がなくなってしまうだろう。アポローンは太陽の神であり、アポローン的なものとは、ロゴス、知的生活、論理や推論の優位に等しいものとなった。アポローンが女性を説得してヘスティアー的な処女性を放棄させるとすれば、彼女が直観的に感じられる内的経験を、精密な科学的な調査にゆだねることになろう。彼女は感じてはいるけれども言葉で表現できないことが、かくして価値を失ってしまう。彼女は内なる賢女として知っていることも、現実的な証拠によって支持されないことには、値引きされてしまうのである。「男性的な」科学的懐疑主義が精神的経験に浸透し、「証拠」を要求するようになれば、そのような侵入は必ずや完全さや意味という女性的な感覚を冒瀆することになる。

ヘスティアー型の女性が「ポセイドーンによって連れ去られる」とすれば、彼女は海の神によって圧倒されているのである。ポセイドーンは無意識から湧き上がる大洋的な感情や内容が氾濫してしまうという危険を表している。このような洪水が彼女を脅している場合、巨大な波が自分を圧倒する夢を見るかもしれない。覚醒時、感情的な状況に心を奪われているならば、心が中心に向かっていると感じられないであろう。混乱から抑うつ状態になるとすれば、ポセイドーン的な水の影響によって一時的に「ヘスティアーの炉の中心にある火が消される」ということがありうる。

アポローンとポセイドーンのどちらかによって脅されるとき、ヘスティアー型の女性は孤独のなかに自己充足性を追求する必要がある。平穏な静けさのなかで彼女は再びまた、直観の力によって自身の道を見出して中心へと戻ることができるであろう。

7

傷つきやすい女神としての
ヘーラー、
デーテーメール、
ペルセポネー

傷つきやすい三人の女神とは、結婚の女神であるヘーラー、穀物の女神デーメーテール、コレー（乙女）で、冥界の女王でもあるペルセポネーである。これら三人の女神たちは、妻、母、娘という伝統的な女性の役割を表す元型を人格化したものである。彼女らは関係志向の女神であり、そのアイデンティティと幸福は重要な人間関係をもつことにかかっている。彼女らは女性のなかにある、親しくなりたいという欲求を表現している。

神話では、これら三人の女神は男性神によってレイプされ、誘拐され、支配され、辱められる。どの女神も愛着の情が壊されたり傷つけられたりして苦しむ。どの女神も無力感を経験する。そしてどの女神も特有の反応をする。ヘーラーは激怒と嫉妬、デーメーテールとペルセポネーは抑うつで反応するのである。どの女神も心理的な病気に似た症状を示している。元型としてこれらの女神が存在している女性も同様に傷つきやすい。ヘーラー、デーメーテール、ペルセポネーを知ることによって、女性は関係を求める自分の欲求の本質や喪失にたいする自分の反応パターンに関する洞察を得ることができる。

ヘーラー、デーメーテール、ペルセポネーが優勢な元型である場合、動機となる力は、達成や自律や新しい経験よりはむしろ関係である。注意の焦点は他者にあり、外的な目標や内的な状態にはない。結果として、これらの女神に同一化している女性は他人に注意を払い、受容的である。彼女らの動機になっているのは是認、愛、注目といった関係の報酬、および連れ添うという元型（ヘーラー）、慈しむという元型（デーメーテール）、依存するという元型（コレーとしてのペルセポネー）の欲求である。これらの女性たちにとって、伝統的な女性の役割をまっとうすることは、個人的に意味深いこととなる。

拡散的に放射する光のような意識の質

これら三人の女神のカテゴリーは特徴的な意識の質をもっている。傷つきやすい女神の元型と結びついているその性質とは、「拡散的な気づき」である。ユング派の分析家であるイレーネ・クラレモン・デ・カスティリェホは（『女性を知ること』という彼女の本のなかで）この気づきのことを、「受容的な態度、あらゆる生命の統一性についての気づき、関係に入る準備ができていること」と述べている(1)。意識のこの性質はどちらの性においても人間関係を中心とする人々の典型である。

この種の意識は、リビングルームの明かりから発する光にたとえることができると思う。その光は、光の届くあらゆるものを照らし出し、あたたかい輝きを投げかけるからである。それは何事に対しても、微妙なニュアンスを感じとらせてくれる注意深さであり、ある状況の感情的な調子にたいする感受性であり、それによって人は、前景にあって注意の中心となっているあらゆるものにたいしてだけでなく、背景の音にも気づくことができる。拡散的な気づきは、きめ細かな観察眼を理解させてくれる。それによって親は騒がしく会話しているなかでも、子どもがしくしく泣いているのに耳を傾けたり、妻は夫がドアを開けて入ってくるだけで（ときには彼自身も気づいていないうちに）、取り乱しているとか、気分が悪いとか、プレッシャーを感じているとかいったことがわかるのである。この感受性に富む拡散的な種類の意識は、状

況をまるごと、あるいは「ゲシュタルト」として捉える。（これとは対照的に三人の処女神であるアルテミス、アテーナー、ヘスティアーの特徴である「焦点づけられた意識」は、他のものをすべて除外して一つの要素に注意を集中する。）

二人の子どもたちのオムツがやっと取れたとき、私は、世間の母親たちの行動がいかに子どもたちの影響を受けて子どもたちを拡散的な気づきのうちに包んでおかねばならないかということを思い知らされた。子どもたちの面倒を見ていた頃にはほとんどいつも、私は彼らに調子を合わせており、心が集中しない、受動的な精神状態であった。私はふだんのあり方を変えて子どもたち以外のことに熱心に注意を集中させると、彼らはきまって、私の邪魔をしにやってくることに気がついた。

たとえば、子どもたちが一緒に静かに隣の部屋で遊んでおり、私が流しの掃除をしたり、服を分類したり、あるいは軽い読み物をしているならば、私はどんなことでもしばらくのあいだは「無心に」しつづけることができた。だが、子供たちが静かに遊んでいる時間を利用して雑誌を読んだり、注意の集中を必要とする何かを研究しようと心に決めると、一、二分もたたないうちに、きまって可愛い足音がやってきて邪魔するように思われたのである。彼らに気配りをし、細かい所までいき届く私の精神状態が、別のものに注意を集中して、そのことで「彼らを締め出す」ようになったとたん、子どもたちはまるで超能力をはたらかせるかのようであった。たえず妨害されながら、そのまっただなかで精神を集中させようとすると、欲求不満が生じてくる。掛け値なしの効果と言えば、集中した意識をくじくことであった。このようにして、私の心理行動は変わっていったのである。

状況がのみこめてきたとき、私は読者も試したかもしれないような実験を試みた。学童以前の子どもが、あなたがいなくても満足して何かをしているというそんな静かな時がくるのを待つとする。集中力のいらないことだったら精を出すことができるということがわかるであろう。それから時計を確かめてから、拡散的注意を何か違った種類のことへ集中した意識に切り替えてみるがよい。子どもが邪魔しにくる前にあなたはこの仕事にどれくらいの時間、集中できるであろうか。子どもたちは自分の人生にとって重要な女性が彼女自身の関心事に注意を集中して自分が締め出されたと感じるとき、このように反応する。しかしそれは彼らだけではない。私の女性患者たちもまた、他の人々とのあいだの数えきれない出来事について述べてきた。たとえば、人間関係中心の女性が何かのコースに入会したり、卒業生として大学に戻ったりした場合、彼女とその周りにいる人々（夫、恋人、年長の子供たち）とのあいだの軌轢の源として避けられないことの一つは、彼女が勉強しようとすると彼らが侵入してきて、中断させようとするということである。彼女自身しばしば自分の研究に集中することに困難をおぼえる。感受性が高く、拡散した精神状態であるために、他者に気を配ることもできるが、同時に気が散らされることにもなるからである。

また女性が仕事に集中するとき、生活を共にする男性は、無意識的にあたかもそれが自分から彼女を奪い去ってしまうライバルであるかのように、彼女の仕事にたいして反応するかもしれない。彼の反応は、それまで家庭環境の一部であったはずの彼女の注意を失ってしまうということにたいするものである。彼はその女性のなかのヘーラーあるいはデーメーテールが一時的にいなくなってしまったことに反応しているのかもしれない。彼女自身、彼にたいしていつもと同じ反応をしないのである。

それはちょうど目に見えないあたたかい光が消えたために彼が漠然と不安で不確かな気持ちになり、どこかおかしいと感じているかのようである。彼が「何らもっともらしい理由もなく」侵入してしまう場合には、事態はもっと悪くなる。精神集中を妨害されたことにたいする通常の反応は苛立ちであるから。彼女はうんざりしたり怒ったりして反応し、このようにして自分は拒否されているのだという彼の感情が立証されてしまう。私のこれまで知ってきたカップル（男性は女性の学問やキャリアへの意欲を心から支持し、また彼女から本当に愛され、彼女にとって重要な存在であるのだが）はいずれも、この軋轢をつくり出すパターンを認識することでよくなった。拡散的意識から集中した意識へと彼女が変化するのを彼が個人的レベルで受けとめなくなるとただちに、彼が予告もなく彼女の邪魔をし、その結果彼女が怒って憤慨するというパターンは変化し、緊張が解消した。

傷つきやすさ、犠牲になること、拡散的意識

傷つきやすい女神たちは、犠牲になった。ヘーラーは夫であるゼウスによって辱められ侮辱を受けた。ゼウスは貞節にたいする彼女の欲求を無視したのである。デーメーテールと娘との絆は無視され、ペルセポネーが誘拐されて冥界に囚われの身になったときの彼女の苦しみも無視された。デーメーテールもペルセポネーもレイプされた。抑圧され、苦しみに満ちた無力な状況にいる人間の女性と同じように、これら三人の傷つきやすい女神たちも精神医学的な症状を示している。

これらの女神と内的に似ており、意識の様式として拡散的意識をもつ女性たちもまた、生贄になりがちである。これとは対照的に、集中した意識を要求される女神たち、すなわち、境界線をはっきりと引き、ゴールを狙う能力と結びつく女神（アルテミス）や、問題を考えぬき、戦略を編み出す能力と結びつく女神（アテーナー）たちは処女神であり、傷つくことのない女神である。彼女らに似ている女性は、そうでない女性と比べて犠牲になることが少ない。

生贄になることを避けるためには、女性は精神を集中して見つめ、自信をもつ必要がある。どこかへ着こうとして急いでいるのだというふうに、きびきびと歩かなければならない。目的がなく心ここにあらずという様子がトラブルを招くのである。感受性に富み、親しみやすい女性は人間関係をつくり、家庭をあたたかくする役には立つが、この同じ性質を世間へ持ち出すことで、招かざる侵入を受けることがある。どんな女性でも、一人で立っていたり、レストランやロビーで、一人で待っていたり座っていたりするならば、男性が接近してくるものと思っていい。そういう男性にとっては、誰と結びついているのかはっきりしていない女性は声をかけたり注意を向けたりする恰好の餌食なのである。受容的で接近しやすく、親しみやすくしていると、手軽なセックスの対象だと考えられてしまうかもしれない。そのために望みもしなかった性的な誘いを受け入れ、セクシャル・ハラスメントや、それを断った場合の怒りの生贄になる。彼女を生贄にしやすい傾向は次の二つの要因がある。一つの要因は、女性が受容的であったり親しみやすかったりすると、男性はそれを性的な招きだと誤解するということ、つまり一人ぼっちでいる女性はみな接近可能で基本的に手をつけやすいという一般的な先入見であ

る。もう一つの要因は、女性は所有物であるという基本的な社会通念である。この社会通念があるために男性は、護衛つきの女性についていろいろとはやしたてたり話しかけたり、あるいは「調査する」ことさえはばかる。男性は女性が一人でいるか護衛つきかで、自由に違う行動ができるのである。

デーメーテールやペルセポネーのような女性たち、つまり傷つきやすいか無防備だと感じる女性はしばしば不安夢を見る。それは男たちが寝室や家に押しいってくる夢であったり、攻撃的な男たちが待ち伏せしていたり、自分を脅したり、後をついてくる夢であるかもしれない。彼女たちの夢に出てくる敵意に満ちた男性は、ときには自分のよく知っている人であることもある。彼女たちは彼らから批判されることを恐れており、彼らは不必要な肉体的脅しをかけたり、怒りを爆発させたりして彼女たちを怖がらせる。子ども時代に女性が無防備であると感じていたり、あるいは実際虐待されていたりすると、夢のなかで彼女を襲うのはしばしば子ども時代に由来する人物であり、子ども時代に馴染みの場所で攻撃がおこなわれたりする。

関係を第一にする傷つきやすい女神のタイプの女性たちのすべてが、生贄の夢を見るわけではない。これらの女神たちに似た女性は、女神自身の諸段階と同じように、安全で脅かされていないと感じられるような人生の期間を過ごすことができる。その場合の夢の生活は、同じく心地よいものであろう。しかしながら、幸せな生活をしているはずなのに生贄の夢を見る女性たちもいる。まるで自分の傷つきやすさを思いおこさせるかのようである。いずれにせよ、傷つきやすい女性の夢は人々であふれ、建物のなかであることが多い。そして象徴的な言葉で現在の人間関係を記述すると同時に、過去の感情的な人間関係の記憶も呼びおこすのである。

存在と行動のパターン

三人の傷つきやすい女神たちのいずれも、神話のなかでは次のような時期を過ごす。幸せで充実した時期、生贄となって苦しみ、症状を出す時期、回復あるいは変容の時期である。この三つのいずれも、女性がすばやく過ぎ去ったり、しばらくそこに留まったりする人生の一時期を表している。

自分がヘーラー、デーメーテール、ベルセポネーに似ていると発見した女性は、自分とこの元型的な女神との類似点を理解することで、自分自身について、つまり自分の強さや感じやすさ、否定的な潜在力についてもっと知ることができる。これからおこる自分自身の問題を予測できるようになれば、苦痛のいくばくかは経験せずにすむであろう。たとえば、ヘーラー型の女性であれば、考えもなく時期早尚な結婚を焦らないことで、多くの悲しみを避けられる。結婚する前に男性の性格や愛する能力を判断する仕方を学ぶ必要があるのである。というのも彼女の運命は夫によって決定されるからである。同じようにデーメーテール型の女性も、どんな環境のもとで自分が妊娠するかについてはっきりとした理解を持ち、それまで用心しておかなければならない。というのも、抗いがたい母性的な本能として感じられる彼女のなかの女神は、そこからどんな結果が生じるかについては無頓着だからである。ペルセポネー型の若い女性は、家から離れて大学に行ったり、働いたりするのがよかろう。そうすれば母の従順な娘で

あることを越えて成長するチャンスができる。

傷つきやすい女神を乗り越えての成長

傷つきやすい女神たちは達成につながる性質を人格化してはいないものの、これらの元型が住んでいる女性は、それを乗り越えて成長することもできる。自分のアテーナー的あるいはアルテミス的な性質を発見するかもしれないし、自分の「男性的な」部分のように感じられるものを発展させることによって、自分の才能や世間での競争を経験するかもしれない。また、炉の女神ヘスティアーや愛の女神アプロディーテーと結びつく精神的な次元や官能的な次元を探索するかもしれない。

次の三つの章では、ヘーラー、デーメーテール、ペルセポネーの神話と彼女らの性格を掘りおこしてみよう。各章は、一人の女神が人格化している元型的なパターンについて述べ、女神が心を支配している女性の生活にどのような影響を及ぼすか、また、そのような女性に配偶者、両親、友人、恋人、子どもとして関わる人々はどんな影響を受けるのかということを示している。

これまで一度でも早く結婚したいとか、子どもをもちたいと感じたり、自分の人生を変える何かがおこらないかと心待ちにしていると感じたことのある女性なら誰でも（どうやらあらゆる女性がそうであるように思われるが）、自分が人生のある時点では傷つきやすい女神たちのうちの一人と似ていることに気づくだろう。

8

結婚、コミットメント、妻の女神ヘーラー

女神ヘーラー

威厳があり堂々として美しいヘーラーは、ローマ人にはユーノーとして知られており、結婚の女神であった。彼女は天と地を治めるオリュムポスの最高神ゼウス（ユーピテル）の配偶者であった。彼女の名前は、ギリシア語のヘーロー（hero）の女性形であり、「偉大なる淑女」を意味していると考えられる。ギリシアの詩人たちは彼女の大きく美しい目を賛美して彼女のことを「牛の目をした」女神と呼んだ。彼女の象徴は牛、銀河、ユリであり、孔雀の虹色をしたしっぽの「目」はヘーラーの注意深さを象徴していた。神聖な牛は昔から滋養の供給者としての大母神と結びついてきたイメージであり、他方「母乳」をあらわすギリシア語のガラ（gala）に由来するギャラクシー（galaxy）にあたる銀河（訳注　英語では the Milky Way すなわち乳の道）は、天の女王である偉大なる女神の乳房から流れたのだとするオリュムポスの神々よりも古い信仰を反映している。これはその後、彼女の乳房から乳がほとばしり出て銀河ができたとするヘーラーの神話の一部となった。地面に落ちた雫はユリとなったのだが、ユリは、女性性器の自己受胎能力にたいする古代ギリシア以前のもう一つの信仰を象徴している。これらヘーラーのシンボル（そしてゼウスとの葛藤）は、彼女がかつてゼウスに先立って崇拝されていた偉大なる女神として有していた力を反映している。ギリシア神話ではヘーラーは二つの対照的な側面をもっていた。厳粛に敬われ、結婚の強力な女神として儀式で崇拝され、かつ、ホーメロースによって復讐心に満ち、喧嘩好きで嫉妬深いガミガミ女におとしめられたのである。

系譜と神話

ヘーラーはレアーとクロノスの子どもである。彼女は四人のきょうだいと同じく、生まれるとすぐ父親に飲み込まれてしまった。クロノスに捕らえられていた状態から抜け出たときには、彼女はすでに少女であった。彼女は二人の自然神の保護のもとに置かれたが、彼らは身分の高い年配の里親といったところである。

ヘーラーは愛らしい女神へと成長した。彼女はゼウスの目をひきつけたが、ゼウスはそれまでにクロノスとティーターンたちを征服し、神々の長となっていた。（彼が彼女の弟であったことはまったく問題にならない。関係ということになると、オリュムポスの神々は自分流の掟をもっていたり、またそれを無視することもした。）この処女に近づくためにゼウスは、震えおののくあわれな小鳥に変身し、ヘーラーのあわれみをかった。寒さに震えるその生きものをあたためようとヘーラーは自分の胸に入れた。そのときゼウスは変装をやめ、雄々しい姿を取りもどし、力づくで彼女を自分のものにした。彼の試みは成功しなかった。彼が彼女と結婚することを約束して初めて、彼女は彼のなまめかしい試みに抵抗することをやめたのである。その後につづくハネムーンは三〇〇年もつづいたと言われている。

蜜月が終わると、すべては本当に終わってしまった。ゼウスは結婚前の相手かまわずのやり方に戻った（彼はヘーラーと結婚する前に六人の相手をもち、たくさんの子孫をつくっていた）。何度もゼウスは裏切り、裏切られた妻に復讐心に満ちた嫉妬を呼びおこした。だが、

ヘーラーの怒りが向けられる相手は不貞な夫ではなく、むしろ「他の女性」（たいていはゼウスにさらわれ、犯され、欺かれた女性である）や、ゼウスによって孕まされたた子どもたち、罪のない傍観者たちであった。

ヘーラーの怒りについては多くの物語がある。ゼウスがアイギーナを犯そうと島へさらって行ったとき、ヘーラーは巨大な龍を放ち、それが民衆のほとんどを殺してしまったのである。ディオニューソスが生まれたことに激怒したときも、彼女は彼の育ての親たちを狂わせ、彼を殺そうとしたが、失敗に終わった。

ゼウスとヘーラーの十字砲火を浴びたもう一人の不幸者はカリストーである。ゼウスは狩の女神アルテミスの姿をとって彼女をだまし、それから彼女を誘惑した。ヘーラーは、この情事にたいする反応としてカリストーを雌熊に変え、カリストーの息子がそうとは知らずに彼女を殺すようにし向けた。しかしゼウスは母と息子を大熊座と子熊座の星座として空に置いた。

ヘーラーはゼウスの多くの情事によって侮辱された。彼は彼女にとって神聖であった結婚を裏切り、他の女性たちに生ませた子どもたちを可愛がることでますます彼女を悲しませた。彼みずからが、娘である知恵の女神アテーナーを産んだことは、彼女の傷心にさらに侮辱を加えた。子どもを産むために妻をまったく必要としなかったことを示したからである。

ヘーラーには七人の子どもがいた。アテーナーにたいする仕返しとして、ヘーラーはある息子のただ一人の親になることを決めた。彼女が身籠もったのは鍛冶の神ヘーバイストスであった。五体満足なアテーナーと違って海老足という欠陥のある子どもとして生まれてきたためヘーラーは彼を拒み、オリュムポスの山から投げ落とした。

ヘーラーはまた、いくつかの言い伝えでは、非人間的で破壊的で「恐ろしく有害な」怪物テューポーンのただ一人の親でもあった。そして、戦争の神アレースがヘーラーとゼウスの息子であった（ゼウスは、戦争で首をはねられたということでアレースを軽蔑した）。ヘーラーには二人の目立たない娘もいた。お酌をしてまわるヘーベーと、出産の女神エイレイテュイアであった。エイレイテュイアはこの役割をアルテミスと共有している（陣痛に苦しむ女たちはアルテミス・エイレイテュイアとしての彼女に救いを求めた）。

ヘーラーはふつう、どんな侮辱に対しても行動をおこすことで反応した。だが、怒りと復讐ばかりしていたわけではない。ときには引き下がることもした。神話はヘーラーが地と海の果てまでさまよい、そのあいだこのうえもなく深い黒色の衣に身を包んで、ゼウスや他のオリュムポスの神々から離れていたと伝えている。ある神話では、ヘーラーは自分がかつて若かりし幸せな日々を過ごした山々に戻っている。彼女が戻ってくる意志がないのを見てゼウスは、自分はこれからある田舎の姫と結婚しようとしていると伝えることで彼女の嫉妬を呼びさまそうとした。それから、ある女性の彫像と式を挙げるまねをした。このいたずらはヘーラーの気に入り、彼女は彼を許してオリュムポスの山に戻った。

ギリシア神話はヘーラーが受けた侮辱とそれにたいするヘーラーの復讐を強調しているが、これと対照的に、実際の宗教儀礼では彼女は大変崇拝されていた。

儀式ではヘーラーは三つのおきまりの形容詞句で語られ、これに対応する三つの神殿をもって、そこで彼女は一年中崇拝されていた。春のあいだはヘーラー・パルテノス（乙女ヘーラー）であった。夏と秋にはヘーラー・テレイア（完全な女性ヘーラー）として敬われ、冬になるとヘーラー・ケーラ（寡婦ヘーラー）となった(1)。

ヘーラーのこれら三つの側面は女の一生の三つの段階を表しており、それは象徴的にさまざまな儀式において具現された。春になると、ヘーラーを表す像が泉にひたされ、象徴的に彼女の処女性が取り戻された。夏には結婚の儀式において彼女は自分の願いを完全に成就した。冬になると、もう一つの儀式がゼウスとの口論と別れを表現し、それがきっかけとなって寡婦ヘーラーの段階に入り、そのあいだ彼女は身を隠しているのである。

ヘーラー元型

結婚の女神ヘーラーは崇拝され、かつののしられ、賞賛されかつ侮辱された。他のいかなる女神にもまして彼女は、顕著にポジティブな属性とネガティブな属性をもっている。同じことはヘーラー元型についても言える。これは女性の人格において喜びもしくは苦しみを生み出す非常に強力な力である。

妻

ヘーラー元型は、まず第一に妻になりたいという女性の願望を表している。強いヘーラー元型をもつ女性は、パートナーがいないと根本的に何か不完全だと感じる。彼女は、「女神から与えられた」本能に心を動かされて結婚をめざす。連れ合いがいないことに対する彼女の悲しみは、子どもをもつことを切に望んでいる女性にとって子どもがいないのと同じくらいに、深くかつ心を傷つける内的経験である。

精神科医として私は、ヘーラー型の女性が、自分の人生にしかるべき男性がいないときにおぼえる苦しみをよく承知している。多くの女性がこれまで、自分のひそかな悲しみを私と分かち合ってきた。ある女性弁護士は、「私は三九歳ですが、夫がいません。とても惨めな思いです」と語りながらむせび泣いた。離婚して三二歳になる、ある魅力的な看護婦は悲しげにこう語った。「心のなかに大きな穴があいているような気がします。けっして癒されることのない傷なのでしょう。ああ、一人ぼっちでとても寂しいです。しょっちゅう外出しているような気がするのですが、真剣な気持ちになってくれる男の人は一人もいません。」

誰かの妻になりたいという思いに駆り立てられている女性が、心を決めて特定の人と関係に入ると、ヘーラー元型によってつくり出されていた願いのほとんどが満たされる。しかしそれでも彼女は、結婚そのものに対する抑えがたい欲求をおぼえている。結婚が自分にとって意味する特権、尊敬、それに名誉を必要としており、「誰それ夫人」としてみんなから認められることを求めているのである。単に一緒に暮らすことだけを望んでいるのではない。仮に、同棲していることで後ろ指をさされることのない年齢であっても、そうなのである。つまり、彼女が切に望んでいるのは、世間から認められるということである。飛行機でレノ（訳注― ネヴァダ州にあり、結婚式用のチャペルが二十四時間オープンしており、即座に結婚できる）に行ったり、市役所に行ったりするよりも、大きな教会で結婚式をあげるほうがはるかに好ましいと考えている。

ヘーラーが元型の場合、花嫁は結婚式の日には自分が女神であるように感じる。彼女にとって、結婚を目前に控えていることだけで、願いの成就と完全さの予感が生まれ、彼女を喜びで満たす。これこそまさに、ヘーラーに心が満たされた輝ける花嫁である。

ファースト・レディーであるナンシー・レーガンは妻の元型を体現している。レーガン夫人の様子から明らかであるが、ロナルド・レーガンの妻であることは彼女のもっとも重要な特権なのである。自分の結婚がいかに重要であるかを述べるとき、彼女は、幸せな結婚生活をしているヘーラーを体現するあらゆる女性になりかわって語っている。

自分のことになりますが、ロニーに会うまでは私の本当の人生はなかったのです。こんな感じは、近頃の人々にはあまり受け入れられないということは心得ています。皆さんは自分が完全に独立していて、夫は便利な付属物のように思っているのでしょうね。でも、私は自分の気持ちを否定するわけにはまいりません。ロニーがいればこそ私は幸せなのです。彼がいなければ、とても惨めで、人生になんの目的も方向も見出せないでしょうね(2)。

私たちの文化は、つい最近までナンシー・レーガンの考え方がふつうであった。「結婚すること」が女性の最大の業績と見なされていたのである。教育と出世が重要な目標となっているいまの時代でさえ、たいていの女性は、「身をかためて結婚する」ようにという文化からの期待からプレッシャーをかけられているという感じをぬぐいきれない。それゆえ、ヘーラー元型は巨大な支持を得ているのである。さらに、「ノアの箱船」心性が支配している。人々は、靴や靴下のようにペアになることが期待されている。このことが一つの社会的規範となっているものだから、一人身の女性たちは、自分がバスに乗り遅れたという気持ちをもたされる。かくして、ヘーラー元型は、ヘーラーに同調するように行動すると正しいことをしているという評価によって、またヘーラーに同調する行動をしないと間違ったことをしているという評価によって強められるのである。

父権制の文化では、男性に選ばれたことのない女性はおとしめられ、しかもその男は強ければ強いほどよいとされているのだが、ヘーラーが父権制の文化がつくり出したものだけではないかもしれないという事実を示すのは、多くのレズビアンに同じ欲望が見られることから示唆される。連れ合いが欲しい、忠実でありたい、願いはパートナーを通じて成就する、自分にはパートナーがいるということを世間に認めさせる儀式は何としてでも執りおこないたいという、同じ思いを多くのレズビアンが抱いているのである。ヘーラーになりかわっているレズビアンが、文化からのプレッシャーや家族からの期待に反応しているわけではないということは確かである。文化からのプレッシャーであれ、家族からの期待であれ、それはともに彼女たちの関係を支持するよりはむしろ非難する傾向にあるからである。

コミットする能力

ヘーラー元型は、絆を結び、パートナーに誠実となり、パートナーと一緒に幾多の困難に耐えて乗り越えていく力を与えてくれる。心を動かしている力がヘーラーであるとき、女性が条件つきでコミットすることはない。いったん結婚すると、彼女は「よくなるにつけ、悪くなるにつけ」妻でありつづける気持ちでいる。

ヘーラーがはたらいていないと、関係は長つづきしないものとなり、避けがたい困難がもち

あがったり、恋愛が始まるときの最初の魔法がききめを失ってくると、次のパートナーへと移っていく。彼女はけっして結婚せず、また結婚してないという状態でも、けっこう気持ちよく過ごすかもしれない。あるいは、お義理に、たとえば大きな教会で結婚式を挙げてみせたりはするが、ヘーラーのようには、自分が結婚した男性に心底つながっているとは感じないであろう。

ヘーラーぬきで結婚すると、女性は「何かが欠けている」という気持ちをおぼえる。これは私のある患者が述べた言葉そのままである。彼女は四五歳の写真家であるが、夫と深くつながっているという感じがなかった。「彼のことが好きですし、私自身これまでよい妻でした」と彼女は言う。「でも、自分一人で生きた方が性に合っているのではないかしらと、よく考えるのです。私がそばにいるのに、女たちが彼といちゃついているとき、彼はますます調子に乗ることがあります。私のことを思ってなのかしらと考えたりします。あの人は私がやきもちを妬いて動揺することを願っているのです。私が動揺しないものですから、ひょっとしてあの人は、自分が私にとってどうでもいい存在だと勘ぐっているのではないかしら。でもそれは本当なんです。深いところでは、私は少しも献身的な妻ではないのです。妻としての振る舞いは申し分ないのですが。」彼女にとっても夫にとっても悲しいことであるが、結婚して二十年もたつというのに、ヘーラーが元型としてはたらいていなかったのである。

聖なる結婚

結婚には三つの意味がある。第一の意味は伴侶になりたいという内面的な欲求の成就であり、第二の意味は、夫として妻として世間から認められるということである。結婚元型は、「聖なる結婚」を通して全体性を追求するという第三の神秘的レベルでも表現される。宗教的な結婚の儀式は、結婚が神聖なものであるということを強調している。結婚は霊的一致、あるいはそれを通じて恩寵が目に見える形となる秘蹟であることを明らかにするのである。この宗教的な結婚式を通じてヘーラーの神聖な儀礼が現在でも施行されている。

ヘーラー元型のこの神聖な側面への洞察は、私がじかに経験したことから生じた。私はある中道的なプロテスタント信者として育てられた。私たちの宗教的な儀式には、神秘的なものや魔術的なものは何も伴っていなかった。聖体拝領の秘蹟は、ウェルチのグレープジュースを用いておこなわれた。そういうわけで、サンフランシスコのグレース大聖堂で執行された私の結婚式が、心をおののかせる一つの内面的体験であったということは、私にとって思いがけないことであり、また深い感動であった。私は、自分が聖なるものを呼びおこす力強い儀式にあずかっているのを感じたのである。私は通常の現実を超える何か、霊的な何か（これは元型的経験の一つの特徴である）を感じとった。誓いの言葉を復唱するとき、まるで聖なる儀式にあずかっているような気がした。

聖なる結婚が夢のなかでおこるときも、同様にはっきりした変化が経験される。その経験は心おののかせるものであったということが記憶に残るのである。夢のなかで聖なるパートナーである人物に結びつけられるときに感じたものを説明するのに、人々はしばしば電気やエネルギーの比喩を用いる。その夢は、心のなかの男性と女性の合一を象徴しており、全体性の経験である。夢見る人は聖なるパートナーに抱擁されるとき、エロティックな感情と至福と合一が入り混じっている。その夢は「ヌーメン的（霊的）」である。つまり、夢見る者に、ある表現

しがたい、神秘的で神的な感情的効果を及ぼすということである。夢見る者は心をゆさぶられ、感動しながら目覚める。「目が覚めたときに感じたものよりも、もっと私にとってリアルな夢でした。けっして忘れません。あの人が私を抱いたとき、なんと素晴らしかったことでしょう。まるで神秘的仕方で再び一つになるかのようでした。説明しようとしてもできません。電流が通ったかのようで、同時に深い平和な気持ちがありました。この夢は私の人生での大きな出来事でした。」

このように聖なる結婚を純粋に内面的に経験するとき、夢見る者は完成された、あるいは願いが成就したヘーラーとして自分を体験しているのである。これにはしばしば伴侶になりたい、結婚したいという欲求にたいする鎮静効果がある。

否定的ヘーラー・パターン― 侮辱された女性

女神ヘーラーは、ゼウスが堂々と浮気をしても彼に怒りを表現することがなかった。彼から拒絶され、彼の情事のためにおとしめられていることにたいしておぼえる苦痛を、彼女は他の女性たちや、ゼウスが父親となっている子どもたちに復讐の怒りを向けるという形で表現した。ヘーラー元型がはたらくと女性たちは、非難の矛先を自分の伴侶から他の者たちに変える。なぜなら、彼女は伴侶にたいして感情的に依存しているからである。そしてヘーラー型の女性は、喪失と苦痛にたいして憤りと行動によって反応する。（デーメーテールとペルセポネーならば、典型的には抑うつ状態になることで反応するのであるが。）分析の仕事を通じて気がついたことだが、復讐は目にも止まらぬ早業でなされる。これによってヘーラーは拒絶されているというよりはむしろ、自分には力があると感じるのである。

ジーン・ハリスは、侮辱されたヘーラーの現代版である。排他的なマディラ校のこの尊大な女性校長は、彼女の長年にわたる恋人、スカーズデイル・ダイエットの開発者、ハーマン・ターノーヴァー博士を殺害したかどで有罪を宣告された。ハリスは、ターノーヴァーが彼女より若いライバルを可愛がっていたことにたいして嫉妬心から激しい憤りを抱いていたことがわかった。この年若いライバルは、彼女の判断からすれば、自分より行儀、教育、上品さという点で劣っていた。彼女が殺人で有罪の宣告を受けたのは、この別の女性にたいするむきだしの憎しみが明らかになってからのことである。ターノーヴァーが死ぬ直前に、彼あての長い手紙を書いている。そこで彼女は次のように書いている。

あなたは私の人生でもっとも大切なもの、もっとも大切な人でした。そしてそのことは永遠に変わらないでしょう。あなたは、言うことをきかなければお払い箱にするぞと脅して、私を思いのままにしつづけます。それが耐えがたい脅威であったということは、あなたもご存じのことです。それで私が一人で家にいるあいだ、あなたは私をほとんど完全に打ちのめした誰かさんのところに行ってセックスをしているのです。私はこれまでなんどもなんども、みんなの前で侮辱されてきたのです(3)。

数々の業績や特権にもかかわらず、ハリスは、ターノーヴァーなしには自分が価値のない女であると確信していた。彼女は、殺害は偶然の出来事だったと、断固とした口調で主張した。ヘーラーは、夫のゼウスが浮気をかすめていたにもかかわらず、けっして彼の非を責めようと

はしなかった。そのヘーラーを代弁するかのようなこの言葉は実際真実なのであろう。ハリスには、彼のいない人生など想像ができなかったからである。

ヘーラーを育てる

ヘーラーのようになりたいという欲求は、中年になったばかりのある種の女性たちにとっては一種の自覚として訪れる。それまでに彼女たちは一連の人間関係を経験していたり、キャリアに情熱を燃やしていたために、結婚は第一の関心事になっていなかった。この時点までは彼女たちは、関係を次から次へと代えていくアプロディーテーの傾向や、コミットメントを避けるペルセポネーの傾向や、目標を達成しようというアルテミスやアテーナーの傾向を育ててきている。これらの女神たちの目的は互いに食い違っており、伴侶になりたいというヘーラーの欲求は、女性がこれまでおこなってきた男性の選択によって挫折させられている。選択が、他の女神たちの影響のもとでなされたものだからである。

伴侶としての絆を結ぶことが強い本能でないとき、それは意識的に育てられることを必要としない。これが可能なのは、女性がコミットメントする欲求を感じ、それを維持したいと望み、実際にそれをおこなう機会が存在するときだけである。もし自分が、いつまでも誠実でいてくれることを求める男性を愛するならば、彼女は一夫一婦制と彼のどちらかを選ばなければならない。アプロディーテーの移り気や、アルテミスの独立心に箍をはめて、ヘーラーに味方することを決心しなければならない。一人のヘーラー型の妻になるということを意識的に決断することで、この元型との女性の結びつきが強められるからである。

結婚するつもりのない男性との関係に巻き込まれることで、妻になることを妨げられるならば、女性は、自分がこれまでひかれてきたタイプの男性と、彼らから受けてきた扱いから目覚めなければならない。また、伝統的な価値観をもっている男性にたいする自分の態度を再検討することも必要となる。なぜなら、結婚して家族をもちたいと望んでいるこれらの男性にたいする偏見にわざわいされてきたからである。望ましい男性について彼女が抱くイメージが、本気で自分を賭けることのできるタイプの男性に同調する方向に変化するとき、妻になりたいというヘーラーの願いはかなえられるであろう。

ヘーラー型の女性

現代のヘーラーを見つけることは簡単である。輝くばかりの花嫁が自分を待っている花婿の方に向かってヴァージン・ロードを歩くとき、彼女は、自分の願いが成就することを予感している喜びに満ちたヘーラーである。夫が別の女性と情事をしているのを発見して怒り狂うとき、その裏切られた妻は、がみがみ女のヘーラーである。ヘーラー型の女性は、これまで「ミッスス（Missus）」であった無数の女性が体現している。彼女たちは、典型的には、結婚するまで、あるいは少なくとも婚約までは処女であり、それから何十年間かは忠実な妻となり、最後には社会保護に頼って生きる未亡人となる。

ヘーラー型の女性は、喜んで夫を自分の人生の中心にする。ご存知のように、夫が最初にく

るのである。ヘーラー型の女性の子どもたちは、彼女の世界の秩序がどのようになっているのか、よく承知している。いちばんいいものはいつも彼のためにとっておかれているのである。他の人たちにもこのことはすぐわかる。彼女は夫と相談するまで彼らにたいして意見を保留するのである。

ヘーラーの鋳型にはまっている女性たちの多くは、既婚婦人らしい品のよさを備えており、誰からも、「結婚しているだけあって」と評価される。他の多くの女性たちは、自分のパーソナリティのいくつかの側面の一つとしてヘーラーをもっている。表面的にはヘーラー型の女性のようには見えないかもしれないが、ヘーラーがどういう女神であるかを学ぶと、彼女たちはヘーラーが自分にとってきわめて馴染み深い存在であると認める。

子ども時代

四歳か五歳ごろの子どものヘーラーは、ままごと遊びをしているのが見受けられる。自分の遊び友達をドアのところまで見送りながら、「お父さん、お仕事、いってらっしゃい」と言う。「偉い人」であるかのように駆け回って掃除をし、テーブルに草のサラダと泥んこのパイの夕食を並べて、ヘーラーの一日のハイライトを待ち受けている。それは彼が家に帰ってきて食卓につくときである。（これと対照的に、子どものデーメーテールは、お母さんになることがいちばん大事なことなので、お人形を乳母車に乗せて運び、何時間もかけて自分の「赤ん坊」に服を着せたり、お乳を飲ませたり、寝かしっけたりする。）

しかし、男の子と女の子たちが分かれて、それぞれ自分たちだけで遊び、女の子たちは男の子が「やんちゃ」だと考える六、七歳のころには、男の子たちと「ままごと遊び」をすることがほとんど不可能となる。一年生でさえそうなのだが、あちこちでペアの解消がおこるが、たいていの場合、ヘーラーの次の出現は、後になって子どもたちが「ステディになる」時期になっておこる。

両親

ヘーラーの両親はクロノスとレアーであった。クロノスは子どもたちの誰かが自分を倒しはしないかと恐れて自分の子どもを飲み込んでしまうほどの縁遠い存在の父親であった。レアーは、クロノスから子どもたちを守ってあげることができない無力な母親であった。クロノスとレアーは、父権制社会での結婚を、否定的でかつ極端な形で示している。夫は、自分の子供たちとの競争を認めようとはせず、妻がいかなる新しい関心をもつことも許さない横暴な男性である。妻は、彼の知らない秘密を守り通し、欺くことによって受動的に抵抗する。ヘーラーは、飲み込まれた自分の兄弟のうちでただ一人、別の両親に育てられた。ひとたび父親から解放されると彼女は、里親となった二人の自然神によって、田園的な環境のなかで育てられた。

二組の両親、あるいは結婚の二つのモデルというテーマは、多くのヘーラー型の女性にとって馴染み深いものである。理想からはほど遠い家族環境のために、他の子どもたちは結婚に関してペシミスティックになったりシニカルになったりするのだが、そのまっただなかにあって、子どものヘーラーは結婚についての理想化されたイメージをもちつづけ、悲惨な家族の状況から抜け出す道として、理想的な結婚を自分で追求するのである。環境に恵まれていれば、ヘーラー型の娘は、自分の両親の安定した結婚に、自分が求めているものを見出す。

思春期と大人になりたての頃

思春期のヘーラーは、特定の誰かと安定した関係のなかにいるときは非常に満足している。彼女は、ネックレスにボーイフレンドからもらった指輪を誇らしげにつけて、盛大な結婚式を夢み、彼の名前を試しに使ってみて「ボブ・スミス夫人」「ロバート・スミス夫人」「ロバート・エドウィン・スミス夫人」とノートに書いたりする。

決まった相手がいるということは彼女にとって、このうえなく重要なことのように感じられる。もし彼女が身分を意識する裕福な郊外のハイスクールに通っているならば、彼が誰であるかということは大問題である。たとえば学級委員であるか、大学のフットボール・プレーヤーであるか、会員制クラブのメンバーであるかどうかということである。もし彼女の通っている学校が都会にある場合は、身分を決める尺度は異なるかもしれないが、そのパターンは同じである。彼女は、高い身分の若者とカップルになることを追求し、その関係から引き出される感情面での安定を切望する。ひとたび彼女がボーイフレンドを通じて半分でも上流社会の仲間入りをすると、デートとパーティーの回数を二倍にふやし、まだペアを組む相手がいない人々をオリュムポスの山にあるヘーラーの高みから見下ろす。この同じパターンは、大学時代を通じて、そしてそれ以後も持続する。

ヘーラー型の女性のなかにはハイスクール在学中に、あるいは卒業後すぐに結婚する者もいるが、それは、できるだけ早く「ままごと遊び」をしたいからである。しかし、ハイスクール時代のたいていのロマンスは壊れ、この最初の真面目な関係の終わりは、若いヘーラー型の女性にとって最初の深刻な情緒的傷つきになる。

ヘーラーは大学を、配偶者を見つけるための時間と場所と心得ている。もし彼女が聡明で有能であるならば、大学でかなりの成績を納めるが、彼女が自分の能力を真剣に受け止めるものと考えていた教師たちは、ただがっかりするだけである。ヘーラー型の女性にとって、教育はそれ自体重要なものではない。自分に期待されている社会的背景の一部にすぎないのである。

結婚が大学にきた目的である以上、夫となる人物が実際に現れてこないならば、時間が過ぎていくごとに彼女の不安はつのっていく。一九五〇年代の半ばに大学時代を過ごした者として、私は「服からまだ止め針が抜かれていない（訳注　相手がまだ決まっていない）」女性たちのことを思い出す。彼女たちは、大学三年ともなるとますます心配し始め、最上級学年になっても婚約者がいないと落ち込んだ様子を示し、オールドミスになるしかないと考えていた。「いつ結婚するつもりなの？」という親類たちからの無遠慮な質問は、ことの他苦痛なものであった。結婚していないヘーラー型の女性は心に空虚さをおぼえ、生きている意味が感じられないからである。こうした気持ちは、結婚を強調する他の人々からの期待によって、ますます強められる。

仕事

ヘーラー型の女性にとって、仕事も大学に行くのと同様に、人生のうちでいちばん重要なものではない。学歴、職歴、職業、肩書がどうであれ、ヘーラーが女性の心のなかで強い力を及ぼしているとき、彼女の仕事は、自分自身の重要な部分であるよりはむしろ、単におこなっているにすぎないものである。

ヘーラー型の女性は仕事を非常にうまくこなし、世間に認められて出世するかもしれない。

しかし結婚していないならば、こうしたことはどれ一つとして自分にとつてそれほど意味があるとは思えない。自分の基準からすれば、どのような業績をあげているかいないかにかかわりなく、彼女は失敗者なのである。

仕事の世界で有能な女性には、他の女神たちが存在している。しかしヘーラーが全体のパターンを決定しているならば、彼女は自分の仕事がそれほど大きな意味をもっとは感じない。結婚しているならば、彼女はもちろん仕事よりも夫を優先し、彼が望んでいることがかなえられるように、自分の仕事の時間やチャンスをふりむけるようにするであろう。表面的に見た場合にのみ、ヘーラー型の女性が仕事と結婚を両立させているように見える。つまり、彼女の本当の仕事は結婚なのである。

現代は、夫も妻もキャリアを追求する時代であり、二人分の支払伝票がしばしば必要とされる。働いている妻の多くはヘーラー型の女性である。しかし、ヘーラー型の女性はいつも、「あなたが行くところへ私も行くわ」と言っている。彼女は一時的であるにせよ、二人が地理的に離れるようになることは提案せず、何とか仕事を免除してもらって、週末は二人で一緒に過ごそうとする。また、自分の出世が夫の出世と同じくらい重要なものであると主張しようとはしない。そのようなことを主張するためには、別の女神が役割を果たさねばならない。

同性をおとしめる対女性関係

ヘーラー型の女性は通常、他の女性たちとの友情にそれほど重きをおかず、親友がいないのがふつうである。彼女は夫と一緒にいて、彼と何かをするのを好むのである。もし彼女が、親密で長続きのする友達が実際にいるならば、他の女神たちが関与している。

もしまだ結婚していないのならば、彼女は適当な男性たちとの出会いこそ、いちばん重要なことだと感じている。仮に別の女性と一緒に出かけることがあるとしても、その行き先は、バーのように、女が一人だけでいれば面白くないようなところである。だが、いったん決まった関係に入ると、独身の女友達と過ごす時間がほとんどなくなり、ふつうは彼女たちのことなど忘れてしまう。

もちろんヘーラー型の女性は、ある種の女性たちのあいだではありふれたことであるが、男性から招待されることがあれば、それ以前に女友達と約束していても、これをキャンセルするという社会的慣習を維持している。いったん結婚すると、さらに女性たちとの友情を反故にしてしまうまでになる。

結婚しているヘーラー型の女性は、他の結婚している女性たちとは、夫婦の片われとして関わる。どの男のものでもない女性にたいしては、夫が少しでも目をかけたりすると潜在的な脅威をおぼえるか、男のいないただの女として無視するかのどちらかである。結婚後は、ほとんどあらゆる社会的付き合いを、夫婦生活の一部と見なしておこなう。結婚しているヘーラー型の女性が、他の女性たちと一緒に何かをするとしても、特徴的なことだがその活動は夫の職業や活動と関係している。女性たちが助太刀してくれることで、この傾向は制度的な裏付けを得る。このような組織で選挙がおこなわれるとき、夫の地位が妻の順位を決定する。このような組織の委員を選挙する場合、ヘーラー型の女性は、かならず夫の地位を考慮する。

ヘーラー型の女性にとっては、他の女性たちとの接触が夫婦同士の関係の文脈でなされるとき、女性間の絆はしばしば、個人的な友情よりはむしろ友好的な同盟関係というものになる。

それゆえヘーラー型の女性は、友達が離婚したり未亡人になって、もはや夫婦の一員でなくなってしまうと、たとえそれまで何年も頻繁に行き来があっても、簡単にその友達を無視するようになる。ヘーラー型の女性は互いに無視しあうが、そうすることで、女というものは夫がいなければ何の意味もないのだという確信を強めるのである。これまで多くの未亡人が、苦々しい思いで、太陽の光がより豊かな土地へ引っ越していったが、それは気候のせいではなく、以前の親しい友人たちのサークルにはもはや自分の居場所がないということを発見したときの怒りとプライドのためである。

願望の成就を期待する対男性関係

女神ヘーラーがギリシアの寺院で崇拝され、ゼウスとヘーラーの結婚が儀式を通じて表現されていたころ、ゼウスはゼウス・テレイオスと呼ばれた。これは「ゼウス、成就をもたらすもの」ということを意味する。今日のヘーラー型の女性は夫に、彼が自分の願いをかなえてくれるだろうという元型的な期待をかける。

ヘーラー型の女性は、有能で成功する男性にひかれる。しかし何をもって有能で成功する男性と見るかは、彼女の階級と家族によって決まる。腹をすかしている芸術家、感受性の豊かな詩人、それに天才的な学者は彼女にはおよびではない。ヘーラー型の女性が心をひかれるのは、芸術や政治上の原理のために悩んでいる男性ではない。

しかし、ときにはヘーラー型の女性は、特にヘーラー自身の心をもつかんだ組み合わせに心が動かされるように思える。ゼウスはまず、ぶるぶる震えている鳥に姿を変えてヘーラーに接近し、その後で自分が主神であることを明かしたのである。よくおこることであるが、ヘーラー型の女性は、あたたかさ（これを彼女が与えるのだが）を求めている哀れな可愛い生きものと偉大で力強い男性という組み合わせのものと結婚する。世間で非常な成功を納めている男性はしばしば、ゼウスがそうであったように、母性本能にうったえる情緒的に未熟な可愛い少年という要素を持っており、それがヘーラー型の女性にとってきわめて魅力的である権力と結びつくと、彼女の心に触れることができるのである。彼には親友がいないか、他の人々からひそかな悲しい胸のうちを明かされたことがなかったか、あるいは他人の身になって考える能力を発達させていないかもしれない。

この種の男性の情緒的未成熟は、彼が女性に関して深さよりも多様性を求めるということ、またその結果、さまざまな浮気をするという傾向にも関係している。しかしこれこそ、ヘーラー型の女性にとっては耐えがたいことなのである。彼は商用で町から離れたとき、一夜だけのお遊びを楽しむビジネスマンであるかもしれない。新しい女性との最初のセックスに含まれている征服と興奮を楽しむのであるが、その場合彼は、妻が知らなければ妻を傷つけることにはならないと高を括っているのである。彼はその関係のことを話したり、自分の行動と直面することをいやがる。だが、これこそ、ヘーラー型の女性には受け入れがたいことである。

もし、ヘーラー型の女性が、ゼウスのようにプレイボーイで嘘つきの男性と結婚し、彼が言うことを鵜のみにする（安心させてもらいたがっているヘーラー型の女性にはきわめて特徴的なことだが）ならば、彼女は繰り返し傷つけられるであろう。ヘーラー型の女性は、この点で不利な立場にいる。なぜなら彼女たちは、その根本にある性格を評価したり、行動パターンを認識することが苦手だからである。このような女性は、人物判断をするとなると、いろいろな

可能性よりはむしろ表面だけを見る。まるで、売家の目に見えるところだけを見て、その家がこれまでどうであったかとか、これからどうなるかという可能性を見ないのと似ている。最後に、ヘーラー型の女性の味わう失望と苦痛は、自分の願いを成就してもらいたいという彼女の元型的な期待と現実のあいだの不釣合に比例し、そのギャップは非常に大きなものとなるであろう。

セックス

ヘーラー型の女性は、セックスと結婚が一致しているものと考えている。それゆえ、婚約あるいは結婚しない限り、処女のままでいたかもしれない。結婚するまでは経験していないために、夫の力に頼って性的に目ざめることになる。たとえ夫が目ざめさせてくれなくても、彼女は自分が内心深く感じているところの妻の役割の一部として規則的にセックスをするであろう。おそらく義務的なセックスという観念は、まずヘーラー型の女性とともにおこったのであろう。

ヘーラー型の女性が結婚初期にオーガズムを経験しないということはめずらしくない。このような状態が何年たっても変わらないままでいるかどうかは、アプロディーテー元型が結婚生活のなかで活性化されるかどうかにかかっている。

結婚

ヘーラー型の女性は結婚式をあげる日を生涯でもっとも重要な日と考える。その日彼女は新しい名前を獲得するのである（彼女はけっして自分の名前をとっておくことはしない。それがまさに「娘時代の名前（maidenname）」〔旧姓〕だと考えるからである）。彼女はいまや妻となる。かくして、もの心ついた頃から抱いてきた願いがかなえられるのである。

中部アメリカは、多くのヘーラー型の女性の出身地である。夫と妻は週末と休暇を一緒に過ごす。夫は仕事に出かけ、決まった時刻に夕食を食べに帰ってくる。彼の友人たちは男性であり、彼は彼らと時間を過ごす。自分の妻を尊敬し、彼女が妻としての務めを果たしてくれることを期待し、自分は一生結婚しているものと考える。毎日同じことをおこない、社会生活を二人で経験し、おのおのが役割を果たすことで結婚が安定し、そのことがヘーラー型の女性に満足感を与える。

団体生活はヘーラー型の女性にふさわしいもう一つの場面である。彼女は夫とともに、その団体の梯子段をのぼり、夫の行くところに自分もついていき、それほどすいすいと出世していかない者たちを簡単に見捨てる。夫との絆こそ主な生きがいであり、他の人たちとの関係は浅いため、彼女にとって夫の行くところに自分もついていくのは簡単である。これと対照的に、強い友情で結ばれている女性たちは、引っ越しをするごとに喪失と孤独に悩まされる。自分の仕事を大切にしている女性たちも同様で、彼女たちも夫とともに住処を替えるごとに、一から始めなければならない。

ヘーラー型の女性の幸せは、夫がどれぐらい彼女に尽くしてくれるか、結婚を大切に見なしているか、自分を妻として評価してくれているかにかかっている。しかし彼女が心ひかれるのは成功している男性である。ところが彼らの多くは、仕事にエネルギーを集中していたり、仕事と結婚しているがゆえに成功しているのである。それゆえ、彼女は結婚しているにもかかわ

らず自分が不幸だと感じるであろう、たとえ、夫が浮気をすることが一度もなくても。結婚は、それが夫にとってたいして重要なものではないとき、ヘーラー型の女性にとって充実したものにならないであろう。

今日のゼウス型の夫は、結婚をもっぱら自分の世間体のために用いている。彼は自分の階級もしくはそれ以上の階級出身の女性と結婚し、必要なときには彼女を伴って人々の前に出る。このような結婚は彼にとっては都合がいいが、妻にとっては災難である。もし他のいかなる元型でもいいが、それが自分のなかで支配的であるならば、彼女はそれほど満足がなくても、結婚を受け入れることができるであろう。しかしヘーラー型の女性は夫が身をいれてくれなければ、傷つけられるのである。彼は通常、権力の要素を含む他の関心事（商売の取引とか、政治上の同盟関係）に熱中しており、自分の主な関心事を妻と分かち合うことはない。その結果、妻は心の中心にぽっかりと穴が開いているように感じるのである。

彼女はこの空虚感を埋め合わせようとして、せっせと社会活動をおこなうかもしれないが、それは自分たちが申し分のないカップルであることを世間に示すためである。オペラの初日の晩などに姿を見せる多くの有名人のカップルがまさにそうである。彼らは、世間にたいしては自分たちは一緒だというイメージを与えるが、私生活ではばらばらである。もちろん、このような功利主義的な結婚は、なにも特定の階級に限られるわけではなく、あらゆる社会階層に見られるものである。

たとえ結婚生活が不満足なものであっても、あらゆる女神のタイプのうちでヘーラー型の女性は離婚しょうと思う確率がもっとも低い。女神ヘーラーと同様にヘーラー型の女性も、おとしめられ、辱しめられているにもかかわらず、ひどい仕打ちに耐えることができる。彼女は心の底から結婚していると感じているのである。彼女にとって離婚など思いもよらないことである、たとえそれが実際に自分の身におころうとも。

ヘーラー型の女性は、夫が他の女を好きになって彼女と別れたいと思い、そのことを彼女に話すと、彼が言っていることなど聞きたくもないと言って心の底から抵抗する。結婚は彼女にとって一つの元型的体験であり、心のなかでは彼女はいつも妻でいたいと願っている。たとえ離婚が成立しても、ヘーラー型の女性は自分がなお結婚していると考え、現実には自分はもはや結婚していないということを思い出させられるごとに、心新たに苦しむであろう。この反応は彼女自身を苦しめるだけでなく、他の人々にとっても頭痛のたねとなる。

彼女は、結婚が終わってからでさえ、結婚（あるいはヘーラー）が女性にもつ元型的魅力にさかのぼることができるもろもろの困難と闘いながら、精神科医の世話を受けるかもしれない。私自身、臨床実践で、これらの該当者のすべてにたいして、ヘーラーがいかに影響を及ぼしているかを見てきた。たとえば、患者が離婚したヘーラー型の女性であるとしよう。彼女は苦痛と憤りのあいだをいったりきたりしながら、自分がなお正当な妻であると感じている。患者が前の夫である場合もある。彼は前の妻から毎日のように電話されることにうんざりしている。あるいは患者が新しい妻であることもある。彼女は、夫の前の妻が自分たちの生活に侵入してきたり、請求書や他の書類に前の夫の名前を用いることで混乱が生じることに腹を立てているのである。

子ども

ヘーラー型の女性が子どもをもうけるのは、それが妻としての役割の一部だからである。しかし、デーメーテールも重要な元型になっているのでない限り、彼女はそれほど母性本能をおぼえることがないであろう。また、アルテミスやアテーナーもはたらいていないのならば、自分の子供たちといろいろなことをするのに喜びを経験しないであろう。

もし、ヘーラー型の女性が子どもを産んでも、母と子どもの元型的な絆をつくり出すことができないならば、子どもたちは、母親には愛したりいたわったりする気持ちが欠けていると感じとるであろう。たとえ彼女が専業主婦の母親で、子どもたちと常に一緒にいても、彼らは母親と深く結ばれておらず、何かしら母親から情緒的に見捨てられていると感じるであろう。

ヘーラー型の女性が夫と子どもたちのどちらかを選ばねばならないということになれば、彼女は子どもたちにとって自分がどれほど必要な存在であろうとも、夫の方を大切にするだろう。治療の場でよく見かける大人たちがいる。彼らは伝統的な家族で育てられたのだが、そこでは父親がいちばん偉い存在で、一家を支え、小暴君であった。このような患者は、母親が自分のことを気にかけてくれているとは感じているが、夫と子どもたちのあいだに立って緩衝装置としてはたらいてくれることは一度もなかった。子どもたちは、父親がどれほどむちゃくちゃで手に負えなくなっていても、自分だけで彼と直面しなければならなかったのである。

このような患者は、分析を受けると、初めのうち、子どもの頃の苦しかったことを思い出し、父親との困難が主な問題だと感じる。ときには、現在の時点で父親と対決し、もし可能ならば、過去の出来事に関する自分の言い分を認めさせたり、謝らせたいという気持ちをおぼえる。しかしここで、母親が果たしてきた役割に気づくことになる。

職業をもっている三十代後半のある患者は、思春期を通じて父親といつも闘ってきたのであるが、彼女はこう言った。「私が何をしても、それでいいということにはなりませんでした。お父さんの目には、私がそんなことを考えるなんて狂っているとか、そうでなければ無能だというふうに映るのです。何につけても、私は打ちのめされるのです。お父さんは、私の大切なものをあざけり、私が大事にしていたものを壊すことさえ何度かありました。」いま彼女は、自分の業績にたいして彼から何がしかの評価を求めていた。彼女には学位があり、専門家としてのキャリアを積んでいたのである。彼女はまた、父親の行動がどれほどのダメージを与えてきたか知ってもらいたがっていた。

ある日彼女は両親に電話をした。二人はいつも一緒であった。いつものごとく両親はそれぞれ別個の受話器に向かって話をした（彼女は、これまで一度も両親のうちの一人だけと話した記憶がない）。彼女は自分の考えていることを父親に話したが、その際、彼に言わなければならない「大切なこと」があり、さえぎらずに耳を傾けてほしいと言った。彼女は混乱したり腹を立てたりせずに、過去の恨みつらみを数えあげた。驚いたことに、父親は彼女が頼んだ通り、ひたすら耳を傾けてくれたのである。ところが母親は、まるで娘が父親に乱暴をはたらいているかのように反応した。「そんなふうに、お父さんに言うものではないわよ」と言ったのである。母親がこのように介入してきたとき、彼女がこれまでどのような役割を果たしてきたかということに、娘は気づいた。

この母親は典型的にヘーラー的な仕方で反応している。彼女の忠誠心は夫に捧げられていたのである。子供がどうして父親と対決できようか。彼は絶対的な支配者ゼウスである。子供が父親の機嫌を損ねることがどうしてできようか。彼はあまりにも傷つきやすい男なのである、

ヘーラーの温もりと保護を求めてプルプル震えている鳥のように。

中年期

ヘーラー型の女性の中年期が幸せなものであるかどうかは、彼女が結婚しているかどうか、そして誰と結婚しているかにかかっている。それなりに成功して地位があり、妻を大事にしてくれる男と安定した結婚生活を営んでいるときこそ、ヘーラー型の女性にとって人生最良の時である。これと対照的に、未婚であったり、離婚したり、未亡人になっているヘーラー型の女性は惨めである。

中年ともなると、結婚生活がしばしばストレスにさらされ、ヘーラー型の女性は、これにうまく対処することができない。結婚生活に困難がもちあがると、ヘーラー型の女性はよく、持ち前の所有欲と嫉妬心によって事態をますます悪化させる。結婚生活で初めて夫にとって別の女性が重要であることに気がついたり、あるいはそうでないかと思われると、これまで一度も見られなかった復讐心がすさまじく醜い形で現れてきて、彼女にとってこのうえなく大切であるはずの結婚をさらに危険な状況に追い込んでいく。

晩年

娘であるヘーラーから願いが成就したヘーラーへと移り変わったヘーラー型の女性にとって、未亡人ヘーラーとなることは、人生においてもっとも困難な時期である。夫に先立たれた数多くの女性たちはこの状態にいる。未亡人になるやいなやヘーラー型の女性は、夫を失うだけではなく、自分に意味とアイデンティティの感覚を与えてきた妻としての役割をも失うのである。彼女らは自分の価値がなくなったと感じる。

自分自身の他の側面を発展させてこなかったヘーラー型の女性は、夫が死ぬことで、喪の気持ちから慢性的な抑うつ状態に陥り、足場がなく孤独になってしまうかもしれない。このような反応は、それまでの態度や行動が制限されてきたことの結果である。ヘーラー型の女性は、常に夫を第一にしてきたため子どもたちと特に密接な関係があるというわけではない。良い友人がいるわけでもなく、社会生活は何事につけ夫婦の一人としておこなってきた。そしてすでに触れたように、ふと気がついてみると、社会的なサークルとの関わりは閉ざされているかもしれない。ちょうど彼女自身が他の独身女性を切り離してきたように。

未亡人になったヘーラー型の女性の人生はいまや、他の女神たちが存在しているか、どの程度経済的なあてが支給されていたかにかかっている。夫を失ったことからけっして立ち直れないヘーラー型の女性もいるのである。

幸運なヘーラー型の女性であれば、夫とともに老年期に入り、金婚式をともに祝う。彼女らは恵まれた女性と言える。自分の人生に意味を与える特定の元型を成就することができたからである。

心理的困難

ヘーラーは多くの女性の人生に否定しがたい影響を及ぼす。他の女神たちのなかには、人生

において肯定的に現れてもそれほど願いを成就しないものもいるが、否定的に現れた場合にヘーラーほどに破壊的な女神はいない。それゆえ、特にヘーラー型の女性にとって、この元型を扱う困難さを理解することは重要である。ヘーラーは抗い難い力になり得るからである。

ヘーラーとの同一化

「ヘーラーとして」生きることは、女性にとって妻という役割と同一化することに等しい。その役割が意義と満足をもたらすか、それとも苦痛や怒りに終わるかは、結婚の質と男性の誠実さにかかっている。

本能的な衝動が満たされないときは、男性を得ることがヘーラー型の女性の主な関心事であり、相手がいないことは悲しみの大きな原因である。相手を探しているあいだはしばしば学業や仕事に精を出し、友人をつくって、あちこち出かけるが、その間、四六時中夫を見つけることを望んでいるのである。

ひとたび結婚するとヘーラー型の女性は、自分の人生を限定し、自分の役割と夫の関心事に合わせる。彼が学校にいるあいだ、彼女の経済的な支えを必要とするならば、彼女は働きに出るだろう。彼が専業主婦を望めば、仕事や学校をやめるだろう。自分も働いている場合、彼が引っ越しを望むならば彼女は喜んでついていくだろう。しばしば彼女は結婚前にあった友情や、夫と会う前にもっていた興味を捨ててしまう。

ヘーラー型の女性と結婚する男性は、結婚式の後で、自分の結婚した女性はもはや彼女ではないということに気づくかもしれない。妻の役割に合わせようと自分自身を限定する前の彼女はもっと広い関心をもっていた。婚前交渉ですら、いまよりはるかによかったであろう。セックスにおける変化はめずらしいことではなく、新婚初夜にさかのぼるかもしれない。ヘーラー型の女性が結婚すると、他の女神たちの影響はすべて劇的に減ってしまうはずである。

ヘーラー型の女性は、結婚後に花ひらくこともある。輝くばかりの花嫁は幸福な妻になる。夫が彼女を愛する献身的なゼウスである場合、結婚は非常に深い意味をもつ彼女の人生の中心となるであろう。常に妻としての役割の後にではあるが、他の女神たちの側面も表現されるかもしれない。

ヘーラー型の女性が結婚後の行動を制限し、自分の役割をヘーラーであることに限ってしまうかどうかは、その元型の強さや、結婚する前に彼女のパーソナリティの他の側面がどれだけ十分に発展していたか、また夫がヘーラーを乗り越えて成長していくことを支持するかしないかによっている。妻を自分の要求に合わせることを期待する独占欲が強くて嫉妬深い夫は、ヘーラー元型と一緒になって女性をただのヘーラーにしてしまう。

期待はずれ

女性がヘーラーに同一化している場合、彼女はしばしば自分と夫が結婚によって当然一変するものと考えており、夫がゼウス・テレイオス、つまり自分の願いをかなえてくれるゼウスになることを無意識に期待している。結婚式の後、彼女は、わけもなく深い失望を味わい、彼が自分をだましたと感じるかもしれない。まるで彼が暗に何かを約束しておきながら、それをしてくれなかったかのように。しかしながら、実際のところ罪人は彼ではなく、彼女が彼に投影

していたゼウス・テレイオスの元型的期待なのである。

多くのヘーラー型の女性は男性に理想的な夫のイメージを投影し、その後彼が期待に沿わないからといって批判的になり腹を立てる。このような女性が、その後彼を変えようとしてせきたてると「ガミガミ女」（女神ヘーラーについてのホメーロスの見解である）になるのかもしれない。他のタイプの女性であれば、まず男性をもっと正確に見るだろうし、結婚が彼を変えるなどとは期待をしないし、彼を見捨てることもできるであろう。

元型と文化のはぎまで

ヘーラー型の女性は元型と文化の二つの力が一緒にはたらくことによって、結婚生活へと駆り立てられると同時に、その罠にはまりこんでしまう。この元型は、ベティ・フリーダンが記述している女性の神秘あるいは「他の人々の力を通じての成就」によって支えられている。二つの力は、「そして二人はいつまでも幸せに暮らしました」というおとぎ話ふうの結末を暗黙のうちに約束してくれる。ヘーラー型の女性は（他のいかなるタイプの女性にもまして）、ひとたび結婚すると、良しにつけ悪しきにつけ、自分が結ばれてしまっていると感じる。それが「悪しきにつけ」である場合、ヘーラー元型は、しばしば文化からの支持を受けて、惨めな結婚生活から抜け出すことに反対する。宗教上の信念や家族からの期待が「共謀」して、女性は飲んだくれや妻を虐待する夫といつまでもくっついていることがある。

被抑圧者か抑圧者か

ヘーラーと同一化することが、どのような結果を生むかということを考えれば、この元型が女性を抑圧する力をもっていることは明らかである。まだ結婚していないヘーラー型の女性は、自分が不完全で失敗者であると感じたり、不幸な結婚に追い込まれていく。結婚している女性は不幸な結婚生活を捨てさることができずに、悪い方向に変化していく。彼女は、自分の夫がヘーラーの期待に沿えないと、苦々しい気持ちを抱いて、不満たらたらとうるさく小言を言う女性になってしまう。あるいは、夫が実際に浮気をしたり、もしくは浮気をしているように想像されるならば、傷ついて怒り狂う嫉妬深い妻になる。あるいは、自分にとって有害以外の何ものでもない結婚生活から抜け出すことができない。

女神ヘーラーは他のいかなる女神にもまして苦しんだ。ただし、例外はデーメーテールで、彼女の苦しみは違った種類のものであった。しかし女神ヘーラーは、復讐心から他の人々を迫害もし、それゆえあらゆる女神のなかでもっとも破壊的な女神であった。今日の女性にも表現されるように、ヘーラーの抑圧者ぶりは、他の人々にたいする裁判官のような態度から、あからさまに破壊的な振る舞いにいたるまでさまざまである。

ヘーラー型の女性は、ヘーラーの基準に合わないということで他の女性たちを裁き、ふつうは彼女たちとその子どもたちをのけものにするという仕方で罰する。このような女性たちは社会の調停者であり、特にアプロディーテーにたいして免疫がある。男性たちが群がる魅力的で官能的な女性、離婚した女性、セックスの面で積極的な独身女性を、その気になればいつでも排除できる。彼女らはすべて、ヘーラー型の女性のパートナーにとって魅力的であり、それゆえ脅威を与えるからである。しかし、ヘーラー型の女性は、個人的に脅威を与えない女性をも裁く。たとえば、生活保護を受けている未婚の母親やレイプの犠牲となった女性にたいして

は、同情的であるよりはむしろ批判的な態度を示す。ヘーラーにとって真に受け入れることのできるのは成功した男性の妻としての役割だけである。

自分がフェミニストだと考え始めてからかなり時間がたってからのことであるが、ある催し物で夫と一緒にいたとき、私は他の女性たちを軽蔑している無意識的なヘーラーのパターンが自分のなかにあるということを発見した。そのことにピンときたのは、夫と一緒にいろいろな会合に出ているときには、夫婦で来ている組を探しており、一人でいるときならとても一緒にいたいと願う「男と結びついていない女性たち」を避けているのに気がついたからである。このヘーラーに特有のパターンがはたらいているのがわかったとき、私は自分の非フェミニズム的行動を恥ずかしく思った。また、これまでヘーラー型の女性にたいして優越感をおぼえていたが、実際のところは自分のなかにもヘーラーの否定的な側面があることに気がついて、謙虚な思いになった。その後、私は自分が誰と一緒にいるつもりなのかを、自分でしっかりと選択するようになった。自分がこれまでバカにしてきた「誰それ夫人」と共通する何かをもっているということを発見してからは、誰かを裁くという態度もなくなっていった。

メーデイア症候群

「メーデイア症候群」という用語は、自分が裏切られ、捨てられたと感じて、復讐のために極端な行動に走るヘーラー型の女性を的確に記述している。メーデイアの神話は、他の誰にもましてある男性にコミットするヘーラー型の女性の能力、そして自分の献身が相手の目には何の価値もないものだと知ったときに復讐する彼女の能力を表すメタファーである。

ギリシア神話ではメーデイアは、自分を捨てたということで夫にたいして復讐するために自分自身の子どもたちを殺した人間の女性であった。彼女は、ヘーラーの破壊的側面の虜になった「臨床事例」である。

メーデイアはコルキスの王が巫女とのあいだにつくった娘であった。イアーソーンとアルゴナウテースたちが探し求めていた黄金の羊毛は、この王国のものであった。イアーソーンが黄金の羊毛を取るためには、助けが必要であった。というのは、その羊毛は厳重な見張りがなされていたからであった。彼のパトロンである女神ヘーラーとアテーナーはアプロディーテーを説得して、メーデイアがイアーソーンを恋し、彼が黄金の羊毛を盗むのを助けることになった。イアーソーンはメーデイアに自分を助けてくれるように頼み、彼女と結婚することを約束し、「死の呪いが私たちをその腕に抱き寄せるまで」彼女とともにいることを誓った。そこで、彼にたいする情熱と忠誠心から、メーデイアは彼が黄金の羊毛を盗むのを手伝った。そうすることで彼女は自分の父親と国を裏切り、弟が死ぬことになった。

イアーソーンとメーデイアはコリントスに落ち着き、二人の息子ができた。外国人であるために、メーデイアの地位は内縁の妻と同じであった。それから、日和見主義者のイアーソーンは、コリントスの王クレオーンの娘グラウケーと結婚するチャンスをつかんだ。結婚の条件として、イアーソーンはメーデイアと自分たちの子どもたちを追放することに同意した。

夫の裏切りに傷つけられ、自分が彼のためにおこなった犠牲と罪のすべてが何の意味ももたなくなってしまったことで侮辱されたメーデイアは、人を殺してしまう。まず彼女は自分のライバルに毒を塗った衣装を贈った。グラウケーがその衣装を着ると、ナパーム弾を浴びたかのように彼女のからだは焼け、滅んでしまった。次にメーデイアは、自分の子どもたちにたいす

る愛情と復讐欲の葛藤に苦しめられた。憤激とプライドが勝ちを納め、彼女はイアーソーンに復讐するために、子どもたちを殺害した。

メーデイアの行動は凶暴そのものであるが、彼女がイアーソーンにたいするどうしようもない愛の犠牲者であるということは明らかである。拒絶されてから、抑うつ状態になったり、さらには自殺さえする女性もいるが、メーデイアは能動的に復讐を企て、実行した。イアーソーンとの関係は彼女の人生のすべてであった。何をするにしてもそれは、彼を愛すること、彼を失うことのどちらかの結果であった。メーデイアはイアーソーンの妻でありたいという欲求に取りつかれ、とらわれ、そして狂っていったのである。彼女の病は、ヘーラー本能が強く、かつそれが妨害されたことからきている。

メーデイア神話が文字どおり現実の行動になることは幸い稀であるが、比喩のレベルではよく見られる。メーデイアの身におこったように、女性がヘーラーとアプロディーテーの二人の女神が介入することで男性と結ばれると、結婚したいという本能と彼にたいする情熱に突き動かされて、彼女は何ものにもましてその関係を第一に考えるようになる。彼女は、必要とあらば、自分の家族を捨て、裏切り、その絆を断ち切る。メーデイアと同様に多くの女性も、結婚が永遠の献身を約束することを信じ、自分の夫のために途方もない犠牲を払うが、結果はただ、破廉恥で野心家のイアーソーン的な男に利用されて捨てられるだけである。

夫婦がメーデイアとイアーソーンのドラマを地でいくとき、妻は夫が自分を捨てて選ぶもう一人の女性を文字どおりに焼き殺すことはしないかもしれないが、しばしば感情の面ではそれと同じようなことを空想したり、企てたりする。たとえば、「メーデイア」は、さまざまなでたらめを吹聴して、そのもう一人の女性の評判を台なしにしたり、あるいは実際にその女性に危害を加えようとすることがある。

そして、これまたメーデイアとイアーソーンの神話とよく似ているのであるが、妻の復讐心が、自分の子どもたちにたいする愛情や子どもたちの最善を願う気持ちを上回るならば、彼女は夫と子どもたちの関係を破壊しょうとするかもしれない。子どもたちを連れ去って、夫が彼らに会えないようにするかもしれない。あるいは夫が子どもたちを訪問することを子どもたちにとって心的外傷となる出来事に変えてしまう。そのために夫は子どもたちとつながっていようとする努力をあきらめるのである。

しかしどんなに破壊的になっても、ヘーラーについて言えることは、メーデイアがイアーソーンを殺したのではないということに注意しなければならない。同様に夫から拒絶されて敵意に燃えるヘーラーは、自分を捨てた男よりははるかに他の人々を傷つけることのほうが多い。彼女は特に自分の子供たちを傷つけるのである。

成長の道

ヘーラーからの影響に気がつき、かつ彼女がいろいろな点で感じやすい女神であるということを理解することが、ヘーラーを越えて成長するための第一歩である。多くの女性はこれまでの関係を振り返って、自分も結婚したがっていたということを認識することができる。「ヘー

ラー」が支配し、機会をとらえていたならば、このような女性は、自分が実際にはよく知らないどんな男性とでも、高校時代に結婚してその後も長続きするか、あるいは夏のロマンスを経験していたことであろう。

ヘーラーに影響されると、女性は自分にとって何がいちばんいいのかを立ち止まって考えずに、最初に自分に求婚してくれる体裁のいい男や、一緒に出掛けるのに都合のいい男なら誰とでも結婚する傾向がある。将来の夫となるべき人物についてのかなりの情報を得てからでなければ結婚を断ってもよさそうなものである。たとえば、彼はどんな性格をしているか。どれだけ情緒的に成熟しているか。身を固める覚悟がどれだけできているか。妻にたいする誠実さが、彼にとってどれだけ重要なものであるか。人間としての彼について実際に何を感じるか。自分たちはどれだけうまが合うか。これらの疑問に率直に答えることは、ヘーラー型の女性が未来の幸福を得るうえで決定的に大事なことである。ひとたび結婚してしまうと、彼女は自分が結婚した男性の性格、自分を愛してくれる彼の能力に依存するであろう。自分が願いを成就したヘーラーになるか、幻滅して怒りに燃えるヘーラーになるかは、男性次第だからである。

ヘーラーを越えて

ヘーラー型の女性の人生においては、幸せな結婚が主な生きがいであるが、妻であることに自分を限定するということは、死や離婚でこの役割が終われば、成長し、適応してゆくことができなくなることを意味する。彼女は、どんな活動をするか、誰を友達にするかに関しては、夫の選択に無意識的に従い、その結果、自分の人生をどのように過ごすかも夫に決めてもらうであろう。しかし、自分のパターンに気づいて、自分の他の側面を無視してきたということを認識することもできる。この他の側面こそ、自分の結婚だけでなく自分の人生をも豊かにするものかもしれないのである。

伝統的な結婚では夫と妻は一つの全体の半分半分であり、それぞれが文化によって決定される役割を果たす。しかし、このように男と女の仕事を分けてしまうと、各人のなかにある全体性が実現されにくくなる。文化が「男性的」と見なすものはどれでも、女性においては発達されないままになる。ヘーラー型の女性は簡単にこのパターンにはまりこむ。彼女は、自分が車や算数のことを何も知らないということ、またビジネスの世界で人々とどのように付き合っていいのか知らないということに、倒錯的な誇りをもちさえするかもしれない。なぜなら、夫がこれらの仕事をすべて二人のためにしてくれるからである。それゆえ、男の仕事をすべて夫にやってもらうならば、ヘーラーは女性としての能力をも限定していくことになる。しかし女性はこのようなやり方をやめて、自分の結婚のパターンについて反省を始めることもできる。どんなによくても自分を制限するだけで、最悪の場合には自分にとって破壊的にもはたらく役割に自分がはまりこんでいることを理解することができるのである。この自覚こそ、女性がヘーラーに抵抗して、このワンパターンを越えて成長していくことを可能にする最初の一歩なのである。ヘーラー型の女性は、妻としての役割を越えて成長させてくれる他の女神たちと、意識的にかつ繰り返し同盟関係をもたねばならない。

成長の経験としての結婚

不安定なヘーラー型の女性は、非常に嫉妬深くなりやすい。ちょっと挑発されただけで彼女

は、夫の浮気を勘ぐり、夫が目をかけてくれないということでみんなの前で粗末に扱われ、侮辱されたと感じる。それにたいする反応が、根拠にもとづいた正当なものでないならば、彼女は、自分の加える非難によって夫を自分から遠ざけてしまうか、自分にたいして夫がどのような影響を及ぼしているかを夫がもっと感じるようにするかのどちらかとなる。そして結婚は彼女が恐れた通りの方向に変質していくか、そうでなければ、夫と妻が力を合わせて成長していく。

たとえば、夫は、腹を立てて情報提供を拒むよりはむしろ同情しながら、自分（夫）がどこにいるかを知りたいという妻の要求に反応することを学ぶかもしれない。もし夫がこのように反応することができれば、妻の信頼は増すであろう。このような夫の一人がこう言った。「いまでは、いつ私のことをあてにしてくれたらいいか妻に知らせるようにしています。二人で計画していたことに差し障りが生じたときには、妻に電話をします。妻を嫉妬深い悪魔たちのなすがままにして、妄想をたくましくさせるようなことはしないのです。」ヘーラー型の女性は、誰を信頼すべきか、内なる猜疑深いヘーラーなのか、それとも自分の夫なのかを繰り返し決めなければならない。成長するためには、ヘーラーに抵抗し、夫が支えになり、誠実でいてくれることを信じなければならない。

怒りと苦しみを創造的な仕事に変えるヘーパイストス的解決

ヘーラー型の女性が不幸な結婚をしているか、みずからヘーラーの犠牲になって復讐の鬼になることから自由になろうと努力しなければならないとき、一つの可能な解決がヘーラーの息子で鍛冶の神ヘーパイストスの神話によって示唆されている。彼は潜在的な内なる強さを象徴しており、これは女神自身からは拒否されるが、それでもヘーラー型の女性になお開かれているものである。（ヘーラーはもう一人の息子で戦争の神アレースのほうを可愛がった。「母親のように、息子のように」と言われているように、戦場において示すアレースのどうしようもない憤激は、ヘーラーのコントロールのきかない復讐心を映し出している。）

ヘーバイストス（ウゥルカーヌス）は、火山の内部に自分の鍛冶場をもっていた。象徴的には、火山のような怒りが心のなかに収められて、それが創造的なエネルギーに変えられ、武器や芸術作品をつくり出す可能性を表している。

ないがしろにされて怒りに燃えているヘーラー型の女性は、みずからの怒りで燃え尽きるか、敵意に満ちた衝動を心に収めて自分にどのような選択肢がひらかれているかを反省するかの、どちらかを選ぶことができる。もし自分の怒りと嫉妬のために自分がしだいに不具となり、人生の幅が狭められつつあるということが理解できるならば、自分の怒りを仕事に振り向けることができるであろう。彼女は文字どおりヘーパイストス（彼の妻アプロディーテーは、繰り返し彼を裏切った）の例にならい、職人になってもよかろう。粘土をこね、自分がつくったものを釜のなかで焼き、そのようにして、しだいに自分が変わっていったのである。比喩的に言えば、自分の感情の火によって燃えつきるよりはむしろ、職人になるのである。あるいは、すさまじい強さをもつ自分のもろもろの感情を、絵や文章に表現することもできよう。知的な仕事であれ、手仕事であれ、どんな種類の仕事でも怒りを昇華する手段として役に立つ。実際、昇華は怒りで身を滅ぼすよりは、はるかに健康的である。

和解の可能性を見定める― ― 現実と神話

ヘーラー型の女性は、いったん男が自分を見捨てても、その喪失を信じることがむずかしいであろうということを知る必要がある。この種の状況では、彼女は現実を受け入れることが困難で、神話的な結末つまり夫がゼウスのように、自分がいなくて淋しく思い、また帰ってくるものと信じる傾向がある。だが、ヘーラー型の女性とて事実を無視しつづけるわけにはいかない。現実を否定せずに、それを受け入れることが必要である。最終的には和解が訪れるという期待をやめて初めて、彼女は悲嘆にくれた後で、回復し、生きつづけていくことができるようになる。

ヘーラー型の女性の多くは、別の女性のもとに去っていった夫がいつかは戻ってくるかもしれないと期待している。ヘーラーのことを語ったある神話では、この和解が実際に訪れるが、それは彼女がゼウスを見捨てることができるようになってからのことである。すでに指摘したように、この神話では、ゼウスが彼女のこもっている山に行って、女に見せかけた像と結婚式を挙げた。ヘーラーは、この情景を見て楽しみ、その後で和解がおこなわれる。

ここにいくつかの重要な心理学的要素が示されている。第一に、和解するヘーラーはゼウス以上に心が自由になっている。彼女はまた、夫が変わってくれるであろうという期待や、犠牲となって復讐心に燃えるヘーラーの役割からも自由となった。ゼウスは、ヘーラーが自分にとって本当に大切な存在であるということを発見し、このメッセージを彼女に伝えた。おそらく、そうして初めてヘーラーは楽しむことができたのであろう。なぜなら、他のいかなる女性も彼にとって初めからずっと重要な存在であったことはないということが、最後になってわかったからである。彼の情事はどれも（木像と同じく）一つの重要な関係であるよりはむしろ、彼にとっては一つの象徴だったのである。

人生はこの神話のような幸せな終わりかたをすることもときにはあるが、ふつうはそうではない。女性は、別れて暮らしていたからといって、夫の心が変わったわけではないということ、彼が戻ってはこないで、明らかに誰か他の人との関係に深くのめりこんでいるか、彼女から離れられてホッとしているということを知るかもしれない。そのときにこそ彼女は、現実に目を向けることが必要なのである。そのようにして初めて、悲しむこと、そして自分の人生と付き合っていくことができるのである。

自分自身をリサイクルする

一つのサイクルを完結させて、新たな気持ちで始める可能性がヘーラーの神話に含まれている。すでに指摘したように、毎年行われる崇拝のサイクルでは、この女神は春には乙女ヘーラーであり、夏と秋には願いが成就した女ヘーラーであり、冬には未亡人ヘーラーである。毎年春になると、彼女は処女にかえり、サイクルが新たに始まった。この元型的な可能性を理解することによって、不幸な結婚をしているヘーラー型の女性は、空虚さ、虐待もしくは不実だけをもたらす関係を後にして、感情の面で自分を「未亡人」にすることができる。それから気分を一新して出発し、今度は賢明な選択ができる。新しい結婚では、妻になりたいという彼女の心からの願いは、ポジティブな仕方で成就されうる。

このサイクルは、もし女性が妻になりたいという欲求や、妻としての役割を通して自分の願いが成就されるという期待から自由になるならば、一つの内的経験として生きられるかもしれ

ない。たとえば、未亡人となっているある老婦人は、月経が停止してから十年もたってから、再び月経が始まった夢を見て、この夢はまさに象徴的に何かを語っていると悟った。自分が一つの全体であり、人生の新しい段階の敷居に立っていることを感じた彼女は、心理学的に言って再び乙女となったのである。

9

穀物、養育者、母の女神デーメーテール

女神デーメーテール

穀物の女神デーメーテールは豊作を主宰した。ローマ人たちは、彼女のことをケレースと呼んだ。cereal はこれに関係している。ホメーロスの『デーメーテール讃歌』では、彼女は「美しき髪……と黄金の剣をもてる畏き女神(1)」（おそらく彼女を象徴する一束の実った麦を詩的に表現したものであろう）と形容されている。彼女は、髪が黄金色で青いローブを着た美しい女性として、あるいは（彫刻で非常によく見られるのだが）既婚夫人のように品良く腰をかけている人物として描かれている。

デーメーテールという名前の一部 meter は、「母親」を意味しているようである。しかし、de- あるいはそれ以前の da- が何を意味しているかは、必ずしも明らかではない。彼女は母神、特に穀物の母、および乙女ペルセポネー（プロセルピナ）の母親として崇拝された。

デーメーテールの生涯はヘーラーの生涯と同じく、陰うつに始まった。彼女はレアーとクロノスとのあいだに二番目に生まれ、クロノスに飲み込まれた子供であった。デーメーテールは、兄でもあるゼウス（ユーピテル）の四番目の后であり、ヘーラーに先立っている。ヘーラーは七番目で最後の后であったからである。この結びつきから、ゼウスとデーメーテールの一人っ子である娘ペルセポネーが生まれ、彼女とデーメーテールは神話と崇拝によって結ばれている。

ホメーロスの長い『デーメーテール讃歌』に美しく語られているデーメーテールとペルセポネーの物語は、デーメーテールの兄で地下の神ハーデースによるペルセポネーの誘拐にたいするデーメーテールの反応をめぐっている。この神話が下地となってエレウシースの秘儀がおこったが、これは二千年以上にわたって古代ギリシアのもっとも神聖かつ重要な宗教的儀式であった(2)。この崇拝は、紀元五世紀に侵入してきたゴート族がエレウシースにある神殿を破壊したために終わりを告げた。

ペルセポネーの誘拐

ペルセポネーは仲間と一緒に牧場で花を摘んでいたとき、一本の驚くほど美しいスイセンの花に心ひかれた。それを摘もうとして手を伸ばしたところ、目の前の地面がぱっくりと口を開いた。大地の深みからハーデースが黒い馬に引かれた黄金の戦車に乗って現れ、彼女をひっつかみ、来たときと同様に、すばやく深淵を通り抜けていった。ペルセポネーは抵抗し、ゼウスからの救いを求めて叫んだが、何の助けもこなかった。

デーメーテールは、ペルセポネーの叫びがこだまするのを聞いて、彼女を探しに走った。彼女は誘拐された娘を求めながら、九日九夜、陸と海のすみずみを探した。我を忘れて探し求め、食べたり眠ったり水浴するために立ち止まることもしなかった。

（別の神話では次のことが付け加えられている。デーメーテールが誘拐された娘をむなしく探しているとき、彼女は海の神ポセイドーンに見そめられ、追われることになった。彼女は姿を雌馬に変え馬の群にまじることで彼をかわそうとしたが、ポセイドーンはこの変装に惑わされず、一頭の種馬に変身し、馬の群のまっただなかに彼女を見つけてレイプした。）

十日目の夜明けにデーメーテールは、新月と十字路の女神ヘカテーに出会った。ヘカテーは一緒に太陽の神ヘーリオス（アポローンとこの称号を分かちもつ自然神）のもとに行くようにと示唆した。ヘーリオスは彼女に、ハーデースがペルセポネーを誘拐し、自分の花嫁とするために冥界へと連れ去ったが、彼女がこれに抵抗していると語った。さらに彼は、ペルセポネーの誘拐とレイプはゼウスからの承認を得ていると述べた。彼はデーメーテールに、泣くのをやめてすでにおこったことを受け入れるようにと言った。ハーデースが、結局のところ「義理の息子としてふさわしくなくはない」からだということであった。

デーメーテールは、彼の忠告を拒否した。彼女はいまや、悲しみだけでなく、怒りをおぼえた。ゼウスに裏切られたからである。彼女はオリュムポスの山を下り、老婆に姿を変えて人に知られることなく町や田舎をさまよった。ある日、エレウシースに着いて井戸の近くに座っていたところ、エレウシースの支配者ケレオスの娘たちの目にとまった。彼女の振る舞いや美しさから感じられる何かが娘たちの心をひいたのである。デーメーテールが娘らに、自分が乳母としての仕事口を捜しているということを話すと、彼女らはデーメーテールを母親のメタネイラのところへ連れていった。デーモポーンという名のとても可愛い弟が最近生まれたからである。

デーメーテールに世話されながら、デーモポーンは成長して神のようになった。彼女は彼をアンブロシアー（神の食物）で育て、ひそかに火のなかに入れた。メタネイラがそれを目撃して、恐れのあまり叫ばなかったら、彼は不死の存在になっていたであろう。デーメーテールは逆上してメタネイラの愚かしさを罵り、自分の正体を明らかにした。自分がデーメーテールであると告げるとすぐ、女神は大きさと姿を変えて、神としての自分の美を啓示した。彼女の黄金の毛は肩にかかり、彼女のふくよかな匂いと明るさが宮殿を光で満たした。

デーメーテールは自分を祀る寺院を建てるようにと命令した。そこに彼女は腰をおろして、誘拐された自分の娘のことを思って悲しみにくれ、女神として働くことを拒否した。その結果、何も生まれ成長することができなくなった。飢饉がおそって人類が滅びそうになり、オリュムポスの神々と女神たちは、自分たちに捧げられる供え物と生贄を奪われた。

とうとうゼウスは黙って見ておれなくなり、まずみずからの使者イーリスを派遣して、デーメーテールに戻ってくるようにと懇請した。デーメーテールが依然心を動かさなかったので、ついにオリュムポスの神々が贈り物と名誉を携えてやってきた。怒り狂っているデーメーテールは、どの神にも次のことを知らせた。ペルセポネーが自分のもとに返されるまでは、自分はオリュムポスの山の地に足をつけることもなければ、いかなるものも成長させることはしないであろう、と。

最後にゼウスが応えた。彼は使者神ヘルメースをハーデースのもとに派遣し、ペルセポネーを母のもとに戻すようにと彼に命じた。「彼女の母親がこの目で娘の姿を見れば、怒りを捨てるだろう」からであった。ヘルメースは冥界へ行き、ハーデースが、沈んだ面持ちのペルセポネーのそばの寝椅子に座っているのを見た。

自由の身となって行けることを聞いてペルセポネーは、喜びのあまり飛び上がってヘルメースについて行った。しかし初めにハーデースは、彼女に甘いざくろの実を与えて、それを彼女は食べていたのである。

ヘルメースはベルセポネーを家に帰すためにハーデースの戦車を借りた。馬たちは冥界から

天上の世界へすばやく飛び、デーメーテールが待っている寺院の手前で止まった。彼らを見てデーメーテールは走り寄り、娘を抱きしめるために腕を大きく広げた。娘も同じように喜んで、母親の腕のなかに飛びこんだ。それからデーメーテールは、ペルセポネーが冥界で何かを食べなかったかどうか不安げにたずねた。もし食べていなければ、ペルセポネーは完全に母親の懐に戻っていたことであろう。しかし、ざくろの実を食べていたために、一年の三分の二をデーメーテールと共に過ごし、残りはハーデースと共に冥界で過ごすことになる。

母親と娘が再び結ばれてからデーメーテールは、豊鏡と成長を大地に回復させた。それからエレウシースの秘儀を設定した。これは畏れにみちた宗教的儀式で、それにあずかったものは外部にそれを明かすことを禁じられた。この秘儀を通じて人々は、喜びのうちに生き、死を恐れることなく死ぬ理由を獲得した。

デーメーテール元型

デーメーテールは母親元型である。彼女は妊娠、あるいは他の人々にたいする物理的、心理的、もしくは霊的栄養の提供によって成就される母性本能を表している。この力強い元型は、女性がどのような人生を送るかを決定し、彼女の人生において出会う他の人々にかなりの衝撃を与える力をもっている。そして育てたいという自分の欲求が拒絶されたり邪魔をされるなら、抑うつ状態に陥るように定めているのである。

母親

母親元型はオリュムポスの山ではデーメーテールによって代表された。彼女のもっとも重要な役割は（ペルセポネーの）母親、（穀物の女神として）食物の提供者、霊的栄養（エレウシースの秘儀）の提供者としての役割であった。他の女神たち（ヘーラーとアプロディーテー）も母親であったが、娘はデーメーテールがもっとも重要な関係を結んでいる相手であった。彼女はまた、女神たちのなかでもっともよく育ててくれる女神でもあった。

デーメーテール元型が強い女性は母親になりたがる。いったん母親になると、それが自分の欲求にぴったりであることを発見する。女性の心のなかでデーメーテールがもっとも強い元型であるとき、母親であることが人生でもっとも重要な役割であり、かつ機能となる。母と子のイメージ（西洋の美術では聖母と子どもとして描かれることがもっとも多い）は彼女の心を深く動かす内なるイメージに対応している。

母親元型に動かされて女性たちは、他の人々を養い育て、寛大な気持ちで与え、世話をやいたり、提供することに満足をおぼえる。それゆえ、デーメーテール元型の養育的側面は援助職（教育、看護、カウンセリング、その他、人々を助けることがその役割に含まれているあらゆる職業）を通じて、そして自分が養育者になることができるどんな関係においても表現されうる。この元型は、母親であることに限定されないのである。

母性本能

生物学的レベルでは、デーメーテールは母性本能、すなわち妊娠して赤ん坊を産みたいという欲望を表している。女性たちのなかには、ものごころがついた頃からそれを願ってきた人もいる。

デーメーテール元型は有無をも言わさずに女性を妊娠させる力である。女性は、この本能がいかに強いかをはっきりと自覚して、自分がこの深い欲望をいつ成就するかを決めることができるかもしれない。しかし、デーメーテールに動かされていることに気づいていないならば、偶然、妊娠していることがわかることになるかもしれない。

計画していなかったのに妊娠していることを発見してから何がおこるかを見れば、この元型がある特殊な女性にいかに強くはたらくかということがわかる。中絶がもっとも分別があるか、責任のある行動であることが明らかなとき、デーメーテール型でない女性は中絶する方向に取り計らい、その後でホッと感じることができる。そしてそれから以後は、二度と偶然に妊娠することがないように万全の注意を払うであろう。これと対照的に、デーメーテールが強い影響を及ぼしているとき、中絶がその女性の利害にもっともかなっているにもかかわらず、中絶しないかもしれない。中絶は、子どもが欲しいという深い内面からの命令にさからうからである。その結果彼女は、中絶するよりはむしろ子どもを産み、その結果まったく違った人生を歩むことになるかもしれない。

もし中絶を決心するならば、彼女はその選択のプロセスと手術のあいだ、そしてその後も葛藤と苦悩を経験するであろう。彼女は安心よりもむしろ悲しみ、あるいはこのような感情が入り混じっているのを感じるであろう。ついには、このような大変な不幸をくぐり抜けてしまうと、このタイプの女性は、そのようなことが二度とおこらないようにするであろう。しかし、しばしば事実はその反対である。彼女は妊娠、ごたごた、中絶、抑うつのサイクルを繰り返す。なぜなら、妊娠したいという衝動は、ひとたび妨げられると、以前にもまして強くなるからである。

デーメーテールの母性本能は、生物学的な意味で母親になるということや自分の子どもたちだけを養い育てることに限定されない。里親になったりベビーシッターになることで、自分の子どもたちが成長したり、去ってからでも母性本能を表現しつづけることができる女性は多い。女神自身、デーモポーンとの関係でこの役割を果たした。特別に里親の才能がある女性として評判のエミリー・アプルゲイトというサンディエゴの女性は、デーメーテールのこの側面を地でいっている(3)。彼女は、栄養失調か病気のために生存が危ぶまれているメキシコ人の赤ん坊たちの世話をし、彼らを家に連れてきて、自分の三人の息子と一人の養女がいる彼女の家族の一員としているのである。彼女は「ママ・セグンダ」すなわち第二の母と言われている。アプルゲイト、それに彼女以上に有名なデポルツ（多くの人種からなるハンディキャップを背負った子どもたちの里親になっている）もそうだが、彼女らは豊かな母性本能と、子どもを育てて成長を促進する能力をもっている。これは、デーメーテール型の女性に典型的に見られることである。

食物の提供者

他の人々に食物を与えるということは、デーメーテール型の女性にとってもう一つの生きがいである。彼女は、自分の子どもの世話をすることに、この上ない満足をおぼえる。家族と客

のためにどっさりとご馳走をこしらえることに喜びをおぼえる。彼らが彼女のつくった料理をおいしいと言ってくれるなら、彼女は自分が素晴らしい母親であるようなあたたかい気持ちにひたる。（これと対照的に、アテーナーならば、自分がグルメのシェフだと感じるであろう。）もしオフィスで働いているなら、彼女は他の人にコーヒーを出すことに喜びをおぼえる。（これとまったく対照的なのは、アルテミス型の女性である。彼女は男たちも自分と同じことをしてくれるのでない限り、命令されているように感じて、それをするのを拒否する。）

穀物の女神であるデーメーテールは、人類に穀物を栽培する能力を与え、自然が実り豊かであるのは彼女のおかげである。同様に、自分で食物を栽培し、パンを焼き、果物を曜語にし、自然の恵みを人々と分かち合うために田舎に引っ込む女性たちも、デーメーテールの母なる自然の側面を表現している。

粘り強い母親

母性的な粘り強さはデーメーテールのもう一つの特性である。このような母親は、いざ自分の子どもたちのこととなれば諦めることを拒否する。障害児のための特殊学級がたくさん存在するのは、自分の子どもが必要とするものを得るためにデーメーテール型の母親が闘ってきたからである。国家警察の手で自分の息子や娘が誘拐されて行方不明になっているアルゼンチンの母親たちも、粘り強さの点でデーメーテールに似ている。マードレス・デ・ラ・プラーサ・デ・マーヨ（五月広場の母親たち）と呼ばれる彼女たちは、自分の子どもを失ったのであるが、諦めることをせず、たとえ危険であっても独裁政治に抗議しつづけた。頑固さ、忍耐、それに我慢は、ゼウスが後悔しながら気づいたように、ついには権力者や制度にまで影響を及ぼすことになるデーメーテールの特質である。

寛容な母親

神話ではデーメーテールはもっとも広い心をもつ女神であった。彼女は人類に農業と収穫を与え、デーモポーンが成長するのを助け、（さらに彼を不死にしようとした）、エレウシースの秘儀を設定した。これらの寛大さの表現はすべてのデーメーテール型の女性に見られる。具体的に食物や身体的な世話を、もって生まれた素質から与える者もいれば、情緒的・心理的な支えを提供する者もいる。またある者は、精神面での栄養を与えてくれる。これまでの多くの有名な女性の宗教指導者は、デーメーテールの特質をもっており、その追随者からは母性的な存在と見られてきた。たとえば、ノーベル平和賞を受賞したカルカッタのマザー・テレサや、クリスチャン・サイエンスの宗教を創始したメリー・ベーカー・エディー、インドにあるアウロビンド・アシュラムの霊的指導者で単に「母」と呼ばれている女性などがそうである。

与えることの、この三つのレベルはデーメーテール型の女性が自分の子どもたちに与えることにも対応している。第一に、彼女の子どもたちは自分の身体的な欲求の世話をしてもらうために母親に依存する。第二に、心の支えと理解を母親に求める。そして第三に、いろいろな悲しみや失望に対処したり、人生に何らかの意味を見出そうとして、母親から霊的な知恵を期待するであろう。

悲しむ母親 ― 気分の落ち込みやすさ

デーメーテール元型が強い力を及ぼしていながら女性がそれを成就することができないとき、彼女は特徴的な「空の巣空虚」抑うつに苦しむであろう。子どもが欲しいのに子どもが生まれないとか、子どもが死んだり、あるいは家から離れるかもしれない。また代理の母としての仕事が終わり、クライエントや学生がいないことを淋しく思うかもしれない。その場合、デーメーテール型の女性は（ヘーラーのように）腹を立てたり、責任があると見なす人々をはげしく攻撃するよりはむしろ、気分が落ち込む傾向がある。彼女は悲嘆にくれ、自分の人生に意味が欠けていて、空虚であると感じる。

イリノイ大学の社会学の教授ポーリーン・バート博士は、『マザー・ポートノイの愚痴(4)』という標題で、抑うつ状態にあるデーメーテール型の女性に関する論文を書いた。バートは、年齢が四十歳から四十九歳のあいだに初めて入院した五百名以上の女性のカルテを研究した。その結果、極端に養育的で過度に関わりすぎて、母親としての役割を失っている母親たちが、もっとも抑うつ状態がきついということを見出した。

病気になる前は、これらの女性たちは犠牲に犠牲を重ねてきた「スーパー・マザー」タイプであった。これらの抑うつ状態にある女性たちからの引用で明らかになるのは、彼女らが人のために世話をやくことにエネルギーを投入しており、自分の子どもたちが去ってしまうと空虚感をおぼえるということである。ある女性は次のように言っている。「母親としてはもちろん、娘に家を出ていってもらいたくはありませんでした。ポッカリと穴があいた感じがしました。」別の女性はこう言っている。「私はすごくエネルギッシュな女だったわ。家は大きかったし、家族もいたし。娘はこう言いましたっけ。『お母さんは、八でいいところを十までするのね。』」何がいちばん自慢かと尋ねられると、彼女らは異口同音に「子供たち」と答えた。自分自身の業績をあげる者は誰もいなかった。母親としての役割がなくなると、生きがいもなくなってしまったのである。

自分の子どもたちが大人になって情緒的あるいは物理的に離れていくために、中年後半の女性が抑うつ状態になり、腹を立てて失望するとき、彼女は悲しみのデーメーテールになる。喪失感にとりつかれ、物事にたいして無関心になる。心理学的成長がストップするのである。デーメーテール元型の悲しみの側面に「とりつかれる」と、同じような病気をわずらっている他の女性たちと実際には変わらなくなる。このような抑うつ状態にある患者は、非常によく似た症状を示す。表情は沈み、座ったり立ったり歩いたりするかと思うと、ため息をつき、苦しそうな様子を見せて、そのために他の人々は防衛的になり、罪悪感を抱き、腹を立て、絶望的な気分になるのである。

破壊的な母親

デーメーテールが悲しみのあまり働くのをやめたとき、何も成長することがなかった。そのため、飢饉が襲って人類は破滅の危機に瀕した。同様に、デーメーテールの破壊的側面は、他の人が求めているものを引っ込めることによって表現される。（これと対照的にヘーラーとアルテミスは、腹を立てると自分から破壊的に行動する。）母親になったばかりの女性が、深刻な抑うつ状態に陥り、母親として機能しなくなると、彼女の子どもの生命が脅かされる。緊急医療室のスタッフや小児科医は「発育不良」と診断するであろう。赤ん坊は体重が増加せず、ぼんやりとしていて、痩せ衰えている。発育不良は、母親が子どもの発育に必要な栄養だけで

なく、情緒的・身体的な接触もさし控えることから生じる。

自分の子どもたちに何日も、あるいはそれよりずっと長い期間にわたって話しかけるのを拒んだり、彼らを孤立させる母親は、このような撤収のかたちを通じて子どもの心を傷つける。この種の母親はふつう自分自身、深刻な抑うつ状態にあって、敵意の気持ちを抱いている。

これらの撤収の極端なかたちよりもはるかにひんぱんに見られるのは、子どもが自分から独立して成長していくにつれて、誉めることを控えるデーメーテール型の母親である。母親の抑うつは、これらの状況では、前にあげた状況に比べてはっきりとは示されないが、（子どもが自尊心を成長させるために必要とする）賞賛を控えるということも抑うつ状態と結びついている。彼女は、子どもの自立性が増していくことを、自分自身にとっての情緒的喪失として経験しているのである。以前に比べて必要とされておらず、拒絶されているように感じており、その結果、気分が沈んで腹を立てているのであろう。

デーメーテールを育てる

そのことを自覚していなくとも、女性は、子どもをもつべきかどうかを真剣に考えるとき、デーメーテールを心のなかに育み、この元型がより活発になるようにしむけている。産むべきかどうかの選択を考えていると、（以前は目に入らなかったようなのだが、いまや常に存在しているように思われる）妊娠している女性や赤ん坊が目につき、子どもがいる人々を探し、子どもたち自身に注意を向けるようになる。これらのはたらきはすべて、デーメーテール型の女性なら自然におこなっていることである。女性は、自分が妊娠していて子どもをもつことを想像して、デーメーテールを心のなかに育てる。妊婦の存在に気がつき、赤ん坊を抱き、子どもたちにたっぷりと注意を払うにつれて、この元型が心のなかに呼び出されてくる。デーメーテール元型をたやすく呼び出すことができるならば、母性本能の強さをテストしようという努力がなされるかもしれない。他の場合ならばそうではない。

女性はギアをチェンジして、ある特定の子どもに向かって、より母性的になろうとするか、特定の子どもに愛されたいと思うかもしれない。その子どもは女性の心のなかにあるデーメーテール元型を引き寄せるか、布置しているのである。子どもにたいする感情に動かされて彼女は、以前に比べて我慢強くなるように努力したり、子どものために辛抱強くなろうとする。実際の様子からも、より母性的になり、そうなるように努力するにつれて、デーメーテール元型が彼女の心のなかで育っていくのである。

デーメーテール型の女性

デーメーテール型の女性は徹頭徹尾母性的である。人間関係では相手を養い、支え、助け、おしみなく与える。しばしば婦人慈善家であり、必要と思われるものなら何でも提供する。たとえばチキンスープ、抱擁、友人に困難を乗りきらせるためのお金、「困ったらお母さんの元に帰っていらっしゃい」という永遠の招待状など。

デーメーテール型の女性の周りにはしばしば母なる大地のオーラがある。彼女は気持ちが

しっかりしていて頼りがいがある。彼女のことを「地に足がついている」と言い表す人もいる。必要なことをするとき、実践性とあたたかみをミックスさせておこなうからである。ふつうは寛大で、外界に心が開かれていて、利他的であり、個々人や原理にたいして忠実であり、そのためしまいには彼女のことを頑固だと言う人もでてくるぐらいである。彼女は強い確信をもっており、自分にとって重要な何か、あるいは誰かに関わっているときには扱いにくい。

子ども時代

幼い女の子のなかには、明らかにデーメーテールの芽生えを思わせる者がいる。腕のなかで赤ちゃん人形をゆすっている「小さな母親たち」である。（子どものヘーラーはバービー人形やケン人形を好み、子どものアテーナーはガラスケースに歴史上の人物の人形を集める。）子どものデーメーテールはまた、ほんものの赤ちゃんも抱きたがる。九歳か十歳ともなると、隣人のベビーシッターをやりたがる。

両親

デーメーテール型の女性が両親と持つ関係は、女神デーメーテールが自分の両親とどのような関係をもっていたかを見ればよくわかる。女神デーメーテールはレアーの娘、ガイアの孫娘であった。ガイアは最初の母なる大地で、彼女からあらゆる生命が生まれた。大空の神ウーラノスもそうで、彼はガイアの夫になった。レアーも大地の女神として知られているが、彼女はオリュムボスの神々の最初の世代の母親としてもっとも有名である。

穀物の女神としてのデーメーテールは、豊饒性に関わる女神たちのラインに連なっている。他の面でも、彼女は母と祖母に似ている。たとえば、三人とも自分の夫が子どもたちを傷つけたとき苦しんでいる。ガイアの夫は、子どもたちが生まれたとき子どもたちを彼女の体のなかに埋めた。レアーの夫は、生まれたばかりの子どもたちを飲み込んだ。そしてデーメーテールの夫は、自分の娘が冥界に誘拐されるのを黙認した。三人の父親はみな、父親としての感情に欠けていたのである。

三世代にわたって、これらの母神たちは苦しんだ。夫よりは権力がなかったために彼女たちは、夫が子どもたちを傷つけるのを止めることができなかった。しかし虐待を受け入れることは拒否し、子どもたちが自由になるまで頑張った。もっとも重要な絆が夫と妻の関係であるヘーラーと違って、これらの地母神たちのもっとも強い絆は母子関係であった。

母性的な女性が父性的でない男性と結婚すると、現実の人生もデーメーテールの神話に似てくる。このような状況では、デーメーテール型の娘は、母親と同一化し父親とはつながらないままに成長する。子どもたちにたいする父親の態度は、無関心から競争と恨み、さらには虐待に至るまでさまざまである。もし彼が子どもたちのことを、妻の愛情をめぐるライバルと見る場合のことであるが。このような家庭では、デーメーテール型の娘は自尊心を傷つけられ、犠牲者の態度を発達させる。あるいは、デーメーテール型の娘は母性的な特質をもっているために、親との関係で役割を逆転させるかもしれない。ある程度の年齢になればすぐに彼女は、親の面倒を見たり弟たちや妹たちのために代理の親になるであろう。

これと対照的に、デーメーテール型の娘の父親が愛情深くて彼女のことを誉めるならば、彼

女は自分自身がよい親になりたいという自分の願いを親が支持してくれていると感じながら成長するであろう。彼女は男たちを肯定的に見、夫に期待をもつであろう。元型的には犠牲になるという傾向はあったとしても、子ども時代の経験によってそれが強められることはないであろう。

思春期と大人になりたての頃

思春期になると、元型的な母性的衝動がホルモンからのあおりを受けて増大し、自分自身の赤ちゃんをもつことが生物学的に可能となる。そうなると、デーメーテール型の女の子のなかには、妊娠したがる者も出てくる。生活の他の側面がむなしく、また自分自身あまりかまわれていない子どもであるなら、セックスを強要されて妊娠したデーメーテール型の少女は、子どもが欲しいと思うであろう。未婚の母親たちの施設にいる十四歳のある少女は、こう言っている。「私の年齢の他の女の子たちはバイクか何かを欲しがっているけど、私の欲しかったのは、いつも、自分の赤ちゃんだったの。だから妊娠できて、私、幸せだわ。」

しかしながら、デーメーテール型の少女は、たいてい、妊娠しない。結婚して妻になりたいというヘーラーの深い願望や、アプロディーテーのエロティックな衝動がなければ、デーメーテールは早い時期に性的な経験をもつようには心を動かされないからである。

デーメーテール型の女性の多くは若くして結婚する。労働者階級の家庭では、女の子は高校を卒業するとすぐに結婚するように促される。家族からのこの期待は、教育や仕事よりはむしろ家族をもちたいという少女自身のデーメーテール的傾向と一致するであろう。

もしデーメーテール型の少女が結婚して家庭生活を始めることをしないならば、彼女は働き始めるか大学へ行くであろう。大学ではおそらく、援助職養成のコースをとるであろう。聡明で勉強に熱心であるとしても不思議ではないが、典型的なデーメーテール型の女性は野心的でも知的でもなく、よい成績をとろうとして競争することもない。ヘーラー型の女性が重要と見なす地位は、デーメーテール型の女性にとっては、取るに足らない。彼女の友人はしばしば、社会的にも人種的にも幅広い範囲から選ばれる。彼女は、不安な思いで暮らしている外国人学生を心地よい気持ちにさせ、身体障害の学生や社会に適応できずにいる人を助けようとして、出世コースからはずれようとする。

仕事

デーメーテール型の女性は母性的な素質をもっているために、人を育てたり援助したりする職業につく。彼女は教育、ソーシャルワークあるいは看護といった「伝統的に女性の」仕事にひきつけられる。人々がよくなったり、成長するように助けることは、デーメーテールが存在しているときには満足を与え、根底から心を動かすものとなる。心理療法家、理学療法士、リハビリテーション・セラピスト、あるいは小児科医になる女性はしばしば、職業選択のうえでデーメーテール的傾向を表現している。保育園や小学校、病院や養護施設でボランティアをしている女性の多くも、自分のデーメーテール的傾向をはたらかせているのである。

デーメーテール型の女性のなかには、組織の重要人物となっている者がいる。組織は彼女らから母性的エネルギーを受け取っているのである。このような状況にいる典型的なデーメーテール型の女性は、その人柄によって周りの人々に深い感銘を与える。彼女は組織を構想して

設立し、かなりのエネルギーを投入し、初期の成功は彼女のおかげかもしれない。

組織を設立したり、その指導的な立場にいるデーメーテール型の女性が相談をしにくる場合には、いくつかの理由がある。すなわち、組織のために非常な労力を費やすために、他のことをするための時間やエネルギーが実質的には少しも残っていない。（ヘーラーも存在しているなら）妻になりたいとか、自分自身の子どもが欲しいという個人的な願いが満たされない。自分の心のなかで、そして自分と自分が監督している人々とのあいだに葛藤がおこる。なぜなら彼女は、自分自身を見つめながら同時に他の人たちからは頼りになる存在と見られている牽引車だからである。たとえば無能な従業員に非難の言葉を浴びせたり、問題を突きつけたりすることは、彼女にとってむずかしい話である。その人にすまないと感じたり、苦しい思いをさせて申し訳ないと思ったりするからである。さらに、従業員たちは個人的に自分たちの面倒を見てくれることを彼女に期待し（このようなことを彼らはふつう男性の上司には期待しない）、彼女が期待どおりに行動してくれないときは、いつも腹を立てる。

対女性関係

デーメーテール型の女性は男性に関しても業績に関しても、他の女性たちと競争することがない。他の女性たちを妬んだり、嫉妬する場合は必ず子どもをめぐっている。子どものいないデーメーテール型の女性は、自分と同年齢で母親になっている女性たちと比較しては、惨めな気持ちになる。もし子どもができないからだであれば、他の女性が妊娠したということだけですぐに苦々しい気持ちになる。とくに彼女らが中絶をするなら、なおさらそうである。晩年になって、大きくなった子どもたちが家を離れたり、感情面で疎遠になったりするなら、彼女は自分の子供と頻繁に接触している母親を羨ましく思うであろう。人生のこの段階になると、二十五年もたってから羨望がふたたび表面に現れてくるかもしれないが、そのときは孫をめぐってである。

デーメーテール型の女性はフェミニズムと女性運動に関して入り混じった気持ちを抱いている。デーメーテール型の女性の多くは、母親の役割をおとしめているという点でフェミニズムに腹を立てている。彼女らは二十四時間母親でいたいと思っているのに、家庭の外で働くようにプレッシャーをかけられているように感じるのである。他方、デーメーテール型の女性は、多くの女性問題を強く支援している。たとえば、子どもたちを虐待から守るとか保護するとか、虐待されている女性たちに避難所を提供するといったことがらである。

通常デーメーテール型の女性は、他のデーメーテール型の女性と固い友情を結んでいる。このような友情は、彼女らが一緒に母親になった頃にまでさかのぼる。精神的な支えにしても、具体的な援助にしても、彼女らの多くは、自分の夫によりは女友達に頼る。たとえば、ある女性は次のように言っている。「私が入院していたときのことですが、友人のルースが子どもたちを見てくれて、夫のジョーに毎晩夕食をつくってくれました。……二週間ものあいだ九人の子どもの面倒を見てくれたのですよ。自分の四人の子ども、そして私の五人の子ども、それに三人の大人も。……私だってルースのためなら同じことをしていたでしょうね。」典型的なことであるが、この女性は自分がいないときに、夫に家の仕事と子どもの世話を期待するよりはむしろ女友達に助けてもらったのである。

家族の内部では母親と娘がすべてデーメーテール型の女性であった場合、彼女らの固い結束

は何世代にもわたってつづく。これらの家族は顕著に母権制の特徴を示す。そして家族のなかにいる女性たちは、拡大家族のなかで何がおこっているか、夫よりもはるかによく知っている。

この母娘関係のパターンは、同年齢の者たちとの関係でも繰り返される。彼女は、経験がなくて決断力に乏しいペルセポネー的な友達との関係で、デーメーテール的な母性的役割を果たす。あるいは二人ともがデーメーテール型の女性で、ペルセポネーの性質をも分かちもっているなら、彼女らはかわりばんこにお互いにマザリングをし合い、別のときには二人ともがデーメーテールになって、自分たちの生活の細々したことを分かち合い、嬉しいことや困難なことを語り合う。しかしまた、二人ともふざけてくすくす笑うペルセポネーでもある。

レズビアンのカップルがデーメーテールとペルセポネーのパターンにはまっていることがある。そこでは、デーメーテール型の女性の幸せは、年下か未熟な恋人との関係が壊されないことに基づいている。二人が一緒でいる限り、デーメーテール型の女性は生産的で実りある人生を送っていると感じる。彼女の仕事と創造性は、自分にとって女神のような一人の女性と一緒にいる結果として生まれてくる。彼女は自分のペルセポネーを失いはしないかと心配になれば、独占欲が強くなる。そして依存性と排他性を助長するが、そのためについには関係そのものが損なわれることになる。

しかしながらペルセポネー型の女性のパーソナリティは幼く、未分化である。彼女に関してはどんなことも、まだ形をなしていず、不明確である。彼女は受け身的で女らしい女性であり、その性的な好みは彼女の残りの部分と同じく、どのようにでも鍛えられる。仮にたとえば、レスビアンの関係にあっても、男性にも心ひかれるかもしれない。もし、ある男性が注意を払ってくれることに反応して異性愛が芽生え、ベルセポネー型の女性がデーメーテール型の恋人を見捨てるならば、デーメーデール型の女性は、まるで神話を地でいくかのように感じる。思いがけないことに、彼女のペルセポネーが「ハーデースに誘拐された」のであり、これは、デーメーテール型の女性にとって致命的な喪失である。

対男性関係

デーメーテール型の女性は、母性的な女性に親しみをおぼえる男性をひきつける。正真正銘のデーメーテール型の女性は、そもそも選ぶことをしない。彼女は男性が自分を必要としてくれることに反応し、彼のことが可哀相だと思うだけでも男と一緒になる。デーメーテール型の女性は男性にそれほど期待しない。これよりもっと見受けられることであるが、彼女らは「男なんて、ただの可愛い坊やだわ」と感じている。

女性がデーメーテール型である、ありふれたタイプのカップルは、息子のようでかつ恋人である男性と結ばれているグレート・マザーのパターンにはまっている。この元型的な母息子関係は、男の方が年下であるが、年齢差は関係ない。ふつう彼は、才能がある感受性の豊かな男性で、（彼女と違って）彼のユニークさを大切にせず、彼の無責任さを見逃さない他の人々から無視されたり、誤解されたりしていると感じている。一人の男性であるというよりはむしろ、変わった人間だという感じを抱いている未熟で自己に陶酔している少年である。彼女は彼の自己評価に同意し、他の人々が利己的だとか無思慮だと考える自分にたいする行動を何度も見逃す。

彼女にしてみれば、世の中は彼にたいして不親切であり、彼女と同様に世の中も彼を例外扱いしてあげねばならないというのである。彼の分別のなさは、しばしば彼女を傷つけ怒らせるが、自分がどれだけ彼女のことを評価しているか、あるいは彼女が彼の人生で本当に自分のことを思ってくれるただ一人の人であることを彼女に告げるならば、すべては再び許される。

ハンサムな息子をもった母親は、自分がどうしてこんな初々しい神を生むことができたのだろうかと不思議に思う。それと同様に、息子でかつ恋人である男性を愛するグレート・マザーの役割を演じているデーメーテール型の女性も、彼の容貌（あるいは彼の才能）に神聖な恐れの気持ちを抱く。あるデーメーテール型の女性が私に言ったことであるが、「彼はまるでミケランジェロのダビデの像のように見えました。私は彼の世話をしていることで幸せでした。そのために彼はとても甘えん坊になってしまいましたわ。」彼女はこのことを苦々しい思いよりはむしろ、誇り高く語った。

デーメーテール型の女性は母性的な性質をもち、ノーを言うことがむずかしいために、デーメーテール型の女性との関係でしばしば見られるもう一つのタイプの男性である社会病質の人間に利用されやすくなる。デーメーテールと社会病質者との関係は、表面的にはグレート・マザーと息子‒恋人との関係に似ており、重なる面もあるが、息子‒恋人には、愛したり、忠実であったり、あるいは後悔する能力がある。社会病質者にはこれらの能力が欠けており、この点が決定的な違いである。社会病質者は、世の中は当然自分を受け入れるべきだという仮定のもとに行動する。彼は、人と情緒的に親しくなったり、人を大切にすることができない。彼の態度は、「おまえは最近私のために何をしてくれたか」という問いを暗示している。彼は、過去に自分が人をくいものにしたことだけでなく、デーメーテール型の女性がどんなに寛大な心を示してくれたり、犠牲を払ってくれたかを忘れてしまう。彼は自分の欲求をおおげさにし、まさにこの物欲しげなところが、寛大なデーメーテール的反応を呼びおこすのである。社会病質者との関係は、何年にもわたってデーメーデール型の女性の感情生活を縛りあげ、お金もしぼりあげるかもしれない。

デーメーテール型の女性が結ばれるもう一つの典型的な連れ合いは、「父親と結婚した女にそっくりの女の子」を欲しがる男性である。小さなオイディプースとしての彼は、ただ運命に甘んじてきただけなのかもしれない。つまり、これまでは自分のお母さんと結婚したがっている四歳か五歳の男の子であった。ところがいまでは大人の男性になり、自分にとっていいお母さんになってくれるような母性的な女性を探し求めるのである。彼が彼女に望むもの、それは養育、あたたかさ、反応、世話、料理、衣服の購入と手入れ、必要なときには医者や歯医者へ行くようにという保証、そして彼の社会生活への気配りである。

デーメーテール的な性質の女性にひかれるあらゆる男性のなかで、成熟して心が広いのは「家庭的な男性」だけである。この男性は家族をもちたいという願望に強く動かされており、デーメーテール型の女性のなかに、その夢を分かち合えるパートナーを見る。彼らの子供たちにとっての「よい父親」になるだけでなく、このタイプの男性は妻の面倒もよく見る。もし彼女が、デーメーテール的な善良な性質を利用しようとする人々にノーを言えなくて困っているならば、彼は彼女の味方をすることができる。

家庭的な男性は、彼女が子どもを産むことを通じて自分の願いを成就するのも助ける。それ以外の三つのタイプの男性は、子どもということを考えただけで恐れを抱き、もし彼女が妊娠

するなら、中絶するように主張する。男の側が中絶に固執するために、彼女は母性の危機に追い込まれる。すなわち、自分が母親のように世話をしている男性を拒むか、それとも母であることを拒むかのどちらかを選ばねばならなくなるのである。この選択のために彼女は、自分がまるで二人の子どものうちの一人を犠牲にしなければならないという不可能な選択を言いわたされた母親のように感じる。

セックス

デーメーテールが女性のパーソナリティのなかでもっとも強い女神の要素であるとき、セックスはそれほど重要なものではない。デーメーテールは通常、強い性的欲望をもたない。彼女はしばしば、セックスが抱擁とまったく同じ意味をもつ、あたたかくて愛情あふれる女性的な人間であり、セクシーな女性というよりはむしろ「ハギー（huggy）」（訳注　抱擁を意味する“hug”からつくられた形容詞）な女性というべきであろう。デーメーテール型の女性の多くは、セックスにたいして潔癖な態度をもっている。彼女らにとってセックスは生殖のためであって快楽のためではない。デーメーテール型の女性のなかにはセックスを、与えたり養育するという脈絡のなかで妻が提供するものとして考えている者もいる。彼女は夫が必要としているものを与えているのである。そしてデーメーテール型の女性の多くは「罪深い」秘密を自分自身にとっておいている。つまり、彼女らにとってもっとも官能的な身体的行為は、赤ん坊に乳を飲ませることであって、夫とセックスをすることではないのである。

結婚

デーメーテール型の女性にとって結婚それ自身は、ヘーラー型の女性と違って、あらゆるものにまさる重要なものではない。たいていのデーメーテール型の女性が結婚をしたいと思うのは、主として子どもをつくるためである。アプロディーテーやヘーラーが元型として活発にはたらくのでない限り、デーメーテール型の女性は結婚を、子どもに至る道を切り開くために必要な単なる一つのステップ、そして子どもをつくるためにいちばんいい状態と見なしている。

子ども

デーメーテール型の女性は、生物学的な母親になりたいという深い欲求をおぼえている。彼女は、自分の子どもを産んで育てたいと願っており、慈愛にみちた里親、養親あるいは継母になるかもしれないが、自分の子どもをもつことができなければ、ある深い憧れが満たされず、自分が不毛であるように感じるであろう。（これと対照的に、アルテミス型あるいはアテーナー型の女性は、子持ちの男性と結婚することによって、すでにできあがっている家族をたちどころに相続するであろう。）

デーメーテール型の女性はきまって自分が、子どもたちにとっていちばんためになることを考えているよい母親であると思っている。しかしながら、彼女らが子どもたちにどのような衝撃を与えているかという点から見ると、デーメーテール型の女性は素晴らしく有能な母親か、あるいは恐ろしい、すべてを食い尽くす母親のどちらかであるように思われる。

大人になった子どもたちが彼女に腹を立てるとき、デーメーテール型の女性は深く傷つき、混乱する。他の母親たちは子どもたちから愛され、評価されているのに、どうして自分が子ど

もたちからはひどい扱いを受けるのか彼女には理解できない。自分が子どもたちを困難な状況に追い込んでいるということも理解できない。彼女に意識されるのは自分のポジティブな意図だけであり、子どもたちとの関係を破壊しているネガティブな要素ではない。

デーメーテール型の母親が、子どもたちに良い影響を及ぼしてきたかどうか、そして彼らから良いように評価されるかどうかは、彼女が「誘拐前」の女神デーメーテールであるか、それとも「誘拐後」の女神デーメーテールであるかどうかにかかっている。ペルセポネーが誘拐される前のデーメーテールは、（ペルセポネーが牧場で遊んでいるとき）すべてがうまくいっていると信じており、せっせと自分の仕事をしていた。誘拐されてからのデーメーテールは、落ち込んで、腹を立て、オリュムボスの山を去って、仕事をしなくなった。

「前の」段階は現実の人生では多くの形をとる。末の子どもが家を出て巣が空になっていることに直面し、まるで生きがいが「奪われた」かのように感じている女性にとって、前段階は、二十五年間かそこら続いた親密で思いやりにあふれた家族生活であった。娘が自分に挑戦し、自分の目からすれば誘拐するハーデースのように見える男性と暮らしている女性にとって、以前の段階は、娘が自分と同じ価値観をもって将来に希望をかける自分自身の延長であるように思われていたときである。

デーメーテール型の女性のなかには、自分の子どもに何か悪いことがおこらないか、いつも恐れている者がいる。これらの母親たちは、まるで子どもが生まれたときから「誘拐」の可能性を予感しているかのように振る舞う。その結果、彼女らは子どもの独立心に制限を加え、他の人々と関係を結ぼうとする意欲をくじく。このように彼女らを振る舞わせている不安の核心にあるのは、子どもの愛情を失いはしないかという恐れである。

環境もデーメーテールのネガティブな側面を活性化するのに関わっている。ある女性が思い出したことだが、娘が生まれてからの六年間、彼女はまるで神の恵みを受けているかのように生きてきた。この世界は安全そのもので、母親としての仕事は自分の願いをかなえ、面白かった。それから、大地がぱっくりと口を開けてハーデースが現れてきたのと同じくらいに恐ろしくかつ唐突な出来事がおこった。ある午後のこと、母親は娘をベビー・シッターに預けた。娘はある隣人の家に迷いこんで、性的にいたずらをされたのである。その後、子どもは恐怖と不安をもつようになり、悪夢にうなされ、男にたいしてびくびくするようになった。自分の父親にたいしてさえもそうであった。

母親は激怒し、悲しみ、そしてうしろめたく思った。なぜなら、その場に居合わせていなかったために、その出来事を食い止めることができなかったからである。以前は寛大な心で子どもを信頼し、どちらかといえばきさくな態度で子どもの世話をしていた。しかしその事件以後は罪悪感と責任を感じ、自分自身に確信がもてなくなり、何か悪いことがまたおこるのではないかと心配した。彼女はコントロール過剰で過保護になった。彼女の喜びと自発性、安心できる世界に生きているという感覚、自信がなくなった。

デーメーテール型の母親は子どもを逆境にさらすどんな出来事にたいしても罪悪感をおぼえる。完全な母親でなければならないという自分の非現実的な期待に何らかの洞察がひらけるまでは、彼女は自分が全知全能で、出来事を予測し、子どもをあらゆる苦しみから保護することができなければならないと考えている。

自分の子どもを守ろうという意図から、デーメーテール型の女性はコントロール過剰にな

る。彼女は子どもが何かするごとに、その周りをうろつき、子どものためを思って中に入り、子供が傷つく可能性があるときは必ず自分が替わりを引き受ける。その結果、子どもはいつまでたっても、人々やいろいろな問題に取り組むうえで母親に頼ることになる。

コントロールするデーメーテール型の母親をもった子どもたちは、いつまでたっても彼女にぴったりとくっついたままでいることがある。心理学的なへその緒がまだ切られていないのである。母親のパーソナリティに支配されているために、お母さんの可愛い男の子や女の子のままで大人になってしまう。このような子どものなかには、一度も結婚しない者もいる。仮に結婚するとしても、彼らはしばしば、夫婦の関係よりも強い親子の絆を維持する。たとえば、デーメーテール型の母親をもつある息子は、母親の言いなりになり、妻を困惑させる。妻の希望はいつも後にまわされるのである。あるいはデーメーテール型の母親をもつある娘は、夫と長い休暇に出かけることにけっして同意しない。なぜなら、そんなに長いあいだ母親をほっておくことができないからである。

過剰にコントロールするデーメーテール型の母親をもつある子どものなかには、自分自身の生活を送ろうとして、母親との関係を絶って彼女から遠い所にとどまり、自分たちのあいだに地理的かつ情緒的な距離をつくろうと努力する者がいる。しばしば彼らは、母親が無意識的に彼らに恩を受けているとか、やましいとか、あるいは依存的であると感じさせようとするときにそうする。

デーメーテール型の女性にとってのもう一つのネガティブな母親モデルは、自分の子どもたちにたいしてノーと言えない母親である。彼女は自分がひたすら与えるだけの無私で、寛大で、慈愛にあふれる母親だと思っている。このデーメーテール型の母親は、子どもたちがまだ小さいときから、自分が欲しいものは何でも持ってもらいたいと思う。それが自分にはとても与えられない高価なものであれば、彼女はそれを得るために犠牲を払うか、そうでなければ子どもにたいしてすまないと感じる。さらに彼女は、行動に限界をもうけることをしない。よちよち歩きのときから子どもの言いなりになり、利己心を助長する。その結果、子どもたちは、自分は当然特別に目をかけられるものだと思い込み、人と調子を合わせることができないように感じながら成長する。彼らの行動上の問題は学校で生じる。また、上司との関係がうまくいかなくて仕事をやめたりする。このような母親は、すべてを与える「よい母親」になろうとして、実際にはその反対になってしまうのである。

中年期

中年期はデーメーテール型の女性にとって重要な時期である。もしそれまでに子どもをつくっていなければ、自分の体が妊娠できるための生物学的時間がまもなく過ぎようとしているということで頭がいっぱいになる。結婚しているデーメーテール型の女性は、赤ちゃんの問題をもちだすが、夫は気がすすまない。受胎、流産の問題があるなら、不妊症の専門家を訪れる。養子のことが考慮されるかもしれない。未婚の女性は、シングル・マザーになることを考えるであろう。

たとえデーメーテール型の女性に子どもがいても、子どもが自分の残りの人生でどれほど重要であるかということに気づいてはいないかもしれないが、彼女の中年時代はやはり決定的な意味をもつ。子どもたちはどんどん成長しており、彼らが独立に向かって一歩あゆむごとに、

自分に彼らが依存してくれなくとも自分は自由に生きていく力があるかどうかが試される。ここで彼女もまた残りの人生の生きがいとなる赤ん坊をもちたいと思うかもしれない。ある女性が中年の危機のまっただなかで私のもとにやってきた。いま年齢が四十歳で、子どもたちは学校に行っており、もしデーメーテールを越えて成長するのならば、自分も学校に戻るべき時期であった。彼女は、自分が大学院で落第するのではないかと恐れており、もう一人子どもが生まれるのでない限り、大学院に登録しないですむ何の言い訳も存在しないということに気づいた。そこで、もう一人子どもが欲しいという気持ちと、ひょっとすれば学生として落第するのではないかという気持ちを切り離し、自分の関心をもっと探究していくことに焦点を合わせることができた。その結果、彼女は実際に大学院に行き、自分が好きなテーマを研究し、いまでは意欲的な教師になっている。

中年になると、組織の生みの親ともいうべき女性は、組織が大きくなって、他の人々が彼女の地位と権力を欲しがるようになるとき、危機に直面する。アテーナーの戦略家としての精神をもち合わせ、政治もうまくこなすことができないなら、野心的なマネージャーたちは、彼女が生んで、その創業期を一貫して育ててきた組織を「乗っ取る」かもしれない。その喪失にショックを受けて彼女は、怒り悲しむデーメーテールになるであろう。

たとえ権力闘争がなくても、あるいは仮にあったとして、この危機を乗り切るとしても、いまや彼女にとって、そして自分の母性的なエネルギーを仕事に投入してきたあらゆるデーメーテール型の女性にとって、個人的な問題がもちあがる。いまや、自分の人生に何が欠けているか、自分の真の願いを成就するには何をしたらいいのか、ということを考えるべきときなのである。

晩年

晩年のデーメーテール型の女性はしばしば二つのカテゴリーに分かれる。この時期の彼女らの多くは、自分の努力した甲斐があったと感じる。彼女らは、これまでいつもそうであったように現在も活発で忙しい女性である。人生から謙虚に学び、その地に足のついた実際的な知恵と心の広さで人々から評価されている。彼女らは、人々を自分に縛りつけないということ、あるいは人々が自分を利用するのを許すことを学んできたデーメーテール型の女性である。反対にこれらの女性たちは、自立心と相互の尊敬を育ててきたのである。何世代にもわたる子供、孫、顧客、学生、あるいは患者は、彼女を愛し、尊敬するであろう。彼女は、神話の最後の段階での女神デーメーテールに似ている。女神デーメーテールは、人類に自分の贈り物の数々を与えて、大いに讃えられたからである。

自分を犠牲者だと考えるデーメーテール型の女性には、反対の運命が襲う。彼女の不幸は通常、中年期の数々の幻滅と失望からきている。いまや、裏切られて、怒り、悲しみにくれ、自分の寺院に座ったきり何が育つことも許さないデーメーテールに同一化した女性は、晩年を向かえても何もせず、ただ年をとって、苦々しくなっていくだけである。

心理的困難

女神デーメーテールがいればこそ、物はいきいきと存在した。彼女が働くのをやめると生き物は成長をやめ、オリュムポスの神々はみなぞろぞろと山を下って、彼女のご機嫌をうかがい、豊餞性を回復しようとした。しかし彼女はペルセポネーの誘拐を防ぐことができなかったし、ペルセポネーがすぐに戻ってくるようにすることもできなかった。彼女は犠牲になったのであり、その訴えは無視され、気分が落ち込むことになった。デーメーテール型の女性が直面する困難も同じテーマである。すなわち、犠牲、権力とコントロール、怒りの表現、そして抑うつである。

デーメーテールとの同一化

デーメーテールと同一化している女性は、際限なく与える力をもつ、慈愛あふれる母性的な女神のように振る舞う。もし誰かが彼女の注意や助けを必要とするなら、いやとは言えない。このデーメーテール的な特性のために女性は、気分の滅入っている友達と望んでもいないのに長電話をしたり、どちらかと言えば、その気がないのに世話役を引き受けてしまったり、午後のあいている時間を自分のためにとっておかないで、誰かを助けるために犠牲にする。デーメーテールは、不安状態にあるクライエントに、規定の時間を超えて面接するセラピストの心のなかで働いている。こうしたサービスは、彼女にしてみれば、一日のハードスケジュールの切れ目でしかない。彼女の生活は毎晩、長電話で中断され、彼女のスライド制の料金は、いつまでたっても最低料金のままである。この養育本能はついには、援助職にある女性のエネルギーを涸渇させてしまい、そこから疲労と無気力の「燃えつき」症候群が発生する可能性がある。

自分から何かを必要としているなら誰にたいしても本能的にイエスと言う女性はまたたく間にのめり込みすぎることになる。たとえ他の人々や自分のなかにあるデーメーテールがそうするように期待しても、自然の資源が際限なくあるわけではない。デーメーテール型の女性は、もし自分自身の人生を、責任をもって生きたいと思うならば、繰り返し女神デーメーテールと対決しなければならない。デーメーテールの反応である本能的なイエスではなく、いつ、どのように、誰に与えるのかを選ぶことができなければならない。そのためにはノーを言うことを学ばねばならない。自分から何かを求めている人にたいしても、自分のなかにいる女神にたいしても。

母性本能

もしこの元型が思いどおりに力を及ぼすならば、デーメーテール型の女性は妊娠せずにいることはできないであろう。母性性は彼女にとって内なる命令者であるため、デーメーテール型の女性はデーメーテール元型と無意識的に共謀し、いつ妊娠可能であるかを「忘れ」、あるいは避妊に関して「不注意に」なるであろう。そのために、理想的とはとても言えない状況のときに、気がついたら妊娠してしまっているということになる。

デーメーテール型の女性は、いつ、そして誰とのあいだに赤ん坊を産むつもりであるかを選ぶことができなければならない。自分のなかにいるデーメーテールが、自分の生活の現実や時期に関して、何の興味も関心ももち合わせていないということを認識する必要がある。もしいちばんいい時期に妊娠したいのならば、避妊に関して注意深くなることによってデーメーテールに抵抗しなければならない。

疲労、頭痛、月経痙攣、もろもろの潰瘍症状、高血圧、それに背中の痛みは、あまりにもたくさんの責任や子供を抱えて働きすぎて、負担が重すぎるのに、ノーを言ったり、怒りを表すことができないデーメーテール型の女性によく見られる。これらの症状を通じて間接的に伝えられているメッセージは、「私はもうくたくただわ。プレッシャーをかけられて、とても苦しいの。もう私に何も頼まないで！」である。症状はまた軽い慢性の抑うつも表現しており、それは、女性がうまく抗議できず、怒りを抑圧し、デーメーテールの仕業である状況を恨んでいることから生じている。

甘やかし

デーメーテール型の女性がもっている並はずれて豊かなマザリングの能力は、子どもが自分を必要としてほしいと願い、子どもが「自分の視野から消える」と不安になって、損なわれる。彼女は依存性を助長し、子どもを自分の「エプロンの紐に結び付け」ておこうとする。他の人間関係でも似たことがおこなわれる。たとえば、恋人のなかの「可哀そうな、可愛い坊や」や友達のなかの「怖がりの子ども」の世話をするとき、「甘えん坊」を母親のように世話しているのである。

このような女性は、自分を相手にとってなくてはならない人間にしたり（「お母さんは何でも知っているのよ」）、過剰にコントロールしたりする（「私にやらせてごらん」）ことによって、他の人々を子ども扱いにする。この傾向は、相手の心のなかにある不安感と不全感を助長する。たとえば台所では、彼女は娘が料理の仕方を学ぶのを励ますかもしれない。しかし、徹底した特訓をおこない、しかも最後の仕上げは必ず自分がやる。娘が何をしても母親は、「まだもう一つというところね」とか「お母さんにやらせたら、うまくいくわよ」といったメッセージを伝える。仕事の状況でも同じである。彼女は仕事をどのようにすればいいのかを「いちばんよく知っている」上司、編集者、指導者であり、仕事を人にまかせることができないために、「子ども」の独創性と自信をもみ消し、自分はというと仕事の負担がますます増える。

もし人々が自分を必要としてくれるなら、不安の強いデーメーテール型の女性はホッとする。人々が自分から独立して有能になっていくと、脅かされるように感じる。いつまでも彼女からの寵愛を受け、可愛がられるためにはしばしば依存的な役割にとどまらねばならない。

デーメーテール型の女性が依存性を助長するか、それとも反対に相手がそのなかで成長していけるような安心感をつくり出すことができるかどうかは、彼女自身が豊かさを感じているか、それとも乏しさを感じているかによる。相手を失うのではないかと心配していたり、自分の「子ども」が「まだもう一つというところ」であるなら、彼女は所有欲が強くて、相手を自分の思いどおりに支配して、相手に窮屈な思いをさせることになるかもしれない。この不安定感が、彼女にまとわりついたり、窒息させるような母親にするのである。

私が治療している若い母親は、自分の子供がまだ小さかった頃のことだが、自分は娘を成長させたがらないタイプの母親であることに気がついた。最初の闘いは、ベビー・フードを導入すべき時期におこった。彼女は母乳で育てており、その関係には第三者が入りこむ余地がなく、子どもが自分を頼ってくれていることを楽しんでいた。固形食を導入すべきときになって、夫は娘にスプーンで食べさせようとした。これは、父親と娘の絆の新しい大きな一歩であった。幸い、彼女のなかに利己的でない母親という面があったので、いまは固形食を始める時期だと心得、子どもをもっと夫と分かち合うようになった。といっても、彼女のなかの独占欲の強い母親という面は、できるだけ長いあいだそれに抵抗したいと思っていたが。とにかく、子どものためにいちばんよいことをしようという彼女の思いが勝った。だが、たとえそうであっても、喪失を悲しみ、デーメーテールのような気持ちになる瞬間があった。

独占欲の強いデーメーテール型の女性は、他の人々をいつまでも依存的にして、自分のエプロンの紐に縛りつけておこうという欲求から自由になるにつれて成長していく。このようにして、相互依存が、相互的な評価と愛に変えられていくのである。

受動的・攻撃的行動

ノーを言えないデーメーテール型の女性は、負担過剰になるであろう。そしてエネルギーが涸渇して、無気力になるか、怒りっぽくなるかもしれない。食いものにされていると感じるなら、典型的にいって、彼女はそのことを直接表現せず、ノーと言うべきときにイエスを言わせてきた自己主張の欠如をまたしても示すことになる。怒りを表現したり、何かが変わるべきだと主張するかわりに、デーメーテール型の女性は自分の気持ちが寛大ではないと割り引いたり、自分ですべてをやろうとして、ますます一生懸命に働きがちである。

自分の本当の気持ちを押さえようとしながら、それが何かの加減で漏れてしまうと、彼女は受動的・攻撃的行動を示し始める。「コースから少しはずれている」ことを忘れ、隣人からの頼み事をほっぽりだし、原稿の締切りに間に合わなかったり、重要な会議に遅れてきたりする。このようにして、実は、背負うことを期待されていた重荷を軽くし、非協調的な行動によって無意識的に自分の敵意を行動化し、間接的に自分の恨みを表現し、自分の独立を主張しているのである。もし、まず最初にノーを言うことができれば、はるかにベターであろう。なぜなら、受動的・攻撃的行動のために彼女は無能であるように思われ、罪悪感をおぼえるようになるからである。

自分の目的をはっきりと自覚していれば、同じ行動でもまったく違う意味をもつことになる。誰か他の人が自分にしてもらいたいと思っていることを率直に断り、その理由を述べれば、すっきりとしたメッセージになる。受動的で攻撃的な行動は、敵意のこもった暗号のような行為に書き直された混乱したメッセージである。相手がこちらの欲求を配慮してくれるなら、すっきりとした言葉で十分である。相手が人を食いものにする人間で、こちらに犠牲を払わせながら自分の思いどおりにしようとしているときには、言葉を行動で裏付けることがしばしば必要となる。ゼウスは、デーメーテールが「ストライキをおこす」までは、彼女の言うことに耳を傾けなかったのである。

デーメーテールが穀物の女神として機能することを拒否するまでは、ゼウスは彼女の苦しみに少しも注意を払わなかった。彼女が何も成長させまいとしたために大地が飢饉に脅かされて

初めて彼は関心を示した。なぜなら、彼女が自分の意志を貫けば、神々を讃える死すべき者（人間）は一人もいなくなるだろうからである。デーメーテールが不動の決意を示して初めてゼウスは、彼女の苦しみに耳を傾け、ペルセポネーを冥界から連れ戻すためにヘルメースを派遣したのである。ひとたびデーメーテール型の女性が（みずから抑圧している）自分の欲求と、その欲求が人から軽く扱われていることにたいする怒りに気がつくと、彼女はデーメーテールの例にならうことを考える。たとえばなくてはならない存在でいながら、安月給でこき使われている従業員は、給料のアップと手当を求めて実情を述べることができる。しかし、自分がこれまでどおり働き続けたくはないということをはっきりとボスに言わなければ、聞いてもらえないであろう。

抑うつ — 空の巣と空虚感

デーメーテール型の女性が、そのなかで母性的な役割を演じてきた関係を失うと、彼女はその関係を失い、相手がいなくてさびしく思うだけでなく、自分の果たしてきた母親としての役割をも失う。ところが、この役割こそ彼女に、自分は力があり大切な人間であって、生きることに意味があると感じさせてきたのである。彼女に残されたものは、空の巣と空虚感である。

「空の巣抑うつ（empty-nest depression）」という用語は、子供に自分の人生を捧げてきたにもかかわらず、結局はただ子供たちに去っていかれただけの女性たちが示す反応を表している。恋愛関係が終わった状態にいるデーメーテール型の女性も、これと同じ反応をする。あるプロジェクトを何年間も「育てて（mothered）」きながら、結局はそれが失敗したり、あるいは他の人に引き継がれるだけで終わったデーメーテール型の女性も同様である。このような組織上の困難の後に残るのは「剥ぎ取られた（ripped off」とか、不毛なという感じである。

元型が極端にはたらくときは、抑うつ状態にあるデーメーテール型の女性は、生活ができなくなって精神病院への入院が必要となる。彼女は、地上のすみずみにわたってペルセポネーを探しても実りなく、悲しみにうちひしがれている女神を体現しているのかもしれない。デーメーテールに似て、食べることも、寝ることも、入浴することもしない。振子のように行ったり来たりし、いつも落ち着きなく動き、重苦しく気分が落ち込みながら、両手を固く握り合わせて、もむ。エレウシースのデーメーテールのように、何ものにも関心を示さず、心動かさず、反応もせずに座っている。彼女にはすべてが寒々として不毛に見え、世界には意味が欠けている。自分の無味乾燥な生活には、新鮮に成長する生命を感じさせるものは何もないように思われる。この反応は重症の無気力うつ病である。感情の高まりであれ、無気力であれ、彼女の抑うつの根底に敵意が横たわっている。彼女は、生きがいが奪われたことに怒っているのである。

悲しみにくれるデーメーテールが入院するとき、もちろん彼女には専門的な助けが必要である。だが、自分がこれほど空の巣抑うつになりやすいということを知っており、精神医学上の四つの予防策をとっていたならば、彼女の反応はこれほど重症のものにはならなかったであろう。怒りを心のなかに溜めるかわりに、それを表現する仕方を学べば、抑うつはそれだけ少なくなる。ノーを言うことを学べば、過剰な負担から生じる消耗や抑うつを避け、評価されていないとか犠牲になっているという気持ちをもたずにすむ〕行かせること、成長させること」を学べば、子どもたち（あるいはスーパーバイザー、スタッフ、クライエント）から恨まれて、

関係を壊されることに苦しまなくてもよくなる。自分のなかの他の女神たちを発達させることで、人の世話以外のことにも興味をもてるようになる。

成長の道

デーメーテール型の女性にとって、ノーを言えないことを含めて自分が体現している母性的パターンを認めることは困難ではない。しかし非常によくあることだが、他人にたいする自分の否定的な感情や行動が彼女らの盲点である。これらの感情と行動こそ、もっとも変わらねばならないものであるため、デーメーテール型の女性は、全体についてのイメージをもてるようになるまでは、その成長が妨げられている。デーメーテール型の女性の善意は、自分をよい母と見なしたいという欲求と結びつくと、この洞察を受け入れることにたいする妨げとなる。このような女性は、しばしば非常に防衛的である。彼女らは、自分の善意について語ったり（「私はただ助けてあげたいと思ったのです」）、実際にそうなのだが、自分がおこなっている多くのポジティブで寛大な行動を並べ挙げることで、批判に対抗しょうとする。

デーメーテール型の女性は、善良でおしみなく与える母親と同一化しているため、ノーを言うことが困難であるが、まさにそれと同様に、自分が愛している人たちにたいする怒りを認めることにも抵抗する。同じ理由から、自分が受動的・攻撃的行動をおこなっており、依存性を過剰にコントロールしたり、あるいはそれを助長しているのではないかという可能性を否定する。しかしながら、自分が評価されなくてがっかりしていることはよく知っており、気落ちしているということを認めることもできる。もしこういった自分の心のひだを探究する用意があるのならば、彼女はしだいにデーメーテールのネガティブな特徴についての自覚が深まってくるであろう。それらを認めることが最大の障害なのである。行動を変える方が、仕事としては簡単である。

自分自身のよい母親になる

デーメーテール型の女性は、まるで自分自身がデーメーテールであるかのように他人にたいして本能的に反応するかわりに、自分自身のためにデーメーテールを「雇う」ことが必要である。新たな負担を負うように頼まれたときは、他人にたいしてなら簡単にできる心のこもった世話を、自分自身に焦点を合わせておこなうことを学ばねばならない。こう尋ねてもいいだろう。「これが本当にいま自分のしたいことなのか」とか、「時間とエネルギーが十分にあるのか」と自分に尋ねることができる。これまでひどい扱いを受けてきたなら、「自分はもっといい扱いを受けるに値する」と言って自分を元気づけ、自分の求めているものを「彼らに言いに行こう」と言って自分を励ますことが必要である。

デーメーテールを越えて意識を拡大する

デーメーテール型の女性は、自分の生活のなかにデーメーテールとは違った人間関係のための余地を意識してつくらなければ、「ただのデーメーテール」というワンパターンにはまりこ

んだままでいるだろう。子どもがいる既婚の女性であるならば、子どもぬきで夫と外出する努力をするだろうか。ジョギングや瞑想、絵画とか楽器の演奏といった自分だけの活動のための時間をとろうとするだろうか。あるいは、デーメーテールに典型的に見られることだが、決して時間を見つけようとしないのではないだろうか。もし、職業をもっているデーメーテール型の女性であるなら、彼女のエネルギーのすべては、自分の仕事に投入されているであろう。保育園を経営していたり、仕事のプログラムを立てて自分の時間とエネルギーのすべてをそれに費やし、毎日くたくたになって家に帰る。五人の子持ちのデーメーテール型の女性と同じく、仕事をしているデーメーテール型の女性も同様に「ただのデーメーテール」になることに抵抗しなければならない。もしデーメーテールを越えて意識を広げることがなければ、もはや誰からも必要とされなくなって、自分がお払い箱であることを知ったとき、空の巣抑うつにかかる可能性が高くなる。

抑うつからの回復

悲しみにくれて気分が滅入っているデーメーテールになるのは、何らかの深刻な喪失に苦しんできたデーメーテール型の女性である。失われたものは、人間関係であれ、役割であれ、仕事であれ、理想であれ、いずれにせよ彼女にとって情緒的に大きな価値のあるものであり、これまで生きがいを与えてきたものであるが、それがいまやなくなってしまったのである。女神の神話のどれについても言えるように、女性はどの段階でも「停滞」することもあれば、一つの神話パターンを通り抜けてさらに成長していくことも可能である。抑うつ状態にあるデーメーテール型の女性のなかには、二度と回復しないものがいる。彼女らの存在は、いつまでたっても虚しく、苦々しく、不毛のままである。

しかし回復と成長は可能である。神話自身、二つの解決を示している。第一に、ペルセポネーが誘拐されてしまったことを知ってからは、デーメーテールはオリュムポスの山をあとにして地上をさまよった。エレウシースでは、気分が滅入って悲しみにくれる女神は、ある家庭に迎え入れられ、そこでデーモポーンの乳母になった。彼女は彼にネタタールとアンプロシアーを飲ませ、彼の母のメタネイラに中断されていなかったなら、彼を不死の存在（神）にしていたことであろう。つまり、誰か他の人を愛し育てることによって、自分の味わった喪失に対処したのである。危険を承知で、もう一つの関係を結ぶことは、悲しみにくれるデーメーテール型の母親にとって、再び元気になって生活するための一つの道である。

第二に、ペルセポネーと再び結ばれることによってデーメーテールは回復した。悲しみにくれる母親は、自分の永遠の乙女である娘と再び合一することで、抑うつ状態にピリオドを打ち、再び穀物と果物の女神として機能し、大地に豊饒と成長をもたらしたのである。

比喩的に言えば、次のことが抑うつを終わらせる。すなわち、若さの元型が戻ってくるということである。それがどのようにおこるかは、しばしば神秘的に見える。それは、涙と怒りの後にやってくる。時が過ぎる。それから何かが芽生えるような感情が動き出す。おそらくその女性は、空がなんと美しい青であるかということに気がつくであろう。あるいは誰かの同情に心を動かされたり、長いあいだほったらかしにしてきた仕事を完成させたいという心の疹きをおぼえる。感情の面から言うと、これらは春のささやかなしるしである。戻ってくる命のこの最初のしるしが現れると、まもなくして女性は再び元の自分にかえっており、もう一度生命力

と慈愛にあふれる自分にかえっているのに気がつく。それまで失われていた自分の一部と再び結ばれたからである。

　そこで可能になるのは単なる回復以上のものである。苦しみの時期から回復したデーメーテール型の女性は、知恵と精神的な理解力が増している。内的経験としてのデーメーテールとペルセポネーの神話は、苦しみを通り抜けて成長することができるということを語っている。それゆえ、デーメーテール型の女性は、デーメーテール自身と同じく、人間が季節ごとに変化するという仕方で存在するということを受け入れるようになる。彼女は自然を映し出す大地の知恵を獲得する。このような女性は、何がおころうと、それを生き抜くことを学んでいる。ちょうど冬のあとに春が訪れるように、人間の経験は一定のパターンに従って変化していくということを知っているからである。

10

乙女と冥界の女王、受容的な女性、母の娘ペルセポネー

女神ペルセポネー

女神ペルセポネーは、ローマ人からはプロセルピナあるいはコーラと呼ばれ、ハーデースによる彼女の誘拐を描いたホメーロスの『デーメーテール讃歌』を通じてもっともよく知られている。彼女は二つの仕方で崇拝されていた。一つは、乙女あるいはコレー（「若い女の子」を意味する）、もう一つは、冥界（underworld）の女王として。コレーはほっそりとした美しく若い女神で、豊饒の象徴（ざくろ、穀物、およびトウモロコシ）や、彼女の心をそそった花である水仙と結びついている。冥界の女王としてのペルセポネーは成熟した女神で、死者の魂を支配し、冥界を訪れる生者を道案内し、自分の欲しいものを要求する。

ペルセポネーは十二人のオリュムポスの神々には含まれないが、キリスト教に先だつ二千年間、ギリシア人の中心的な宗教であるエレウシースの秘儀における中心的存在であった。エレウシースの秘儀でギリシア人たちは、ペルセポネーが毎年冥界から戻ってくることを通じて、生命が死んでから再び戻ってきたり、あるいは復活することを経験した。

系譜と神話

ペルセポネーはデーメーテールとゼウスの一人娘であった。ギリシア神話は、彼女がどのような状況のもとで孕まれたかについて、異常なほどに沈黙を守っている。

（前章で詳しく語られた）デーメーテールとペルセポネーの神話の始まりでは、ペルセポネーは、花を集めては友達と遊ぶ無邪気な少女であった。そのとき、戦車に乗ったハーデースが大地の口から突然現れ出て、泣き叫ぶ乙女を力づくで奪い、冥界に連れて帰って、ペルセポネーが嫌がっているにもかかわらず、自分の花嫁にした。デーメーテールは、この状況を受け入れず、オリュムポスの山を去って、ペルセポネーの帰還のためにがんばり、ついにはゼウスの心を動かして、彼女の願いに耳を傾けさせた。

ゼウスは使者神のヘルメースを派遣してペルセポネーを連れ戻させた。ヘルメースが冥界に到着すると、やるせない思いでいるペルセポネーの姿が見えた。ヘルメースが彼女のためにやってきて、ハーデースが彼女を行かせるつもりであるのを見て、彼女の絶望は喜びに変わった。だが、彼女が彼のもとを去る前に、ハーデースは彼女にざくろの実を与え、それを彼女は食べた。それからヘルメースとともに戦車に乗り、すばやくデーメーテールのもとに連れ帰ってもらった。

再会した母と娘が喜びのあまり抱き合ってから、デーメーテールは、ペルセポネーが冥界で何かを食べなかったかどうか心配そうに尋ねた。ペルセポネーは、ざくろの実を食べた――なぜならハーデースが、彼女に「無理やり」それを食べさせたから（だが、それは本当ではなかった）と答えた。デーメーテールがその話を信用したので、サイクルのパターンができあがることになった。もしペルセポネーが何も食べていなかったら、彼女は完全にデーメーテールのもとに戻っていたことであろう。しかし、ざくろの実を食べたことによって、一年の三分の一を冥界でハーデースとともに過ごし、一年の三分の二を地上の世界でデーメーテールとともに過ごすことになった。

後にペルセポネーは冥界の女王になった。ギリシア神話の主人公たちが冥界に下ってくるときはいつでも、ペルセポネーが彼らを迎えて道案内をした。（誰が行っても、彼女は必ずいた。ペルセポネーとデーメーテールの神話では、一年の三分の二は母のもとに帰っていることになっているのだが、「母のもとに帰っています」とドアに書かれていることは一度もなかった。）

『オデュッセイア』では英雄オデュッセウス（ウリッセース）が冥界へと旅をするが、そこでペルセポネーは彼に、伝説で知られている女性たちの魂を見せた。プシューケーとエロースの神話では、プシューケーの最後の仕事は、冥界に下ってアプロディーテーのために美の軟膏がいっぱい入ったペルセポネーの箱を持って帰るということであった。ヘーラクレースの十二の最後の仕事も、彼をペルセポネーのもとに連れて行った。ヘーラクレースは三つの頭がある獰猛な番犬ケルベロスを借りることを命ぜられたのだが、そのためにはペルセポネーの許しを得なければならなかった。そしてそのうえで彼はケルベロスを押さえて、鎖にかけた。

ペルセポネーは美しい若者アドーニスをめぐってアプロディーテーと争った。彼は二人の女神から愛されたのである。アプロディーテーはアドーニスを箱のなかに隠したまま、安全のためにペルセポネーのもとに送った。だが、その箱を開けると、冥界の女王自身が彼の美しさに魅惑されて、彼を返すことを拒んだ。かつてデーメーテールとハーデースがペルセポネーをめぐって争ったように、今度はペルセポネー自身が、もう一人の有力な神と争ったのである。この争いはゼウスの裁くところとなり、アドーニスが一年の三分の一をペルセポネーとともに過ごし、一年の三分の一をアプロディーテーとともに過ごし、残る三分の一を自分の好きなところで暮らすように、ゼウスは命じた。

ペルセポネー元型

ヘーラーとデーメーテールは強い本能的な感情と結びついた元型的パターンを表しているが、彼女らと違ってペルセポネーは、パーソナリティのパターンとしてはそのような強制力を感じさせない。もしペルセポネーがパーソナリティの構造になっているとするなら、女性は、行動するのではなくて、他の誰かからはたらきかけられることになる。つまり、従順に行動し、態度が受動的になるのである。乙女ペルセポネーのために女性は、永遠の乙女であるようにも見える。

女神ペルセポネーには、コレー（乙女）と冥界の女王という二つの側面がある。この二重性は、二つの元型的なパターンとしても存在している。女性はこの二つの側面の一つに影響され、コレーから女王に成長するか、心のなかでコレーと女王の両方が存在することになる。

元型的な乙女としてのコレー

コレーは「名前がない乙女」であった。彼女は、「自分が誰であるか」がわからず、また自分が何を欲望し何ができるかにも気づいていない若い女の子を表している。たいていの若い女性たちは、「コレー」の段階を通過して後に結婚したり、仕事の道に進むことを決断する。人

生の大半を乙女のままで過ごす女性たちもいる。彼女らは、人間関係、仕事、あるいは教育上の目標にコミットしていない。たとえ実際には誰かとの関係のなかにあり、仕事をもち、大学もしくは大学院に在籍していても、そうなのである。彼女らは、何をしていても「リアル」であるようには思えない。彼女らの態度は永遠の若者のそれであり、自分が「大人になる」とき、どのような人間になりたいのか、あるいは何をしたいのかについて決心がつかず、自分の人生を変えてくれる何か、あるいは誰かを待っている。

母の娘

ペルセポネーとデーメーテールは、娘があまりに母親に密着しているために、独立した自分についての感覚が発達できずにいる、ありふれた母娘のパターンを表している。この関係のモットーは「お母さんが何でも知っている」である。

ペルセポネー型の娘は、母親を喜ばせたいと思っている。この欲望に動かされて彼女は、「お行儀の良い女の子」になる。彼女は従順で協調的で用心深く、少しでも危険を匂わせるような経験からは、「保護」されている。このパターンはマザー・グースの詩にも見られる。

「お母さん、泳ぎに行ってもいい？」
「ええ、いいわよ。
　服はヒッコリーの枝に掛けなさいね。
　でも、水に近づいてはだめよ。」

母親は強くて独立しているように見えるが、これはしばしば外見だけである。彼女は、娘を手元へおいておくために、娘の依存性を助長しているのかもしれない。あるいは、娘が自分の延長であることを必要としており、娘を通じて自分の代理の人生を生きようとしているのかもしれない。この関係の古典的な例は、舞台のマネージャーをしている母親と女優の娘の関係である。

ときには父親が支配的に侵入し、娘の依存性を助長していることもある。彼のコントロール過剰な態度も見掛けだけのことで、娘にたいするあまりにも密着した情緒的愛着を覆い隠しているのである。

家族のダイナミックスに加えて、私たちが暮らしている文化も、少女たちが女性性を受動的で依存的な行動と同じものだと考えるようにしむけている。彼女たちは、王子がやってくるのを待っているシンデレラや、目ざめさせてくれるのを待っている眠り姫のように振る舞うのを促されている。受動性と依存性は、多くの女性にとって中心問題である。コレー（kore）はまさに核心（core）なのである。環境はこの元型を強め、そのためパーソナリティの他の側面が発展しないからである。

「アニマ的女性」

すぐれたユング派の分析家M・エスター・ハーディングは、彼女の本『あらゆる女性の道』を「万事男まかせ」であるタイプの女性を描くことから始めている。このタイプが「アニマ的女性（anima woman）」であり、「自分を男の願望に合わせ、自分を男の目にきれいに映るように

して、男を魅惑し、男を喜ばせる。」彼女は「自分の内的生活がどのようなものであるのかについてのイメージを描けるほどには十分に自分自身のことがわかっていない」「一般的に言って自覚がなく、自分自身あるいは自分の動機を分析せず、ただ存在しているだけで、大部分は未分化のままである(1)。」

ハーディングは、いかにたやすく「アニマ的女性」が男性の無意識的な女性のイメージ（アニマ）の投影を受け止めて、無意識にこのイメージに調子を合わせるかを描いている。ハーディングはそれゆえ、この種の女性を次のように述べている。「このように順応することで彼女は、自分の側では少しも意図しなくても自動的にくるくると回る多面体の水晶のようである。……最初にある面が、次に別の面が見せられ、しかも常に彼のアニマをもっともよく反映する面が、見つめる者に提示されるのである(2)。」

ペルセポネー型の女性はもともと受容的にできているために、どのようにでも鍛えられる。もし重要な人々が、あるイメージや期待を彼女に投げかけるなら、彼女は初めは抵抗しない。カメレオンのように次々と色を変え、他人が自分に期待するものはどんなものでも「やってみよう」とするのが彼女のパターンである。まさに、この性質があるからこそ、彼女は「アニマ的女性」になるのである。彼女は、男性が自分になってもらいたいものに、無意識に調子を合わせる。ある男にたいしては、カントリー・クラブにぴったりのテニスファンであり、次の男性との関係では、彼のバイクの後ろに乗って、轟音をたててハイウェイを駆けおりる。三番目の男にとってはモデルになる。彼は彼女をあどけない少女として描くのだが、実際、彼女は彼にとってそういう存在なのである。

子ども女

誘拐される前のペルセポネーは子ども女（child-woman）で、自分の性的魅力や美しさに気づいていない。セクシュアリティとあどけなさのこの元型的な組み合わせは、アメリカの文化に充満しており、望ましいと考えられる女性とは、セクシーな子猫であり、隣の女の子のような容貌をしながら、『プレイボーイ』の雑誌にヌードとなっている女性である。たとえば、『プリティ・ベイビー』という映画でブルック・シールズが、元型的な子ども女を演じている。売春宿にいる処女の可愛い十二歳の女の子で、彼女の処女は最高入札者に売られる。このイメージは、彼女の次の映画『青い珊瑚礁』と『エンドレス・ラブ』それにカルヴァン・クラインのジーンズの広告でも続く。同時に、メディアは彼女のことを、マネージャーとしての母親からキャリアと生活をしっかりと管理されている従順なペルセポネー型の箱入り娘として描いている。

ペルセポネー型の女性が官能的な、あるいはセクシュアルな女性としての自覚に欠けるのは、必ずしも年齢が若いとか性的に未経験であるからではない。心理学的に乙女である限り、彼女のセックスはまだ目ざめていないのである。男たちに自分を好きになってもらいたいと思ってはいるが、情熱に欠け、おそらくオーガズムを経験しないであろう。

アメリカ以上に日本では、理想的な女性像がペルセポネーに似ている。もの静かで、とりすましていて、従順であるのが理想とされる。彼女はけっしてノーを直接言ってはならないことを学んでいる。意見を合わせなかったり、つきあいを悪くすることで和を壊すことがないように育てられている。理想的な日本女性は愛想よく振る舞っているが、裏では男たちが求めてい

るものを先どりし、外面的には自分の運命を受け入れている。

冥界への案内人

ペルセポネーは誘拐の犠牲者として初めて冥界を経験したが、後に冥界の女王となって、そこを訪れる者たちを案内した。ペルセポネー元型のこの側面は、神話で語られているように、経験と成長の結果として発達したものである。

象徴的に言えば、冥界は心のより深い層を表している。そこは、いろいろな記憶や感情が「埋められて」おり（個人的無意識）、さらに、元型的で人類が共有するイメージ、パターン、本能、感情（集合的無意識）が見られる場所である。これらの領域が分析で探究されるとき、冥界のイメージは夢となって現れる。夢見る者は地下室にいて、そこはたくさんの回廊や部屋があり、迷路のように見えることがある。あるいは、どこかの地下の世界か深い洞穴にいて、いろいろな人々や事物や動物と出会い、恐怖をおぼえたり不安になったり、興味をおぼえたりするが、それは彼女が自分のなかにあるこの領域を恐れているかどうかによる。

冥界の女王と道案内人であるペルセポネーは、「現実」世界という自我に基づいた現実と、心という無意識的あるいは元型的現実のあいだを行ったり来たりする能力を表している。ペルセポネー元型が活発にはたらくとき、女性はこの二つのレベルのあいだを媒介し、それを自分のパーソナリティに統合することができる。彼女はまた、夢や空想で冥界を「訪れる」人々のためのガイドとしても働き、また、「誘拐」されたり、現実との接触を失っている人々を助けたりもする。

『私はあなたに一度もバラの園を約束したことはない』（邦訳『デボラの世界』みすず書房）のなかでハナー・グリーンは、一人の十六歳の分裂病の少女が病気になって入院し、そして回復するという自叙伝的物語を書いているが、この少女は現実から退いて、イメージの王国へ入りこんでしまったのである。グリーンは自分の経験を書くためには、それをいきいきと思い出さなければならなかった。最初「イヤ（Yr）の王国」は彼女の避難所で、それ独自の「秘密のカレンダー」と秘密の言語をもち、いろいろな登場人物がいる空想の世界であった。しかし、しまいにはこの「地下（underground）」世界は、一つの恐ろしい現実という様相を帯びてきた。彼女はそこの囚われの身となり、離れることができなくなった。「彼女には輪郭しか見えず、周り一面灰色で、奥行きがなく、絵のように平板であった[(3)]。」この少女は誘拐されたペルセポネーだったのである。

ペルセポネーと同様に、かつて精神科の患者であった人々も、他の人々が冥界を通り抜けるのを助けることができる。ハナー・グリーンの『私はあなたに一度もバラの園を約束したことはない』、シルヴィア・プラスの小説『ベル・ジャー』や詩、ドリー・プレヴィンの歌は、自分の深みに引き込まれて、その経験の意味を見出すうえでの助けを必要としている人々にとってのガイドとして役立ってきた。これらの女性たちは、かつて精神病院に入院していたが回復してから、抑うつと狂気の世界に自分が「さらわれた」経験を書いた患者である。私も、若かった頃精神病で入院していていまは素晴らしい治療者になっている何人かの人々を知っている。彼女らは、一時期、無意識のもろもろの要素のために「囚われの」身となって、通常の現実との接触を失っていたのである。心の深みをもろに経験してしまったが、そこから回復することができたために、いまでは特に他の人々の力となっている。このような人々は冥界の地理

に詳しい。

最後に述べておきたいことは、囚われのコレーの経験がなくとも、案内人ペルセポネーを知っている人々がいるということである。これは、患者の想像力のなかに現れる夢やイメージを分析する多くの治療者について言えることである。彼女たちはこれまでに囚われの身になったことがなくとも、無意識にたいする感受性をそなえているのである。冥界のことは直観を通じて馴染み深いものとなっている。案内人ペルセポネーはその人の心の一部であり、彼女が象徴的言語、儀式、狂気、幻、あるいはエクスタシーを含む神秘的経験に遭遇するときに馴染み深さを感じるのはこの元型のせいである。

春の象徴

コレーとしてのペルセポネーあるいは「名前のない乙女」は多くの女性にとって、まだ若くて確信がなく、もろもろの可能性に満ちていた頃には馴染み深いものである。その頃彼女は誰か、あるいは何かがやってきて、自分の人生を形づくってくれるのを待っていた。その後で別の元型が活性化されて、これまでとは違った段階が始まったのである。女性の人生を季節にたとえるなら、ペルセポネーは春を表している。

春は収穫後の休閑期と冬の不毛な数カ月に続いて周期をなしてやってきて、あたたかさと、いままで以上の光と、若々しい生命の成長をもたらす。ちょうどこれと同じように、ペルセポネーも喪失と抑うつの時期の後に、女性の心のなかに再び活性化される。ペルセポネーが女性の心の表面に再び浮かび上がってくるごとに、新しい影響と変化を再び受け入れることができるようになる。

ペルセポネーは若さ、生命力、それに新しい成長に向かう潜在力である。自分の一部としてペルセポネーをもっている女性たちは、生涯、若々しい精神で、変化を受け入れ続けることができるであろう。

ペルセポネーを育てる

ペルセポネー元型が持つ受容性は、多くの女性たちが心のなかに育てることが必要な性質である。これは特に、精神が何かに集中しているアテーナー型やアルテミス型の女性について言える。彼女らは習慣的に自分が何を望んでいるかを知って、決断力をもって行動する。彼女らにとって苦手なのは、いつ、どのように行動すべきか、あるいは何がいちばん重要であるかはっきりしない状況である。このような状況でうまく行動できるようになるためには、事態が変化したり、自分の感情がはっきりするまで待つというペルセポネーの能力を、心のなかに育てなければならない。

ペルセポネーにとって典型的なのは、ときにはそれが過ちにもなるのだが、心開いて柔軟になれることである。こうした能力は、ヘーラー型のように、自分の期待で頭がいっぱいだったり、デーメーテール型の女性のように、自分こそいちばんよく知っていると確信しきっている女性たちも、育てることが必要な特性である。

受容性に積極的な価値を認めることが、ペルセポネーを心のなかに育てる第一歩である。他人にたいする受容的な態度は、相手が言いたがっていることに耳を傾け、相手の身になって物事を考えようとし、批判的な決めつけ（あるいは偏見）を控えることによって、意識的に発達

させることができる。

自分の心にたいする受容的な態度も発達させることができる。そのために必要な第一歩は、（短気や自己批判であるよりはむしろ）自分自身にたいする優しさであり、とくに自分の「心を休めている」と感じる時期について、このことが言える。多くの女性が経験を通じて知っていることであるが、休息の時期は心の傷が癒される猶予期間であり、彼女らがこの時期を罪としてではなく、一つの段階として受け入れることを学んでから初めて勢いよく活動に乗り出したり、何か創造的なことをすることができるようになるのである。

夢を大切にすると、報いられることがしばしばある。毎朝、夢を思い出して書きとめておこうと努力すれば、いつまでもイメージがいきいきとしている。夢を思い出して、それについて考えるにつれて、その意味にたいする洞察がしばしば増していく。超感覚的知覚（ESP）であるような印象を集め、自分の心のなかに、おのずと湧きおこってくるイメージにたいして受容的になることを学ぶと、超感覚的知覚も発達する人が多い。

ペルセポネー型の女性

ペルセポネー型の女性には若さがある。彼女は実際、年より若く見えたり、その人柄には「少女的な」ところがある。「可愛い私を大事にして」というこの要素は、中年になっても、あるいはそれ以後も続く。私には、ペルセポネー型の女性は、なんとなく柳のようなところがあるように思われる。いろいろな状況や、自分より強い人間に出会うと、それに同調して身を曲げるからである。「風の吹き具合」で、一つの方向に行ったかと思うと、次には別の方向に行き、風がやむとピンと元に戻り、自分の存在を変えてしまうほどコミットしない限り、何を経験しても影響されないままでいる。これはある意味で重要なことである。

子ども時代

典型的なペルセポネー型の子どもは、もの静かで出しゃばらない「いい子ちゃんの可愛い女の子」であり、しばしば「お人形さんのように」フリルのついたピンクのドレスを着ているタイプの女の子である。ふつう、行儀がよい子供であり、人を喜ばせ、言われたことをおこない、自分のために選んでもらった服を着る。

母親が心配しすぎで、小さい頃から娘を、保護と監督が必要な壊れやすい人形のように扱うなら、用心深く従順であるというペルセポネー型の子どもがもともともっている傾向が倍加される。自分の可愛い娘がたどたどしく歩き始めたときに喜ぶよりむしろ、転んで怪我をLやしないかということが気になるとき、母親は新しくて、それゆえ困難な何かを試みることは危険と心配の種であるというメッセージを送っているのである。そして、その後も類似のメッセージを送り続けていくことになる。自分勝手に何かをしようとしたということで、「どうしてまずお母さんに聞かなかったの？」と言って娘を叱るとき、彼女のメッセージは実際には「お母さんが手伝うまで待ちなさい」なのである。いつまでも依存的でいなさいという警告が暗黙のうちに発せられているのである。

ペルセポネー型の女の子が、内向的な子どもである場合がある。彼女はまず様子を見てから、その後で加わろうとするために、元来用心深そうに見える。事態がどのように転換していくのか、どういう軌跡を描くかがわかるまでは、横のほうからじっと見つめている。もっと外向的な子どもなら、その場に飛び込んで、じかに学ぶところであるが、自分が加わりたいのかどうか決める前に、彼女はまずそれをしているところをイメージすることを必要とする。しかし母親はしばしば、娘の生来の内向性を自信のなさと誤解する。善意あふれる外向性の母親から、まだ用意ができていないのに何かをするように圧力をかけられるために、しばしば彼女のペルセポネー型の娘は、自分自身の好みが何であるか見つけ出すための時間がもてなくなる。「自分で決めなさい」とバッハをかけられると、ペルセポネー型の女の子は、逆らうよりはむしろ相手が喜びそうなことをする傾向がある。このようにして、受身の姿勢を学んでいくのである。

これと対照的に、支えがあれば、ペルセポネー型の娘も自分が何をしたがっているのかを、自信をもって理解していけるようになる。自分のもって生まれた受容的なスタイルをしだいに信頼し、自信をもって自分なりのやりかたで、ちょうどよい時に決断できるようになる。望んでいたものに到達し、それは実際自分の心に適っている。だが、自分の行動の理由を説明することができない。なぜなら、何をすべきかを内面的に感じとっていながら、それを論理的に説明することができないからである。

両親

ペルセポネー型の娘はしばしば、「ママの可愛い女の子」であり、母親との関係では、デーメーテールとペルセポネーのパターンにはまっている。このタイプの母親はしばしば、自分自身の延長のように娘を扱い、そのために自分の自尊心が高まったり、あるいは反対におとしめられたりする。このパターンから結果として、母親の心と娘の心が重なり合う関係が生まれる。母親は子供のパーティー、ダンスやピアノのレッスン、さらには友人まで取り決める。まるで自分自身の世話をやいているかのようである。彼女は、自分が子どもだった頃に欲しかったり、あるいはなくて淋しい思いをしたものを娘に与えるのであるが、ひょっとしたら、娘はまったく違ったものを望んでいるかもしれないということを考慮しない。

ペルセポネー型の娘は、母親が自分に望んでいるのと同じものを自分も望んでいるという印象に逆らうようなことは、あまりしない。もともと受容的で従順で、人を喜ばせたいからである。（これと対照的に、アルテミス型やアテーナー型の娘は、二歳ともなると、自分が着たくないドレスや、自分がやるつもりでいることから気をそらせまいとする努力にたいして、はっきりと「ノー」と言う。）

ペルセポネー型の娘を持つ母親が、職業面での出世を望んでいるアテーナー型の女性であるとき、彼女は「どうしてこんな女の子ができたのだろう」と不思議に思うであろう。この子供の母親であることに喜びをおぼえても、次の瞬間には、娘が一見決断力に欠け、心に思っていることを言えないということにイライラするかもしれない。アルテミス型の母親のイライラはこれとは違っている。アテーナー型の母親に比べて、娘の主観的な感情をずっとうまく受け止めることができる。彼女のイライラは、娘に意志が欠けているということに向けられている。彼女は娘に「自分の足で立ちなさい」と要求する。アルテミス型の母親もアテーナー型の母親

もともに、自分が重要だと考えるこれらの性質を自分のペルセポネー型の娘が発達させることを助けるかもしれないが、そうでないときは、娘の心にある種の不全感をしみこませていくであろう。

ペルセポネー型の娘の多くは、父親と密接な関係をもたない。父親は、娘との非常に排他的な関係を求めるデーメーテール型の母親の独占欲に、意気を削がれてしまっているのかもしれない。あるいは、オムツをけっして換えないことを誇りとする伝統的な夫であるなら、娘のことには関わるまいと決めこんでいるのかもしれない。これは、娘の養育をその母親にまかせて、息子に積極的な関心を示す男性たちに見られることである。

ペルセポネー型の娘にとっては、自分に大切なことは内面的に理解していくという自分なりのやり方を尊重し、自分の出した結論を信頼してくれる両親がいれば理想的であろう。そのような親なら、彼女にさまざまな経験をさせてくれるが、彼女に圧力を加えることはないであろう。自分自身のなかにある内向性を大切にすることを学んできた親こそ、そういう人々である。

思春期と大人になりたての頃

ペルセポネー型の娘の学校経験はふつう、これまでの人生の続きである。「お母さんがいちばんよく知っている」式の関係のなかで大きくなっているなら、母親が彼女と一緒に買物をし、彼女の服を選び、彼女の友人、興味、そしていまではデートの選択に影響を及ぼすであろう。娘の経験を通して身代わり的に生きているために、娘のデートや活動を隅から隅までくいものにして、娘が自分に心を許して秘密を分かち合ってくれることを期待するかもしれない。

しかしながら、思春期の人々にとっては、秘密を守って、何らかのプライバシーをもつことが必要である。この成長段階で親からあからさまに侵入されると、独立した個人としてのアイデンティティの発達が妨げられる。何から何まで母親と分かち合っていると、思春期の娘は自分が何を経験すべきかということまで、母親からの指図を受けることになる。母親の不安、意見、それに価値観が、娘のものの見方に影響するのである。

典型的な中流ないし上流階級のペルセポネー型の女性が大学に通うのは、そこに彼女と同じ社会的階級と背景の人々がいるはずだからである。大学とは、ペルセポネーと彼女の友達が遊んでいた牧場の現代版なのである。このような女性にとって教育はふつう一種のレジャーであり、職業人になるための予備的訓練の場ではない。彼女が熱心に研究課題に取り組んで論文を書くのは、簡単に気ばらしとなるか、自信がないからである。特徴的なことだが、可能でさえあれば、いくつかの学問を専攻する。仮に一つの専攻に落ち着くとしても、それは積極的に選択したうえでのことというよりはむしろ、楽をしたいからとか、いちばん無難な道だからである。

仕事

ペルセポネー型の女性は「万年学生」であるか、そうでなければ仕事に出る。高校を卒業してからであれ、大学を卒業してからであれ、一つの仕事にとどまるよりはむしろ転職を繰り返し、友達や家族のいるところで仕事をしようとする。本当に自分の興味のひく仕事を求めて、次から次へと職を変える。あるいは、仕事に一生懸命でないとか、頼りにならないという理由

でクビになる。

ペルセポネー型の女性がもっともうまくやりこなすのは、イニシアチブ、粘り強さ、あるいは人を指導する技術がいらない仕事である。自分が喜ばせたいボスがいるときの仕事ぶりは見事である。彼はすぐに処理しなければならない特別な課題を彼女に与える。しかし、それが長期にわたるものとなると、ペルセポネーの仕事は遅々として捗らない。まるで、仕事から救い出してもらうのを期待しているかのように、あるいは、いつでも時間がある気でいるかのように振る舞う。そのどちらも現実ではなかったということがわかり、提出の時期になっても、まだその準備ができていない。せいぜい最後の土壇場になって、一夜漬けで仕事を片づけようとするだけである。

コレーに似ている女性にとって仕事はけっして重要ではないが、冥界の女王へと成熟するなら、話はまったく別である。彼女は創作、心理学、あるいは宗教の分野へ入る傾向がある。たとえば、芸術家、詩人、治療者、あるいは霊能力者として働く。彼女が何をするのであれ、ふつうそれは深く自分個人に根ざしたものであり、しばしば非正統的である。彼女は非常に個性的な仕方で働き、「本来の」学位をもっていないことが多い。

対女性関係

ペルセポネー型の若い女性は、自分に似た他の若い女性たちといるとくつろげる。しばしば高校や大学では女子修道会のシスターのような存在で、自分単独でよりはむしろ他の女の子たちと一緒に、新しい状況を試してみるのが常である。

もし顔立ちが奇麗なら、自分をそれほど女性的だと思っていない女性の友人たちをひきつける。彼女らは自分のあまり発達していない女らしさを彼女に投影し、彼女を特別扱いするのである。いままでの人生で常に、脆くて大切な存在として扱われてきているなら、彼女はこのような扱いを当然のように受け止めるであろう。彼女のもっとも親密な友達は、しばしば彼女より強いパーソナリティをもっている。ペルセポネー型の女性は、自分と同年齢と自分より年上の女性たちの心のなかに母性的反応を呼びおこす。そして彼女らは、彼女を可愛がり、世話をする。

（女の子を好む）男性との関係

男性たちにとってペルセポネー型の女性は、自己主張することがなく、少女っぽい態度の子供女である。彼女は、あらゆる女神たちのなかでもっとも目立たず、脅威を与えることがない乙女ペルセポネーのパターンにはまっている。彼女が、「あなたがしたいことなら、どんなことでもしましょう」と言うとき、実はそのことが言われているのである。

ペルセポネー型の女性にひかれる男性は、三つのカテゴリーに分かれる。彼女と同じくらいに若くて未経験な男性、彼女の無垢と脆さにひかれる「タフな男」、および「大人の」女性と一緒にいると居心地が悪い男性である。

「ヤング・ラブ」は、第一のカテゴリーに属する。これらの高校や大学での関係では、若い男女は対等の立場で、異性に関して探究しあうのである。

第二のカテゴリーになると、ペルセポネー（良家のすてきな少女の元型）は、町のタフな男とペアを組む。彼は、自分とはまるで正反対で特権を与えられた箱入り娘に魅惑される。彼女

はというと、彼の人格から発する磁力、性的な魅力（オーラ）、および強引さに引きつけられて、その虜になる。

第三の典型的なカテゴリーは、いろいろな理由で、「大人の女性」と一緒にいると居心地悪く感じる男性である。たとえば、年上の男とはるか年下の女性とのあいだのいわゆる五月・十二月関係は、この元型的な家父長的モデルの極端な形である。男性は相手の女性に比べて年齢、経験、背の高さ、体力、身なりの面でまさっていると考えられる。女性は、相手の男性より年齢、経験、背の高さ、体力、学歴、知性の面で劣っていると考えられる。この理想にまさにぴったりなのがペルセポネー型の若い女性である。さらにペルセポネーは、多くの男性が「母親」について抱くイメージ（気が強いか、気難しい女性）とまったく違っている。これも一つの理由となって、ある種の男性が年下の女性を好きになるのである。ペルセポネー型の女性と一緒にいると、男性は自分が人を自分の思いどおりにできる力強い男性と見られていると感じ、自分の権威や理想が挑戦を受けていないと感じる。彼はまた、自分が無知で未経験あるいは無能であっても批判されないとも感じる。

ペルセポネー型の女性にとって男性との関係は、自分を支配する母親から離れるための手段になりうる。その場合彼女は「人質」としてのペルセポネーの段階を経過する。そこでは、その所有をめぐって男性と母親のあいだでくりひろげられる権力闘争の対象となる。彼女は、母親が好まない男性、母親が念頭においている「すてきな若い男性」とは違った誰かと恋におちる。ペルセポネーが自分とは異なった階級、さらには異人種の男性を選ぶことがある。母親は彼の人柄を見て「あの人は、つきあいにくくて無作法だわ」とか「可愛げがないわ。……いつも別の見方をするんだから！」と言って反対する。彼が、甘やかされて育ったお姫さまをこれまで扱ったことがない男性であるなら、もし彼女がそのような振る舞いにでると我慢できないであろう。そこで母親は肝をつぶす。ふだんの従順な娘に影響を及ぼせるものと確信して、娘の選択を非難する。彼女は、その男性の人柄、性格、あるいは背景を嘆き、ときには娘の判断、能力、そしてモラルにも疑いの目を向けることがある。しばしば母親は、彼が有力な敵対者であることに気づいている。実際、このように自分の母親に逆らえるということが一つの理由となって、ペルセポネー型の娘は彼にひかれたのである。

いまや、生まれて初めてペルセポネー型の娘は、母親と、行儀のよい少女でいなさいという母親の基準と、ぎくしゃくするようになる。母親や家族は、彼女が選んだ男性と会うのを禁じるかもしれない。彼女は、（あからさまに彼らに挑戦するよりはむしろ）言うことを聞いて、それからこっそり家を抜け出て、彼に会いに行くであろう。あるいは、彼がどんなにいい人であるかを、母親に確信させようとするかもしれない。

この闘いがある程度おこなわれてから、男性は、娘が母親と対決するか、そうでなければ母親からの賛同を得ようとするのを諦めなければならないと言う。彼は、彼女が自分と一緒に暮らし、自分と結婚し、住み慣れた世界を自分と一緒に去り、母親との接触を断ち切るように求めるであろう。二人のあいだに挟まって、彼女は母親の元にもどって従順な娘の役割を演じるか、彼との人生に自分を賭けて母親との縁を切るかのどちらかとなる。

文字どおり、あるいは比喩的に母親から離れるなら、彼女は自分でものごとを決める一個の独立した人間になる方向で旅を始めたことになる。（彼女がそうするとき、支配的な母親を支配的な男性と取り替えるという危険を犯している。しかしふつう、自分の母親に挑戦すること

で彼女は変化しており、もはやかつての従順な人間ではなくなっている。）母親との和解は、自分自身が情緒的な独立を確立してから後におとずれるであろう。

セックス

乙女ペルセポネーの段階にいる女性は、眠り姫や白雪姫のように、自分の性欲が眠っているか、あるいはそれに気づいておらず、通りすがりの王子がそれを目ざめさせてくれるのを待っている。多くのペルセポネー型の女性は、結局、性的に目ざめさせられる。彼女らは、自分が情熱的でオーガズムを経験する女性であることを発見する。これは、彼女らの自尊心によい効果をもたらす発見である。以前は、大人の女のふりをしている少女のようだと感じていたからである。（ペルセポネーのこの側面は、本章の後半でさらに詳しく論じる。）

結婚

結婚は、ペルセポネー型の女性にとって、偶然自分の「身に降りかかる」何かである。男性が結婚を望み、彼女を口説いてイエスを言わせるとき、彼女は「誘拐されて」結婚するのである。もし典型的なペルセポネー型の女性であるなら、自分が本当に結婚を望んでいるのかどうか確信がもてないであろう。彼女は男性の執拗な要求と確信に押し流され、結婚は当然するものだという文化からの期待に影響されている。もともと、ペルセポネー型の女性は、「伝統的な意味での女性的な」パーソナリティをもっている。彼女らは、自分より強い人間に従い、能動的であるよりはむしろ受動的で、人と競争したり、押しつけがましくなることはない。男性が彼女らを選ぶのであって、その反対ではない。

いったん結婚すると、ペルセポネー型の女性は、ペルセポネー神話に似たいくつかの段階を通り抜けて、夫と母親のあいだに挟まれた気のすすまない花嫁あるいは人質になる。自分から求めたわけではないにしても、結婚することで、永遠の少女あるいは乙女が、既婚夫人、母親、あるいはセクシーな女性になることもある。それはヘーラー元型、デーメーテール元型、あるいはアプロディーテー元型が、結婚によって活性化されるときである。

結婚したばかりのある夫が、自分とペルセポネー型の妻とのあいだで繰り広げられる苦痛に満ちたドラマを次のように述べている。「彼女は、まるで僕のせいで人生が破滅したかのように思っています。僕はただ彼女が好きになって一刻も早く結婚したかっただけなのに。先週ある書類を取りに銀行に行かねばなりませんでした。ところがその日は別の約束がありました。それで僕は彼女に代わりに行ってくれないかと頼みました。けれど彼女は、自分が召使い扱いされていると言って僕を非難しました。僕の方から始めるのでなければ、セックスはありません。そのときも彼女は、まるで僕がレイプ魔であるかのように振る舞うのです。」彼は二人のあいだでおこっていることに混乱し、腹を立て、落ち込み、彼女からは、鈍感で恐ろしい野獣扱いをされているように感じていた。自分が傷つけられて無力であると感じるのは、妻がまるで囚われのペルセポネーで、自分がペルセポネーを誘拐して幽閉しているハーデースであるかのように反応しているからであった。

花嫁になることに気のすすまないペルセポネー型の女性は、ただ部分的にしか自分をコミットさせることがない。彼女らは心のなかで留保しながら結婚する。その一人はこう言った。「私は何人かのルームメイトと一緒に暮らしていて、仕事は退屈でした。彼は私が夢に見てい

たチャーミングな王子ではありませんでしたが、私と同じものを望んでいるように思われました。家と家族です。それに頼りがいがありました。ですからイエスと言ったのです。」このペルセポネー型の女性は、自分の夫にただ部分的にのみコミットしていた。情緒的には、自分の時間の一部だけを結婚に費やしていたのであり、残りは他の男のことを空想することに費やしていた。

子ども

　ペルセポネー型の女性は、子どもがいるとしても、デーメーテールが心のなかに活性化されるのでない限り、自分のことを母親らしいと感じることはないであろう。いつまでたっても娘のままで、自分の母親こそ「本当の母親」であり、自分自身はただ母親の役割を演じているにすぎないと考える。世話やきの母親が孫の世話をやくために、ペルセポネー型の娘は自分が母親として無能であると感じ、問題はさらに深刻になる。彼女の母親は、「うるさい赤ちゃんの抱き方などわからないでしょ、私にやらせて」とか「私がやってあげるわ。あなたは休んでいて」とか「あまり母乳が出ないようね。哺乳びんに切り換えたら」と言ったりする。これらのおきまりの評価を受けて、彼女の娘の自尊心はおとしめられていく。

　ペルセポネー型の女性を母親に持つ子どもたちは、いろいろな仕方で彼女に反応する。ペルセポネー型の母親より意志が強くて、考えがはっきりしている娘は、母親から何をしてもらいたいかを言うのを諦める。大きくなっていくと、（ときには、早くも十二歳の年齢で）娘と依存的なペルセポネー型の母親との役割は逆転する。このような娘の多くは、大人になってから子ども時代や思春期を振り返って、「私には母親などいませんでした。私が母親だったのです」と言う。もし母親と娘がともにペルセポネー型の女性であるなら、彼女らは極端なくらいに似るであろう。特に一緒に住んで、お互いに頼りあう場合、そうである。歳月が過ぎるにつれ、彼女らは離れがたい姉妹に似てくる。

　自己主張の強い息子たちをもつペルセポネー型の母親は、自分が彼らに「振り回されている」と感じる。よちよち歩きの頃でさえ、男の子はペルセポネー型の母親を怖がらせる。だだをこねて、腹を立てているとき、男の子は力のある男を小さくしたように見えるからである。どんな人間関係でも、権力を使うことはペルセポネー型の女性には無縁であるため、このような子どもに「誰がいちばん偉いか」わからせるようなことはまずない。彼女は要求に屈伏し、限界を設けず、自分が無能で、犠牲になっていると感じる。あるいは間接的に男の子の気を逸らせるやり方を見つける。息子を魅惑して、いい気持ちにさせ、甘い言葉でたらしこんで気持ちを変え、注意を別の方向に逸らせるか、びっくりして罪悪感や羞恥心をおこさせるのである。

　母親がペルセポネー型であっても、その母親が干渉せずにその子どもを愛して、自分とは非常に違っているがゆえに子どもの独立心を賞賛するとき、息子や娘が成長する場合がある。ペルセポネー型の母親は想像力や遊びの能力を彼らと共有することで、彼らのそうした面を育てることもする。自分自身が乙女ペルセポネーを越えて成長している場合は創造性の源としての内面的生活を大切にする方向で子供たちを導くことができる。

中年期

乙女ペルセポネーの元型は、永遠に若々しいままでいるが、女性自身は年をとっていく。肉体的な若さを失い、顔に皺がよっていくたびに、惨めな気持ちになっていく。いまや現実という障害が現れてきて、自分がかつて可能性として描いていた夢が、いまや手の届かないものになっているということを気づかされる。中年の抑うつ状態は、これらの現実が彼女に明らかとなるときに現れる。

もしいつまでも「乙女」と同一化しつづけているなら、現実を否定しようと努めるであろう。一心に若々しさの幻影を維持しようとして、美容整形術を受ける。ヘアースタイルや服は、彼女よりもっと年下の女性にふさわしいものにある。頼りなさそうに振る舞い、キュートになるように努める。一年また一年と過ぎていくごとに、その行動はわざとらしくなってくる。このような女性にとって、抑うつ状態は、もうすぐそこにきている。

もし中年になって、乙女ペルセポネーともはや同一化していないならば（それは、いろいろなことに自分をコミットさせたり、自分を変えるような経験をしてきたためであろう）、抑うつ状態に陥ることはないだろう。そうでない場合は、抑うつ状態は人生の転換点となる。これが転機となって、よい結果もしくは悪い結果が生じるのである。いつまでも続く抑うつ状態の始まりであって、その後は人生に絶望したままでいるかもしれないし、長引いた思春期がここで終わって、成熟が始まるかもしれない。

晩年

生きていくうちにペルセポネー型の女性がコレーから女王へと成長するなら、六五歳かそれ以上の年齢になった頃には、彼女は女王のように堂々とした老賢女になっており、生と死に意味を与える神秘を知っている。これまでに神秘的あるいは霊的な経験をしており、自分自身の奥深い所にある霊性の源を掘りあてて、もはや年をとって死ぬことを恐れなくなっている。もし成熟し、自分をコミットさせ、自分のなかの他の側面を発達させ、しかも乙女ペルセポネーとの結びつきを維持しているなら、彼女の一部は永遠に若々しい精神を保ちつづける。

晩年になると、ペルセポネーの痕跡がほとんどなくなることもある。これはペルセポネーのパターンに従って人生のスタートをきりながら、大人になってまもなく、あるいは中年になってからヘーラー、デーメーテール、アプロディーテーが活性化した女性である。もしペルセポネーにとって最悪のシナリオどおりになれば、抑うつ状態からけっして回復せずに、それから以後はずっと人生に打ちのめされたり、現実から引きこもったりして、自分の冥界に囚われの身でいつづけることになる。

心理的困難

女神ペルセポネーは、ハーデースに誘拐されてレイプされ、一時無力な人質として気のすすまない花嫁となるまでは、何の心配もない娘であった。母親の努力で解放されたとはいえ、ざくろの実を食べてしまい、そのため一年のある期間は地上でデーメーテールとともに過ごし、ある期間はハーデースとともに冥界で暮らすことになった。後になって初めて、彼女は冥界の女王あるいは案内人の地位に納まった。神話のそれぞれ独自な段階は、実際の人生の類似の段

階に対応する。女神と同様、ペルセポネー型の女性も、これらの段階を経ながら発達し、自分の身におこることに反応しながら成熟する。だが、一つの段階に留まってしまうこともある。

ヘーラーとデーメーテールは、女性が成長するためには、それにたいして抵抗しなければならない強い本能を表している。これらの女神と違って、ペルセポネーに影響されると、女性は受動的で従順になる。そのために、簡単に他人から支配されてしまう。七人の女神のなかでもっとも流動的で目立たない女神であるペルセポネーは、方向と衝動が欠けていることが特徴的である。しかし、彼女らのうちで、成長に向かうもっとも確実な道を確保しているのもペルセポネーなのである。

乙女ペルセポネーとの同一化

乙女として生きることは、何にたいしても、あるいは誰にたいしても自分をコミットさせない永遠の少女であるということを意味する。何らかのはっきりした選択をすれば、他の可能性が排除されるからである。さらに、このような女性は、まるでいつでも決断するための時間があるかのように感じており、そのために何かが自分を動かすまでは待っていることになる。彼女は、ピーターパンや迷子になった男の子たちと一緒に住むウェンディのようにネヴァー・ネヴァーランドに住み、なりゆきまかせに遊んでいるのである。成長しようと思うのなら、彼女は現実の生活に戻らなければならない。ウェンディはもちろんこの選択をおこなった。彼女はピーターにさよならを言い、窓を通って、長いあいだ留守にしていた子供部屋に戻ってきた。彼女はいまや自分が年をとっていくだろうということを知っているのである。ペルセポネー型の女性が越えなければならない敷居は、心理的な敷居である。

ペルセポネー型の女性が成長するためには、いろいろなことにコミットし、それを成し遂げるということを学ばなければならない。イエスと答え、自分がやると同意したどんなことでもそれを最後までやり遂げるということは、彼女にとって困難である。期限に間に合わせること、学校を卒業すること、結婚生活に入ること、子どもを育てること、仕事を続けることは、どれも気ままな生活をしたい者にとっては困難な仕事である。成長するためには、優柔不断さや、消極性や、ものぐさと闘うことが必要とされる。自分のなした選択が面白いものではなくなったときでも、心を強く決め、続けなければならないのである。

三十歳から四十歳のあいだに、自分は永遠に若いのだというペルセポネー型の女性の幻想に現実が割り込んでくる。彼女は、何かが違っていると感じ始めるだろう。生物学的な時計では、子供を産む時期が過ぎ去ろうとしている。自分の仕事には将来性がないことを悟ったら、鏡に自分を映してみて、刻々と年をとりつつあることを知るかもしれない。友人たちを見回してみると、彼らは大人になってしまっており、自分だけが取り残されていることに気づく。友人たちは夫や家族をもっていたり、キャリアを築きあげたりしている。友人たちがおこなっていることは、他の誰かにとって意味をもっており、ある一定の、しかし微妙に彼女と違っている。なぜなら、人生が彼らに影響を及ぼして、その痕跡を残しているからである。

乙女ペルセポネーの態度を続ける限り、女性はけっして結婚することがないか、さもなければいろいろな活動を経験しても、「現実に」自分を賭けることはないであろう。結婚することにたいして抵抗があるのは、それを乙女の元型的な観点から見ているからである。乙女にとって結婚のモデルとなるのは死である。ペルセポネーの立場からすると、結婚は死をもたらす

ハーデースによる誘拐であった。結婚と夫についてのこのような見方は、ヘーラーの見方とはまったく対照的に違っている。ヘーラーにとって結婚は自分の願いを成就することであり、夫ゼウスが自分の願いを当然かなえてくれるものと期待する。ヘーラー型の女性は、その元型が結婚と配偶者についてポジティブな期待をもつために、男性をよく知り、不幸な結婚に入ることにたいして抵抗しなければならない。そうでなければ、結婚が自分の願いをかなえてくれないとき、幻滅するだろう。これとまったく対照的にペルセポネー型の女性は、結婚が常に誘拐や死のようなものであるがゆえに、これと闘うか厭わねばならないという、同様に根拠に乏しい思い込みにたいして抵抗しなければならない。

性格の傷となるペルセポネーの落とし穴

ペルセポネーが再びデーメーテールと結ばれたとき、母親がした最初の質問は、「冥界で何かを食べなかったかい？」であった。ペルセポネーはざくろの実を少し食べたと答えたが、そのとき彼女は、ハーデースが強制したからこそそうしたのだと嘘をついた。ペルセポネーは、母親が娘にたいして抱いているイメージを損なうことなく自分が望むことをしたのだ。彼女は自分で自分の運命を支配できないのだ、それゆえ責任を負うこともできないのだという印象を与えながら、実際には自分自身の運命を決定している。ざくろの実を飲み込んだことでペルセポネーは、ある期間をハーデースとともに過ごすことを保証した。

迷い、嘘、ごまかしはペルセポネー型の女性にとって潜在的な特徴をもつ心理的問題である。彼女たちは無力感を感じ、自分よりも力のある他者に依存しながら、自分が暗に望んでいることを得る術を学ぶ。彼女たちは行動する好機をうかがい、媚へつらいを使うこともある。他者と直接的に対決するよりもむしろ、真実の一部だけを話したり、あるいはまったく嘘をついたりする。

ふつうペルセポネー型の女性は怒りを避ける。彼女たちは人々が自分に激怒することを望まない。自分よりも力があると認め、実際そうである他の人々の寛容さと善意に依存しているように感じるのである。だから彼女たちはしばしば、母親や父親や夫や雇用主や教師たちを保護者であるかのように扱う。彼らの恩恵が必要だからである。

しかしながらナルシシズム（自己愛）も、ある種のペルセポネー型の女性にとって、もう一つの落とし穴となる。彼女らは不安な思いで、あまりにも自分に囚われてしまっているので、他者と関係する能力を失っている。彼女らの思いは「私はどんな風に映っているかしら。私にはウィットがあるかしら。私の言っていることは知性を感じさせるかしら」といった自分に関する疑問に支配されている。そして彼女らのエネルギーは化粧と服装に注がれる。このような女性は鏡の前で何時間も過ごす。人々は、彼女らにフィードバックを与え、自分の姿を見せてくれる鏡となるためにのみ存在している。

冥界における心の病い

神話の一部では、ペルセポネーは冥界に囚われの身として、食べることも微笑むこともしない悲しい乙女であった。この段階は、ある種のペルセポネー型の女性たちが通過しなければならない心の病いの時期に似ている。

ペルセポネー型の女性は、縛りつけられたような状態で人々に支配されたり制限されたりす

るとき抑うつ感を感じやすい。自己主張をしないので彼女は自分の怒りや違和感を抑圧し、それを表現したり積極的に事態を変えようとすることはしない。むしろ自分の否定的な感情を抑え、抑うつ的になるのである（怒りが内へ向かい、抑圧されて抑うつとなる）。孤立感や不全感や自己批判などがさらに抑うつ状態に輪をかける。

ペルセポネー型の女性が抑うつ状態になるとき、その抑うつは劇的ではなく、人々の目にたたないものになっていく。彼女はますます世間から退き、その受容性はますます増大し、彼女が何を感じているかは誰にもわからなくなる。彼女は痩せ細っていて、存在感が希薄に見える。冥界に初めて連れ去られてきたときのペルセポネーのように、何も食べず、何も言わない。心理的にも肉体的にも存在感が希薄だということが、時の経過につれてますます目立ってくる。抑うつ状態に陥ったペルセポネー型の女性は、花が枯れていくのを思わせる。

これと対照的に、抑うつ状態に陥ったデーメーテール型の女性は、大きな存在となって現れ、周りにいる誰にたいしても大きな効果を及ぼす。うつ状態に陥る前にはエネルギッシュな中心人物だったかもしれない。それゆえ彼女が抑うつ状態になると、その行動が劇的に変化するのである。一方、ペルセポネー型の女性は初めから出しゃばることをしなかったために、抑うつ状態になるとただ、ますます存在感がなくなっていくばかりとなる。

さらに抑うつ状態のデーメーテール型の女性は、周りの誰にたいしても、彼女が心のなかで抱いている責めに関して、罪悪感や無力感あるいは怒りをおぼえさせる。これと対照的に、抑うつ状態のペルセポネーは、人々にこれらの感情を呼びおこさない。彼らは彼女から切り離されているように感じ、彼女の方が罪悪感、責め、無力感をおぼえるのである。そしてしばしば彼女は不当にも、自分が言ったり考えたりした何かに関して罪の意識をおぼえている。その結果、抑うつ状態に陥っているデーメーテール型の女性は、家の中心にいて、途方もなく存在感を与えるのにたいして、抑うつ状態のペルセポネー型の女性は奥の間に消えていくように見える。

ペルセポネー型の女性のなかには、内的イメージ、空想や想像された生活という影の世界に退く者がいる。そこはただ自分だけが近づくことができる世界である。干渉する母親や虐待する父親から逃れるために、あまりにも長いあいだそこに引きこもって、一人で暮らしてきた女性がいるかもしれない。私の患者でペルセポネー型の女性の一人が、こう言った。「私には特別の場所がありました。居間の隅にある、大きくて茶色の椅子の背後とか、木の下で枝が大地に触れていて身を隠せる所などです。そこへ私はしじゅう隠れに行きました。子供の頃そこで何時間も過ごし、たいてい白昼夢にふけりながら、自分の知っている人々が家にいるけれども、自分はどこかよその所にいると決めこむのです。」

ときには、自分の内界にふけるために人々から遠ざかり、現実の世界があまりにも生きづらかったり、要求を突きつけてくるときは、いつでもそこへ逃げる。しかし、ある点までくると、かつては聖域であったものが牢獄になるかもしれない。テネシー・ウィリアムズの戯曲『ガラスの動物園』に出てくるローラのように、ペルセポネー型の女性は、自分の空想の世界に閉じ込められて、通常の現実に戻ることができなくなるであろう。

現実から次第に退いていくために、ある種のペルセポネー型の女性は足を滑らせて精神病にはまりこんでいくようである。彼女らは象徴的なイメージと秘教的な意味に満ちた世界のなかに暮らし、自分自身についてゆがんだ認識をする。精神病は一種の変容に役立つことがある。

つまり、このような女性は精神病を通じて、これまで自分の生活を窮屈にしてきたいろいろな限界や禁止を打ち破ることができるのである。一時的に精神病になることによって、これまでと比べてより広い範囲にわたる感情と、自分についてのより深い自覚を呼びおこすことができるかもしれない。

しかし精神病者は冥界の囚われの身となる危険を冒している。（シェイクスピアの戯曲『ハムレット』に出てくるオフェーリアのように）ある種のペルセポネー型の女性は、現実があまりにも苦痛であるとき、精神病にとどまることによって、現実におこっていることを避ける。しかし他の多くの者は治療の助けを得て、その経験をくぐり抜け、成長し、自己主張し、自立することを学ぶ。

ペルセポネーが冥界から現れて後は、ヘカテーがいつも彼女の同伴者となった。新月と交差路の女神ヘカテーは、幽霊とデーモン、呪詛と魔術という不気味な領域を支配した。精神病から回復してくるペルセポネー型の女性は、出来事の象徴的な意味を直観的に見分ける内省力を得るかもしれない。病気が治って、病院から世の中に戻るとき、しばしばもう一つの次元が存在するということに気づいている。これはヘカテーを同伴者にもつということで象徴されているものである。

成長の道

何かに自分を賭けるためには、ペルセポネー型の女性は自分のなかの乙女と闘わねばならない。結婚を決意するなら、心の中で指と指とを交差させずに、つまり保留せずにイエスと言わねばならない。もしそうするなら、結婚はしだいに彼女を永遠の少女から成熟した女性に変えていくであろう。もし仕事の世界に乗り出す場合、自分の人間的成長の点からいっても、また仕事で成功するためにも、本気で自分を賭けて、その仕事にとどまることが必要である。

ペルセポネー型の女性は、自分で人生に直面して自分のことを大切にするならば、乙女ペルセポネーを越えて成長するであろう。特権階級出身の多くの娘にとって、このような自立が初めて可能となるのは離婚してからである。それまで、彼女らがしてきたのは、自分に期待されていることだけであった。彼女らは、似合いの若者と結婚した箱入り娘であった。離婚の一つの理由は、結婚生活が捕虜生活のように思われる点にある。彼女らは、結婚してもその存在が変わっておらず、いまや離婚が自分の通過儀礼であるということを知るのである。自分のためにいろいろのことをしてくれたり、自分を叱ってくれる誰かがいなくなって初めて成長することができるペルセポネー型の女性がいる。締まりの悪い水道の蛇口とか、銀行のレート、それに仕事口といった問題を自分で解決しなければならないとき、必要性が教師となる。

ペルセポネー型の女性は、（本書の全体にわたって述べられている）他の女神元型を活性化することを通じて、あるいは（アプロディーテーの章で述べられる）自分のアニムスを発達させることによって、（次に論じる）ペルセポネー元型に本来備わっているいくつかの異なった方向に向かって成長することができる。

情熱的でセクシーな女性になる

ペルセポネー型の女性は、セックスをするとき、レイプされているとか、そうでなければただ従順に振る舞っているだけだと感じ、性的に反応しない女性であるかもしれない。このような女性は次のように言うだろう。「一週間たつと、彼がセックスのことで私にいらいらしているのがわかります」「セックスをしているときは、サラダドレッシングのつくり方を考えています。」あるいは「時どき、本当に頭が痛くなるときがあります」「セックスはいやなのです。」しかし彼女は官能的でセクシーな女性に変身することもある。私はこのような変身が、自分の患者の女性たちや、私とそのことについて話してきた男性たちの妻において、しばしばおこるということを聞いてきた。

実際、自分のセクシュアリティを目ざめさせる力は、神話に表現されるペルセポネー元型にもともと含まれているものである。いったん冥界の女王となったペルセポネーは、愛と美の女神であるアプロディーテーと結びついた。ペルセポネーはアプロディーテーに含まれる冥界の側面を表していると言えよう。ペルセポネーは、より内向的なセックス、あるいは眠っているセックスである。神話ではアドーニスが、アプロディーテーからもペルセポネーからも愛された。そして、この二人の女神は、ざくろを象徴として分かちもっている。

さらに、ペルセポネーがハーデースからざくろの実を受け取ったということは、彼女が自分から彼の元に戻るであろうということを意味した。この行為によって彼女は、気のすすまない花嫁であることをやめ、囚われの身であるのではなく、彼の妻として冥界の女王になったのである。現実の人生では、結婚後何年かたつと、ペルセポネー型の妻は、自分がこれまで横暴で利己的な夫に囚われの身で、彼とはいやいや結婚してきたのだとは感じなくなることがある。彼女は、彼を傷つきやすくて、真面目で、不完全な男と見ることができて、彼が自分を愛してくれていることが評価できるようになって初めて、いままでとは違った感じ方をする。彼女の認識が変化すると、彼は自分たちの結婚生活で初めて、彼女が自分と一緒にいてくれて、自分のことを愛していることを知る。信頼と評価というこの新しい脈絡のなかで彼女は初めてオーガズムを経験し、彼のことを誘拐者ハーデースとしてよりはむしろ、情熱を呼びおこすディオニューソスと見るようになるであろう。

古代ギリシアでは、陶酔を誘うディオニューソスの精神が、女性たちを感動させてエクスタシーを伴うセックスの高みへと導いた。ギリシアの女性たちは、山で催される酒盛りで彼を崇拝した。彼女らは、周期的に、自分の伝統的に尊重されている役割や自分たちの家庭を離れて、宗教的な酒宴に参加した。ディオニューソスは彼女らを情熱的なマイナスたち（ディオニューソスの侍女）に変えた。伝統と神話はハーデースとディオニューソスを結びつけている。ディオニューソスは、ハーデースが再び姿を見せるまでのあいだ、ペルセポネーの家で眠ったと言われている。哲学者ヘラクレイトスは、「女たちが怒り狂うハーデースとディオニューソスは同じものである」と言った(4)。

今日のペルセポネー型の女性も、これに似た「ディオニューソス的」出会いを経験する。ある女性はこう言っている。「夫を捨ててから、自分の結婚にこれまでなかったものを探しに出かけました。私は自分がきちんと育てられた神経質なお嬢さんにすぎないということがわかりました。自分をミス・プリスだと思っていたのです。」喫茶店である男性と知り合い、彼の恋人になった。彼は非常に官能的で、彼のおかげで彼女は、「自分がこれまで少しも知らなかっ

た神経の末端」に気づくことができるようになった。

宗教的なエクスタシー体験の能力を発見する

　女神ペルセポネーは、元型的にヘカテーとディオニューソスと親しい関係にあるということは、なぜある種のペルセポネー型の女性が、女性神官に見られる霊的エクスタシー能力を発展させるかを理解するうえでの手がかりを与えてくれる。彼女らは、儀式によって恍惚状態になり、ある神もしくは女神の虜になったと感じる。キリスト教においては、聖霊が彼女らを動かすとき、「異言を語る」「カリスマ（賜物）を授かった者」となるであろう。女神崇拝が復活し、らせん舞踊が女神の霊を呼びおこす今日では、日中はありきたりのペルセポネー型のように見える女性が、夜ともなると、不気味なヘカテーやディオニューソスのマイナスになる。

霊媒もしくは超能力者としての素質を発展させる

　冥界を訪れて死者の影に話しかける死すべき者（人間）の道案内人であるペルセポネーには、降霊会を催して、自分を通じて死者の霊を語らせる霊媒と比喩的によく似た機能を果たしている。そのパーソナリティは分散傾向にあって、どんなことにも受容的で焦点が定まっていないために、ESPを受け取る能力が促進される。超能力を発達させるためには、ペルセポネー型の女性は乙女との同一化を越えて、ペルセポネー＝ヘカテー的要素を見つけ出さなければならない。この要素を自分のものとすると、不気味なものを恐れず、冥界を住まいとし、いつ危険な十字路にいて安全な道を探さねばならないかということを賢明に知ることができるようになる。

冥界への道案内人になる

　ひとたびペルセポネー型の女性が自分自身の深みに下って、元型的世界の深い領域を探究し、その経験を再検討するために、恐れることなくそこに戻るならば、彼女は通常の現実と通常でない現実のあいだの媒介をすることができるようになる。彼女はそれまでに、恐ろしいぞっとするような、理屈では説明することができないような幻や幻覚を経験しており、霊的な出会いをしている。もし自分がこれまでそのようにして学んできたことを伝えることができるならば、彼女は他の人々にとっての道案内人になることができる。たとえば、私が精神病院で働いていたときのことだが、ルネという少女の書いた書物『分裂病の少女の手記(5)』（みすず書房）は、精神病者であるということが主観的にどういう経験であるかということについてのいきいきとした洞察を私に与えてくれた。冥界に行って、そこから戻ってきたペルセポネー型の女性は、他の人々を自分自身の深みと結びつけることができる治療者＝道案内人になることもできる。彼女は彼らを導いて象徴的な意味を発見し、彼らはそこに見出すものを理解するのである。

11

錬金術の女神としての
アプロディーテー

アプロディーテー

愛と美の女神アプロディーテーだけは、錬金術の女神という独立したカテゴリーをもうけることにする。彼女のみがもっている魔力、もしくは変容の力を表すのにそれがふさわしいからである。ギリシア神話では、アプロディーテーは死すべき者（人間）と（三人の処女神を例外とする）神々を恋に陥らせて、新しい生命をはらませるおそるべき存在であった。ピュグマリオーンのために彫像を生きた人間の女性に変えた。（人々を石に変えたアテーナーと対照的に）彼女は、インスピレーションを吹き込んで、詩や説得力豊かな演説を生み出し、変容と創造をもたらす愛の力を象徴している。

彼女は処女神や傷つきやすい女神の両方に共通する特徴をいくつかもち合わせているが、どちらのグループにも入らない。もっとも情事が多い女神であるアプロディーテーが、処女の女神でないことは確かである。といっても、自分の好きなことをするという点では、アルテミスやアテーナーやヘスティアーと似ている。また傷つきやすい女神でもなかった。といっても、男の神々と結びついたり、子どもをもうけるという点ではヘーラーやデーメーテールやペルセポネーと似ている。しかし彼女らと違い、アプロディーテーはけっして犠牲になることもなければ、苦しむこともなかった。彼女のどの関係でも、欲望の感情は相互的なものである。彼女は、自分が望みもしない男性の情熱の犠牲になることは一度もなかった。（処女神たちを動機づけている）他者からの独立と、（傷つきやすい女神たちの特徴である）他者への永続的な絆のいずれよりも、他者との情緒的経験を重んじたのである。

錬金術の女神であるアプロディーテーは、女神の他の二つのカテゴリーといくつかの類似点を共有しているが、両者とも根本的に異なっている。アプロディーテーにとって人間関係は重要ではあるが、（傷つきやすい女神たちのように）他の人々に長期にわたって本気で関わるということではない。アプロディーテーはいろいろな人間関係を完成させて、新しい生命を生み出そうとしているのである。この元型は肉体的な性交を通じて、あるいは創造的なプロセスを通じて表現されよう。彼女が追求しているものは、処女神が追求しているものと異なっている。しかし、自分にとって個人的意味のある事柄に注意を集中させることができるという点では、処女神に似ている。他の人々は彼女が目標としているものから彼女の注意を逸らすことはできない。そして、彼女が重視しているものがひたすら主観的なものであって、客観的な業績とか世間での認知という点から測ることができないという点では、アプロディーテーは、逆説的に聞こえるが、無名で内向的なヘスティアーともっともよく似ている。ヘスティアーは表面的に見るならば、アプロディーテーとは似ても似つかない女神なのだが。

アプロディーテーが美しくするものは誰であれ、あるいは何であれ、抗いがたい美しさをもつ。磁石のような魅力がそこから生まれ、二つのあいだに「化学」がおこる。その二つのものは、何ものにもまして一つとなることを願う。二人の人間は、もっと親密になりたい、交わりたい、願いを成就したい、あるいは（聖書的な言い回しに従えば）相手を知りたいという力強い欲望をおぼえる。この衝動は純粋に性的なものであるかもしれないが、それを引きおこしているものは、それより深いもので、心理的でもあるが、霊的でもある欲望を表している。性交

は精神的交わりや聖体拝領と同じ意味をもち、願いの成就は完成へと向かう心の深い動きを表しており、合一は結ばれて一つになること、知ることは本当に互いに理解し合うということである。相手を知り、かつ相手から知られたいという欲望は、アプロディーテーが生み出すものである。もしこの欲望から肉体的に親密な関係になるなら、妊娠がおこり、新しい生命が誕生する。もしこの合一が精神的な種類のものであれば、心理的、情緒的、あるいは霊的な面での新しい成長がおこる。

アプロディーテーがある人間関係に影響を及ぼすとき、彼女のはたらきはロマンティック、あるいは性的なものに限られない。プラトニック・ラブ、魂の結びつき、深い友情、ラポール（交流）、それに感情移入的理解はすべて愛の表現である。精神的指導、カウンセリング、子育て、進路相談、教育、編集、心理療法と分析においておこりうるように、成長が生み出され、ヴィジョンが指示され、潜在力が発展させられ、励まされて創造性の火花が散るとき、いつでもアプロディーテーがいて、二人の当事者の両方に影響を及ぼしている。

ライムライトのような意識の質

アプロディーテーと結びついている意識はユニークな性質をもっている。処女神たちは焦点が絞られた意識と結びついており、その元型によって女性は自分にとって大事なものに精神を集中することができる。傷つきやすい女神たちの受け身の姿勢は、注意が分散しているということと同じである。しかしアプロディーテーには独自の意識の性質があり、私はこれをアプロディーテー型の意識と呼ぶ。アプロディーテー型の意識は焦点が絞られているが受容的でもある。このような意識は、注意が向かうものを取り込むとともに、それからの影響を受ける。

アプロディーテー型の意識は、傷つきやすい女神たちの分散した意識より焦点が絞られて、強烈である。しかし、処女神たちの焦点が絞られた意識より、焦点の当て先にたいしてより受容的で、それに従っていく傾向がある。それゆえ、その輝きが及ぶ範囲にあるものをすべてあたたかくやわらかな光りで照らし出すリビングルームのランプにも、また、スポットライトやレーザー光線にも似ていない。私にはアプロディーテー型の意識は、舞台を照らし出す劇場の照明に似ているように思われる。

経験が私たちに及ぼす衝撃は、このライムライトに照らし出されて見えてくるものによって高められ、ドラマティックなものにされ、強められる。私たちは、自分が見たり、聞いたりするものを取り込んで、それに反応するのである。この特殊な照明があるからこそ、私たちは、交響曲を聞くと、心が遠くへと運ばれ、劇や演説者の言葉に感動するのである。もろもろの感情、感覚的印象、それに記憶は、私たちが見て聞くものにたいする反応として、私たちのなかから引き出される。舞台の上にいる人々は、聴衆から霊感を吹き込まれ、自分に向かっているように感じられるラポールからエネルギーを受ける。

「ライムライト」に照らし出されているものは私たちの注意を奪う。私たちは努力せずとも、自分が見るものに引きつけられ、くつろいだ気持ちで注意を集中させる。アプロディーテー型の意識が放つ黄金の光に照らし出されて見えてくるものは何であれ、私たちを魅惑するようになる。たとえば、ある人の顔や性格、宇宙の本質についての考え、あるいは陶磁器の半透明な感じや形である。

ある人、ある場所、ある観念あるいはある対象が好きになってしまった人はみな、アプロ

ディーテー型の意識でそれに注意しながら、それを取り込む。しかし、アプロディーテー意識を用いる人がすべて恋をするわけではない。アプロディーテーは、ある誰かが目にとまると、その人がとても魅惑的で美しいように思われてくるという仕方で好きになってしまうのだが、これはアプロディーテー元型を体現している女性たちに特徴的であり、ある人が好きになって、自分の全注意をその人に注ぐ多くの女性（と男性）にとっては、人と関わったり、情報を集めたりするときの自然な仕方である。

このような女性は、ワイン通の人が興味深い新しいワインに注意を払って、その特徴を知るのと同じ仕方で、人々を自分のなかに取り込む。この比喩を十分に活用するなら、未知のワインを知ることに喜びを見出しているワイン・ファンを想像するがよい。彼女（あるいは彼）はゴブレット（台つきのグラス）を明かりにかざして、そのワインの色や透明度を調べる。彼女はその香をかぎ、ゆっくりとちびりちびり飲みながら、そのワインの性格と舌ざわりをとらえる。さらには、飲み終わった後の感じをも賞味する。しかし、彼女がそのワインに「愛情のこもった」注意と興味をよせるからといって、その特定のワインを特別に価値があるとみなしたり、ましてやそれを楽しんでいると考えては間違いであろう。

これは、アプロディーテー型の意識を用いる女性にたいする反応で、人々がしばしばおかす過ちである。彼女のライムライトの光を浴び、周りから浮き立ち、彼女から（評価的あるいは批判的な仕方であるよりはむしろ）愛情のこもった、あるいは肯定的な仕方で反応されると、彼らは自分が魅力的で興味深い人間であるような気がしてくる。しかしこれは、自分の興味をかき立てるものにたいしては何であれ、それに一時的ではあるが心から関与しているときの彼女のスタイルなのである。それは相手にたいして誘惑的にはたらき、彼女のやりとりの仕方が、実際はそうでないのに、自分が魅惑されているとか、心を奪われているかのような印象をつくり出すなら、相手を迷わすことになる。

アプロディーテー型意識、創造性、およびコミュニケーション

私がアプロディーテー型の意識なるものを発見したのは、自分が心理療法の仕事でおこなっていることを記述するのに「焦点が絞られた意識」も「分散した意識」もともに不適切であるということに気がついたときである。いろいろな芸術家や作家を比較しながら研究していくうちに、創造的な仕事には第三の様態が働いていることに気がついた。私はそれを「アプロディーテー型の意識」と呼ぶようになった。

ある治療のセッションで私は、いくつかのプロセスが同時的に進行しているということに気がついた。私は患者の言葉を聞くのに没頭している。患者は私の注意を奪い、同情をそそる。同時に私の心は活発にはたらいていて、自分が聞いているものに対して、心のなかで連想している。その人についてすでに知っているいろいろなことが心に浮かんでくる。おそらく、そこで浮かんでくるのは、関係がありそうな過去の夢、家族についての知識、以前の出来事、あるいは現在おこっている出来事などであろう。ときにはあるイメージが現れてきたり、ある比喩を思いついたりする。もしくは、その素材かそれが表現される仕方のどちらかにたいして、自分自身ある感情をおぼえるかもしれない。そのことに私は注意を向ける。私の心はたしかに活発にはたらいてはいるが、相手にたいする没頭から刺激を受けているという意味では、受容的である。

分析のセッション中に私が反応しているものは、大きなモザイクの一つの部分に似ており、私の治療を受けているこの人の、はるかに大きな、ただ部分的に完成しているにすぎない絵の一つの重要な細部なのである。患者は、私が相互的なプロセスのなかで関わっている誰かでもある。もし私たちが変容の仕事に携わるならば、私たちの双方に触れるほどの力をもったある感情的な場が、私たちのあいだに生み出される。ユングが言っているように、分析は二人の人間の全体をまきこむのである。医者と患者それぞれの意識的態度と無意識的な諸要素が一つのプロセスにまきこまれ、そのなかで両者が深く影響されるのである。「二人の人間が出会うということは、二つの異なった化学物質を混ぜ合わせるようなものである。もし豊かな結合が生じるなら、両者が変えられることになる。(1)」

治療をおこなっていくうちに、しだいに私は次のことに気がついてきた。変化と成長を促進する相互作用的、受容的なアプロディーテー型の意識に加えて、ちょうどいいぐあいの感情的距離を保ちつづけなければならないということである。もし患者とあまりにも同一化しているように感じるなら、私にはある本質的な客観性が欠けている。もし患者にたいしてあまりにも距離をとって、愛情が欠けているなら、決定的に大切な感情移入的結びつきを私はしてしない。しかしそれがなければ、より深い変化をもたらすだけのエネルギーは湧かないのである。アプロディーテーも、処女神と同様に傷つくことがなく、また傷つきやすい女神と同様に相手に積極的に関与する。アプロディーテー的意識は、この二つの性質をそなえているのである。

アプロディーテー的意識はあらゆる創造的な仕事にはたらいており、孤独のうちになされる仕事についてもそれが言える。人間と仕事とのあいだには「関係」という対話があり、そこから新しい何かが生まれてくる。たとえば、画家が絵具とキャンバスに関わっているときのプロセスを見るといい。没頭しながら相互的な変化がそこでおこっている。画家は給具と絵筆から生まれる創造的な偶然に反応し、あるいはそれを受け止めながら、大胆な筆さばき、ニュアンス、色によって能動的に描いていき、それから、現におこっているものを見つめながら、反応する。それは一つの相互作用であり、自発性が技能と結合するものである。画家とキャンバスのあいだで相互作用があり、その結果これまで存在しなかった何かが生み出されるのである。

さらに、目の前にある細部に注意を凝らしながら、同時にキャンバス全体にも目をくばりつづける。ときには後ろにさがって、これまで主観的に描いてきたものを客観的に見つめる。彼女は心を奪われ、没頭してはいるが、同時に何らかの仕方で距離をおいて客観性を保っている。

よいコミュニケーションにおいても創作の過程においても、相互作用というものがある。たとえば会話は陳腐で無意味で傷つけるものにもなれば、また、一種の芸術として、即興音楽や即興ジャズ演奏会と同じくらいに自然発生的で感動的で素晴らしいものにもなる。それは魂が音楽とともに飛び、いま熱狂的な高みにまで天がけたかと思うと、次の瞬間には深い心の琴線に触れるときである。相互作用は、形のうえでは自然発生的におこるが、その本質は深く感動的なものであるかもしれない。それぞれが交互に相手のなかに反応をひらめかすとき、会話している者たちは胸を躍らせ、何かが発見されるように感じる。彼らは相互にアプロディーテー型の意識を体験する。アプロディーテーの意識は、コミュニケーションや創造性が生じるためのエネルギーの場、背景をもたらすのである。音楽がどこへいくのか、会話がどんなふうに展開するのかは、初めの段階ではわからないし、予め計画されてもいない。発見、つまり新しい

ことの誕生は創造性と会話の鍵を握る重要な要素である。

アプロディーテーの意識がはたらくときはいつでも、エネルギーが生み出される。恋人たちはエネルギーの高まりと幸せを感じながら輝く。会話は火花を放ち、考えや感情を刺激し、二人の人が本当に互いに出会うとき、二人ともがその出会いからエネルギーを受け取り、以前にもまして生命力を感じる。内容は問題ではない。といっても、治療では、それは非常に苦痛に満ちた素材であることもあるが。仕事をすると消耗するというよりもむしろ、いきいきとしてくる。一緒にいる人、あるいは自分がしていることに没頭していて、時間が過ぎるのを忘れてしまう。これは、アプロディーテーがヘスティアーと共有している一つの特徴である。

ヴィジョンの担い手

夢をかなえるためには、夢を持って、それを信じ、それに向かってはたらかねばならない。その夢が可能であるということを、誰か別の重要な人間が信じてくれるということがしばしば不可欠である。その人はヴィジョンの担い手であり、その人の信仰はしばしば決定的な意味をもつ。ダニエル・レヴィンソンは『人生の四季』という本のなかで、若い男が大人の世界に入る移行段階において、ある「特別な女性」が果たす機能を述べている。レヴィンソンが主張するところによれば、このような女性は彼の夢を実現するうえで特別な役割を果たしている。彼女は、彼が夢をかたちづくって、それを実際に生きることを助けてくれる。夢を一緒に分かち合い、彼が夢の主人公であることを信じ、夢に祝福を与え、彼の旅に一緒に加わり、ある聖域をもうけて、そこで彼の望みがイメージされ、希望が育てられるのである(2)。

この特殊な女性は、トーニ・ヴオルフが「ヘタイラ的女性(3)」について記述していることと似ている。（「ヘタイラ」とは、高級娼婦を表す古代ギリシア語で、教育を受けていて教養があり、当時の女性としては異常なくらいに自由な立場にあった。ある面では日本の芸者に似ている。）これは、男性との関係がエロティックであると同時に伴侶的な性質をもっているタイプの女性である。彼女は霊感を与える女性（la femme inspiratrice）あるいはミューズであろう。ヴオルフによれば、ヘタイラは男性の創造的な面を豊かにし、その面で彼を助ける。ユング派の分析家で、かつてのユングの患者であったトーニ・ヴオルフは、彼の同僚であり、愛人でもあったと言われている。彼女自身、ユングの「特別な女性」つまりユングの理論にインスピレーションを与えたヘタイラ的女性であったのであろう。

ときおり、ある女性が特別な女性として自分のことを見る何人かの、あるいは多くの男性をひきつける天分に恵まれていることがある。彼女は、彼らの潜在力を見てとり、彼らの夢を信じ、それを達成するようにインスピレーションを与える能力をもっている。たとえば、ルー・サロメ・アンドレアスは、リルケ、ニーチェ、それにフロイトを含む多くの有名で創造的な男性たちにとって特別な女性で、ミューズで、同僚で、かつエロティックな伴侶であった(4)。

男性だけでなく女性も、自分の夢が実現可能であることを想像できねばならない。そのためには、成長を促進するアプロディーテー的意識をそなえた誰かに、自分と自分の夢を見まもってもらうことが必要である。なぜ女性で有名な芸術家、偉大な指導者、あるいはオーケストラの指揮者、すぐれた哲学者がこんなにも少ないのかということについて人々は思いをあれこれと巡らすが、そのうちの一つの理由として、女性には、自分の夢を運んでくれる人がいないということが考えられよう。男性の夢を育ててきたのは女性なのであるが、一方、男性は一般的

に言って、女性の夢をそれほど育ててはこなかったのである。

こうした事情が生まれる一つの理由として、役割が固定化し、そのために女性たちが自分の力を発揮する機会が狭められているとともに、創造力をはたらかす余地が限られているということがあげられる。しかし、「女性の方はお断り」式の、はっきりそれとわかるような障害は役割モデルの欠如と同様、減少傾向にある。

ピュグマリオーン効果

思うに、他の人々が、その人のもとで自分の才能の花を咲かせて発展させるヴィジョンの担い手は、治療者であれ、指導者であれ、教師であれ、「親指は緑色の」（訳注_野菜を栽培するのが上手なという意味で、ここでは、それが子育てについて言われている）親であれ、心理学者のロバート・ローゼンタールがピュグマリオーン効果(5)と名付けたものを呼びおこす。この用語は、ポジティブな期待が他者の行動に及ぼす力を表している。自分自身のつくった完全な女性の彫像に恋することになったピュグマリオーンにちなんでそのように名付けられている。この彫像は、アプロディーテーによって生命が与えられてからガラティアになった。（同様に、ジョージ・バーナード・ショーの戯曲『ピグマリオン』では、ヘンリー・ヒギンズがロンドン訛をしゃべる花売り娘をエレガントな淑女に変え、そしてその女性と恋におちる。ショーの戯曲は、アラン・ジエイ・ラーナーのブロードウェイのミュージカル『マイ・フェア・レディ』のもとになっている。）

ローゼンタールは、学生たちが良きにつけ、悪しきにつけ自分にたいする教師たちの期待に応えて行動することを見出した。彼はゲットー（ユダヤ人居住区）の学生を調べた。彼らの学業成績は、在学していればいるほど悪くなっていく。これらの子供たちの教師は、彼らが学ぶことはありえないと確信しがちである。ローゼンタールは、教師からの期待と子供の学業成績はどちらがより根本的な要因になっているかを調べるために、ある研究プロジェクトを組んだ。その結果わかったことは、私たちが抱く期待は異常なくらいに他者に影響を及ぼしており、そのことを私たちはしばしば忘れているということであった。

ローゼンタールの研究を読みながら、私は患者のジェーンのことを考えていた。彼女はスペイン語を話す家庭の出身で、初めは学校では頭のはたらきが鈍い子供と考えられていた。彼女が利口でないと決めこんでいた以前の教師の予想どおりに、彼女はクラスメートより遅れて四年に進級した。だが、四年の教師はいままでとは違った観点から彼女を見つめ、彼女の素質を引き出して、ジェーンならできると考えられる課題を彼女に与えた。目をかけることで、九歳の女の子は、いちばんよくできる学生になり、いまではクラスで堂々と話をして、自分についてよいイメージを抱くようになった。その後ジェーンも、自分の学生の素質を見抜いて引き出す、素晴らしい教師になった。

アプロディーテーのピュグマリオーン効果は、私が彼女の錬金術と考えているものにも関係している。中世ヨーロッパでは、錬金術はもろもろの実体を結合させることで、いやしい物質を黄金に変えようという物理的なプロセスであると同時に、錬金術師の人格を変えようという秘教的性格をもつ心理学的努力であった。私たちは、自分が他者に心がひかれるのをおぼえて恋におちるとき、アプロディーテーの錬金術を経験する。そのことが感じられるのは、私たちが彼女の変容と創造の力に心を触れられるときである。ある何かに心を傾けていると、それは

私たちの愛が吹き込まれているために、美しく、価値あるものとなる。そのことを可能にする力が自分のなかにあることを知って、深い感銘をおぼえるとき、私たちはアプロディーテーの錬金術を知る。平凡で未熟なものは何であれ、日常生活の「いやしい」物質であるが、アプロディーテーの創造的な錬金術の影響を受けると、「黄金」に変わることができる。それはちょうど、ピュグマリオーンが製作したガラティアの彫像が、愛を通じて、一人の現実の生きた女性になったのと同じである。

12

愛と美の女神、創造的な女性と恋人アプロディーテー

女神アプロディーテー

ローマ人がウェヌスと呼んでいる愛と美の女神アプロディーテーは、もっとも美しい女神であった。詩人たちは彼女の顔かたち、金髪、輝く目、やわらかな肌、それに乳房の美しさを語っている。ホメーロスにとって彼女は「笑いを愛する人」であり、抗いがたい魅力に溢れていた。彫刻家たちは、好んで彼女の彫像を製作し、その優雅で官能的な肉体をあらわにする裸体もしくは半裸体で彼女を描いた。ミロのウェヌスやクニドスのアプロディーテーは、ローマ人による複製を通じてしかわからないが、多くのアプロディーテー像のなかでも、もっとも有名なものである。「黄金の」は、アプロディーテーを表すのにギリシア人がもっとも好んで用いた形容詞であり、それはギリシア人にとって「美しい」を意味した。アプロディーテーの研究で有名なパウル・フリードリッヒによれば、黄金と蜂蜜、黄金と言葉、黄金と精液とは言語学的には結びついており、アプロディーテーが有する生殖と言語的創造のより深い価値を象徴している(1)。彼女は愛撫し、甘いささやきをかわす愛の鳥である鳩と、その美しさと睦まじさで際立っている白鳥と結びついている。また、いろいろな花、特に伝統的には恋人たちの贈り物であるバラ、さまざまな甘い香りや果物、特に黄金のリンゴと、官能的で情熱的な赤いざくろ（ペルセポネーとも共有しあっている象徴）とも結びついている。

系譜と神話

アプロディーテーの神話的な誕生と起源については二つの言い伝えがある。ヘーシオドスとホメーロスは、矛盾する二つの物語を語っている。

ホメーロスでは、アプロディーテーはふつうの生まれ方をしている。彼女はただ、ゼウスと海のニンフ、ディオーネーのあいだに生まれた娘であるにすぎない。

ヘーシオドスの方では、アプロディーテーは暴力行為の結果として生まれている。（後にティーターン族の支配者となり、オリュムボスの第一世代の父となる）クロノスは、斧を取り、父ウーラノスの生殖器を切り離し、海に投じた。精液が海に混ざり、白い泡が周りに広がって、そこからアプロディーテーが生まれた。彼女は海ではらまれ、十分に成長した女神として現れたのである。

海から現れ出るアプロディーテーのイメージは、ポッティチェルリの「ヴィーナスの誕生」に描かれて、ルネッサンスの時代に不滅のものとなった。これは不遜にも「貝殻のうえのヴィーナス」と呼ばれることもある。彼の絵では、優雅で甘美な裸体が貝殻の上に立ち、空とぶ風の神々によってバラのシャワーを浴びながら岸辺まで運ばれるところである。

アプロディーテーが最初に岸に着いたのは、キュテーラの島かキュプロスのどちらかだと言われている。その後（愛の）エロースと（欲望の）ヒーメロスに付き添われながら神々の集会へ導かれ、そして神々の一人として受け入れられたのである。

彼女の美しさに心うたれた多くの神々は、結婚を申し込もうと競い合った。夫や恋人を選択したことがない他の女神たち（ペルセポネーは誘拐され、ヘーラーは誘惑され、デーメーテールはレイプされている）とは違い、アプロディーテーは自由自在に選ぶことができた。彼女は

片足が悪い職人の神、鍛冶場の炉の火の神ヘーパイストスを選んだ。このようにヘーラーに拒絶された息子はアプロディーテーの夫となったが、しばしば妻に不義をされることになる。アプロディーテーとヘーパイストスには子供がなかった。彼らの結婚は、美と職工の統一を象徴しており、そこから芸術が生まれてくるのである。

アプロディーテーが、密通を重ねた相手は、オリュムボスの第二世代にあたる男性神、つまり、ゼウス、ポセイドーン、ハーデースといった父親世代ではなく、その息子の世代である。アプロディーテーは軍神アレースとロマンティックに結ばれ、彼のもとで長いあいだ情事を重ねて、数人の子どもを産んだ。もう一人の愛人は神々の使者ヘルメースである。ヘルメースは魂を冥界に導き、旅人、運動競技者、泥棒、商人の守り神であり、同じくコミュニケーションの神であり、楽器の発明者であり、オリュムボスのトリックスターであった。

彼女とアレースのあいだに生まれた子どもは三人で、娘ハルモニアー（調和）とディモス（恐怖）、ポボス（敗走）という二人の息子である。息子たちは父親と一緒に戦場に出向いた。アプロディーテーとアレースは、二つのもっともコントロールのきかない情熱、つまり愛と戦いの結合を表している。それが完全なバランスを保っているときはハーモニーをつくることができるのだが。

ヘルメースとのあいだにできた子どもは、両性具有の神ヘルマプロディートスである。彼は両親の美しさを受けつぎ、二人の名前をもらい、両方の性的特徴をそなえていた。象徴としてのヘルマプロディートスは、バイセクシュアリティ（男と女の両方の性にエロティックに引きつけられること）、あるいは両性具有（一人の人間のなかに伝統的な意味での男性的と女性的の両方の性質が存在すること）を表している。

ある言い伝えでは、愛の神であるエロースはアプロディーテーの息子たちの一人であった。アプロディーテーに似て彼も、宇宙に、いつ、どのようにして現れたのかについて、神話の記述は矛盾している。ヘーシオドスによれば、エロースは創造における根本的な力であり、ティーターンたちやオリュムボスの神々が現れる前から存在していた。エロースはまた、アプロディーテーが海から現れてきたときに彼女に付き添った神とも見られている。しかしながら、後の神話では、彼はアプロディーテーの父無し子だと述べられている。ギリシア人たちは普通、彼のことをアモルと呼んだローマ人たちと同様に、エロースをたくましい若者として描いている。神話では、根源的な力として出発したエロースは、時代が経るにつれてますますスケールが小さくなって、今日では数本の矢が入った矢筒と弓を携えて、おしめをつけたキューピッドの赤ちゃんによって表されている。

アプロティーテーと死すべき者（人間）たち

死すべき（人間の）男たちとのアプロディーテーの関係も、彼女の神話では重要である。男たちが自分に助けを求めて祈ったときに彼女が実際に彼らを助けたことを伝える神話もいくつかある。たとえば、彼女はアタランテーとの競走の前の晩にヒッポメネースがおこなった祈りに応えている。彼女は彼に、三つの黄金のリンゴを与え、それをどのように使うか忠告した。その三つの黄金のリンゴのおかげで彼は命拾いをして、愛する妻を獲得できた。

すでに述べたように、アプロディーテーはキュプロスの王ピュグマリオーンの伝説にも現れている。ピュグマリオーンは象牙で自分の理想の女性の彫像をつくり、それを見れば見るほ

ど、自分の作品に恋するようになった。アプロディーテーを讃える祭で、彼は、自分の彫像に似た妻が得られるようにと彼女に祈った。その後で、彼が象牙の彫像にキスをすると、彫像は命をもつようになった。その女性は、ガラティアであり、彼は彼女と結婚した。これが、彼の祈りにたいするアプロディーテーの答えであった。

愛と美の女神は、人間の男たちとも多くの情事をおこなっている。たとえば、アンキーセースが山麓で家畜を追っているのを見たアプロディーテーは、（ホメーロスによれば「神々しい肉体をもった死すべき男」である）彼にたいする欲望におそわれた。美しい乙女を装って彼女は言葉を弄して彼の情熱をかき立て、彼を誘惑した。

その後、彼が眠りこんだとき、彼女は人間の変装を解いて、眠っている恋人を目ざめさせた。彼女は、自分が二人の息子アイネイアース（ローマの伝説の建国者として有名になる）をはらんでいることをあかし、自分が彼の息子の母親であることを誰にも打ち明けないようにと警告した。アンキーセースは後に酒を飲みすぎて、アプロディーテーとの情事を自慢し、まさにそのとき稲妻に打たれて足をひきずるようになったと言われている。

人間で、もう一人の有名な恋人は、ハンサムで若々しい狩人のアドーニスである。アプロディーテーは彼の命を気遣って、獰猛な獣を避けるようにと警告した。けれども、怖さ知らずの彼は狩のスリルに我を忘れて、彼女の忠告を無視した。ある日、狩をしているとき、彼の犬たちが一頭の猪に飛びかかっていった。アドーニスは槍でその獣に傷を負わせた。苦しみに狂ったようになった獣はかえってこれに挑発されて彼に向かっていき、獰猛に彼を八つ裂きにしてしまった。

死後、アドーニスは一年のうちのある時期は冥界からアプロディーテーのもとに帰ることを許された（アプロディーテーはベルセポネーと彼を分かち合っていた）。神話が伝えるこの死と回帰のサイクルが、アドーニス崇拝の基礎となった。彼が毎年アプロディーテーのもとに帰ってくることは、豊饒の回帰を象徴した。

女性もアプロディーテーからの強力な影響を受けた。アプロディーテーの命令に従うことを余儀なくされ、彼女が命じるどんな相手にも抗いがたくひきつけられる人間の女性は、ミュラーの神話に見られるように、非常に危険な目にあうこともある。

アプロディーテーを祀る寺院の僧侶の娘ミュラーは、自分の父親との情熱的な恋におちた。この物語のさまざまな言い伝えによれば、アプロディーテーはこの禁断の情熱を、次のいずれかの理由で引きおこした。すなわち、ミュラーの母親は、自分の娘がアプロディーテーよりも美しいことを自慢したからか、そうでなければミュラーがアプロディーテーを崇拝することを怠ったから、というのである。いずれにせよ、彼女は変装して闇にまざれて彼に近づき、彼の密かな愛人になった。何度かの密会の後、彼はこの誘惑的な女性が自分の娘であることを発見した。恐怖と嫌悪の情に襲われ、自分たちがこれまで一緒に楽しんできたことにたいして彼女を罰したいという気持ちにかられて、彼女を殺そうとした。逃げる彼女に彼が追いつこうとしたそのときに、彼女は自分を救ってくれるようにと神々に祈った。即座に彼女の祈りは聞きとどけられた。彼女の姿はミルラ（没薬樹のゴム樹脂）の木になったのである。

パイドラーもアプロディーテーの力の犠牲者である。彼女はハンサムな若者ヒッポリュトスの不運な継母であった。ヒッポリュトスはアルテミスにみずからを捧げて、独身を誓った。アプロディーテーはヒッポリュトスと楽しむための道具としてパイドラーを用いた。だが、ヒッ

ポリュトスは愛の女神を讃えたり、彼女を崇拝することを拒んだために、アプロディーテーはパイドラーを自分の義理の子との絶望的な恋に陥らせた。

神話では、パイドラーは努めて自分の情熱に逆らい、みずからの道ならぬ欲望と闘って病気になった。最後には、一人の召使女が彼女の不幸の原因に気づいて、彼女に代わってヒッポリュトスに近づいた。自分の継母と情事をしてはどうかという示唆を受けて、非常に激怒し、かつ恐れおののいたヒッポリュトスは、パイドラーの耳に入る場所で、彼女を攻撃する長い演説をぶった。

侮辱されたパイドラーは、ヒッポリュトスが自分をレイプしたという偽りの非難を内容とする遺書を残して、首をつった。戻ってきて自分の死んでいる妻と遺書を見たテーセウスは、息子を殺すようにと海の神ポセイドーンに頼んだ。ヒッポリュトスが岸辺の道に沿って戦車を走らせているとき、ポセイドーンは大波と海の怪物を送って、彼の馬たちを怖がらせた。戦車はひっくり返り、ヒッポリュトスは引きずられて死んだ。このようにしてアプロディーテーはパイドラーを犠牲にして復讐した。プシューケーとアタランテーは、アプロディーテーの影響を受けて変身させられた二人の人間の女性である。エロースとプシューケーの神話では、プシューケーは不運にもあまりに美しかったために、人々からは「第二のアプロディーテー」と呼ばれた。そのため人々は、本来女神に捧げられてしかるべき崇拝と畏怖をプシューケーに与えた。これがアプロディーテーの機嫌を損ねることになったのである。

この神話でプシューケーは、自分がその怒りを招いた女神を探し出している。アプロディーテーは彼女に四つの不可能な仕事を与えた。そのいずれも、当初はプシューケーの能力を越えるものであるように思われた。いずれの場合も予期せぬ方向からの助けを借りて、プシューケーは成功した。アプロディーテーは変容の力として行動している。つまり（傷つきやすい女神の性格をもつ人間である）プシューケーに仕事を与え、それによって彼女を成長させるのである。

アプロディーテーはアタランテーの神話でも変容の力となっている。アタランテーは処女神アルテミスと比較される人間であった。すでに述べたように、アタランテーはアプロディーデーの三つの黄金のリンゴを拾いあげることを選び、競走に負けて夫を得たのである。

アプロディーテー元型

元型としてのアプロディーテーは、女性の愛、美、性、官能の喜びをとりしきる。恋人の領域は多くの女性を強力にひきつける。女性のパーソナリティを備えた一つの力であるアプロディーテーは（彼女とならぶ二人の強力な本能的元型である）ヘーラーとデーメーテールと同じく強力な命令を発する。アプロディーテーの力で女性は、創造的機能、生殖機能の両方を成就させるのである。

恋人

女性が誰かに恋し、その誰かも彼女に恋しているならば、その瞬間どの女性もアプロディー

テーを人格化したものと言える。一時的に普通の人間から愛の女神へと変容し、彼女はみずからを魅力的で、官能的で元型的な恋人であると感じる。

アプロディーテーが人格のなかでの主要な元型として存在しているとき、女性はしばしば、そして簡単に恋におちる。彼女には「あれ」（イット）（サイレント時代の映画スター、クララ・ボーを有名にしたもの）、すなわちセックス・アピールがある。彼女の人格から醸しだされる磁石のような力は、性の目ざめを促す官能的な世界のなかに人々をひきずりこむ。「ボルテージ」が上がり、互いにひきつけられた二人は、ともに魅力的で喜びにうち震えているように感じられてくる。

ユダヤ・キリスト教やイスラム教や他の家父長的な文化のように、女性の官能性とセクシュアリティがおとしめられるとき、恋人としてアプロディーテーを体現する女性は、誘惑者とか娼婦と見なされる。それゆえ、この元型が表現されると、女性は道徳の基準と齟齬をきたすことになる。アプロディーテー型の女性は、村八分に遇うであろう。たとえば、ピューリタニズムが支配的な時代のニューイングランドを描いたナサニエル・ホーソーンの古典的小説『緋文字』では、ヘスター・プラインは姦通をしたということで、あかい大文字の（A）をつけるように仕向けられた。俳優のイングリッド・バーグマンは、イタリアの映画監督ロベルト・ロッセリーニと情事をして後に結婚したという理由で世論から非難され、追放を余儀なくされた。聖書の時代では、このような女性たちは石を投げられた。今日のイスラム諸国では、いまなお処刑がなされている。

恋愛

二人が恋におちるとき、どちらの側も相手を特別に浮き立たせる（アプロディーテーの黄金の）光に照らして見つめ、相手の美しさにひきつけられる。そこには何かしら魔術的なものがはたらいている。魅惑や夢中といった状態が呼びおこされる。どちらの側も自分が普段の自分よりも美しくて特別な存在で、神々しく感じられる。二人のあいだにできるエネルギーの場には感情が充満しており、エロティックな「電気」が生み出され、そこから互いに磁石のようにひきつける力が生み出される。彼らをとりまく「黄金の」空間において、感覚の影響が強まり、音楽はもっとはっきりと聞こえ、かぐわしさもきわまり、恋人の味覚や触覚も強まる。

しかし、誰かに恋をして、その人が愛に報いてくれない場合、彼女は自分が残忍な欲望やふさわしくない憧れにとりつかれたように感じる。彼女は愛する人にひきつけられていっては拒絶されることを繰り返す。その強烈さは、愛が報われている限りは素晴らしいものであるが、いまや苦痛を増すものとなる。

アプロディーテーを活性化する

ちょうどアプロディーテーの誕生については二種類の神話があるように、この元型が意識に現れてくるのにも二種類の方法がある。

まず、第一は、劇的な始まりで、アプロディーテーは突然畏れを呼びさますぐらいに完全に開花した形で無意識の海から堂々と現れ出るのである。性が本能的な反応として感じられ、彼女を呼びおこす男性を愛したり、さらには好んだりといったこととほとんど関係がない場合、それは情緒的な親しさからは「切り離された」性である。比喩としてはヘーシオドスによる海

でのアプロディーテーの誕生にあたる。

心理療法のセッションにおいて、多くの女性が予期せざる最初の性的反応の圧倒するような衝撃について語った。たとえば「私は自分にそんなものがあるとさえ知らなかったような欲望でいっぱいになりました。それは素晴らしいものであると同時に恐ろしいものでした」と語る。アプロディーテーの力をいったん感じてしまうと、多くの若い女性たちは、知らず知らずのうちに性的親密さへとひきつけられてしまう。いまや何がおこりうるかを気づいて肌の露出を避ける女性もいる。私の二人の女性患者はこれらの対照的な反応の例となってくれた。一方の女性はもっと求めたのである。「思い返してみれば、私が本当に望んでいたのは性的な部分でしたのに、私はデートを楽しんでいるようなふりをしていたことがわかります。」もう一人の方は、バリアーをはった。「私は勉強に没頭し、デートを断り、女子校へ行くんだと言い張りました。無事に結婚するまでは、何らかの精神的な修道院に自分自身を閉じ込めようと考えたのです。そのあいだは誰にも誘われずに一人でいるはうがいいと思いました。」初めてのセックスが終わると、このような女性は、その経験を繰り返したいという抑えがたい願望が自分を性的な親密さへとひっぱっていくということを知る。いまや彼女の肉体は目ざめ、性的な関心が一人の男性に向けられてしまっているのである。彼女の望みとは何か。それは彼と溶け合い、情熱に運ばれながらオーガズムの開放へと向かい、クライマックスに到達し、そこで自分の個性が個人を越えたオーガズムの体験のなかに消えていくことである。

アプロディーテー元型がいきいきとはたらく第二の道は人間関係である。ホメーロスは、アプロディーテーがゼウスと海のニンフ、ディオーネーの娘として生まれ、成長したということを語っているが、ここで言われる人間関係はそれに似ている。まず信頼と愛が成長し、禁止がだんだんと少なくなっていき、その後でアプロディーテーが呼び出され、「誕生」する。彼女の到来を告げるのはセックスにおける最初のオーガズムと身体的な親密さを求める新たな欲望である。結婚前には何人もの恋人がいて、結婚後何年かしてオーガズムを経験したある女性は、「まるで、どんなものであるかということが、いまやっとわかったみたいです」と不思議がっていた。

生殖本能

アプロディーテーは種の保存を確保しょうとする衝動を表している。性的衝動と情熱の力と結びついている元型としてのアプロディーテーは、女性を生殖の器に変えることができる（バース・コントロールをしないならばの話であるが）。

デーメーテールの影響を受けて、赤ちゃんが欲しいからセックスをする女性と違い、アプロディーテーに影響された女性は、男性にたいする欲望あるいは性的もしくはロマンティックな経験をしたいという欲望から、子どもをもうける。アプロディーテーは避妊具を用いないようにと囁きかける。避妊をすれば、せっかくの情熱がそらされるか、最初の性交が前もって準備されたものになってしまうからだというのである。女神の言葉に耳を傾ければ、それだけ、望んでもいないのに妊娠をする危険が増える。

生殖本能と符合するかのように、ある女性たちがアプロディーテーの影響をもっとも強く感じるのは、月経の十四日前におこる排卵の時期、つまり、セックスをすればもっとも妊娠しやすい時期である。この時期こそ、彼女らは普段よりも性的に反応し、エロティックな夢を見

て、もしセックスをする相手がいなければ、身のさびしさをおぼえるのである。

創造性

アプロディーテーは変化をもたらす巨大な力である。彼女を通じて、魅力、統一、新しい生命の受胎、孵化および誕生が一つの流れのようにおこる。このプロセスが男と女のあいだで純粋に体のレベルでおこるとき、赤ん坊がはらまれる。この一連の流れは、他のあらゆる創造的なプロセスに見られるものと同じである。つまり、魅力、統一、受胎、孵化、そして新しい創造なのである。そこで生み出されるものは、あるインスピレーションを受けて二つの考えが一つになり、そして最終的には新しい理論が誕生する場合と同様に抽象的な性質のものである。

創造的な作品は、強烈でかつ情熱的に打ち込むことから生まれる。一方（芸術家）が新しい何かを生み出そうとして「他方」と相互作用をする様子は、まるで恋人との関係を思わせる。この「他方」は、絵画であったり、ダンスであったり、作曲であったり、彫刻であったり、詩や原稿であったり、新しい理論や発明であったりする。いずれにしても、いっときはすべての関心を奪い、魅惑するものなのである。創造性は多くの人々にとって「官能的な」プロセスでもある。それは、瞬間を生きる感覚的経験であり、肌ざわり、音の響き、イメージ、動き、そしてときには匂いや味さえ含んでいる。恋人のように、創造的なプロセスに没頭している芸術家はしばしば、自分のあらゆる感覚が目ざめていて、多くのチャンネルを通じて知覚的印象を受け取っていることに気づく。ある視覚的なイメージや言い回しやダンスの動きにはたらきかけているとき、多数の感覚的印象が相互に作用しあって、そこから結果が生じてくる。

ちょうど恋人としてのアプロディーテーが次から次とたてつづけにたくさんの情事を重ねていくように、創造的な力としてのアプロディーテーに巻き込まれた女性は、次から次へと精力的に創造的な努力を重ねていく。一つの仕事が終われば、別の可能性が現れてきて彼女を魅惑するのである。

アプロディーテーの創造的な側面とロマンティックな側面の両方が、同一の女性のなかではたらいていることもある。その場合彼女は、自分の創造的な仕事に没頭するとともに、次から次へと熱烈な恋愛関係に入りこんでいく。このような女性は自分を魅惑するものが何であれ、誰であれ、それを追求し、慣習にはまらない人生を送る。たとえば、ダンサーのイサドラ・ダンカンや作家のジョルジュ・サンドのように。

アプロディーテーを育てる

アプロディーテーは官能的あるいは感覚的経験にもっとも深く関わっている元型である。それゆえ、知覚を鋭くし、いまここに焦点を合わせていくと、アプロディーテーが呼び出される。恋人たちは当然のごとくお互いの趣味、香り、そして美に自分のそれを合わせる。音楽と触覚的な刺激は彼らの快楽を高める。セックス・セラピストは「感覚への焦点づけ」や「心から楽しむこと」を教える。これらは、目標を気にしないで、その瞬間に没頭し、快い感覚の楽しみ方を学ぶ方法だからである。

罪悪感や白か黒かを決めつける態度は、セックスにしても芸術的創作にしても、楽しみの妨げになる。このような障害は、セックスだけでなく楽しみ、遊び、その他の「非生産的」活動もしてはいけないと感じているときにもちあがる。多くの人々は愛と美の追求を、せいぜい取

るに足らないことか、ひどければ罪深いものときめつけている。たとえば、アルテミスやアテーナーの元型は精神を集中して目標を達成しようとするため、こうしたタイプの女性は、アプロディーテーの刹那的な快楽の追求を軽蔑することになる。またアプロディーテーはしばしば、ヘーラー元型やデーメーテール元型にとっていちばん大切なこと、つまり一夫一婦制や母性的役割を脅かし、そのため後者はしばしばアプロディーテーにたいして裁判官のような態度で臨むことになる。最後に、ペルセポネーやヘスティアーの内向性がはたらくと女性は、以前に比べれば「外面的な」魅力にたいして反応しなくなる。

女性がアプロディーテーの価値を理解して、この側面を自分のなかに発達させようとするとき、彼女らはこの元型を活性化することに向けて、心のなかで大きな一歩を歩む。その場合、アプロディーテーが発達するための時間と機会が必要である。夫婦は子どもたちから離れて休暇をとり、くつろいだ状況でおしゃべりをしたり、セックスをして楽しむことが必要である。ある女性は、マッサージをしたりされたりすることを学ぶかもしれない。あるいはベリー・ダンスのクラスに通って自分のからだを心地好く感じ、それを楽しむようになるかもしれない。これはセックスを楽しむためにあらかじめ満たしておかねばならない条件なのである。

美術、詩、舞踊あるいは音楽にたいする興味を育てることも、審美的領域における同様の目的に役立つ。視覚的、聴覚的、運動感覚的体験のなかに自分を完全にとけこませる能力は発達させることができる。いったん没頭するなら、自分と感覚的媒体のあいだに相互作用がおこり、そこから新しい何かが生まれてくるであろう。

アプロディーテー型の女性

女神アプロディーテーが一糸まとわぬ輝かしい姿で海のなかから現れて以来、映画の女王ジーン・ハーロー、ラナ・ターナー、マリリン・モンローといった曲線美を誇るブロンドのセクシーな女性は、愛の女神を体現してきた。ときには、この女神タイプの女性は、体型、ブロンドその他がすべて神話の女神そのままであるが、アプロディーテー型の典型的な特徴は、その外見だけよりはむしろ魅力に認められる。アプロディーテー元型はカリスマ（磁石や電気のような力）をつくり出し、それが身体的な特徴と結びつくと、女性は「アプロディーテー」になる。

アプロディーテーがふつうの女性の心のなかではたらくとしても、その女性は何も男たちを誘惑するわけではない。それにもかかわらず、接近してくる男性たちにとって彼女は魅惑的で気になる存在なのである。アプロディーテーの性質をそなえたかなり平凡そうに見える女性の多くは、自分の人柄、その自然で無邪気な官能性が醸しだす魅力的なあたたかさで他の人々をひきつける。これらの「ごくふつうのジェーン」の人生にはいつも男たちがいるように見える。一方、才能にもっと恵まれていて客観的に見ても可愛い彼女の姉妹たちは、電話を待ち続けたり、ダンスに加わらないで、「あの子にはボーイフレンドがいるのに、どうして私にはいないのだろう」と不思議に思うのである。

子ども時代

子どもの頃のアプロディーテーは無邪気で可愛い浮気娘である。男たちに応えるすべを知っており、男たちに興味を抱き、自分でも気づいていない官能性をそなえている。そのために、大人たちは「あの子が大きくなったら、どんな女になると思う。きっと男を悩ますだろうさ」と言う。彼女はみんなの関心の的になることを楽しみ、可愛い服を着たがり、ちやほやされて、いい気になる。ふつう恥ずかしがりの子どもではなく、即興の芸をしたり、その他いろいろと注意をひく努力をするために「可愛い大根役者」と呼ばれたりする。その場合でも、人々は彼女に魅惑されるのである。

八歳か九歳にもなれば、多くのアプロディーテー型の少女はおおいそぎで大人になり、おめかしをする。男の子にのぼせあがり、セクシーな男性歌手やロックグループのファンである。幼いアプロディーテーのなかには「若いニンフ（おませの少女）」もいる。早くから自分のセックスに目ざめ、年上の男性たちが自分の悩ましげな誘惑に反応するとき、自分に力と魅力があることを喜ぶ。

両親

両親のなかには、自分の可愛い娘を小さなアプロディーテーにしこむものがいる。彼らは娘の魅力を強調し、大人にキスをするように娘を仕向け、子どもの美人コンテストに応募させ、他のいかなる性質や能力にもまして女性的魅力に注意を集中する。

ところが、娘が思春期になって性的な活動が可能になると、親はまったく違ったふうに反応する。ありふれた破壊的なパターンがおこるかもしれない。すなわち、親は、セックスに積極的になるようにと暗黙のうちにそそのかしておきながら、娘を罰し、観淫者であると同時に道徳の守護者となるのである。

父親は自分のアプロディーテー型の娘のセクシュアリティが現れてくることに、さまざまな仕方で反応する。多くの父親は、娘がしだいに魅力的になってくることにたいして、不注意にあるいは無意識的に葛藤を挑発することによって反応する。その結果、二人は感情的にも物理的にも距離をとることになる。娘はしばしば、大騒ぎをしながら協力しているように見える。大騒ぎをすることで二人とも自分たちのインセスト的な感情に気づかずにすましていられるからである。ある種の父親はあからさまに厳格になり、娘がデートをすることを一切禁じたり、干渉したり、コントロールを加えたり、娘のデートを厳しく追及したり、電話をかけてきたり訪問してくる男性をすべて「馬の骨」扱いする。しかしなかには誘惑的な父親もいる。

アプロディーテー型の娘にたいする母親の反応もさまざまである。ある母親たちは厳格になってコントロールを加え、十代の若者が好みそうな音楽や服のスタイル、さらには娘が年齢相応に振る舞っているときでさえも過剰に反応する。このような母親は、露出部分を少なくすることを強調して魅力的であることを曖昧にするように、服装についての自分流の規則を娘に押しつけ、多くの活動を禁止する。娘の同性と異性の両方の友人をチェックし、ある女性が後悔しながら述べたことだが、自分の娘と男の子のいずれか、あるいはその両方を「潜在性色情狂」として扱う。父親と同様に母親も自分のアプロディーテー型の娘にたいして「看守根性」を発達させる。

アプロディーテー型の娘をもつ母親の方が父親より干渉的であることは珍しくない。自分の

魅力的な娘を「見張っていたい」という欲求に動機づけられた干渉心の他に、母親は、ときには娘を通じて身替わりに生きて、娘のデートについてこと細かに聞きたがっていることもある。このような母親を喜ばせるために、娘たちは男の子からの受けがよくならねばならないのである。

娘に現れてくるアプロディーテーに競争するという仕方で反応する母親もいる。娘の魅力に脅威を感じ、その若さを妬ましく思う母親は、娘をおとしめ、娘にとって不都合になるような仕方で娘と張り合い、娘のボーイフレンドといちゃつき、娘の目ざめつつある女らしさをいろいろな仕方で傷つける。彼女のことを語っているおとぎ話では、白雪姫の継母が繰り返し「鏡よ鏡、すべての女性のなかで誰がいちばん美しいかい」と尋ねた。このおとぎ話のキャラクターは、脅威を感じて（それゆえ敵意に燃えて）競争する母親を表している。

もっとも助けとなってくれるような親はアプロディーテーの性質を過大評価したり過剰に強調したりせず、娘を可愛い対象として扱わない。両親は、知性や親切心や芸術にたいする才能といった他の性質を評価するのと同じポジティブな仕方で娘の魅力を肯定する。デートに関しても、娘の年齢や成熟に応じたガイダンスや制限をもうける。男性にとっての魅力は少女が気づくべき（そのことで責められるべきではない）当然の事実として扱われる。

思春期と大人になりたての頃

思春期と大人になったばかりの頃は、アプロディーテー型の女性にとって非常に大切な時期である。彼女は、自分の心のなかにいるアプロディーテーのうごめきと他の女神たちの反応の狭間にいることを知るかもしれない。世の中には裏と表があることを考えれば、セックスに関心のある男の子と同じくらいに性的な経験をしたいと強く望んでいる女子高校生は、そこからどのような結果が生じるかを考慮しなければならない。もし彼女が自分の衝動のままに行動するなら、悪い評判がたち、自尊心は損なわれ、自分についてのイメージがネガティブなものになる。「しつけのよい女の子たち」は彼女を避ける一方で、いつもセックスのことばかり考えている若い男たちは彼女の周りに群がりはするが、彼女のことを、いつまでも長続きのする関係を結んだり、ダンスパーティーにつれていくパートナーにするにしては「身持ちがよくない」女と考えるであろう。

抑制のきかないアプロディーテー型の女性には別の問題もある。望んでもいなかった妊娠は、その一つの可能性である。積極的なアプロディーテー型の女性は性行為感染症にかかる危険がある。医学上のもう一つのやっかいな問題は、年をとると、子宮頸部癌にかかる確率が高くなるということである。

若い女性たちは、自分の内部からおこってくるアプロディーテーの執拗な要求をどのように扱ってよいのかについてほとんど助けを与えてもらえない。性的表現は、もろもろの深刻な結果を招く一つの大きな選択である。自分のセクシュアリティを押し殺す者もいる。そのなかでも、強く宗教的に抑制されている者は、「受け入れられない」感情を抱くことで自分を責めながら、何らかの罪悪感をおぼえる。安定した関係の内部でセクシュアリティを表現する女性もいる。これは、ヘーラーもその人のなかで強力な役割を果たしているときになされる選択である。ただし、その場合、彼女は早い時期に結婚することになるであろう。

もし、アテーナーとアプロディーテーの二人の女神が一人の若い女性の心のなかで強い要素

となるなら、彼女は自分を守る方向で戦略と性欲を組み合わせるであろう。「私は自分が誰かをすぐ好きになって、それに性欲が強い女だということがわかってからは、あまり深刻に恋愛することはなくなりました。まじめに考えたことは避妊と相手がどんな男であるかということと、それに私の生活のこの部分をプライベートなものにしておくということです。」

アプロディーテー型の女性が大学にいくと、おそらく社会のいろいろな側面が彼女にとってもっとも重要なものになるであろう。彼女は「パーティー・スクール」（学問的な研究よりは社会的な活動で知られている大学）を選ぶであろう。

彼女の関心は、長期にわたる学問的な目標やキャリアには向けられない。専門職にたいして関心が芽生えていても、自分の興味に合わない難しい諸条件を満たさねばならないことがわかると、その関心はおとろえていく。彼女は、あるテーマに心を奪われさえすれば大学の仕事に飛び込むことができる。それはしばしば、人々との交流にかかわる創造的な分野である。たとえば、演劇部に入って次から次といろいろな役をこなす。その都度その役になりきり、自分の内なる情熱をほとばしらせ、そのために学校中でもっとも有名な演劇学生になるであろう。

仕事

自分の心をとらえない仕事は、アプロディーテー型の女性にとって何の興味もわかない。彼女は多様性と強烈さを好む。家事や事務、実験のように同じことを何度も繰り返す仕事は彼女を退屈にさせる。一心になって創造的に埋没できるときにしか、彼女はいい仕事をしない。それゆえ、美術、音楽、著作、舞踊、演劇といった分野で仕事をしたり、自分にとって特別な意味をもつ人々と関わる仕事、たとえば教師や、セラピスト、編集者として働いたりする。その結果、彼女は仕事をするのを嫌って、何か中途半端な仕事をしているか、そうでなければ仕事が大好きで、それ以外のことに時間と手間をかけることを考えない。ほとんどいつも、それほど面白くはなくても実入りのよい仕事よりも、興味が感じられる仕事の方を好む。自分を夢中にさせるものを追求する結果として成功することはあるかもしれないが、アテーナーやアルテミスと違い、最初からある業績をあげようという気持ちはない。

対男性関係

アプロディーデー型の女性は、必ずしも自分にとってよくはない男性にひきつけられる。他の女神たちが影響を及ぼすのではない限り、彼女が選ぶ男性はしばしばアプロディーテー自身が選んだ男たちに似ている。つまりヘーバイストスやアレースやヘルメースなどといった創造的ではあるが複雑な性格で気分にむらがあったり、感情的な男性である。このような男たちは仕事での名声や経営者としての地位を得ようとはしない。また、家庭をもうけて夫や父親になることを好まない。

内向的で情熱的な性格のヘーパイストス型の男性は、怒りを抑圧しており、これを創造的な仕事に昇華する。鍛冶の神ヘーパイストスのように、彼も芸術家であると同時に（感情面では）不具者である。両親との関係は、ヘーバイストスの場合と同様に悪い。彼も母親の期待に沿わなかったときに、母親から拒絶され、父親との関係から切り離されている。その結果、彼の女性関係は愛憎が入り混じっている。彼にとって女性はおそろしく重要であり、かつ信頼に値しないゆえに女性を忌み嫌う。男性たちとの関係ではほとんど親密さをおぼえない。しばし

ば彼らから疎遠にされていて、劣った立場にいるように感じる。

ヘーバイストス型の男性は、しばしば非常に内向的であるため、社会的な場面で不安をおぼえ、ちょっとした話をする才能がない。そのため、他の人々は彼といつまでも一緒にいることはない。アプロディーテー型の女性は例外である。自分が出会う人物に全注意を向ける才能があるため、彼女は彼から力を引き出し、彼を魅力的な男性と見る。

自分が魅力的な男性と感じながら彼女に心ひかれるヘーパイストス型の男性は、彼に独特の激しさでもって反応し、二人のあいだに情熱の火花が燃えあがる。彼女は彼の感情の強烈さにひきつけられ、他の女性たちなら反感をおぼえる彼の感情の炎に同じ仕方で反応する。彼女は、自分の心深くに感じられる彼のエロティックな本性を抱きしめる。この彼のエロティックな本性は、長いあいだ眠っていて、彼の怒りとともに仕事へと昇華されてきたものである。彼女が彼の情熱をかき立てると、恋人たちはともに彼の感情の急激な高まりに恐れおののく。もし彼が鍛冶屋か芸術家であるなら、彼女は彼がつくるいろいろな美しいものにもひかれ、そうすることで彼の創造性に霊感を吹き込むのである。

ヘーパイストス型の男性を愛することには多くの問題が含まれているが、それは彼がどのような種類の感情を包み隠しており、彼が心理学的にどの程度健康であるかに左右される。一方の極では、怒りをためこんだ火山、潜在的に偏執狂であり、あまりに孤独で敵対的であるため、世間から認められていない一匹狼である。これに加えて、怒りと劣等感と喪失恐怖の感情は、アプロディーテー型の女性の魅力そのもの、あるいは他の人々に及ぼす彼女の魅力が引き金となって、呼びおこされる可能性がある。本当にヘーパイストスそっくりの男性であるなら、彼は自分の嫉妬をコントロールすることができる。しかし、こうした状況のなかでヘーパイストス型の男性の傍にいると、活火山の麓で暮らしているように思え、いつ噴火して熔岩を空高く吹き飛ばすのであろうかと心配になってくる。

ヘーパイストス型とアプロディーテー型の組み合わせでも非常にうまくいくこともある。この場合ヘーパイストス型の男性は、彼に特有の激しくはあるが抑制された仕方で、（怒ってばかりいるよりはむしろ）さまざまな感情をおぼえている内向的で創造的な男性である。彼は、これらの感情を自分の仕事と数少ない重要な人間関係を通じて表現する。彼女にたいする愛は深くて情熱的ではあるが、所有欲から発するものではない。彼の情熱は彼女を感情的にひきとめ、彼が彼女に自分を賭けているため、彼女は自分が必要とする心の安定を得る。

アプロディーテー型の女性にひきつけられるもう一つのありふれたタイプの男性はアレース（戦争の神、ヘーラーとゼウスの息子）のように移り気である。このタイプの男性の実際の生活史は、アレースの神話における家族の構図と非常によく似ている。父親に見捨てられてから敵意を抱いている母親に育てられるのである。彼は感情的で情熱的で、いつもいばりちらしている男性であり、「過剰に男らしい」（スーパーマッチョ）情緒をそなえている。役割モデルと躾をしてくれる者としての実の父親がおらず、母親だけとの関係で自分の思いどおりに生きてきたため、短気で、自分の気にいらないことがあると我慢できない。責任ある立場に立ちたがるが、プレッシャーをかけられると動揺し、それゆえ、よいリーダーにはならない。

アプロディーテー型とアレース型の組み合わせは、可燃性の混合物である。二人とも、いまここで生きようという傾向がある。反省するよりは反応するたちであり、いま行動して、後から考えるタイプの人間である。二人連れ立ってどこに行っても、愛の炎が燃えあがるか、火の

ような癇癪玉が爆発してまばゆいばかりの相互作用が生じる。彼らは、愛と戦争の両方をおこなうのである。喧嘩と仲直りを繰り返す恋人たちの行動の根本にあるのは、このアプロディーテーとアレースの組み合わせなのである。

アプロディーテーとアレースは、安定した関係をもたらさない。感情が興奮ぎみであるだけではなく、自分の男ぶりを気にして威勢よくホラを吹いたりするため、しばしば経済状況が苦しくなる。彼は戦略を立てて考えたり、慎重になることができない。その場の熱気に押されて言ったりしたりすることのために、自分の仕事をフイにしてしまう。もし、これに加えて、女性の方がアプロディーテーの不倫（あるいは少なくとも尻軽さ）の傾向があるなら、彼女は彼の男性性をさらに脅かし、彼の独占欲をさらに誘発する。それから彼は暴力的になり、彼の癇癪玉が爆発し、恐怖がつくり出される。

しかし二人がこのように火花を散らすにもかかわらず、ある種のアレースとアプロディーテーとの組み合わせは持続し、比較的調和のとれたものになることもある。このような組み合わせでは、男の方にはアレース型のパーソナリティ（生まれながらの衝動性、激しい気性、好戦性）があるが、家族の状況は彼に比べてより健康的であり、そのため根本的に敵意を抱いているわけではない。そして女性の方にはヘーラーが十分にはたらいていて、彼との絆を持続させ、発展させることができるのである。

永遠の青年を演じている男性も、多くのアプロディーテー型の女性をひきつける。彼女らは、創造的な素質をもち、未熟で、複雑で、主観的な男性にたいする強い好みをもち合わせているようである。これらの男性は、オリュムボスの神々のなかで最年少の使者神ヘルメースに似ている。彼女は、（特に詩的である場合にはそうであるが）彼がうっとりとさせる言葉を楽々と語ることを見出し、彼が（感情的にせよ、社会的にせよ）すばやく高みから深みへと動くことができることに魅惑される。ヘルメース型の男性はトリックスターで少し詐欺師のところがあり、「頭の回転の鈍い」者を出し抜くことを好む。潜在力に満ちていて、躾がなされていないがしばしば非常に才能があり、カリスマ的で、仕事や女性に自分を賭けることがない。典型的には、女性の人生に現れたかと思うと風のように去っていく。彼を何かに縛りつけておこうとするのは、まるで水銀を捕まえておこうとするようなものである。彼は、「たぶん」を連発し、一緒に暮らしたり、結婚するといった空想をもてあそぶ。だが女性は彼の言葉をあてにしないほうがよい。なぜなら、彼はけっして本気になることはないからである。彼とのセックスは思いがけない仕方でなされ、非常に情熱的である。彼は魅惑的で感受性に富む恋人であり、けっして大人にならないかもしれない、ふざけたピーターパンである。

アプロディーテーとヘルメースの組み合わせは、ある種のアプロディーテー型の女性には非常に合っている。二人とも、その刹那とその場の強烈さを分かち合い、本当に自分を賭けるということがないからである。しかし、アプロディーテーとヘーラーの元型がともに強くはたらくなら、女性にとってきわめて苦痛な組み合わせである。このような女性は、彼に深く心が結ばれ、嫉妬に苦しめられる。二人のあいだでなされるセックスは強烈である。彼女は一夫一婦主義で結婚を望むが、通常は、来ては去っていくという彼の欲望に見合う形でけりがつく。

しかし、成熟したヘルメース型の男性は、仕事と関係に自分を賭けることができる。（すでに指摘したように、彼はヘスティアー型の女性と結婚する。）彼は移り気な永遠の青年であるよりはむしろビジネスマンか通信員であろう。もしそうであるなら、アプロディーテーとヘル

メースの組み合わせは、素晴らしいものとなる可能性がある。二人の関係は浮気心や情事さえ乗り越えていく。なぜなら、どちらも嫉妬深かったり、独占欲の強い人間ではないからである。さらに、お互いに相手のスタイルを尊重し、一緒にいることを楽しむということからも彼らの関係は長持ちする。彼女は彼の活動的なペースに調子を合わせる。それは彼女自身のペースと両立するからである。二人はある瞬間には互いに強く関わり合い、次の瞬間にはそれぞれ独立している。これは二人のどちらの気性にも合っている。

結婚

もし、ヘーラーの元型だけでなくアプロディーテーの元型も強くはたらくなら、結婚はセクシュアリティと情熱を伴って高められ、生気を帯びてくる。しかしアプロディーテー型の女性にとっては、いつまでも一夫一婦制の結婚を維持することは困難である。他の女神たちが影響を及ぼして、アプロディーテーが結婚の内部に納まっていたり、その結婚が特に偶然の組み合わせでないかぎり、彼女はおそらく一連の関係というパターンをたどるであろう。たとえば、世間では現代のアプロディーテーというイメージをもたれている女優エリザベス・テーラーは、何度も結婚を重ねている。

不信感をもたれる対女性関係

アプロディーテー型の女性は、他の女性、特にヘーラー型の女性から不信感をもたれる。男性にたいして自分がどのような影響を及ぼしているかについての自覚や責任感がないほど、彼女は破壊的な要素になる。たとえば、パーティーにいくと、そこではもっとも関心をもたれている男性たちとの熱のこもった濃密な会話に夢中になる。そのため多くの女性たちの心に嫉妬と不快感と喪失の不安感をかき立てる。彼女たちには、そのアプロディーテー型の女性と男性のあいだに錬金術の反応がおこり、黄金色のオーラが二人を包むにつれて、自分の心を寄せている男性がますます彼女に熱をあげて反応しているのがわかるからである。

女性たち（特に嫉妬深い、あるいは復讐に燃えるヘーラー）から腹を立てられると、アプロディーテー型の女性はしばしばショックを受ける。彼女は他の女性の悪意にめったに気づかず、自分自身独占欲が強かったり、嫉妬深かったりということがないので、なぜ自分に敵意が向けられるのか、しばしばはかりかねる。

アプロディーテー型の女性はよく、彼女の自発性と魅力を楽しむ（ヘーラー型でない）女友達や知人たちとの付き合いの輪が広い。彼女らの多くも、アプロディーテー的な性質をともにしている。彼女の付き添いであるように見える女性たちもいる。彼女らは彼女と一緒にいるのを楽しんでいるか、そうでなければ彼女を通じて、身替わり的な愛の冒険をしているのである。しかしながら、彼女の友情は、彼女が女友達とのあいだで立てる計画をゆきあたりばったり処理しても、女友達の方が気を悪くしないという条件のもとでのみつづく。

アプロディーテー型のレズビアンは、性的な好みの点で、アプロディーテー型の異性愛者と異なっている。彼女も人間関係にアプロディーテー型意識でのぞみ、自分がつくり出す錬金術に自分で反応する。彼女は、人間関係に強烈に関わり、しょっちゅう恋をし、その結果、ふつうは次から次へと深い関係を繰り返す。「人生が差し出すものならすべてを」体験したいと望み、女性とだけでなく、男性ともしばしば性的な関係をもつ。アプロディーテー型のレズビア

ンはおそらく、（アプロディーテー型の異性愛の女性にもまして）、男性から女性はこうなってほしいという期待に応える必要を少しも感じず、自分の気に入った恋人を選んでは食べるというアプロディーテーの特権を行使する。レズビアンのコミュニティが提供する、ふつうとは異なった生き方は、慣習に縛られたくないという彼女の終生の気性にぴったりである。

レズビアンは、ときには、もう一人の女性との関係を通じて自分のなかにアプロディーテーを発見する。これは、ルース・フォークが『愛し合う女たち(2)』という書物のなかで示唆している。彼女は、もう一人の女性のなかに美しさを見て、自分自身を美しいと感じたり、もう一人の女性に触れて、自分自身がまるで触れられたかのように感じる経験を述べている。彼女の見解では、いかなる女性も相手にとって鏡のような存在で、相手を通じて自分の女性的な官能性を発見するのである。

子ども

アプロディーテー型の女性は子どもが好きであり、またその逆も真である。子どもは、この女性が白か黒かを決めつけずに、あたたかい目で自分を見てくれていると感じる。彼女は子どもの感情や能力を引き出し、子どもは自分がすてきな子どもだとか、受け入れられていると感じるようになる。しばしば彼女がおまえは特別な子どもだよという感覚をしみこませることによって、子どもは自信を獲得し、いろいろな能力や才能を発展させることができるようになる。彼女は実にやすやすと遊んだり、その気になったりすることができる。子どもたちは、彼女に心を奪われることで素晴らしい成績をあげ、彼女に霊感を吹き込まれることで、彼女の興味をひくものならどんなものにたいしても夢中になるように見える。これらは母親に見られる素晴らしい性質である。アプロディーテー型の女性の子どもたちは、デーメーテール的な性質も母親のなかではたらいているとき、自分の個性をのばして発達する。

アプロディーテー型の女性は、自分の子どもたちの心をとらえてしまう。彼らは、母親が美しくて魅惑的な女性だと見る。しかし、もし（デーメーテールが欠けていて）情緒的安定と恒常性にたいする子どもたちの欲求を考慮しないならば、彼女は一貫性のない母親となる。これは子どもたちにたいして否定的な結果を生む。その場合、子どもたちは、ある瞬間には母親からの全幅の注意を受け取ってはしゃぎながら、次の瞬間には母親の注意がどこかにいってしまうと、打ちしおれてしまう。私の女性患者の一人を育てたアプロディーテー型の母親は、長いあいだ子どもを家政婦に預けてどこかにいくことがよくあった。その患者にとって母親の帰宅は特別な意味をもっていた。「よくお母さんは、私を抱くために腕をいっぱい広げて、ものすごい勢いで家のなかに入ってきました。私はまるで自分がこの世でいちばん重要な人間であるかのように思いました」と言っている。母親が帰ってくると、「日の光が差し込み」、まるで女神が戻ってきたかのようだった。それまで自分が母親の不在を恨んでおり、母親が戻ってくるという知らせを、不機嫌な思いで受け止めていたことなど、どうでもよくなった。母親の、アプロディーテーのようなカリスマ的輝きを浴びるとすぐに、すべてが許された。この患者は、並はずれた能力をもっているにもかかわらず、大人になっても自信がなく、自分が無価値だという感情と抑うつ状態と闘わねばならなかった。これらの気持ちは、母親が不在だったときに抱いたものとよく似ていた。

アプロディーテー型の母親の一貫しないが強烈な注意が一人の息子に注がれると、彼の自尊

心だけでなく、将来における女性関係にも影響が出る。彼女は、自分と彼とのあいだに特別な親密さをつくり出し、息子のなかに芽生えつつある男性を誘惑して自分にひきつけておきながら、次には自分の注意をどこかべつのところに向ける。彼女の愛情をめぐる黄争相手（しばしば新しい男性、ときには何らかの魅惑的な事柄）が彼女の心を奪い、そのために彼は不全感、荒廃感、無力感、怒り、ときには侮辱をもおぼえる。息子はライバル意識に燃えるが、母親の愛情をめぐる競争ではいつも他の男たちに負ける。こうした感情はたいていの娘たちには縁のないものである。大人になった彼は、かつて母親とのあいだで感じた強烈な感覚と、自分は特別な人間だという意識を渇望するが、いまでは、ただ女性にコントロールされるのを望むだけとなる。子どもの頃の母親との経験が基盤となって、女性の誠実さを信頼せず、女性の気持ちを繋ぎとめておけないように感じる。

中年期

魅力的であることがこれまでの自分の主たる満足感の源泉であったなら、いやおうなく年をとるということはアプロディーテー型の女性にとって恐ろしい現実であろう。ひとたび自分の美しさが色あせつつあることに気づいたり、そのことが心配になってくると、注意が他のところに移り、相手に夢中になることができなくなる。彼女は、（自分の外見上の美しきよりもずっと）このアプロディーテー的性質こそ人々をひきつけてきたのだということに気づいていないのかもしれない。

人生半ばにさしかかったアプロディーテー型の女性はしばしば、パートナーの選択に関しても不幸な思いになる。彼女は自分がこれまで、世間の慣習にはまらない、ときには不適切な男性たちにひかれることがいかに多かったかということに気がつく。しかしいまでは落ち着きたいと思っている。これは、自分が以前は拒絶してきた可能性である。

しかし、創造的な仕事に従事しているアプロディーテー型の女性にとっては、中年は困難な時期ではない。典型的に言えば、このような女性たちは、いまでも物事に熱中し、自分の興味をひく仕事に打ち込むことができる。そしていまでは、以前にもましてインスピレーションをかき立てる経験が豊かになっており、自分を表現する技術を高度に発展させている。

晩年

ある種のアプロディーテー型の女性はあいかわらず、関心を注ぐどんなこと、あるいは誰のなかにも美を見て、常に何かや誰かを愛することができる。彼女らは年をとっても、優雅さと生命力を失わない。人々にたいする興味や創造的な仕事への関わりは、いまなお生活のもっとも重要な一部である。自分でも気づかないうちに経験を重ね、関わる相手を変え、次にどんなものが来てもそれに心奪われてきたにもかかわらず、なお若々しい態度を維持している。典型的には気持ちが若く、人々をひきつけ、あらゆる年齢層の友達がいる。たとえば、イモジン・カニングハムは九十代になっても妖精のような写真家で、自分が見る美をフィルムにとらえ、かつみずからもモデルとなって人々をひきつけて写真をとらせた。

心理的困難

抗いがたい力をもつ元型としてのアプロディーテーを心のなかではたらかせながら生きることは、容易ではない。アプロディーテーの本能的なセクシュアリティに従う女性たちはしばしば、一方では性的結びつきにたいする自分の欲望と、他の人々の心のなかにエロティックなエネルギーを生み出す傾向、他方では、もし自分の欲望のままに振る舞えば女性を淫乱と見なし、もしそのように振る舞わないならば女性をからかう文化との板ばさみになる。

アプロティーテーとの同一化

アプロディーテーと密着するように同一化している女性は、しばしば人生を楽しみ、自分の人格のなかに火のような要素をそなえた外交的な女性である。彼女は男好きで、自分の魅力と男たちにたいする興味によって彼らをひきつける。彼女の魅力は誘惑的である。彼女は男に、自分が特別でセクシーな男だと思わせる。魚心あれば水心で、二人のあいだにエロティックな吸引力がおこり、性的に親密になりたいという欲望が生まれる。もしアプロディーテーと同一化しているなら、女性は結果を考えずに、この欲望のままに振る舞うであろう。しかし、その結果、社会的に非難されるところとなり、次から次へと浅薄な関係が続き、おそらく彼女とのセックス以上は何も求めない男性たちの食いものになり、自尊心が低下するであろう。彼女が知らねばならないのは、ある種の状況で、どのようにアプロディーテーを心に納めるか、別の場面でどのように反応すべきか、すなわち、「いつ、誰と」をいかに賢明に選ぶか、そしてアプロディーテー元型に動かされて破壊的な状況に追い込まれないようにするにはどうすればよいか、ということである。

彼女のあたたかく注意の行き届いた人付き合いの仕方も、男たちから誤解されることがある。彼らは、彼女が特に自分に興味をもっているとか、性的にひかれていると勘違いするのである。それで、男をはねつけると、彼女は無情だとか、ひやかしていると考えられ、男をその気にさせたことで非難される。このような男たちは自分がバカにされたと思って恨みに思い、そこから彼女にたいする敵意や怒りをつのらせる。自分ではその気がないのに男から夢中になられて恨みをかうために、アプロディーテー型の女性は傷つけられ、自分でも腹が立ってくる。彼女は、自分がどんなことをしたために、このような反応を呼びおこすことになったのかについて混乱するであろう。このパターンに気がついてくると、アプロディーテー型の女性は、自分が励ましたいと思っていない男性が情熱を燃やし始めてきたら、炎のような彼の情熱をどのように湿らせればよいのかわかるようになる。彼女は、自分が彼には手の届かない存在であることを悟らせたり、気にもとめていないかのように行動できるようになるのである。

アプロティーテーの否定

女性のセクシュアリティを非難するような環境で育てられたアプロディーテー型の女性は、男性にたいする興味を押し殺し、自分の魅力を目立たなくし、性的な感情を抱くことで自分を悪い女だと考えるかもしれない。しかし、自分のアプロディーテー的な性質を表現することに

たいする罪悪感と葛藤から抑うつ感と不安が生まれる。そしてもしこのアプロディーテー的な部分を非常にうまく行動に表現することによって、自分の意識からセクシュアリティと官能性を切り離すなら、彼女は本当の自分の重要な部分との接触を失い、そのために生命感と自発性を失うことになるであろう。

刹那的な現在に生きることの問題

アプロディーテー型の女性は、直接的な現在のなかで生きて、人生がまるで感覚的経験でしかないかのように考える傾向がある。その場の雰囲気にとらえられると、このような女性は、まるで自分の行動が今後なんの帰結も生じないか、あるいは現在の人間関係と葛藤を引きおこさないかのように反応する。このような生き方は衝動的な情事を越えて、あらゆる当事者に破壊的にはたらく。たとえば彼女は、自分のお金で買えない美しい物を買ったり、習慣的に「人を待たせたり」する。大いに熱中していろいろと計画を立てて、それを実行するつもりでいる。ところが、約束の時がくれば、他の何かあるいは誰かにうつつをぬかすのである。

ものごとを学ぶということは苦しいことではあるが、経験こそアプロディーテー型の女性にとって最良の教師である。彼女は、人々のことをまるで「眼中にない」かのごとく扱えば、人々が傷つけられて腹を立てるということを知る。目にとまったものを衝動買いする前に自分の経済状況をじっくりと考えぬかないとき、請求書がうず高く積もり、うるさく支払いを求める手紙が届くということを経験する。彼女は自分と他の人々にとっての頭痛の種となるパターンを何度も繰り返し、ついにはいまとここという専制君主に抵抗することを学ぶ。その剃邦とその場こそ、まるで明日がないかのごとく生きるように彼女を導いてきたものである。

行動する前にその結果について反省することを学べば、アプロディーテー型の女性は以前に比べて衝動的に反応することが少なくなり、そのかわり責任感をもって行動するようになるであろう。しかしながら、実際的な考慮よりは感情的なことに重きがおかれつづけるであろう。そして、たとえあらかじめ自分の行動がどのような経過をたどるかについて反省しても、なおみずからのおこないによって他の人々を傷つけるかもしれない。なぜなら、結局のところは自分の心に従っているからである。

その場しのぎの愛

男たちは、アプロディーテー型の女性が彼らを「愛しては見捨てていく」とき、その場しのぎの相手となる。彼女は、完全な男性を見つけたと心から確信するたびに実に簡単に恋愛関係に入る。その瞬間の魔法にかかると、男性は自分が女神と恋をしている神のように感じるが、結局は他の男と首をすげかえられるだけである。その結果、彼女が通った後には、傷つき、拒まれ、落ち込み、あるいは怒りに燃えている男たちが累々と重なっている。彼らは彼女にもてあそばれて見捨てられたと感じているのである。

アプロディーテー型の女性は、恋という魔法（あるいは元型的経験）にかかるごとに、一連の強烈な恋愛を経験する。このパターンを終わらせるには、「欠点だらけの」誰か、つまり神であるよりは不完全な人間である誰かを愛することを学ばねばならない。まず、自分をすぐに夢中にさせるものの魔法から解かれねばならない。ふつうは経験してみなければ、このような幻滅はおこりえない。そのとき初めて彼女は自分のパートナーと自分自身のなかにある人間的

な欠点を受け入れて、愛にふくまれる人間的な次元を発見することができるだけの長持ちのする関係にとどまることができる。

愛の「呪い」

他の人々に恋をさせるという女神アプロディーテーの力は破壊的になりえた。たとえば、ときには彼女は、ある女性に誰かを愛するようにし向けたが、その相手は彼女の愛に応えないか、あるいは応えることができない人物であった。あるいは彼女のつくり出す情熱は、恥ずべきもの、もしくは許されないものであり、そこから葛藤や侮辱がおこり、ついにはその女性あるいは彼女のよい性質が破壊されてしまう。ミュラー、パイドラー、メーデイアは、このような呪われた三人の神話上の女性であった。結果的に、彼女らは恋によって「病気」になった。プシューケーに腹を立てたアプロディーテーは、プシューケーが「もっとも汚らわしい男性」との恋におちるように仕組んだ。女神は、愛が苦悩をひきおこすということをよく心得ていたのである。

自分の愛に縛られて不幸になる女性たちは、現代におけるアプロディーテーの犠牲者である。自分が陥ってしまった悲惨さのために精神科医の援助を求める者もいる。私の実践では二つの典型的なパターンが見られる。第一のパターンでは、自分をひどい目に会わせたり、おとしめたりする男性と恋愛をする。女性は、男性からときたま得る「なけなしの」関心を求めて、自分の人生の他のすべてのものを投げ出す。彼への関わりは、短期間しかつづかないこともあれば、何十年にもわたることもある。特徴的に言えることであるが、彼女を苦しめているのは、その人間関係であり、また事実はその反対であるにもかかわらず、彼は本当は自分のことを愛してくれているのだと自分を納得させようとする努力である。彼女は落ち込み、不幸な気持ちになるが、それでも自分の状況を変えることになると気持ちが非常にどっちつかずになる。だが、もっと気持ちよくなるためには、まるで中毒のように彼女の心をとらえているその破壊的な関係を断念しなければならないであろう。

第二のパターンは、はるかに絶望的であるように見える。ここで女性が恋している相手の男性は、彼女と何の関わりももちたくないということが明らかなのである。男は彼女を可能な限り避け、報われることのない彼女の愛に呪われているように感じる。さらに、彼にたいするしつこい関心は何年にもわたり、彼が他のいかなる関係をもつことも効果的に妨げる。（私の患者の一人が実際にしたことだが）男が別の町に行けば自分もついていったり、彼の家に不法侵入して捕まったり、あるいは強制的に彼の家から追い出されたりする。

このアプロディーテーの呪いから自由になることは困難である。変化するためには、女性はこの執着の破壊性を理解して、その関係から離れたいと思わなければならない。彼に会って再び関係をもちたいという誘惑を避けるには、巨大な努力がいる。しかしそうしなければ、自分の気持ちを他のところに向けることはできない。

成長の道

自分の元型的パターンについて知ることで、あらゆるタイプの女性、特にアプロディーテー型の女性は助けられる。それによって彼女らは、自分が簡単に誰かを好きになったり、エロティックな吸引力を経験したり、他の多くの女性ならもっていない強い性的衝動をもつことは、自分の「女神から与えられた」性質なのだということを知ることができる。このような知識に助けられて、アプロディーテー型の女性は自分のありのままにたいする罪悪感から解放される。同時に彼女らは、自分の最善の関心事を自分で見つけ出さねばならないということに気がつかねばならない。なぜなら女神がそれをしてくれるわけではないからである。

他の女神たちの元型はアプロディーテー型の女性の心のなかでは支配的ではないかもしれないが、他の女神たちは少なくとも潜在的な形で存在している。一定の人生経験を積んでいくにつれて、その影響力を増し、女性の心のなかでアプロディーテーの力を埋め合わせたり修正したりする。もしアプロディーテー型の女性がいろいろな技能を発展させたり、学歴をつむなら、アルテミスとアテーナーが重要性を増すであろう。もし彼女が結婚して子供を産むなら、ヘーラーとデーメーテールが彼女の生活を安定させるように影響を及ぼすであろう。瞑想を通じてヘスティアーを発展させるなら、性的魅力という外向的な吸引力にたいして、もっと容易に抵抗できるようになるであろう。ペルセポネーの内向性を心のなかにはぐくむと、アプロディーテー型の女性は現実よりも空想のなかで性的経験を生きることができるであろう。

もしアプロディーテー型の女性が自分のパターンに気がついて、それを修正することを決心し、その結果、自分や自分の愛する他の人々が傷つけられることがなくなれば、大きな変化がおこる。いったん自分のなかで優位を占めているものを取り出して、それらにはたらきかけることができるなら、自分で選択して主体的に生きることが可能になる。プシューケーの神話は、彼女が辿ることができる発達の道筋を描いている。

心理学的成長の比喩としてのプシューケー神話

エロース（アモール）とプシューケーの神話は、何人かのユング派の分析家、特にエーリッヒ・ノイマンが『アモールとプシケー』、およびロバート・ジョンソンが『彼女』において女性心理のアナロジーとして用いてきた。プシューケーは、彼女の夫で愛の神アプロディーテーの息子であるエロースと再び結ばれることを求めている妊娠した人間の女性である。プシューケーは、もしエロースと仲直りするつもりなら、腹を立てて彼女に対立しているアプロディーテーに従わねばならないということに気がつき、そこで彼女は女神に自分を差し出す。プシューケーを試すために、アプロディーテーはプシューケーに四つの課題を与える。

アプロディーテーが与える四つの課題は、重要な象徴的意味をもっている。どれも女性が発達させねばならない能力を表している。一つの課題を成し遂げるごとに、プシューケーはこれまで自分になかった能力を獲得する。それはユング心理学ではアニムスあるいは女性の人格の男性的側面と等しいものとされている能力である。これらの能力は、プシューケーのようにそれらを発達させる努力が必要な女性にはしばしば「男性的」と感じられるが、アルテミス型やアテーナー型の女性には元からそなわっている属性である。

神話に出てくるプシューケーは、（アプロディーテーのごとく）恋人、（ヘーラーのごとく）妻、そして（デーメーテールのごとく）子供をこれから産もうとしている母親である。さらに神話の筋では、彼女も冥界へ行ってそこから戻ってくる（それゆえペルセポネーにも似て

いる）。何よりも人間関係を大事にして、他の人々にたいして本能的あるいは感情的に反応する女性は、それぞれの課題に象徴される能力を発達させねばならない。そうして初めて、自分に与えられているさまざまな選択肢を評価し、自分にもっともためになる方向で決断して行動することができるのである。

課題 1 — 種の選り分け

アプロディーテーはプシューケーをある部屋に連れていき、うず高く積まれた種の山を見せた。それはトウモロコシ、大麦、キビ、ケシ、エジプトマメ、レンズマメ、ソラマメの種がごちゃまぜになったものである。そしてプシューケーに、晩までにそれらの種を種類別に分けねばならないと言いつける。その仕事をこなすことはできないように思われたが、アリの一群が彼女を助けにやってきて、種を種類別に分け、それぞれの山にもりあげた。

同様に、重要な決定をしなければならない女性もしばしば、互いに葛藤し合う感情や鎬をけずる忠誠心を、まず一つ一つ選り分けねばならない。状況は、アプロディーテーの手に握られているとき、特に混沌としたものになることが多い。その場合、「種の選り分け」は内面の仕事であり、女性が自分の内面を正直に見つめ、自分のもろもろの感情、価値観や動機をふるいにかけ、重要でないものから真に重要であるものを選り分けることが求められる。

混乱した状況とともにとどまり、事態がはっきりするまで行動しないことを学ぶとき、女性は「アリたち」を信頼することを学んでいるのである。これらの虫は、直観のプロセスに似ており、そのはたらきは意識的なコントロールを越えている。はっきりした意識は、決断に含まれている多くの要素を体系的あるいは論理的に見定め、それらに重要さの順位を与えるという意識的な努力を通じて得られる。

課題 2 — 黄金の羊毛の獲得

アプロディーテーが次にプシューケーに与えた命令は、太陽の恐ろしい牡羊から黄金の羊毛を獲得せよということであった。太陽の牡羊たちは野原にいる巨大で攻撃的で角のあるけだものであり、互いに衝突し合っている。もしプシューケーが彼らのなかに入っていって、その羊毛を得ようとするなら、きっと踏み潰されるか押し潰されるかするであろう。その仕事をこなすことができそうにもないと思われたそのとき、またしても、助けがやってきた。今度は緑色をした葦である。葦は日が沈むまで待つようにとプシューケーに忠告する。その時刻になれば牡羊は散らばって寝るからである。それで彼女は、牡羊たちが昼間ぶつかっていた濯木から離れたところで黄金の羊毛を刈り取ることができた。

象徴的に言えば、黄金の羊毛は力を表しており、それは女性が何かを達成しようとするとき、破壊されずに獲得する必要があるものである。アプロディーテー型の女性（あるいは傷つきやすい女神タイプの女性）が、他の者たちが権力や地位をめぐって鎬を削っている競争の世界へ入っていくとき、そこに含まれるもろもろの危険に気づかないなら、傷つけられるか幻滅するであろう。心がかたくなになってシニカルになり、思いやりを欠いたり、信頼する自己が中途半端なものになり、まさに「踏みにじられる」のである。武装したアテーナー型の女性は戦場のまっただなかにいて戦略や政治に没頭しているが、プシューケーのような女性は観察し、待ち、段階をおって間接的に権力を獲得するほうがよい。

傷つけられずに黄金の羊毛を獲得するプシューケーは、権力を得ながら同情心に富む女性でありつづけるという課題の比喩である。精神科医としての実践を通じてわかったことであるが、この課題を心にとどめておくことは、自己主張を学びつつあるあらゆる女性にとって非常に助けになる。さもなければ、自分の欲求や怒りを表現することばかりに集中するあまりに、会話は相手の心を遠ざけていくような対決となり、そのため彼女は自分が望んでいるものが得られなくなり、荒っぽくて破壊的な女性だと見られてしまう。

課題 3 — — 水晶のフラスコを満たすこと

三番目の課題としてアプロディーテーは、小さな水晶でできたフラスコをプシューケーに手渡し、禁じられた川の水でそれを満たさねばならないと言いつける。この川は、もっとも高い所に位置する崖のてっぺんにある泉から冥界のもっとも深い所へと滝のように落ちており、大地をめぐって再びその泉から現れてくる。比喩的に言えば、この川は循環的な生命の流れを表しており、そのなかにプシューケーは浸かって自分のフラスコを一杯にしなければならないのである。

ぎざぎざになった崖のなかへ深く削られ、龍たちが守っている、氷のようなその川を見つめていると、フラスコを一杯にするという仕事は、できそうにもないように思われてきた。今度は一羽の鷲がやってきて彼女を助けた。鷲は、距離をおいたパースペクティブから風景を見つめ、必要とされているものをつかむために急降下する能力を象徴している。プシューケーのような女性は、通常このような仕方で物事を見つめてはいない。個人的なことにあまりにも関わっているために、「木ばかりが見えて森が見えない」のである。

アプロディーテー型の女性にとって、人間関係で何らかの感情的な距離をとることは特に重要である。そうすることで全体のパターンが見えてきて、重要な細部を取り出し、意味のあるものをつかむことができるからである。その場合にこそ、彼女は経験を自分のものにし、自分の人生を形成することができるのである。

課題 4 — — ノーを言うことの学習

第四の、かつ最後の課題としてアプロディーテーはプシューケーに、ある小さな箱をもって冥界にくだり、それを美の香油で満たしてくるように命じる。プシューケーは、その仕事を死に等しいものと考える。今度は、遠くを見る塔が彼女に忠告を与える。

この課題は、伝統的な英雄が受ける勇気と決意のテスト以上のものである。というのは、アプロディーテーがそれを特に難しくしているからである。プシューケーは、あわれな人々に出会って彼らから助けを求められるであろうと言われる。しかし、三回、「心を固くして同情心に動かされず」、彼らの懇願を無視し、歩みつづけねばならないであろう。もしそうしなければ、彼女は永遠に冥界にとどまるからである。

目標を設定して、助けを求められてもそれを固辞することは、処女神型を除くあらゆる女神の型の女性にとっては特に困難である。母性的なデーメーテール型の女性と、相手に恩恵を施すペルセポネー型の女性は、他人の要求にたいしてもっとも反応するのにたいし、ヘーラー型とアプロディーテー型の女性はそのあいだのどこかに位置する。

三回ノーを言うことでプシューケーが達成する仕事は、選択をおこなうということである。

多くの女性は、人から何かを押しつけられて、自分自身のために何かをすることから注意をそらされるがままになっている。彼女らは、ノーを言えるようになるまでは、何を計画しても、また自分にとって一番よいどんなことでもそれを成し遂げることができない。一緒にいて慰めてくれるのを求めている人であれ、恋愛関係の魅力であれ、自分に特有の感受性にたいしてノーを言えない限り、彼女は自分の人生を主体的に送ることはできない。

四つの課題を通じてプシューケーは成熟する。彼女は自分の勇気と決断力が試されるごとに、もろもろの能力と強さを発達させる。しかし何を獲得するのであれ、彼女の根本的な性質と彼女が重要だと見なすものは変わらない。すなわち、彼女は愛の関係を重視し、そのためにはどんな危険をも冒し、そして勝利するのである。

13

どの女神が黄金のリンゴを得るか

かつてオリュムポスの山でそうであったように、一人の女性の心のなかでも、女神たちは黄争し、葛藤し、同盟関係を結んでいる。どの女神に関心を払うか。どの女神を無視するか。どれだけの選択をおこなうか。力強い元型的パターンを表すこれらの内なる女神たちは、表現されることをめぐって鎬をけずっている。ちょうどギリシアの女神たちが、かつて黄金のリンゴをめぐって争ったように。この黄金のリンゴこそ、パリスの審判に委ねられた賞品であった。

パリスの審判

不和と争いの女神エリス（マイナーな女神）を除くオリュムポスのあらゆる神々が、テッサリアの王ペーレウスと美しい海のニンフ、テティスの結婚に招かれた。エリスは招かれざる客として、その大いなる場にやってきて、自分がないがしろにされたことにたいして復讐をした。彼女は、集まった客のなかで「もっとも美しい人に」と書かれた黄金のリンゴを放り投げてお祭り気分をぶち壊した。黄金のリンゴが床をコロコロと転がると、すぐにヘーラーとアテーナーとアプロディーテーが名乗りをあげた。どの女神も、それが当然自分のものであるように感じたからである。もちろん彼女たちは、誰がいちばん美しいかを自分たちのあいだで決めることはできなかった。そこで判断をゼウスに仰いだ。しかし彼は選択することは気がすすまず、羊飼いのパリスに選んでもらえと命じた。パリスは美しい女性を見る目がある人間であり、彼こそ審判者にうってつけだということであった。

三人の女神は、イーデー山麓で山のニンフと牧歌的な生活を送っているパリスを見つけた。三人の美しい女神はいずれも、ワイロを使って彼の決定に影響を及ぼそうとした。ヘーラーは、もし彼が自分にリンゴを与えてくれるなら、彼にアジアのあらゆる王国を支配する権力を提供すると言った。アテーナーは、どの闘いでも彼が勝つことを約束した。アプロディーテーは、世界でもっとも美しい女性を彼に与えようと言った。ためらいなく、パリスは、アプロディーテーこそもっとも美しいと宣言し、彼女に黄金のリンゴを授与した。これがヘーラーとアテーナーの永遠の憎悪をひきおこすことになった。

このパリスの審判が原因となって、後にトロイア戦争がおこった。羊飼いのパリスはトロイアの王子であった。世界でもっとも美しい女性はギリシアの王メネラーオスの妻ヘレネーであった。パリスがヘレネーを誘拐することでアプロディーテーからの報酬を得て、ヘレネーを連れてトロイアに戻った。この行動がきっかけとなってギリシア人とトロイア人のあいだに戦争がおこり、十年つづいた後、トロイアの滅亡をもって終わった。

オリュムポスの五人の神々がギリシア人の側に陣取った。すなわち、ヘーラーとアテーナー（ギリシアの英雄たちにたいする彼女らの熱烈なる支持は、パリスへの恨みに彩られていた）、それにポセイドーンとヘルメースとヘーパイストスが加わった。トロイア側に立ったのは四人の神々、つまりアプロディーテーとアポローンとアレースとアルテミスであった。

パリスの審判に刺激されて、西洋文明のもっとも偉大な文学とドラマも生まれた。その決定によって引きおこされた出来事は、『イーリアス』『オデュッセイア』『アイネーイス』（三つの偉大な古典叙事詩）に、またアイスキュロス、ソポクレース、それにエウリーピデースの

悲劇に描かれて不滅のものとなった。

現代版パリスの審判

今日の女性はみな、自分なりの個人的なパリスの審判に直面している。そこでの問いは、オリュムボスの客人たちに向けられたものと同じである。つまり、「どの女神が黄金のリンゴを得るか」と「誰が審判をくだすか」である。

どの女神が黄金のリンゴを得るか

神話では、三人の女神だけが、そのリンゴは自分のものだと主張した。三人とは、ヘーラーとアテーナーとアプロディーテーである。しかし、一人ひとりの女性の心のなかでは、競争し合っているものは神話と異なっている。たぶん二人の女神だけがリンゴをめぐって争っているか、もしくは三人、四人が争っているかであろう。七人の女神のどの組み合わせにしても、たがいに葛藤し合っている。どの女性の心のなかでも、活性化された元型はしばしば、最高の地位や支配権力をめぐって鎬をけずっている。

「もっとも美しい人」を選ぶということ、つまりヘーラーとアテーナーとアプロディーテーが最高の美をめぐって争うということは、何を意味するのであろうか。これらの三人の女神の意味しているものを見たとき、私は、彼女らが表しているのは、一人の女性の人生がとりうる三つの主な方向であるという事実に感銘を受けた。この三つの方向は、女性の心のなかでしばしば葛藤し合う側面である。ヘーラーは結婚を第一にする女神である。ヘーラーが掲げる目標に同一化している女性もそうであろう。アテーナーは、ものごとを自分の思う通りにできるようになるために知性を用いることを重視する。彼女をもっとも美しい女神として崇める女性は、自分のキャリアを第一に考えるであろう。アプロディーテーが究極の価値と見なすものは、美と愛と情熱と創造性である。彼女に同意見の女性は、長つづきする人間関係や課題の達成よりも、自分の主体的な生活がもたらす生命感を大事にするであろう。

これらの選択肢はそれぞれ根本的に異なっている。これら三人の女神いずれもが別々のカテゴリーに入るからである。ヘーラーは傷つきやすい女神であり、アテーナーは処女神であり、アプロディーテーは錬金術の女神である。女性の人生においては、ふつうこれらのカテゴリーで表わされる三つのスタイルの一つが支配している。

誰が審判をくだすか？　どの女神が黄金のリンゴを得るかを誰が決めるか？

神話では、死すべき人間が決定をした。個々の文化でも、人間が決定をおこなう。もちろん、女性の位置を決めるのが男性であるなら、その選択は男性に都合のいいものになる。三K、つまり、子ども、台所、教会を意味するドイツ語（Kinder, Kuche, Kirche）ということがかつて言われたが、これは、たいていのドイツ女性の生活が越えることの許されない境界を意味した。

個人的レベルでは、「どの女神が黄金のリンゴを獲得するか」という問いは、一人の女性の

心のなかで現実に進行している競争を表している。両親と親類に始まり、教師、クラスメート、友達、デートの相手、夫、さらには子供にまで広がりながら、パリスの審判はどこまでもつづいていく。誰もが「黄金のリンゴ」を手渡したり、さし控えたり、自分たちを喜ばせてくれた報いとして彼女に賞賛を与える。たとえば、（アルテミスあるいはアテーナーのどちらかの影響を受けて）競争心に燃えるテニスプレーヤーであったり、（デーメーテールのような）母性的な性質を自分より年下のいとこにたいして示すだけでなく、（ヘスティアーのおかげで）もの静かで孤独を好む性質をもち合わせている小さな女の子は、他の女の子よりいろいろなことにつけて褒められることが多い。彼女の父親は、テニスがうまいとか、母親のようによく世話をしてくれるという理由で、彼女を褒めるであろうか。彼女の母親は何を重視するであろうか。家族は内向的で、そのメンバーがそれぞれ自分のことに静かに時間を費やすことが期待されているのであろうか。それとも外向的な家族で、一人でいたがる者はみな変わり者扱いされるのであろうか。女の子は、控え目で、自分にどんな秘められた才能があるかを見せず、いつも男にたたかれるままになっていると考えられるのであろうか。他の人達からの期待を考えれば、彼女は何をするのであろうか。

自分にとって大事なことを他の人々に決めてもらうなら、女性は親の期待に沿って生き、自分が何をすべきかについて彼女の属している社会階級の考えに同調するであろう。自分の人生では、どの女神が与えられるかは他人が決めるのである。

もし「どの女神が黄金のリンゴを獲得するか」を、自分のなかの女神の強さに基づいて決めるなら、何を決断するにしても、それは自分にとって有意義であろう。家族や文化から支持されるかもしれないし、されないかもしれない。しかしいずれの場合にしても、自分の本当の決断だと感じられるであろう。

葛藤し合う女神たち――比喩としての委員会

女性の心のなかでは、さまざまな女神が互いに競争し合っているか、あるいは一人の女神が支配しているかもしれない。女性が大きな決定をしなければならないときはいつも、黄金のリンゴをめぐって女神たちが競争し合うであろう。もしそうであるなら、もろもろの重要事項や本能やパターンが競い合っているなかで決断をくだすのは女性自身なのであろうか。それとも、彼女がどのようなコースをとるかは女神が決めるのであろうか。

ユング派の分析家で私の師の一人であるジョセフ・ホイールライトが言っていることだが、私たちの頭のなかでおこっていることは、委員会にたとえることができる。私たちのパーソナリティのさまざまな側面がそこに座っている。女性もいれば男性もおり、老人もいれば若者もおり、騒々しくて要求がましい者もいれば、もの静かでぽつんと切り離されている者もいる。もし運が良ければ、健全な自我がテーブルの先端に座り、司会をしながら、いつ、誰が、次に発言すべきかを決定する。議長は、観察しながら参加する有能な職務執行者であることによって秩序を守る。これは、よく機能している自我がそなえている性質である。自我がよく機能するとき、適切な行動が生まれる。

委員会の司会は、簡単な仕事ではない。どの女性のなかにも女神たちがいて、権力を要求し、ときには互いに争い合う場合は特にそうである。一人の女性の自我が秩序を維持することができないとき、一つの女神元型が介入してきてパーソナリティを乗っ取ってしまう。比喩的

に言えば、その女神が人間を支配してしまうのである。互角の強さをもつ元型的要素が葛藤し合うとき、オリュムポスの闘いに等しいものが心のなかでおこる。

人が内面的に葛藤しているとき、そこからどのような結果が生じるかは、その特定の人物の「委員会」の「メンバー」がどのように一緒になってはたらくかによる。委員会はみなそうであるが、その集団がどのように機能するかは、議長とメンバー次第である。つまり、彼らが誰であり、彼らの観点がどれぐらい強いものであり、グループのプロセスがどれぐらい協力的か、論争好きか、あるいは議長がどれぐらい秩序を維持するかによるのである。

秩序を守るプロセス――自我は議長として機能し、あらゆる女神は傾聴される機会を有する

第一の可能性は、秩序を守るプロセスが存在するということである。このプロセスは、適切な情報に基づいて明確な選択をすることができる観察自我によって支配されている。自我は、もろもろの構成要素と、それらのさまざまな欲求と動機に気づいている。パーソナリティのあらゆる関連のある側面が耳を傾けられ、現実が考慮され、緊張が維持される。おのおのの女神は一人の女性の心（彼女のパーソナリティの全体）のうちの特定の本能、価値、あるいは側面を代表して語るために、どの女神が言う言葉の量も、その特定の元型がどれだけ強いか、それがその特定の会議事項にどのように含まれているか（議長としての）自我がその女神にどれだけの発言権を認めるかによって決まる。

たとえば、日曜日に何をするかということで、一人の女性が決断をしなければならないとしよう。ヘスティアーは孤独を好み、家で静かな一日を送ることを提案する。ヘーラーは夫の親類を訪問する義務があると感じる。アテーナーは、やりかけの仕事があることを彼女に思い出させる。アルテミスは、女性たちの集まりに行くようにと主張する。

あるいは、一人の女性の決断が、人生の後半をどのように生きるかに関わっているかもしれない。この場合、パーソナリティのあらゆる側面、あらゆる女神がその結果に関心を払う。たとえば、「子どもたちが大きくなったいまこそ」不幸な結婚を終わらせるべきときではないのか。ここでデーメーテールがうなずくかもしれない。彼女はこれまで「子どもたちのために」ヘーラーと同盟関係を結んで不幸な結婚に踏みとどまってきたのである。しかしいまや、アルテミスと力を合わせて、自立を志向するのではなかろうか。

あるいは、いまこそ学校に戻るなり、キャリアを変えるなどして、アテーナーやアルテミスに関心を払うべきときではなかろうか。

あるいは、ついにデーメーテールやヘーラーの出番が回ってきたのであろうか。その女性はこれまで、自分のエネルギーのすべてを出世やプロとしての実力をつけることに注いできて、人生の半ばにさしかかったいま、つまり目標に到達したか、あるいはスランプの時期になって母性本能が湧き立つのをおぼえ、デーメーテールに感謝するのではなかろうか。あるいは、自分が一人ぼっちであることを知り、男女のカップルを羨ましく眺め、結婚したいと思うのではなかろうか、いままではヘーラーに耳を傾けることを拒んできたのだが。

あるいは、人生半ばになって自分を振り返りたくなり、もろもろの精神的な価値を探究する時期にさしかかったいま、出番が回ってきたのはヘスティアーであろうか。

人生半ばにさしかかると、女神たちが新しいパターンを織りなしたり、ある一人の女神が新たに支配の座にのぼる。このような力関係の変化は人生が新たな段階を迎えるたびにおこる。

つまり、人生半ばにさしかかったときだけでなく、思春期、成人期、引退、更年期にも見られるのである。移行がおこるとき、もし自我が秩序だった仕方で反省し、自覚できるならば、女性は、自分にとっていちばん大事なことは何か、誰に忠実であるべきか、何を価値あるものと考えるか、現実はどうかといったことを考える。彼女はいくつかの葛藤し合う選択肢を前にして、無理に解決しようとはしない。解決は問題が明らかになってからやってくる。日曜日に何をすべきかを決定するには五分で充分かもしれない。だが、生き方の大きな転換を考えるときには五年必要かもしれない。

たとえば、私は女性たちが何年もかかって「赤ん坊の問題」を解決するために闘っているのを見てきた。このような女性は、自分の母性本能と自分の仕事をどうすべきかを考える。もし夫と自分の意見が合わなければ、つまり一方が子どもを欲しがるのに、他方が欲しがらないときには、どうすればよいのか。三十代になっていて、しかも母性には時間的制約があることを考えれば、どうしたらいいのか。

これらの問題のすべてに悩んだのは、芸術家ジョージア・オキーフである。彼女は一度も子どもを産んだことがなかった。ローラ・リスルの伝記から、オキーフが子どもの頃から芸術家になりたいという内的な衝動をおぼえていたことがわかる。また、二十代の半ば頃、ある友達に「赤ちゃんを産みさえすればいいのよ。そうでなきや、私の人生は不完全なままだわ」と打ち明けていたことも知られている(1)。「赤ん坊の問題」が重大関心事になったとき、彼女はアルフレッド・スティーグリッツと深い恋愛関係にあった。彼女は彼とまず同棲し、それから結婚した。彼は現代芸術にもっとも影響力をもつ人物の一人だった。彼の画廊と、絵画と画家についての彼の意見は、画家たちの評判に大きく影響を及ぼした。スティーグリッツは、オキーフが母親になるべきではないと確信していた。母親になれば、彼女のエネルギーが絵画から離れると考えたからである。オキーフよりも三十歳も年上で、すでに成人した二人の子どもの父親であったスティーグリッツは、もう一度父親になることを望んではいなかった。

赤ん坊の問題は一九一八年に始まったのだが、これをめぐる彼女の心のなか、そして彼との関係での葛藤は五年間もつづき、二つの出来事があってやっと一見解決したように見えた。一九二三年に彼女の絵画が一〇〇点展示された。自分が画家として成功するという夢がかなえられるのだという確証が得られたのは、おそらくこの時が初めてであろう。その同じ年、スティーグリッツの娘が息子を産んでから強度の産後うつ病になり、彼女は二度とそこから完全に回復することはできなかった。

スティーグリッツへの思い、二人の関係への関心、それに画家として成功したいという願いは一致団結してオキーフの強い母性本能にさからった。ヘーラーとアプロディーテーとアルテミスとアテーナーが同盟関係を結んで、デーメーテールに対抗したのである。

この女神たちの同盟に加えて、環境は子どもをもうけることにたいして反対の決定を迫ったのだが、オキーフは、後悔することなく母親になるという可能性を十分に展開させることを必要とした。そうでなければ、この問題（どんな問題でもそうであるが）は、完全に解決されることがない。自分で選択せずに、外的な環境や内界からの強制によって、ある重要なことを諦めさせられたと感じるとき、女性は、怒りと無力感と抑うつを感じる。恨みのために彼女の生命力が涸渇し、どれほどそれが重要であろうとも、自分がおこなうどんなことにも完全に精神を集中することができなくなる。（どんな女性でもそうだが）オキーフが大切な何かを喪失す

るという経験をしてから創造的な仕事にとびこむことができるためには、彼女の自我は、自分に投票を迫るもろもろの元型の力を評価しているだけの受動的な観察者以上のものでなければならなかった。彼女は積極的にその結果を確認しなければならなかった。これをするためには、女性は、「私には自分が誰であり、状況がどのようになっているかがわかる。私はこれらの性質を私のものとして肯定し、現実をあるがままに受け入れる」と言えねばならない。そうして初めて一つの問題にとらわれていたエネルギーが解き放たれて、他の事柄に用いられるようになるのである。

シーソーのアンビバレンス

– – 女神たちが支配権力をめぐって競争するとき、自我は無力である

秩序を維持するプロセスがもっともよい解決である一方で、残念ながらそれだけでは、内面の葛藤を処理することはできない。どちらの側が一時的に権力を握っても、自我がそれに受動的に調子を合わせていれば、シーソーのパターンが生じる。初めに一方が「勝ち」、それからもう一方が「勝つ」のである。

たとえば、ある既婚女性は、情事を終わらせる決心がなかなかつかない（もしその情事を終わらせなければ、自分の結婚が終わりになることを知っているにもかかわらずである）。彼女の心のなかの葛藤は、かつてのトロイア戦争のように解決がつかず、終わることがないように感じられる。自我が無力な女性は繰り返し情事を終わらせては、結局何度も元の鞘に納まるだけである。

トロイア戦争はこの状況の見事な比喩である。戦争に勝ったものが得ることになっているヘレネーは、結婚か情事かという葛藤のさなかにいる受動的な自我に似ている。受け身の自我は人質としてとられており、一方のものになったかと思うと、他方のものになる。

ギリシア軍はヘレネーを彼女の夫のもとに連れ帰ろうとしていた。彼らには結婚を支持する者たちがついていた。その中心にいるのが結婚の女神ヘーラーであり、彼女は、トロイアが滅んでヘレネーが夫のもとに戻ってくるまで戦争がつづけられるべきだと主張した。その他にギリシア軍を助けたのは、アキレウスのために鎧をつくってあげた鍛冶の神ヘーパイストスであった。ヘーパイストスがギリシア側に共感するのはもっともである。なぜなら彼は、アプロディーテーに不貞をされた夫だからである。ギリシア軍に味方したもう一人の神は、海面下に住んでいる父権制の神ポセイドーンであった。父権制の権利を支持するアテーナーはもちろん、法律上の夫の側に立った。

これらのオリュムポスの神々は、一人の女性の心のなかで結婚を維持するようにとはたらきかける態度を表している。彼らは、結婚を神聖な誓い、そして合法的な制度と見なし、妻は夫の所有物であると信じ、夫に同情をおぼえた。

愛の女神で黄金のリンゴを獲得したアプロディーテーは、もちろんトロイアの側に立った。興味深いことに、両性具有の双子の神々であるアルテミスとアポローンもトロイア側であった。彼らは、父権制の権力が挑戦を受けるときにのみ認められるような、ステレオタイプになっていない男女の役割を象徴している。トロイア側についた第四のオリュムポスの神は戦争の神アレースであり、彼はパリスと同様、他の男の妻に恋をした。アレースはアプロディーテーの恋人であった。

これらの四人のオリュムポスの神々は、一人の女性の心のなかにあって、情事においてしばしば一緒にはたらく要素、あるいは態度を代弁している。彼らは、性的な情熱と愛、それに自律性を擁護する。これは女性のセクシュアリティが女性自身に属しており、結婚あるいは夫のどちらのものでもないという主張である。これらの四人の神々は伝統的な役割に反抗し、衝動的である。それゆえ夫にたいする反抗の宣言と見なせる情事において力を合わせるのである。

一人の女性の心をめぐる内外の競争の勝者に、その都度彼女の自我が受動的に調子を合わせているならば、彼女は、三角関係のなかにいる二人の男のあいだをシーソーのように行ったり来たりするであろう。このどっちつかずの態度は、あらゆる当事者と人間関係の両方をだめにしてしまう。

委員会の混乱 — 葛藤する女神たちに自我が圧倒される

一人の女性の心のなかで激しい葛藤がおこり、自我が秩序を維持することができないとき、秩序だったプロセスは始まりようがない。多くの声があげられ、心のなかが騒々しくなる。まるで女神たちが金切り声をあげて叫び、それぞれが他の女神たちを蹴落とそうとしているかのようである。女性の自我は、自分のなかのこれらの声が何を言っているか選り分けることができず、その一方で内部からのプレッシャーがかかる。このようなカオスのまっただなかにいる女性は混乱し、何かをせよとプレッシャーをかけられているように感じる。これは、自分の考えをしっかりもっていられないときにおこる。

私は、自分の夫から離れようとしたときにこの「委員会の混乱」がおこった四十代半ばの患者に会ったことがある。彼女は他に男性がおらず、人々から羨ましがられるような二十年間の結婚であった。この別れだけを考えている限り、多くの競い合う観点が、それぞれ多かれ少なかれもっともらしい理屈を述べるのがきこえた。しかし、自分が考えていることを夫に話し、一人になって考え始めると、内面のカオスが噴出した。彼女に言わせれば、それはまるで「頭のなかで洗濯機が回っている」か「洗濯機のなかにいるようなもの」であった。自分のもろもろの側面が（いろいろな危険で一杯の）本当の決断にたいして恐怖と驚きでもって反応していたのである。

しばらくのあいだは身動きがとれなかった。彼女の自我は一時的に圧倒されていたのである。しかし、あきらめて元の鞘に納まるよりは、物事をじっくり見極めたいという自分の気持ちを大事にして、物事がはっきりと見えてくるまで、友人たちのところに泊まった。しだいに彼女の自我はふだんの地位を回復し、警告と恐怖の声に耳をかたむけて考えた。その結果、夫から離れることになった。一年後、彼女は、それが正しい決定であったことを最終的に確信するにいたった。

このような状況では、葛藤し合っている恐怖と衝動について他の誰かに話したり、それらを文章にすることが助けとなる。それによって、互いに競い合っている関心事を見極めるプロセスが始まるからである。諸問題のかたまりが個々の関心事に分解されるならば、自我はもはや圧倒されたようには感じなくなるだろう。

「委員会のカオス」はしばしば一時的なもので、目新しく脅威的なものとして受け取られたものにたいする原始的で混沌とした反応につづいて、一時おこるだけである。自我は、すぐあとで秩序を回復する。しかしながら自我が秩序を回復できない場合、心のカオスは破局へと通

じることになる。心のなかが、競合し合うさまざまな感情や考えやイメージで、いつまでもひしめきあったままで、論理的に考えることが不可能になると、その人は機能することをやめる。

ひいきされるメンバーと検閲を受けるメンバー

– – 偏見のある議長は、ある女神たちをひいきし、他の女神たちを認めることを拒否する

偏見に満ちた自我が議長になると、特定の気に入った委員会のメンバーだけが認められる。そのような自我は、自分が受け入れがたいと考えられる欲求や感情、見解を表す他の女神たちを狂っていると呼ぶことで黙らせてしまう。見たくもない、聞きたくもないと思うようなものはすべて検閲し、表面上は何ら葛藤がないようにする。「ひいきされた女神の地位」はときには二、三人の、あるいはたった一人の女神だけに与えられ、その女神の見解が権力を握る。これらが、その自我の同一化する女神ということになる。

一方、ひいきされない女神たちの見解や彼女らが大切にしているものは、抑制あるいは抑圧される。彼女らは黙っているか、あるいは委員会に出席していないかのようにさえ見える。そのかわり彼女らの影響力はむしろ「委員会室の外」つまり意識の外にあると感じられる。もろもろの行為や心身症的な症状やムードは、これらの検閲を受けた女神たちの現れかもしれない。

「アクティング・アウト（行動化）」は、葛藤し合う感情によってつくり出された緊張をやわらげするように、知らず知らずのうちに動機づけられた行為である。一例をあげると、既婚女性のバーバラは、夫の妹スーザンがいつもバーバラの車に乗せてもらえると考えていることに憤慨している。バーバラは、ノーと言えば必ず自分をわがままで罪深いと感じてしまう。怒りが受け容れられないために腹を立てることができないのである。そのために彼女の自我は、議長としてヘーラーとデーメーテールに味方している。この女神たちは、彼女が夫の親戚の世話をする良い妻であり、慈悲深くて面倒見のよい人でなければならないと主張するのである。彼女の自我は、他人の世話をすることに腹を立てる処女神を抑圧している。心のなかで緊張がたかまり、彼女はそれを「アクティング・アウト」によって発散することになる。バーバラはスーザンを迎えにいく約束を「忘れてしまう」。わざとスーザンを待たせるのなら、非常に敵意に満ちたことだっただろう。アルテミスやアテーナーならば、わざとそうするようにと呼びかけさえするであろう。しかし、バーバラの場合は「忘れること」で敵意を「アクティング・アウト」し、スーザンの習慣をやめさせようとするのである。しかしバーバラは、自分自身の怒りや独立したいという主張には、いまだ気づいていない。

私の患者の一人がもう一つの、しかももっと重要な「アクティング・アウト」の例を提供してくれた。彼女は、ある重要な映画での脇役を決めるオーディションを受けるつもりだった。配役を決めるディレクターが以前に彼女と会っており、彼女がその役にぴったりではないかと考えて、試してみるようにと彼女に頼んだのであった。彼女にとっては大きなチャンスであった。その三十歳の女優は予定外題をつぎつぎと上演する小さな劇場の一員で、劇場のディレクターと同棲していた。彼らはひっついたり離れたりしながら三年間関係をつづけていた。

彼女の方が成功を納めることに彼が耐えられないだろうと、彼女はどこかでわかっていた。しかし彼女は、この認識を抑圧していた。それとならんで他にもいくつかの洞察を持っていた

が、抑圧によって彼女はありのままの彼を見ずにすんでいた。映画のチャンスがやってきて、彼女はオーディションに備え、最後の瞬間までリハーサルしていたのに、あまりにも熱中しすぎて「時間を忘れてしまった」。彼女は約束の時刻に間に合わなかった。

つまり彼女は自分のアンビバレンスを行動化（アクティング・アウト）したのである。その役を欲しいと思い、意識のうえでは、そのために努力していたのであるが。アルテミスは彼女に野心を与え、アプロディーテーは彼女が自分の才能を表現するのを助けた。しかし彼女は、その役柄を得て彼との関係を試すことを、知らず知らずのうちに恐れていたのである。まずヘーラーが関係を結び、それからデーメーテールは、その男性が脅威を感じたり、不適切だと感じることがないようにした。その役柄を得ようと試みることをやめようという決心は意識の外でなされたのである。

心身症的な症状も、検閲を受けた女神たちの表現かもしれない。たとえばアテーナーの性質をもつ独立した女性は、けっして助けを求めたりはしないし、他人を必要とするようにも見えないが、喘息の発作や潰瘍の症状を出すことがある。おそらくこれは、依存的なペルセポネーが母性的な世話を受けるのを許す唯一の方法なのであろう。あるいは、与える大地の母であるタイプは不安定な高血圧であることがわかるかもしれない。彼女の血圧は、特に自分が自己犠牲的であるように思われるときに、しばしば正常値から高い値へとはね上がる。彼女は自分自身が大切にしているものに注意をしつづけるだけのアルテミスをもっていないかもしれないが、彼女があまりにもたやすく他者の欲求を第一にするとき、緊張や怒りを感じているのである。

ムードというのもまた、検閲を受けた女神たちを反映することがある。幸福な結婚をしている女性が、自分と別の道を選んだ友人の話を聞くときに、ぼんやりとした遠くを見つめるような気分に浸るのは処女神のうごめきを表しているのかもしれない。キャリア・ウーマンが月経のときに感じる漠然とした不満は、満たされないデーメーテールであろう。

ギアの変換 ― 数人の女神たちが「交替する」とき

数人の女神が交替で支配的な力を及ぼす場合、女性たちはしばしばみずからを「一人分以上」だと述べる。たとえば、キャロリンは年間百万ドルの保険を売りさばいている。彼女はたくさんのグループのトップにいて、横極的に客を求めている。仕事ではアテーナーとアルテミスがうまいぐあいに混じり合っている。家では、そのビジネスの虎は孤独な子猫に変わり、家や庭を歩きまわることで満足する。これは、孤独を楽しむ内向的なヘスティアー型の女性なのである。

レスリーは、広告代理店に勤める着想豊かな人物である。彼女の提案は精彩を放っている。持ち前の創造性や説得力できわめて有能である。彼女はアルテミスとアプロディーテーがいきいきと混じり合っているのであるが、夫といると、たやすく従順なペルセポネーになる。

どちらの女性も、ギアを変換させ、パーソナリティの一つの側面から別の側面へと変わるとき、自分が二人の異なった人であるかのように振る舞っていることに気づいている。毎日このような自分の変化は彼女らにとって完全に自然なものである。どちらの場合も彼女らは、自分がみずからに正直であると感じている。言いかえれば、「交替で」自分のなかに表現される女神たちに正直であると感じているのである。

パーソナリティにおける変換についてわかってしまうと、心理学的類型の「AかBか」といった選択は多くの女性たちを混乱させたり面白がらせたりする。彼女たちは、どんなふうに感じるかによって答えが変わることを十分に承知しているからである。仕事をしている自分の行動について答えるのか、あるいはプライベートな自分の行動について答えるのか、自分のなかの母について答えるのか、あるいは芸術家について答えるのか、一人でいるときにどんな反応をするか、あるいはカップルでいるときにどんな反応をするかといったことが、答えに影響を及ぼすだろう。答え、つまりパーソナリティのプロフィールは、女性のなかの「どの女神」がテストを受けているかに左右されることが非常に多いように思われる。ある女性のサイコロジストが言っていた。「私はパーティーではとても外向的なんです。それは私が身につけているペルソナやパーティー用の顔といったようなものではなくて、実際私自身が楽しんでいるのです。でも研究しているときの私は別人なのよ。」彼女は、ある場面では泡立つように活気のあるアプロディーテーであり、外向的で感情豊かに反応し、官能的である。別の場面では、彼女は注意深いアテーナーであり、これまでじっくりと考えぬき、いまやそれを立証する証拠を集めなければならない計画を慎重に実行するのである。

女性のパーソナリティを支配しているのが一人の主な女神の元型である場合には、その心理学的類型をテストすると、ふつうユングの理論に一致する。彼女は一貫して外向的であるか内向的であるかのいずれかになるだろう。外向的というのは、外界の出来事や人々に直接反応することを言い、内向的というのは、自分の受ける内界の印象に反応することを言う。彼女は人々や状況を評価するのに（合理的な考慮に重きをおく）思考か、そうでなければ（価値に重きをおく）感情のどちらかを使うだろうし、信頼する情報源は、五感か直観か、のどちらかだろう。（思考、感情、感覚、直観の）四機能のうち一つだけがよく発達している場合もある。

二人あるいはそれ以上の女神の元型が支配的である場合、女性は必ずしも一つの心理学的タイプに一致しない。彼女は環境次第で、つまりどの女神が優先するかによって内向的にも外向的にもなりうる。ある状況では外向的なアルテミスかデーメーテールが「黄金のリンゴを受け取る」が、別の状況では内向的なヘスティアーかペルセポネーにそれを手渡すかもしれないのである。

ユングの理論によれば、思考と感情は評価機能であり、感覚と直観は知覚する機能である。これら四つのうちの一つがもっとも発達すると、反対の側（そのペアの対極）は理論上いちばん意識されないものとなる。一つの女神パターンがパーソナリティ全体の基盤となっている場合には、理論通りになる。アテーナー型の女性は物事を非常にはっきりと考える一方で、感情的な価値を評価する能力はほとんどないに等しいという特徴をもつ。しかし重要な女神が二人以上いる場合は、これがあてはまらない。たとえば活性化された元型としてアルテミスがアテーナーに加わっている場合、思考だけでなく感情も等しく、あるいはほとんど等しいぐらいに発達することになり、理論に反することになる。

一人の女性のなかで、女神たちが協力したり交替で現れたりするような状況においては、「どの女神が黄金のリンゴを得るか」は、環境や目下の課題に左右される。

意識と選択

女性がひとたび（自己の観察自我を通じて）もろもろの女神元型に気づくようになり、委員会を内的プロセスのメタファーとして評価するようになれば、彼女は二つの非常に有効な洞察の道具をもつことになる。自分の内なるいろいろな声に耳をすまして聞き、「誰」がしゃべっているのかを知り、自分に影響を及ぼしている女神たちに気づくことができる。その女神たちが、解決を求めながら葛藤し合っている自分自身のいろいろな側面を表しているならば、それぞれの女神の欲求と関心に波長を合わせ、それから何がもっとも重要であるかを自分で決めることができる。

ある女神たちが未分化で、見極めるのが困難な場合、つまり、その存在がアクティング・アウト的なエピソードや、心身症的な症状や、気分を通じてしか推し測れないような場合、それが誰であるのかを知るために時間と注意が必要である。元型的なパターンについての概念をもち、女神たちの範囲を知っていると、認知を求めている女神が誰であるかを知るうえで助けとなろう。

女神はすべてあらゆる女性のなかにある先天的なパターンであるので、個々の女性は、ある特別な女神とより親しくしたいという欲求に気づくかもしれない。この場合、特定の女神の影響をうまく発展させたり強めたりできるであろう。たとえば、ダーナは論文に取り組んでいるとき、図書館で調べものをする努力がなかなかできなかった。しかし自分自身が狩りに出ているアルテミスだとイメージすることによって、図書館に行って必要な論文を探そうという力が出てきた。自分がアルテミスだというイメージが、仕事に必要なエネルギーを活性化したのである。

女神たちを能動的に想像することは、女性にとって、自分のなかにどのような元型がはたらいているかを知るうえで助けとなる。彼女は、ある女神を目に浮かべ、いったん自分の心のなかでいきいきしたイメージがもてると、自分がその視覚化された存在と会話ができるかどうかがわかる。「能動的想像」（これはユングが発見したプロセスである）を用いることで、彼女はいろいろと質問しては答えることができるということを経験する。自分が意識してつくり出すのではない答えに、心をひらいて耳を傾けるなら、能動的想像を用いる女性はしばしば、まるでほんとうに会話をしているかのようになり、自分の一部である元型的な存在についての知識が増す。

いったん自分自身のさまざまな部分に心の波長を合わせて、自分のいろいろな関心事や、お互いに葛藤し合う忠誠心を聞いたり、観察したり、感じることができるようになれば、女性はそれらを選り分けて、自分にとってどれほど重要なものであるかを秤にかけることができる。そうなれば自覚的に選択することができるのである。葛藤がもちあがると、彼女は、どの重要事項を他の重要事項の上におくか、自分がどのような処置をとるかを決定する。その結果、彼女の決定は内面の闘いを誘発するかわりに、内面の葛藤を解決することになる。このようにして一歩一歩、彼女は黄金のリンゴをどの女神がとるかを、繰り返し自分で自覚的に選択し、決断していく人間になるのである。

14

女はみんなヒロイン

どの女性の心のなかにも潜在的なヒロインがいる。彼女は、誕生に始まって、生涯つづく旅を描いている自分自身の人生の主人公である。自分だけに定められた道を歩いて旅しているあいだに、もちろん彼女はもろもろの困難に出会い、みずからの孤独、傷つきやすさ、不安を感じ、いろいろな限界を知るであろう。また、意義を見出し、性格を発達させ、愛と恵みを経験し、知恵を学ぶということもするであろう。

彼女の人生は、自分がおこなう選択、もち合わせている信仰と愛の力、経験から学び、自分を賭ける能力によって形成される。困難なことがもちあがるとき、自分に何ができるかを見定め、何をするつもりかを決め、価値観と感情に合った仕方で行動するならば、彼女は自分の神話の主人公として振る舞っているのである。

人生は自分で選んだのではないさまざまな状況にみちているが、常に決定をおこなわねばならない瞬間がある。それが結節点となって、物事のなりゆきが決まったり性格が変えられたりする。自分の旅の主人公になるためには、女性は、自分のおこなう選択が決定的に大事だという態度で始めねばならない。あるいは、初めのうちは、あたかも大事であるかのように振る舞わねばならない。この前提で生きていくうちに何かがおこる。つまり、女性は自分でものごとを決める人間、自分がなりたい人間、ヒロインになるのである。彼女は、自分がおこなうこと、あるいはおこなわないことによって、そして自分のとる態度によって大きくなるか小さくなるかする。

患者たちから教わってきたのは、自分が現在のような人間になったのは、単に自分の身におこったことのためだけではなく、自分の心のなかにおこったことのためでもあり、それによって違いが生じたということである。彼女らがどれほどの逆境に出会ったかよりはむしろはるかに、彼女らが何を感じ、内面的かつ外面的にどのように反応したかが、現在の自分を決定していたのである。たとえば、親から見放され、残酷な仕打ちを受け、叩かれ、性的に虐待されながら子ども時代を生きのびてきた人々に私はこれまで会ってきた。それでも彼女らは、（予想に反して）自分を虐待した大人のようにはならなかった。自分が経験したあらゆるひどい仕打ちにもかかわらず、彼女らはいまだけでなく、そのときでも他の人々に同情をおぼえたのである。外傷的経験は爪跡を残し、彼女らは無傷であるわけではないが、それでも、信頼や愛と希望の力や、自分を大切にする気持ちは残っている。なぜそうなのだろうかと考えて、私はようやくヒロインと犠牲者の違いがわかってきた。

子どもの頃、これらの人々はみな、何らかの仕方で恐ろしいドラマの主人公として自分を理解しており、心のなかの神話、空想生活、想像上の友達をもっていた。父親からぶたれたり、辱められたりして虐待され、抑うつ状態にある母親からは保護してもらえなかった一人の女性は子どもだった頃、自分はこの教育もなく偏狭な家族とは関わりがない人間で、本当は試練によって試されているお姫さまであると、自分に言い聞かせていた。子どもの頃にぶたれたり、性的に虐待されたもう一人の女性は、大人になったとき、痛めつけられた子供は、自分の子供を痛めつけるというパターンにはまらなかった。彼女は子どもの頃、いきいきした空想生活のなかに逃げこみ、そこでまったく違った生活をしていた。三番目の女性は自分が戦士だと考えていた。これらの子どもたちは将来のことを考え、自分がある程度の年になれば、どうすれば家から脱出できるかの計画を練っていたのである。彼女らは、それまで、どのように反応したらよいかを自分で選んだ。一人はこう言っている。「けっして誰にも私が泣いているところを

見せようとはしませんでしたわ」（そのかわりよく丘の麓に行って誰にも見えないところで泣いた）。もう一人はこう言っている。「自分の心が肉体から離れていったと思います。あの人が私に触れようとするといつも、私はどこか他のところに行くんです。」

これらの子どもたちは、自分のことは自分で選んでいくヒロインであった。彼女らは、自分がどのように扱われているかとは別個に、自分についての感覚を維持した。状況を評価し、現在はどのように反応したらよいかを決定し、将来にそなえて計画を立ててきたのである。

ヒロインとしての彼女らは、ギリシア神話では（漫画に出てくるスーパーヒーローやジョン・ウェイン風の登場人物のように）たんなる人間よりも強くて保護されているアキレウスやヘーラクレースのようなパワフルな存在ではなかった。早い時期からヒロインを演じているこれらの子どもたちは、どちらかと言えばヘンゼルとグレーテルに似ている。ヘンゼルとグレーテルは森に捨てられたり、魔女がヘンゼルを食べるために太らせるとき、機転をきかさねばならなかった。これらの子どもたちは、リチャード・アダムスの小説『ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち』に出てくるウサギたちに似ている。あるヴィジョンを追求して新しい家にたどりつくのである。つまり、彼女らは小さくて無力であり、もし我慢しつづけるなら、もっといいところへ行くだろうという神話を心のなかに抱くことで自分を支えてきたのである。

ジーン・M・アウルの小説『大地の子エイラ』の全編を通じて英雄的な旅をおこなうエイラは、有史以前の氷河時代のヨーロッパにおける神話上のヒロインである。時代と細部は異なっていてドラマティックではあるが、そこに描かれているテーマは、現在のヒロインが直面しているものときわめてよく似ている。何度もエイラは、対立や危険に直面したときに自分が本当は何をしたいのかを自分で決めねばならない。彼女はクロマニョン文化で育てられた新石器時代の孤児である。この文化では、彼女は女であるという理由でおとしめられ、彼女ができることに制限を加える。彼女の外見、自分の気持ちを伝えて叫ぶ能力、じっくりとものごとを考える勇気と力、それらすべては文化に反するものと見なされる。しかし、自分で選んだものではない境遇にたいして反応するうちに、彼女の勇気が高まってくる。『大地の子エイラ』において一種のオデュッセウスへと展開していくものは、（人間の英雄がおこなう旅に典型的であるような）英雄的探究としてではなく、自分に似た他者を見つけだす旅として始まった。同様に、ヒロインの神話におけるように、人間の女性の現実の人生の物語においても、他者への情緒的な絆は決定的な要素である。ヒロインは、愛しあるいは愛することを学ぶ者である。彼女は他者と共に旅をするか、そうでなければ合一もしくは再合一を求める。

道

どの道にも重要な三叉路があり、そこで決断がなされねばならない。どちらの道をとるべきか。どちらの決定に従うべきか。自分の原理と一致する道を辿りつづけるべきか、それとも他の人々と調子を合わせるべきか。正直であるべきか、それとも欺くべきか。大学へ行くべきか、それとも働くべきか。赤ん坊を産むべきか、それとも中絶すべきか。関係をやめるべきか、それともつづけるべきか。ある特定の男性と結婚をすべきか、それとも彼にノーを言うべ

きか。乳房にしこりを発見して、ただちに医者のところに行くべきか、それともそれを延ばすべきか。学校や仕事をやめて、何か他のことをすべきか、情事をして結婚を危機にさらすべきか。放棄すべきか、それとも耐えるべきか。どちらを選ぶのか。どの道をとるのか。いかなる犠牲を払うのか。

大学時代に経済学の授業で学び、その後何年にもわたって精神医学の分野でも当てはまることを経験してきた、ある重要な教訓がここで思い出される。つまり、どんなものにしてもその真の代償は、それを得るために諦めるものであり、とらなかった道である。選択をおこなって責任をとるということは非常に大切ではあるが、必ずしも容易ではない。ヒロインとは、それをおこなう女性ということである。

これと対照的に、ヒロインでない女性は他の誰かの選択に調子を合わせていく。これは、自分の本当に望んでいるものかどうかを能動的に決めるよりはむしろ、中途半端な気持ちで黙って言うことをきく。そこからしばしば、自分勝手な犠牲者が生まれる。（実際に事がおこってから）彼女は、「本当はこんなことしたくなかったわ。それはあなたの考えだったのよ。」（「こんなごたごたになって、ここまできてしまったけど、私が不幸なのは、みんなあなたのせいだわ」）と言う。あるいは自分が犠牲になったと感じて、「私たちはいつも、あなたがしたいことをしてきたのだわ」と非難しながら、自分の立場を少しも明らかにしなかったことを認めようとはしない。「今夜あなたは何をお望みなの」というもっとも単純な問い（これにたいして彼女は「あなたの望むものなら何でも」と答える）から、あなたまかせの習慣が強くなり、ついには自分の人生に関して何をしてもそれが自分の手から離れてしまうことになるのである。

もう一つの非ヒロイン的なパターンもある。これを演じるのは、いつまでも十字路にとどまっている女性である。自分の気持ちがはっきりせず、選択することに気がすすまないのは、いかなる選択肢も諦めたくないからである。彼女は頭がよく、才能があり、魅力的な女性だが、人生をもてあそび、自分にとってあまりにも深刻になるような関係や、あまりに時間とか努力が必要な仕事からは後ずさりする。彼女の不決断はもちろん、実際には行為しないという選択なのである。十字路で待ちながら十年過ごし、そのあとで、人生が自分の前を通りすぎていくのに気がつくのである。

それゆえ女性は、他の人々や環境にふりまわされながら犠牲者か殉教者のように受動的に生きるのではなく、自分で選択するヒロインになる必要がある。ヒロインになることは、これまで傷つきやすい女神の元型に支配されてきた女性にとっては、まさに啓蒙的な新しい可能性である。自己主張することは、ペルセポネーのように言いなりになってきたり、ヘーラーのようにまず男をたてたり、あるいはデーメーテールのように、他の人ならどんな人の要求にも気を配ってきた女性たちにとっては、英雄的な仕事である。自分が育てられてきた仕方の、まっこうから反対のことをするからである。

さらに、自分で選択するヒロインになりたいという欲求は、自分ではいつもそうしてきたと間違って思い込んでいる多くの女性にとっては、一つの衝撃である。処女神型の女性である彼女らは、アテーナーと同じくらいに「心を武装し」、アルテミスと同じくらいに男性たちの考えから独立し、ヘスティアーと同じくらいに自己充足し、一人でいる。ヒロインとしての彼女らの課題は、誰かと親密になるという危険をおかすこと、あるいは情緒面で傷つきやすくなる

ということである。彼女らにとって勇気を必要とする選択は、誰か他の人を信頼したり必要とすること、あるいは誰か他の人にたいして責任ある立場に自分の身をおくことである。世の中で自己主張したり、危険をおかすことは、このような女性にとってはたやすいことであるかもしれない。しかし結婚して母親になることは勇気が要るのである。

自分で選択するヒロインは、十字路に立ったときはいつでも、「種を選り分ける」というプシューケーの第一の仕事を繰り返し、いま何をなすべきかを決定しなければならない。立ち止まって自分が重要だと見なしているものや動機、それにその状況に含まれるさまざまな可能性を選り分けねばならない。選択肢としてどのようなものがあるか、どのような情緒的犠牲を払わねばならないか、その決断が自分をどこへ導くことになるか、直観的に自分にとってもっとも大事なものは何かを理解することが必要である。自分が何者であり、何をしているかにもとづいて、どの道をとるべきかを決めねばならない。

ここで、私の最初の本である『タオ心理学』で展開したテーマにもう一度触れよう。すなわち、「心にかなう道」を選ぶことの必要性というテーマである。私の感じから言えば、人は、まずじっくりと考え、それから行動しなければならない。人生のあらゆる選択肢を合理的思考によって吟味し、それから、自分の心にすんなりと受け入れられるかどうかにもとづいて決断しなければならないのである。他の誰も、自分の心が本当に関わっているかどうかを言うことはできないし、論理学も答えを与えてはくれない。

自分の人生に大きな影響を及ぼすことになる、あれかこれかの選択に女性が直面するときはしばしば、他の誰かが彼女に圧力をかけて決心させようとする。たとえば、「結婚しなさい」「子どもを産みなさい」「家を売りなさい」「仕事を変えなさい」「やめなさい」「引っ越しなさい」「イエスと言いなさい」「ノーと言いなさい」といったぐあいにである。非常によくあることだが、女性は誰かのイライラによってつくられた圧力釜のなかで、心を決めなければならない。自分自身で決めるためには、それが自分の人生であること、そしてその結果とともに生きていくことになるのは自分なのだということがわかったうえで、自分のペースで決心することを主張する必要がある。

気持ちをはっきりさせるためには、軽はずみに決めてしまわないように、内的プレッシャーに抵抗する必要もある。最初はアルテミスか、アプロディーテー、ヘーラーかデーメーテールが、それぞれに特有の強烈さと本能的な反応を示しながら支配しているかもしれない。そのような女神たちはヘスティアーの感情、ペルセポネーの内省、アテーナーの冷静な思考力を追い出そうとするであろう。しかし、これらの女神たちは、注意を払えば、十分な見取り図を提供してくれ、女性は自分のあらゆる側面を考慮に入れた決心ができるようになる。

旅路

ヒロインの旅路を進んでいく女性は、困難や障害や危険に直面する。どのように反応し、何をするかによって彼女は変化するであろう。道を行くにつれて彼女は、何が自分にとって重要なのか、自分の知っていることにもとづいて行為する勇気があるのかどうかを知ることにな

る。自分の性格と情熱が試される。自分のパーソナリティの暗い影の側面に出会うこともあろうし、同時に強さが明らかになり、自信が増すこともあろう。恐れにうち負かされることもあるかもしれない。喪失や限界、敗北を体験し、悲しみを知ることもあるだろう。ヒロインの旅は発見と展開の道であって、自分のさまざまな側面を、一つの、しかし複雑なパーソナリティへと統合していく旅である。

ヘビの力を回復する

どんなヒロインもヘビの力をとり戻そうとしなければならない。その仕事の性質を理解するためには、女神たちの項目に戻り、女性たちの夢に戻る必要がある。

多くのヘーラーの彫像では、その着衣にヘビがからみついており、アテーナーの彫像では盾のまわりにヘビが巻きついている。ヘビはずっと、古ヨーロッパにおけるギリシア以前の偉大なる女神のシンボルであり、かつて女神が有していた権力を象徴的に思い出させてくれる（あるいはその名残りを伝える）ものとして役立っている。ある神の有名な初期の頃の彫像（クレータ紀元前二〇〇〇年－一八〇〇年）は胸がむきだLで、腕を伸ばし、左右の手に一匹ずつヘビをもっている女性の神であった。

ヘビは、女性が自分の人生は自分自身の力で切り開けるのだと感じ始めるときにしばしば夢のなかで、夢み手が注意深く近づいていく未知の恐れ深いシンボルとして現れる。たとえば、三十歳の既婚女性の夢を例としてあげられるだろう。彼女は、まもなく離婚して、自活しようとしていた。「私は小道を歩いている。前を見ると、この道を行けば大きな木の下に通じているのがわかる。巨大な雌のヘビがいちばん低い枝に平和なようすで巻きついている。毒ヘビでないことはわかっているし、私を拒否する様子でもない。実際、それは美しい色をしているが、私はためらっている。」この種の夢が多く現れるのは、夢み手が、ヘビを危険なものとして怖がっているよりはむしろ、ヘビの力に畏怖をおぼえたり、はっきりとわかっていたりするときである。たとえば「一匹のヘビが私の机の下でトグロを巻いている……」「玄関でヘビがトグロを巻いている……」「ヘビが三匹部屋にいる……」というぐあいにである。

女性たちが自分自身に権威があることを主張し始めたり、決心したり、自分自身の政治力、精神力、個人的な力について、新しい感じを抱いていることに気づくようになると、つねに共通してヘビの夢が現れる。ヘビは、新しい強さを表しているようである。シンボルとしてのヘビは、かつて女神がもっていた力を表したり、同じくアニムスの性質をほのめかす男根的な、あるいは男性的な力を表す。しばしば夢み手は、それが雄のヘビであるのか、それとも雌のヘビであるのかを感じとるが、それはヘビの象徴している力の種類をはっきりさせるのに役立つ。

これらの夢と一致して、現実の生活においても夢み手は、権威や自律性をもつ地位で新しい役割をとるようになったあと、わきおこってくる疑問と直面するようになる。たとえば、「自分はうまくやれるだろうか」「この役目が私をどんなふうに変えるのだろう」「私が強ければ、人々は私のことを好いてくれるだろうか」「この役割をとることで私にとっていちばん大

事な人間関係が損なわれることになるのではないか」といった疑問である。自分自身の潜在能力をそれまで感じたことがなかった女性たちの夢は、未知のヘビにたいしてと同じように、権力にたいしても慎重に接近していかなければならないのだということを告げているかのようである。

私が考えているのは、「ヘビの力を取り戻す」ように、自分自身の権力や権威の感覚を得ようとする女性のことである。それは家父長的な宗教が女神たちから力と影響を取り除き、ヘビを悪の要素としてエデンの園に置き、女性を劣った性にしてしまったときに、女神や人間の女性が失ってしまったものである。それから私が考えるのは、女性が力と美と養育能力をそなえて再び現れてくる可能性を表しているように思われるイメージである。このイメージは、大地から現れ、それぞれの手に、小麦の束と花とヘビをもっている美しい女性もしくは女神のテラコッタで、ローマのテルメ美術館のものでは、デーメーテールを表していると考えられる。

熊の力に抵抗する

自分で選択するヒロインは、男性でこれと対応するヒーロー（英雄）と違って、母性本能の圧倒的な力に脅かされる可能性がある。女性は、アプロディーテーやデーメーテールに抵抗することができないなら、不都合なときや困難な状況のなかで妊娠してしまう。そうなれば、自分が選んだ道からはずれてしまう。彼女はみずからの本能の囚われ人であることを選んでしまったのである。

たとえば、私の知っているある大学院の女子学生は、妊娠したいという衝動にとらわれたとき、自分の目標をほとんど見失ってしまったかのようになった。赤ちゃんが欲しいという考えにとりつかれたとき、彼女は結婚していて、学位を目ざしてがんばっていた。この時期に、彼女はある夢を見た。その夢のなかで、大きな一頭の雌熊が彼女の腕を自分の歯のあいだにくわえて、放そうとしなかった。彼女は自由になろうとしたがだめであった。何人かの男に助けを求めたが無駄であった。彼女は夢のなかでさまよっていると、一頭の母熊と子熊を表した彫刻に出会った。それはサンフランシスコ医学センターにあるプファーノの彫刻を思い出させるものであった。彼女がその彫刻の上に手をおくと、熊は彼女を自由の身にした。

この夢について考えると、彼女にはその熊が母性本能を象徴しているように感じられた。実際の熊は堂々たる母親で、自分の傷つきやすい子どもを養い育て、断固たる決意で保護する。そして成長した子熊が一人立ちできるようになると、母熊は嫌がる子熊たちが無事に母親の元を離れて世の中に出て、自分で自分の身を守るようにと強く要求する。この母性の象徴が、夢み手の心をこれまで縛ってきたのであり、母熊の像に触れるまで彼女を手放そうとはしなかったのである。

夢み手にとって、この夢のメッセージは明らかであった。（二年先のことになるが）学位を取り終えてから子どもを産もうと自分自身に約束することができるなら、いま彼女の心をとらえている妊娠したいという思いから自由になるであろう、ということである。まったく当然のことで、実際、彼女と夫が子どもを産むことを決意し、学位を取りしだい妊娠することに心か

らコミットしてから、この強迫的な思いは消えてしまった。妊娠をめぐるいろいろな思いにわずらわされることなく、彼女はもう一度自分の研究に専念することができるようになった。熊のイメージを抱いている限り、本能に縛られることがなかった。彼女は、キャリアと家族の両方をもつつもりであるなら、学位を得るのに十分なだけの長期間、熊の力に抵抗しなければならなかったのである。

元型は女性の生活のいろいろな現実や彼女の欲求とはかかわりなく、時間に縛られずに存在している。女神たちが影響を及ぼすとき、ヒロインとしての女性は、自分に下されるもろもろの命令にたいしてイエスやノー、あるいは「いまはまだだめ」を言わねばならない。もし自覚的に選択することをしなければ、本能あるいは元型のパターンが彼女の心をのっとるであろう。女性は、もし母性本能にとらわれているならば、「熊の力に抵抗する」と同時に、それが自分にとってどんなに大切なものであるかを評価することが必要である。

死と破壊を払いのける

英雄神話では、主人公はみな決まって、自分を邪魔して滅ぼしかねない破壊的あるいは危険な何かに出くわす。これは女性の夢にもきわめてよく見られるテーマである。

たとえば、ある女性弁護士は夢のなかで、子どもの頃通っていた教会の外へ一歩踏み出たときに、二匹の黒い獰猛な犬に襲われた。犬は彼女に飛びかかり、彼女の首を噛もうとした。「犬たちは頸動脈をめがけているような気がしました」と彼女は述べている。攻撃を避けようとして腕をあげたとき、彼女はこの悪夢から目がさめた。

ところで、彼女は、ある代理店のもとで働きだして以来、自分の扱われ方にますます苦々しい思いになっていた。男たちはしばしば、彼女がただの秘書であると思い込んでいた。たとえ彼女が誰であるかを彼らが知っていても、彼女は自分が安っぽく見られているか、ものの数に入れられていないように感じることがよくあった。彼女は彼女で、男たちを批判し、彼らにたいして敵意を抱くようになった。

初めのうちは、この夢は自分の気持ちを誇張して述べたものであるように思われた。いつも「攻撃されている」と感じていたからである。それから、自分のなかに獰猛な犬のようなものがあるかどうかに思いをめぐらした。この仕事をやりだしてから、自分の身に何がおころうとしているかを考えているうちに、「だんだん敵意まるだしの雌犬になってきているのだ」ということに気がついて愕然とし、打ちのめされた。かつては自分の態度が慈悲心に富んでおり、いまよりもっと幸せであったことを思い出したが、それは子どもの頃に通っていた教会からの連想である。そして自分がその場所から足を「踏みはずして」しまっていることを知った。この夢は、一つの衝撃を与えた。夢み手のパーソナリティは実際、彼女が抱きながら他の人たちに向けている敵意のために滅ぼされるという危険に瀕していた。彼女はしだいに皮肉屋になり、敵意を抱くようになっていたのである。夢のなかと同様、現実の生活でも危険に瀕しているのは彼女自身であり、彼女が自分の苦々しい気持ちを向ける人々ではなかった。

同様に、女神の否定的側面や影も破壊的になりうる。ヘーラーの嫉妬深く、復讐心に燃え、

恨みがましい側面は毒をはらんだものになる。これらの感情にとらわれながら、それを知っている女性は、復讐心に燃えたかと思うと、自分が感じたりしてきたことに悩まされることを繰り返す。女神と闘うヒロインである彼女は、何匹かのヘビから襲われる夢を見るかもしれない。これは、ヘビが表す力が夢み手自身にとって危険なものになっているということを示している。このような夢の一つでは、毒ヘビが夢み手の心臓めがけて突進してきた。別の夢では、ヘビが夢み手の足にその毒牙で噛みついて離れようとはしなかった。実際の生活では、これらの夢を見た女性たちは、ともに裏切り（「草のなかのヘビ」のような振る舞い）を克服しようとしており、毒をはらんだ感情に圧倒されるという危険に直面していた。これは獰猛な犬の夢を思わせる。この夢には二つの意味のレベルがあった。つまり彼女の身にふりかかっていることと、彼女の心のなかでおこっていることの両方の比喩なのである。

襲いかかってきたり、不吉な雰囲気を漂わせる男たちや女たちといった人間の形で夢み手にとっての危険が現れるとき、その危険はしばしば、敵意をはらんだ批判やある破壊的な役割からきている。（一方、動物の形で現れるときは、感情や本能を表現しているように思われる。）たとえばある女性は、子どもたちが小学校にあがると大学に戻った。彼女は、「大柄な女看守」が自分の行く手を遮ぎる夢を見た。彼女が逃れなければならなかったその人物は、自分について母親から下された否定的な判断と同時に、自分自身が同一化している母親の役割を人格化しているように思われた。夢は、このように同一化することで、自分が囚われの身になってしまっていることを伝えていたのである。

心のなかに現れる人物からの敵意を含んだ判断はしばしば破壊的である。たとえば、「おまえにはそんなことはできやしないよ。おまえは嫌な女（家庭的な女、無能な女、頭の悪い女、才能のない女）だからだ」という決めつけである。どのような内容のものが繰り返しお祈りのように唱えられるのであれ、それが言っているのは、「おまえには、それ以上のことを望む権利はない」ということであり、それは女性を打ちのめし、彼女の自信や善意の息の根をとめてしまうメッセージである。このような攻撃的な批評を加える人間は、夢のなかではしばしば脅威を及ぼす男性として描かれる。心のなかで経験される批評はふつう、その女性が周りの世界でこれまでに出会った反対意見や敵意に類似している。その批評家たちは、彼女の家族や文化のメッセージをおうむがえししているのである。

心理学的に見るならば、夢や神話でヒロインが直面する敵や魔物はいずれも、彼女を圧倒して打ちのめそうとする人間の心のなかの破壊的、原始的、未発達、歪曲された、あるいは邪悪な何かを表している。獰猛な犬と危険なヘビを夢見た例の女性は、これらの動物たちが、他のものたちから自分にたいして加えられた傷害行為あるいは敵対行為と闘っているのであり、彼らはまた自分の内部でおこっていることにも同じように脅かされているのだということを理解した。敵や魔物は、彼女自身の心の否定的な部分であり、自分のなかにある同情深くて有能なものを打ちのめす恐れがある影の要素であるかもしれない。敵や魔物は、彼女を傷つけたり、支配したり、侮辱したり、あるいはコントロールしたいと思っている他の人々の心のなかに存在するかもしれない。あるいは、よくあることだが、彼女がその両方に脅かされているのかもしれない。

たとえば、『大地の子エイラ』のなかで、エイラの豊かな才能が、残忍で誇り高い一族の指導者プラウドの恨みを買い、彼は彼女を侮辱してレイプする。『ウォーターシップ・ダウンの

うさぎたち』では、パイオニアの兎たちは、気が違ったように権力を追い求め、ファシストで一つ目の兎である将軍と直画しなければならなかった。『指輪物語』に出てくる勇敢で足が毛むくじゃらで、子供ぐらいの大きさのホビットたちは、モルドルのサウロンと彼の恐ろしい指輪の亡霊たちの悪の力と闘った。

喪失と悲しみを越えて生きる

喪失と悲しみは、女性たちの人生とヒロインの神話におけるもう一つのテーマである。途中のどこかで誰かが死んだり、後に残されねばならなくなる。友情の喪失は女性の人生で重要な役割を果たしている。なぜなら、たいていの女性は、自分を業績によってではなく、人間関係によって定義するからである。誰かが死んだり、見捨てたり、離れていったり、遠ざかっていくと、結果として二重の喪失となる。つまり、その人間関係そのものが失われるだけでなく、自分のアイデンティティの源泉であったその関係も失われるからである。

これまで人間関係で依存的なパートナーであった女性の多くは、喪失を味わってから初めて自分がヒロインの道を歩んでいることに気がつく。たとえば、妊娠しているプシューケーは夫のエロースから見捨てられた。もう一度一緒になろうとして、彼女はいくつかの課題を引き受け、それを通じて彼女は成熟した。年齢に関係なく、離婚女性や未亡人は生まれて初めて自分で選択し、自分の人生を築かねばならなくなる。たとえば、恋人に死なれてアタランテーは父親の王国に戻ることになったが、そこで有名な競争が催される。これは人間関係を失って後にキャリアを始める女性の人生航路に似ている。そしてエイラは、息子のドゥルクがいなくなって熊洞窟の一族の元を去り、ただ自分の思い出と悲しみだけを担っていかなければならなくなった。

比喩的に言えば、私たちが何かあるいは誰かを失うことを強いられ、その喪失を悲しまねばならないときはいつでも、心理学的な死がおこる。そこで死ぬのは、いまではなくなり、その喪失が悲しみの対象となる私たちの一つの側面、以前からとってきた役割、かつての地位、美しさ、あるいは他の若々しい性質であったり、もはや存在しない夢である。あるいは、死や別離で終わり、後には悲しみだけが残る人間関係なのかもしれない。

女性の内なるヒロインは、この喪失からはいあがってきたり、生きのびようとするであろうか。悲しみながら、なお生きていくことができるであろうか。あるいは諦めて、苦々しくなり、抑うつ感に圧倒されて、この時点で自分の旅をやめようとするであろうか。もし、この先もがんばっていくのであれば、彼女はヒロインの道を選んでいくであろう。

暗闇と狭い通路を通り抜ける

たいていの英雄の旅は、ある暗い場所を通り抜ける。たとえば山の洞穴、冥界、迷路を通り

抜け、そこから最終的に出てくると、光があふれている。荒涼たる荒れ地や砂漠を旅して、緑の国にいたることもある。この旅は抑うつ状態を通り抜けることに似ている。人生と同様、神話においても、旅人は動きつづけ、働きつづけ、しなければならないことをおこない、仲間と接触を保ちつづけたり、一人でがんばったり、（たとえ途方にくれていても）やめて諦めることはせずに、暗闇のなかで希望をもちつづけなければならない。

この暗闇は、人々がもし抑うつ状態から抜け出そうとするならば、通り抜けねばならない光のささない、抑圧されたもろもろの感情（怒り、絶望、恨み、非難、復讐、裏切り、恐怖、罪悪感）を表している。光や愛がなくて人生に意味がないように思われているときには、それは魂の暗夜、宇宙的規模でのジョークである。ふつう、悲しむことと許すことがそこからの出口である。その後で、活気と光が戻ってくる。

この暗闇を経験することで私たちは、神話や夢での死と再生が、喪失、抑うつおよび回復のメタファーであることを知らされる。振り返ってみれば、多くのこのような暗い時期は、実は通過儀礼なのであり、苦しみの時期であり、それを通り抜けることで女性は価値のある何かを学んで成長するのである。女性は冥界にいるペルセポネーのように、ある一時期は囚われの身となっているが、後には他の人々の道案内人になるかもしれない。

超越機能を呼びおこす

通常の英雄神話では、探究の旅に出かけて、もろもろの危険や龍や暗闇に出会い、それらを克服してから、主人公は決まって行き詰まり、前にも後ろにも身動きができなくなる。どちらの方向にも自分の力ではどうしようもない障害物が存在するのかもしれない。あるいは、自分である謎を解かなければ、道が開かれないのかもしれない。いましなければならないことは何か。意識で知っていることだけでは不十分になっている。その状況での彼女の心はあまりにもどっちつかずで、どちらに決めることもできないように思われる。このように二つのものの板挟みになっている場合、何をなさねばならないのだろう。

自分で選択するヒロインが不明確な状況のなかにいて、そこではどんな道をとろうとも破壊的な結果を招くか、あるいはそうでなくとも、せいぜい袋小路になる他ない場合、彼女が直面する最初の試練は、自分自身でありつづけるということである。いかなる危機においてもそうであるが、女性はヒロインでありつづけずに、犠牲者となる誘惑にさらされる。もし自分の内なるヒロインに忠実でありつづけるなら、彼女は、自分が困難な状況にあって打ちのめされるかもしれないということを知るが、何かが変わるかもしれないという可能性に自分を賭ける。もし犠牲者になるなら、他の人々を非難する、運命を呪う、酒やドラッグに手を出す、自分を卑下して攻撃する、完全に諦める、あるいは自殺を考えるなどするであろう。あるいは、心をかたくなにしたり、ヒステリーやパニックになって誰かが助けにくるまで衝動的で、理性的でない行動をとることによってヒロインの役を降りるかもしれない。

神話であれ人生であれ、ヒロインがジレンマにいるとき、彼女にできるのはせいぜい、自分の生きかたと自分が大切にしているものにたいして誠実で正直な自分自身であることしかな

い。そうすればいつか、何か思いがけないことがおこって救われる。状況に踏みとどまり、ある答えが得られるであろうと期待し続けていれば、ユングが「超越機能」と呼んだものがおこるための内面の舞台がしつらえられる。この超越機能でユングが考えているのは、問題を解決したり、自分を越えた（あるいは自分のなかにある）何かからの助けを必要としている自我（ヒロイン）に道を示すために無意識からおこってくる何かである。

たとえば、エロースとプシューケーの神話では、アプロディーテーがプシューケーに四つの課題を与える。それはプシューケーにできる以上のものを要求していた。どの場合も初めは途方にくれるが、蟻とか、緑の葦とか、鷲、塔を通じて助けや助言が現れる。同様に、ヒッポメネースもアタランテーを愛していたので、彼女を獲得するためには競走しなければならなかった。だが、自分の脚が勝利を収めるほどには速く走れず、そのため自分の人生をふいにしてしまうであろうということを知っていた。競走の前の晩、彼はアプロディーテーに助けを求めて祈った。アプロディーテーは彼を助けて競走に勝たせ、アタランテーを獲得させた。『ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち』に出てくる勇敢なうさぎたちが、狭苦しい所に入ると、ちょうどそのときケハールというやかましいカモメがやってきた、魔術師ガンダルフがホビットたちにたいしてしたように。これらの物語はすべて古典的な西部劇と同じ筋書きを変化させたものである。すなわち勇敢ではあるが数では劣る集団が、突然ラッパ音を聞き、騎兵隊が自分たちを助けにくることを知るのである。

このように何かが救済に訪れるという物語は、元型的な状況である。救済のテーマは、ヒロインとして生きるつもりなら女性が心にかけておく必要がある人類の真理を語っている。女性は内的危機にあって、どうしていいかわからないとき、諦めてしまったり、恐れから行動にはしってしまってはならないのである。意識のなかにジレンマを保ち、新しい洞察や環境の変化を待ち、瞑想し、意識がはっきりするように祈ることはすべて窮地を乗り越えることを可能にする無意識からの解決策をもたらしてくれるのである。

たとえば個人的な危機のなかで、熊の夢を見た例の女性は博士論文に取り組んでいるまっ最中に、とつぜん子どもが欲しいという衝動にとりつかれてしまった。母性的な本能が彼女をとらえ、それまで抑圧されてきて、いま当然の権利を要求する何かが恐ろしい勢いで彼女を動かそうとしたのである。夢を見るまで彼女は、あれかこれかにとらわれており、どちらにしても満足の得られない状況であった。その状況を変えるための解決策は論理的に到達されるのでなく、感情レベルで感じられる必要があった。夢が元型的なレベルで彼女に強烈にはたらきかけ、自分が子供を産むつもりであるという気持ちをもちつづけるであろうと確信して初めて、彼女は安心して妊娠を延期することができたのである。夢はジレンマにたいして、無意識から生じてきた答えであり、それが解決をもたらしてくれた。この象徴的な体験が彼女の理解を深め、直観的に感じられる洞察をもたらしたときに葛藤が消えたのであった。

超越機能は、共時的な出来事を通じて表現されることもある。つまり、内的で心理的な状況と、外的な出来事とのあいだに意味深い符合が生じるときである。共時性がおこると、それは奇蹟のように感じられ、背筋がぞくぞくしてくる。たとえば数年前、私の患者が女性のための自助プログラムを始めた。一定の期限までに必要な額の金を集めることができれば、ある機関からそれ相応の資金を得、プログラムの存在を保証することができるのであった。期限が近づいてきても彼女はまだ必要な額を集めてはいなかった。しかし彼女は自分の企画が必要なもの

だとわかっていたので、諦めなかった。ちょうどそのときまさに必要な額の小切手が郵送されてきたのだった。それは利子つきの予期せぬ振込みであり、二年前に貸し倒れをして諦めていたローンであった。

ほとんどの共時的な出来事は、ジレンマにたいしてこれほどはっきりした答えを提供するわけではない。そうではなく、ふつうは感情的にすっきりさせてくれたり、象徴的な洞察を与えてくれたりすることによって問題解決の手助けをしてくれる。たとえば、私は本書をある人に書き替えてもらうようにと以前の出版社から圧力をかけられていた。その人が本を注意深く要約し、もっと大衆受けのするようなスタイルで同じ考えを表現するというのである。私は二年間も「それではまだだめだ」というメッセージを受けつづけ、心理的にこきおろされて疲れきっていた。（従順なペルセポネーと感じられる）私の一部が、いまにも他の人に書き直してもらおうとしてまさにそうされるところであった。私は何とかなるさという希望だけの考えに影響されていた。本がその書き替え作家に手渡されようとする前の決定的な一週間のあいだに共時的な出来事が私を助けにきたのだ。似たような状況のもとで、まさに同じ作家によって自分の本が書き替えられたという一人の著者がたまたまイギリスからやってきて、その週に私の友達に自分の体験を語るということがおこったのであった。彼の語ったことは、私がこれまで一度も言葉にしたことはなかったが、おこりうるだろうと直観的に感じていたことだった。すなわち「魂が本から奪い去られた」と彼は言ったのである。私はこの言葉を聞き、洞察の恵みが与えられたと感じた。彼は、私の本におこることを象徴的に表しており、そのことが私の両価的（アンビバレンツ）な感情を一刀両断し、はっきりと行動する自由を与えてくれた。私は自分の原稿を編集してくれる人を雇い、自分自身で本を完成させる手続きをとったのであった。

私はこの共時的な出来事のメッセージが大きな声ではっきりと語られるのを聞いた。そうするとさらに洞察と助けをもたらす出来事がおこってきた。かつて受けた講義のおかげで、私は古代中国のことわざを思い出した。それは共時性と超越機能にたいする信仰を表すもので「生徒たちが準備をしていれば先生はやってくる」というものである。

創造的な洞察も超越機能とよく似ている。創造の過程においても、まだ問題の解決策がわからないとき、問題解決をおこなう芸術家・発明家は、答えが存在することを信じ、解決策がやってくるまでその状況に上どまるのである。創作する者はしばしば高い緊張状態にある。成しえること、考えうることはすべて終わってしまっている。そこまでいくと、人は新しい何かが生まれ出てくる孵化の過程を信じるのである。古典的な例としては、ベンゼンの分子構造を発見した化学者ケキュレをあげることができる。彼はその問題に取り組んでいたが、解決することはできなかった。だが、ついに、おのれのシッポをくわえるヘビの夢を見た。彼は、これが答えを教えてくれることを直観的に知った。つまり炭素原子は輪形をしているのである。そのあと彼はテストし、この仮説が正しいことを証明したのだった。

犠牲者からヒロインへ

ヒロインの旅について考えるにあたって、私は、匿名アルコール中毒者の組織（AA）がどんなふうにして、アルコール中毒者を犠牲者からヒロインあるいはヒーローに変容させるかに感銘を受けてきた。AAは、超越機能を呼びおこし、実際いかにしてみずからが主体的に選択する者になるかについての講義をおこなう。

アルコール中毒者は、まず自分が絶望的なジレンマにあることを受け入れることから始める。つまり、もはや酒を飲みつづけることもできなければ、やめることもできないというジレンマである。絶望しているこの時点で、患者は、人々が互いに助け合いながら同じ旅をする仲間の集団に加わる。そしてこの危機から抜け出るために、自分よりももっと大きな力を引き出さなければならないと言われる。

AAが強調するのは、変えることのできないものを受け入れ、変えることのできるものを変える必要性であり、その違いを知ることである。AAの原理としては、個人にまずは一日がんばってみることを教え、他人まかせの精神状態にあって、ものごとを明確に理解できないときに何が必要であるのかを示すことである。アルコール中毒患者は、一歩一歩、徐々に自分で選択する人となっていく。彼女は自我よりも大きな力が助けてくれることを発見する。また人々が相互に助け合い、相互に許し合うということを知る。自分にも力があり、他者と共感できるのだということも発見する。

これと同じように、ヒロインの旅も個性化の探究である。道を旅しながらヒロインは、自分にとって意味をもつものを見出したり、失ったり、再発見したりするだろう。そしてついには自分を試すあらゆる種類の環境においてもこれらの価値を大切にしつづけるだろう。自分を打ちまかそうと脅かすどんなものであれ、それに繰り返し繰り返し出会い、最終的には自分というものを失う危険が去るのである。

私の仕事場には、何年も前に私が描いた殻に閉じこもったオオムガイの内部の絵がある。その絵は貝のらせん模様を強調しており、私たちの行く道が非常にしばしば、らせんの形をしているのだということを思い出させてくれる。私たちはいくつものパターンに従って円を描きながら繰り返し、それがどんなものであれ、自分が出会い、統御しなければならないネメシス（訳注－人間の思い上がりにたいする神の憤りと罰を擬人化した女神）のあたりへと戻っていくのである。私たちの心をとらえがちなのは、女神の否定的な側面である。つまり、デーメーテールやペルセポネーの抑うつ状態への陥りやすさ、ヘーラーの嫉妬や不信感、あるいは、相手かまわぬアプロディーテー、正邪を意に介さないアデーナー、無慈悲なアルテミスになろうとする誘惑である。人生は、私たちが恐れているもの、気づく必要のあるもの、あるいは征服する必要があるものに直面する機会を繰り返し与えてくれる。困難をもたらす場所へ通じるらせんの道を回るたびに、いろいろなことをより自覚できるようになり、次のときにはもっと賢く反応できるようになればいいのであるが。そうなればついには平和な気持でもっとも深い価値と調和し否定的な影響をまったく受けずにネメシスの場所を通り抜けることができる。

旅の終わり

神話の終わりには何がおこるのだろう。エロースとプシューケーは再び結ばれ、彼らの結婚がオリュムポス山でたたえられる。プシューケーは喜びという名の娘を産む。アタランテーはリンゴを選び競走には負けるが、ヒッポメネースと結婚する。エイラはヨーロッパの大草原を旅してわたり、自分自身とよく似た他の人々を見つける。彼女の武勇伝のこの部分は馬たちの谷で終わるが、彼女はジョンダラーという連れ合いを見つけ、人々から受け入れてもらえるという晴れやかな約束を得る。ヒロインは、勇気と力を発揮したあと、元型的なカウボーイのヒーローと違って、たった一人で馬を降り、夕ぐれのなかに消えはしない。征服者としてのヒーローの鋳型にはまりもしない。結合、再結合、家庭が、彼女の旅の終わるところである。

全体性を求める心理的な探究である個性化の旅路は、対立物の結合で終わる。それはパーソナリティの「男性的な側面」と「女性的な側面」の内的な結婚であり、一つの円のなかに含まれる陰・陽という東洋のイメージで象徴できるものである。もっと抽象的に、性をふり分けずに言うとすれば、全体性へ向けての旅の結末は、能動的でありながら受容的であり、自立的でありながら親密であり、仕事をしながら愛するという力をもつことである。これらは私たちが人生経験を通して知ることのできる自分たちの側面であり、私たちすべてのなかにもとからある側面である。この人間の潜在能力から私たちは出発するのである。

『指輪物語』の最後の章では、指輪を身につけたいという最後の誘惑が克服され、権力の指輪は永遠に壊される。悪をめぐる戦いは勝利に終わり、その英雄的な仕事が完成されると、ホビットたちはシャイアーへと帰っていく。『ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち』も、英雄的な旅を生きぬき、家へ、新しい平和な社会へと帰っていく。T・S・エリオットは『四重奏』のなかで書いている。

探究をやめることはありえないだろう
すべて、探究が終わると
出発点にたどりつき
初めてその場所を知る(1)

現実の生活に似て、万事、かなり地味な終わり方をしているように見える。回復したアルコール中毒患者は、これまで地獄へ行っていたが、いまではふつうのまじめな人に戻っているかもしれない。敵意ある攻撃を払いのけ、自分の力を取り戻し、女神たちとともに闘ったヒロインたちも同様に、平凡な人のように見え、自分自身と和解しているように見えるであろう。しかしながら、シャイアーで平和に暮らすホビットと違い、彼女は、もう一度彼女の存在そのものをテストする新しい冒険がやってくるのかどうか、あるいはいつやってくるのか知らないのである。

一緒にやってきた仕事が終わり、患者に別れを告げるときがやってくると、私は自分自身のことを、彼女らの旅の困難で重要な部分をともにした人のように感じる。いまや彼女たちが自分自身でつづけていくときがやってきたのである。たぶん彼女らが困難な岩場にあったとき、私は彼女らとともにいて、彼女らが見失った道を見出すのを助けたのだろう。彼女らとともに暗い道にしばらくたたずんだのかもしれない。ほとんどの場合私は、彼女らがもっとはっきり

と見つめ、自分で選択できるように助けたのである。

　本書を書き終え、終点にたどりつくにあたって、私がしばらくのあいだ読者の道連れとして、読者とともに学んできたことを分かち合い、読者が自分自身にしか歩めない旅路にあって主体的に決定する者になるお手伝いをしてきたのであれば幸いである。

愛をこめて

謝辞

本書のどの章も、名前はあげていないものの、多くの人々（患者、友人、同僚）の協力に支えられている。彼女らはそれぞれの女神元型のもろもろの側面の例となり、またそれらにたいする洞察を提供してくれた。したがって、たいていの記述は、多くの女性たちの言葉を合成したものである。彼女たちとはいろいろな状況で知り合いになった。特に、二十年間にわたる精神科医としての実践を通じてである。人々から信頼され自分の心の奥底を打ち明けてもらえるということは一つの特権である。それによって私は彼女らの心理、そして彼女らを通じて、自分を含めて他の人々の心理をよりよく理解できるようになるのである。患者たちこそ私の最良の教師である。患者のみなさんにたいして、ありがとうと申しあげたい。

私は多くの編集者に恵まれ、かつ鍛えられてきた。どの編集者も私が本書の執筆にかけた三年間、その発展と、著述家としての私の成長に貢献してくれた。編集上の指針とコメントはカーステン・グリムスタッド、キム・チャーニン、マリリン・ランドゥ、ジェレミー・ターチヤー、ステファニー・バーンステインとリンダ・パリントンから寄せられた。私は原稿を推敲するために彼らに何度も相談をした。彼らの観点はそれぞれ違っており、そのまっただなかで私は自分自身の声とヴィジョンを信頼することを学んだ。そのこと自体が貴重な経験であり、出版社の人々の考えを変えていくことにもなった。この点ではことにキム・チャーニンの励ましに教えられるところがあった。

私はナンシー・ベリイにも感謝している。彼女は、私が助けを求めて電話をしたとき、いつも有能かつ迅速にタイプライターとコンピューターをたたいてくれた。エージェントのジョン・ブロックマンとカティンカ・マトソンにも感謝している。彼らは、「本を生む」という困難なプロセスにたいして専門的な見識を示してくれたからである。私はハーバー・アンド・ロウ社のクレイトン・カールソンに感謝している。彼は自らの直観と私の最初の本『タオ心理学』にたいする個人的な関心から、私と『女はみんな女神』を信じてくれたのである。

家族は、私が本書に取り組んだ時、常にがっちりと私を支えてきてくれた。だいぶ前のことになるが、私は自分がもし物書きをするとしたら、家族から離れたり、家族と自分とのあいだのドアを閉めないでするだろう、自分が彼らからの思いやりを必要とすると同様に、自分も彼らのためにいてあげようと決心したのである。夫のジムと子どもたちのメロディーとアンディーは、この仕事をしているあいだいつも私と一緒にいてくれた。精神的な支えに加えて、ジムはときおり、私の執筆にたいして編集者としての彼の専門的な目を向け、私が自分自身の本能を信じ、もろもろの感情を呼びおこすいろいろな例やイメージを利用するようにとはげましてくれた。

私は多くの人々に心から感謝するのだが、『女はみんな女神』を完成させるうえで彼らからの支えは共時的な時刻に訪れた。私が落胆して、本書が他の人々にも助けとなるということを思い出させてほしい時にはいつでも助けが差し出されたのである。私の仕事は、この本が仕上がるまで耐え忍ぶということであった。ひとたび出版されると、私はこの本がそれ自身の生命をもち、誰が読んでも、その人の心に到達するだろうということを知ったのである。

付録　本書に登場するギリシア神話の神々と人間

アキレウス　トロイア戦争で活躍するギリシアの英雄で、アテーナーに可愛がられた。

アタランテー　人間の女性であり、狩や走ることに長けていた。アプロディーテーが三つの黄金のリンゴを与えたためにヒッポメネースが競争で彼女を負かし、妻としてめとった。

アテーナー　ローマ人にはミネルウァとして知られている。知恵と手工芸の女神であり、彼女の名前にちなんだ都市であるアテーナイの守り神である。多くの英雄たちを保護した。ふつうは鎧に身をつつんだ姿で描かれ、戦場でのもっとも優れた策略家として知られる。ゼウスの娘であるということしか知られていないが、ゼウスの最初の妻である賢女メーティスの娘とも考えられている。処女神の一人。

アプロディーテー　愛と美の女神で、ローマではウェヌスとして知られている。足が悪い鍛冶の神ヘーパイストスの妻であったが、貞節ではなく、数多くの情事をもち、密通による多くの子孫をもつ。彼女の恋人たちのなかでも特筆すべき神々は、戦争の神アレース、使者神ヘルメース、アイネーイス（ローマ人はみずからをその子孫であると主張している）の父親となるアンキーセースなどである。錬金術の女神。

アポローン　ローマ人からもアポローンと呼ばれており、美男子で太陽の神、美術、医術、音楽の神である。ゼウスとレートーの息子で、オリュムポスの十二神の一人。アルテミスの双子の兄。ヘーリオスと呼ばれることもある。

アルテミス　ローマ人はディアーナと呼び、狩と月の女神である。ゼウスとレートーの娘で、太陽の神アポローンの双子の妹でもある。処女神の一人。

アレース　ローマ人にはマールスと呼ばれる。戦争の神であり、好戦的である。オリュムポスの十二神の一人で、ゼウスとヘーラーの息子である。ホメーロスによれば、母親似であったので父親から見下されていた。アレースはアプロディーテーの恋人で、彼女とのあいだに三人の子供がいる。

ウーラノス　空、父なる空、天として知られる。ガイアを妻にしてティーターン族の父親と

なるが、息子クロノスによって去勢され、性器を海に投げられる。しかしその海からアプロディーテーが生まれることになる。（一つの説）

エロース　愛の神で、ローマ人にはアモルとして知られる。プシューケーの夫。

ガイア　大地の女神。ウーラノスの母にして妻であり、ティーターンたちの両親となる。

クロノス　ローマではサートゥルヌス。ティーターン神族に属し、ガイアとウーラノスの末息子である。父親を去勢し主神となった。レアーの夫であり、六人のオリュムポスの神ヘスティアー、デーメーテール、ヘーラー、ハーデース、ポセイドーン、ゼウスの父親であるが、彼らが生まれるとすぐに、飲みこんでしまった。今度は自分自身が末息子のゼウスに打ち負かされる。

ゼウス　ローマ人にはユーピテルと呼ばれ、天と地の支者であり、オリュムポスの神々の長である。レアーとクロノスの末息子であり、ティーターンたちを投げすて、宇宙の支配者としてのオリュムポスの神々の主権を確立する。ヘーラーの夫であるがプレイボーイで多くの妻をもち、多くの情事を重ね、この関係からたくさんの子孫を生み出した。そのうちの多くはオリュムポスの神々の第二世代であり、ギリシア神話の英雄たちである。

ティオニューソス　ローマ人にはバッコスとして知られ、葡萄酒と恍惚の神である。女性の崇拝者たちは、毎年、山で酒盛りやばか騒ぎをして彼と交わろうとする。

デーメーテール　ローマ人にはケレースとして知られる。穀物あるいは農業の女神として知られる。彼女のもっとも重要な神話で強調されるのは、ペルセポネーの母親としての役割である。傷つきやすい女神の一人。

ハーデース　プルートーンともいわれる。冥界の支配者で、レアーとクロノスの息子。ペルセポネーを誘拐して夫となった。オリュムポスの十二神の一人。

パリス　トロイアの王子であり、「もっとも美しい女性に」と書き込まれた黄金のリンゴをアプロディーテーに与えたので、アプロディーテーは、この世でもっとも美しい女性ヘレネーを花嫁として彼に与えた。パリスはヘレネーをトロイアに連れて帰るが、ヘレネーはすでにギリシアの王メネラーオスと結婚していたために、トロイア戦争を誘発してしまう。

プシューケー　人間のヒロインであり、アプロディーテーの四つの課題をなしとげ、夫エロースと再び結ばれる。

ヘカテー　三叉路の女神であり、三つの方向を向いている。不気味なものや神秘と結びついており、賢い魔女を人格化したものである。死者の国から戻ってきたペルセポネーの伴をしたためペルセポネーと結びつけられ、月の女神アルテミスとも結びつけられる。

ヘスティアー　ローマの女神ウェスタとしても知られる。処女神であり、炉の女神。オリュムポスの神々のなかではもっとも知られていない。彼女の火は家や寺院を神聖なものにした。セルフ（自己）の元型を人格化している。

ヘーパイストス　ローマ人にはウゥルカーメスとして知られ、鍛冶の神であり、職人の守り神である。不義のアプロディーテーを妻にもち、足が悪い、あるいは足が奇形しているとしてヘーラーに拒絶された息子である。

ヘーラー　ローマ人にはユーノーとして知られている。結婚の女神である。ゼウスの正式な妻であり、オリュムポス山でもっとも高い地位にある女神。クロノスとレアーの娘で、ゼウスや他のオリュムポスの第一世代の神々の姉妹でもある。ホメーロスによって、嫉妬深い女神として描かれ、結婚の女神として敬意を払われている。傷つきやすい三人の女神のうちの一人で、妻の元型を人格化している。

ペルセポネー　ギリシア人はコレー（乙女）と呼ぶこともあり、ローマ人はプロセルピナと呼んだ。デーメーテールの娘であるが誘拐されて、冥界の女王となる。

ヘルメース　ローマでの名前メルクリウスのほうがよく知られている。神々の使者であり、貿易、コミュニケーション、旅行者、泥棒の守り神である。ハーデースのところへ魂を導き、ペルセポネーをデーメーテールのもとに帰すようにゼウスによって送られた。アプロディーテーと恋をし、ヘスティアーとともに家事や寺院での宗教儀式と結びつけられる。

ポセイドーン　海の神。ネプトウーヌスのほうが一般的に知られているオリュムポスの神。デーメーテールが誘拐された娘ペルセポネーを探しているあいだに彼女をレイプする。

レアー　ガイアとウーラノスの娘、クロノスの姉妹でもあり妻でもある。ヘスティアー、デーメーテール、ヘーラー、ハーデース、ポセイドーン、ゼウスの母。

付録　七人の女神一覧表

	女神	元型的役割	重要な他者	ユング心理学的類型	心理的困難	強み
処女神	アルテミス（デイアーナ） 狩と月の女神	姉妹 競争者 フェミニスト	姉妹的仲間（ニンフ） 母親（レートー） 兄（アポローン）	通常は外向性 通常は直感優位 通常は感情優位	うちとけなさ 無慈悲 憤怒	自分の目標を設定して，それを達成できる。自律性、独立心、女性との友情が築ける。
	アテーナー（ミネルウァ） 知恵と工芸の女神	父の娘 戦略家	父（ゼウス） 選りすぐりのヒーロー	通常は内向性 顕著に思考優位 通常は感覚優位	うちとけなさ 狡猾 共感の欠如	よく考え、実践的に問題を解決し、戦略を立て、男性と同盟関係を形成できる。
	ヘステイアー（ウェスタ） 炉と神殿の女神	乙女のままの伯母 賢女	なし	顕著に内向性 顕著に直感優位 顕著に感情優位	うちとけなさ 社会的ペルソナの欠如	孤独を楽しみ、霊的な意味に対するセンスがもてる。
傷つきやすい女神	ヘーラー（ユーノー） 結婚の女神	妻 コミットメント・メーカー	夫（ゼウス）	通常は外向性 通常は感情優位 通常は感覚優位	嫉妬、復讐心 憤怒、未練 破壊的関係	生涯にわたってコミットできる誠実さ。
	デーメーテール（ケレース） 穀物の女神	母親 養育者	娘（ペルセポネー） 子供たち	通常は外向性 通常は感情優位	抑うつ、燃えつき 甘やかし 無計画な妊娠	他者を母性的に養育できる寛大さ。
	ペルセポネー（プロセルピナ）、 乙女、冥界の女王	母の娘 受容的女性	母（デーテーメール） 夫（ハーデース、デュオニューソス）	通常は内向性 通常は感覚優位	抑うつ、ごまかし 非現実への逃避	受容し、想像力や夢を大切にできる。 潜在的に霊能力をもつ。
錬金術の女神	アプロディーテー（ウェヌス） 愛と美の女神	愛人（官能的女性） 創造的女性	愛人（アレース、ヘルメース） 夫（ヘーパイストス）	顕著に外向性 顕著に感覚優位	一連の関係多情 結果を考慮しにくいこと	快楽と美を享受し、官能的で創造的になれる

注　記

各章の初めに一次資料を提示し、次に脚注をあげる。

ユング全集（略CW）への参照はすべて、Collected Works of C. G. Jung, edited by Sir Herbert Read, Michael Fordham, and Gerhard Adler; translated by R.F.C. Hull; Executive Editor, William McGuire ; Bollingen Series 20 (Princeton, N. J. : Princeton University Press). による。

はじめに　どの女の心のなかにも女神がいる

Lerner, Harriet E. "Early Origins of Envy and Devaluation of Women: Implications for Sex Role Stereotypes." Bulletin of the Menninger Clinic 38, no. 6(1974): 538-553.

Loomis, Mary, and Singer, June. "Testing the Biopolarity Assumption in Jung's Typology." Journal of Analytic Psychology 24, no. 4 (1980).

Miller, Jean Baker. Toward a New Psychology of Women. Boston: Beacon Press, 1976. 〔J・B・ミラー『Yes, But―― フェミニズム心理学をめざして』（河野喜代美監訳）新宿書房、一九八九〕

Neumann, Erich. Amor and Psyche : The Psychic Development of the Feminine.Translated by Ralph Manheim, Bollingen Series 54. New York : Pantheon Books, 1956. 〔E・ノーマン『アモールとプシケー』（河合隼雄監訳）紀伊国屋書店、一九七三〕

(1) Betty Friedan, The Feminine Mystique (New York Dell, 1963),p.69.〔B・フリーダン『新しい女性の創造』（三浦冨美子訳）大和書房、一九八六〕

(2) Joseph Campbell, The Hero with a Thousand Faces 2nd ed., (Bollingen Series 17 Princeton, N. J. : Princeton University Press, 1968), p.19〔J・キャンベル『千の顔をもつ英雄』（平田武靖・浅輪幸夫監訳）人文書院、一九八四〕

1　内なるイメージとしての女神

Jung, C. G. "Archetypes of the Collective Unconscious" (1954). CW, vol.9, part 1 (1968), pp.3-41.

Jung, C. G. "The Concept of the Collective Unconscious" (1936), CW,vol.9,part1,pp. 42-53.〔C・G・ユング「集合的無意識の概念について」ユングの象徴論』（野村美紀子訳）思索社、一九八一、『元型論』（林道義訳）紀伊国屋書店、一九八二　所収〕

Marohn, Stephanie. "The Goddess Resurrected." Wemenews (published by the Friends of the San Francisco Commission on the Status of Women) 8, no. 1

(June 1983)
Mayerson, Philip. Classical Mythology in Literature, Art, and Music. New York : Wiley, 1971.
Spretnak, Charlene, ed. The Politics of Women 's Spirituality : Essays on the Rise of Spiritual Power Within the Feminist Movement. New York : Doubleday, 1982.
Stone, Merlin. When God Was a Woman. New York: Harvest / Harcourt Brace Jovanovich, by arrangement with Dial Press, 1978.

(1) Anthony Stevens, Archetypes : A Natural History of the Self (New York : Morrow, 1982), pp. 1-5.
(2) C.G. Jung, "The Concept of the Collective Unconscious", CW, vol. 9, part 1, p. 44, and "Archetypes of the Collective Unconscious", CW, vol. 9, part 1, pp. 3-4.
(3) Hesiod, Theogony, in Hesiod, trans. Richard Lattimore (Ann Arbor, Mich.: The University of Michigan Press, 1959).
(4) Marija Gimbutas, "Women and Culture in Goddess- Oriented Old Europe," in The Politics of Women's Spirituality : Essays on the Rise of Spiritual Power Within the Women's Movement, ed. Charlene Spretnak (New York : Doubleday, 1982), pp. 22-31.
(5) Robert Graves, The Greek Myths, vol. 1 (New York :Penguin, 1982), p. 13.
(6) Jane Ellen Harrison, Mythology (New York: Har court Brace Jovanovich, 1963 [originally published 1924]), p.49.
(7) Merlin Stone, When God Was a Woman, p.228.

2　女神を活性化する

(1) C.G. Jung, "Psychological Aspects of the Mother Archetype" (1954), CW, vol. 9, part 1 (1968), p. 79.
(2) Maxine Hong Kingston, The Woman Warrior (New York : Vintage Books/Random House, 1977).〔M・H・キングストン『チャイナタウンの女武者（藤本和子訳）晶文社、一九七八〕
(3) 月経周期間の女神元型の移行は、精神科医としての私の実践、臨床的観察に基づいている。独立的で能動的（あるいは攻撃的）な態度から、依存的で受動的な態度への移行を裏づける研究としては次の文献を見よ。Therese Benedek, "The Correlations Between Ovarian Activity and Psychodynamic Processes," in Therese Benedek, ed., Psychoanalytic Investigation (New York : Quadrangle/New York Times Book Co., 1973), pp. 129-223.

3　処女神

Gustaitis, Rasa. "Moving Freely through Nighttime Streets. "Pacific News Service, 1981. Syndicated article (found, for example, in City on a Hill Press, University

of California, Santa Cruz, April 9, 1981).

Harding, M. Esther. "The Virgin Goddess." In Women's Mysteries. New York : Bantam Books, published by arrangement with Putnam's 1973, pp. 115-149.〔M・E・ハーディング『女性の神秘』（樋口和彦・武田憲道訳）創元社。一九八九〕

Kotschnig, Elined Prys. "Womanhood in Myth and Life." Inward Light 31, no. 74 (1968). "Womanhood in Myth and Life, Part 2." Inward Light 32, no. 75 (1969).

(1) M. Esther Harding, "The Virgin Goddess," in Women's Mysteries , p. 147.

(2) イレーネ・クラレモン・デ・カスティリュホが記述する「焦点を合わされた意識」は、アニムスあるいは男性の属性と考えられている。「焦点を合わせるという能力は男性の最大の才能だが、男性の特権ではない。アニムスは女性のためにこの役割を果たしている。」「女性が焦点を合わせた意識を必要とするときにしか、アニムスからの助けが求められない。」Claremont de Castillejo, Knowing Woman, Chapter 5, "The Animus-Friend or Foe" (New York : Putnam's, for the C. G. Jung Foundation for Analytic Psychology, 1973) , pp. 77-78. より。私は彼女の用語を用いているが、ユングの女性心理学のモデルに基づいた彼女の仮定、すなわち焦点を合わされた意識は常に男性的な属性であるという考えには賛成できない。

(3) Marty Olmstead, "The Midas Touch of Danielle Steel." United (United Airlines Flight Publication), March 1982, p. 89.

(4) 女性心理に関するフロイトの精神分析理論のこの要約は、The Standard Edition of the Psychological Works of Sigmund Freud, ed. J. Strachey (London: Hogarth Press),（以下　Standard Edition）からの以下の著作に基づいている。

Sigmund Freud, "Three Essays on the Theory of Sexuality" (1905), Standard Edition, vol. 7 (1953), pp. 135-243. 〔S・フロイト「性欲論三篇」『フロイト著作集5』（高橋義孝他訳）人文書院、一九六九　所収〕

Sigmund Freud, "Some Psychological Consequences of the Anatomical Distinction Between the Sexes" (1925), Standard Edition, vol. 19 (1961), pp.248-258.〔S・フロイト「解剖学的な性の差別の心的帰結の二・三について」『フロイト著作集5』　所収〕

Sigmund Freud, "Female Sexuality" (1931), Standard Edition, vol. 21 (1961), pp. 225-243. 〔「女性の性愛について」『フロイト著作集5』　所収〕

(5) 女性心理に関するユングの理論についての要約は、以下の著作に基づいている。

C.G. Jung, "Animus and Anima" (1934), CW, vol.7 (1966),pp.188-211.〔C・G・ユング「アニムスとアニマ」『自我と無意識の関係』（野田倬訳）人文書院、一九八二、『自我と無意識』（松代洋一・渡辺学訳）思索社、一九八四　所収〕

C.G. Jung, "The Syzygy : Anima and Animus," (1950), CW,vol.9,part2 (1959), pp.11-22.〔C・G・ユング『ユング・コレクション4　アイオーン』（野田偵訳）人文書院、一九九〇　所収〕

C. G. Jung, "Women in Europe" (1927), CW, vol. 10 (1964), pp.113-133.〔C・G・ユング「ヨーロッパの女」『ユング著作集4　人間心理と宗教』（浜川祥枝訳）日本教文社、一九七〇　所収〕

(6) C.G. Jung, CW, vol.7, p.209.
(7) C.G. Jung, CW, vol.10, p.117.

4　アルテミス

Guthrie, W.K.C. "Artemis." In The Greeks and Their Gods. Boston : Beacon Press, 1950, pp. 99-106.
Kergnyi, C. "Leto, Apollon and Artemis." In The Gods of the Greeks. Translated by Norman Cameron. New York : Thames & Hudson, 1979. (Originally published 1951.)
Kerdnyi, Karl. "A Mythological Image of Girlhood : Artemis." In Facing the Gods, edited by James Hillman. Irving, Texas : Spring, 1980, pp. 39-45.
Mayerson, Philip. "Artemis." In Classical Mythology in Literature, Art, and Music, pp. 150-169.
Moore, Tom. "Artemis and the Puer." In Puer Papers. Irving, Texas : Spring, 1979, pp. 169-204.
Malamud, Rene. "The Amazon Problem." Spring (1971), pp. 1-21.
Otto, Walter F. "Artemis." In The Homeric Gods. Translated from the German by Moses Hadas. New York : Thames & Hudson, published by arrangement with Pantheon Books, 1979, pp. 80-90.
Schmidt, Lynda. "The Brother-Sister Relationship in Marriage." Journal of Analytical Psychology 25, no. 4 (1980): 17-35.
Zabriskie, Philip T. "Goddesses in Our Midst." Quadrant (Fall 1974), pp. 41-42.
(1) Walter F. Otto, "Artemis." In The Homeric Gods,trans. Moses Hadas, pp. 86-87.
(2) Callimachus, "To Artemis," in Hymns and Epigrams, trans. A. W. Mair (Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1969), p. 63.
(3) Lynn Thomas, The Backpacking Woman (New York : Doubleday, 1980) , p. 227.
(4) China Galland, Women in the Wilderness (New York: Harper & Row, 1980), p.5.
(5) Frances Horn, I Want One Thing (Marina del Rey, Calif. : DeVorss), 1979.
(6). Laurie Lisle, Portrait of an Artist : A Biography of Georgia O'Keeffe (New York : Washington Square Press / Pocket Books / Simon & Schuster, published by arrangement with Seaview Books, 1981), p. 436.
(7) Lisle, p.430.
(8) M. Esther Harding, Woman's Mysteries, p. 140.
(9) "Meleager and Atalanta," in Bullfinch's Mythology (Middlesex, England : Hamlyn, 1964), p. 101.
(10) この節は、ヴァルター・F・オットーの一九七九年の著作におけるアルテミスの記述にヒントを得た。
(11) 私は Heroes, Gods and Monsters of the Greek Myths (Toronto : Bantam Pathfinder, published by arrangement with Four Winds Press, 1975), p. 173-190. の「アタラン

テー」のバーナード・エヴスリン（Bernard Evslin）による神話の再話を用いた。

5　アテーナー

Downing, Christine. "Dear Grey Eyes : A Revaluation of Pallas Athene." In The Goddess. New York : Crossroad, 1981, pp. 99-130.

Elias-Button, Karen. "Athene and Medusa." Anima 5, no. 2 (Spring Equinox, 1979): 118-124.

Hillman, James. "On the Necessity of Abnormal Psy chology : Ananke and Athene." In Facing the Gods. Edited by James Hillman. Irving, Texas : Spring, 1980, pp. 1-38.

Kerenyi, C. "Metis and Palles Athene." In The Gods of the Greeks. Translated by Norman Cameron. New York : Thames & Hudson, 1979, pp. 118-129. (Originally published 1951.)

Kergnyi, Karl. Athene : Virgin and Mother. Translated by Murray Stein. Irving, Texas : Spring, 1978.

Mayerson, Philip. "Athena." In Classical Mythology in Literature, Art, and Music, pp. 169-175 ; pp. 431-433.

Otto, Walter F. "Athena." In The Homeric Gods. Translat ed by Moses Hadas. New York : Thames & Hudson, by arrangement with Pantheon Books , 1979, pp. 43-60.

Rupprecht, Carol Schreier. "The Martial Maid and the Challenge of Androgyny." Spring (1974) , pp. 269-293.

Stein, Murray. "Translator's Afterthoughts." In Kergnyi, Karl, Athene : Virgin and Mother. Translated by Mur ray Stein. Irving, Texas : Spring, 1978, pp. 71-79.

(1) Hesiod, Theogony, in Hesiod, p. 177.

(2) Wilfred Sheed, Clare Booth Luce (New York : Dutton, 1982).

(3) Carol Felsenthal, The Sweetheart of the Silent Majority : The Biography of Phyllis Schlafly (New York : Doubleday, 1981).

(4) Walter F.Otto, "Athena," in The Homeric Gods, trans. Moses Hadas, p. 60.

(5) たとえば、ヘニングとジャーディンの研究した二五名の成功した会社所属の女性たち（いずれも全国的に有名な会社の社長、副社長）はアテーナー・パターンに当てはまる。彼女らは父の娘、すなわち自分の成功した父親と興味や活動をともにする娘である。ゼウスに飲み込まれたメーティスに似て、彼女らの母親も夫と同等か、夫よりも優れた教育を受けている。しかし、二五名の母親のうちの二四名は専業主婦であり、残りの一名は教師であった。父親と娘の関係は重要なものとしていきいきと思い出された。母親と娘の関係についての記憶は曖昧で、一般的なものにすぎなかった。Margaret Henning and Anne Jardim, "Childhood," In the Managerial Woman (New York : PocketBooks/Simon & Schuster, 1978), pp. 99-117.

6) Christine Downing, "Dear Grey Eyes : A Revaluation of Pallas Athene," in The Goddess, p. 117.

6　ヘスティアー

Bradway, Katherine. "Hestia and Athena in the Analysis of Women." Inward Light 151 (1978), no. 91 : 28-42.

Demetrakopoulos, Stephanie. "Hestia, Goddess of the Hearth." Spring (1979), pp. 55-75. 私はこの論文をヘスティアーの神話と儀式についての主要な資料にした。

"The Hymn to Hestia" and "The Second Hymn to Hes tia." In Homeric Hymns. Translated by Charles Boer. Rev. ed. Irving, Texas : Spring, 1979, pp. 140-141.

Jung, C. G. "The Spirit Mercurius : Part 2 : no. 3, Mercurius as Fire." CW, vol. 13, pp. 209-210.

Jung, C. G. "The Spirit Mercurius : Part 2 : no. 8, Mercurius and Hermes." CW, vol. 13, pp. 230-234.

Kirksey, Barbara. "Hestia : A Background of Psychological Focusing." In Facing the Gods. Editde by James Hillman. Irving, Texas : Spring, 1980, pp. 101-113.

Koltuv, Barbara Black. "Hestia/Vesta." Quandrant 10 (Winter 1977), pp. 58-65.

Luke, Helen M. "Goddess of the Hearth." In Woman : Earth and Spirit (New York : Crossroad, 1981), pp. 41-50.

Mayerson, Philip. "Hestia (Vesta)." In Classical Mythology in Literature, Art, and Music, pp. 115-116.

Mayerson, Philip. "Hermes (Mercury)." In Classical Mythology in Literature, Art, and Music, pp. 210-226.

(1) "The Hymn to Aphrodite I," In Homeric Hymns, trans. Charles Boer, rev. ed. (Irving, Texas : Spring, 1979), p.70.

(2) "The Hymn to Aphrodite I," p.70.

(3) Stephanie Demetrakopoulos, "Hestia, Goddess of the Hearth." Spring (1979), pp. 55-75.

(4) T.S. Eliot, Four Quartets (New York : Harcourt Brace Jovanovich (no date), originally published 1943) , p.16.

(5) CG. Jung, "Concerning Mandala Symbolism," CW, vol.9, part 1, p. 35.

(6) May Sarton, Journal of a Solitude (New York: Norton, 1973), pp. 44-45.

(7) Ardis Whitman, "Secret Joys of Solitude," Reader's Digest 122, no. 732 (April 1983): 132.

7　傷つきやすい女神

(1) Irene Claremont de Castilleje. Knowing Woman, p. 15.

8　ヘーラー

Downing, Christine. "Coming to Terms with Hera." Quadrant 12, no. 2 (Winter 1979).

KerSnyi, C. "Zeus and Hera" and "Hera, Ares and Hephaistos." In The Gods of the Greeks. Translated by Norman Cameron.

Kergnyi, C. Zeus and Hera : Archetypal Image of Father, Husband and Wife. Translated by Christopher Holme. Bollingen Series 65. Princeton, N. J. : Princeton University Press, 1975.

Kerenyi, Karl. "The Murderess-Medea." In Goddesses of Sun and Moon. Irving, Texas : Spring, 1979, pp. 20-40.

Mayerson, Philip. "Hera (Juno)." In Classical Mythology in Literature, Art, and Music, pp. 94-98.

Mayerson, Philip. "Medea." In Classical Mythology in Literature, Art, and Music, pp. 346-352.

Stein, Murray. "Hera : Bound and Unbound." Spring (1977), pp. 105-119.　私はこの論文をヘーラー元型についての最重要な資料とした。スタインはヘーラーのつがいになる本能と合わせて、ヘーラーの三段階を記述している。

Zabriskie, Philip. "Goddesses in Our Midst," Quadrant (Fall 1974), pp. 37-39.

(1) Murray Stein, "Hera : Bound and Unbound." Spring (1977), p. 108.

(2) Nancy Reagan, Quest (1982). Similar sentiments by Nancy Reagan in Nancy, with Bill Libby (New York : Berkley, 1981).

(3) Diana Trilling, Mrs. Harris : The Death of the Scarsdale Diet Doctor (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1981).

9　デーメーテール

Demetrakopoulos, Stephanie. "Life Stage Theory, Gerontological Research, and the Mythology of the Older Woman : Independence, Autonomy, and Strength." Anima 8, no. 2 (Spring Equinox 1982) : 84-97.

Friedrich, Paul. "The Fifth Queen : The Meaning of Demeter" and "The Homeric Hymn to Demeter." In The Meaning of Aphrodite, Chicago : University of Chicago Press, 1978, pp. 149-180.

"The Hymn to Demeter." In The Homeric Hymns, translated by Charles Boer. 2nd ed., rev. Irving, Texas: Spring, 1979, pp. 89-135.

Jung, C. G. "Psychological Aspects of the Mother Archetype" (1954). CW, vol. 9, part 1 (1968), pp. 75-110.

Kerenyi, C. Eleusis : Archetypal Image of Mother and Daughter. Translated by Ralph Manheim. New York : Schocken Books, published by arrangement with Prin- ceton

University Press, 1977. Previously printed in the Bollingen Series (1967).
Luke, Helen M. "Mother and Daughter Mysteries." In Woman : Earth and Spirit. New York : Crossroad. 1981, pp. 51-71.
Zabriskie, Philip. "Goddesses in Our Midst." Quadrant (Fall 1979), pp. 40-41.
(1) "Hymn to Demeter," in The Homeric Hymns, trans. Charles Boer, 2nd ed., rev. (Irving, Texas: Spring, 1979), p. 89.
(2) C. Kerenyi, Eleusis, Archetypal Image of Mother and daughter, trans. Ralph Manheim.
(3) Susan Issacs, "Baby Savior," Parents Magazine (September 1981), pp. 81-85.
(4) Pauline Bart, "Mother Portnoy's Complaints," Trans-Action (November-December 1970), pp. 69-74.

10　ペルセポネー

Dowling, Colette. The Cinderella Complex : Women's Hidden Fear of Independence. New York : Summit Books,1981　C・ダウリング『シンデレラ・コンプレックス（柳瀬尚紀訳）三笠書房、一九八五〕このシンデレラ・コンプレックスは、一つのペルセポネー・パターンを表している。この本は、いかに家族と文化が「一人になる不安」と自己主張と自立にたいする禁止によってこの元型を強化するかを見事に描いている。
Downing, Christine. "Persephone in Hades." Anima (1977) no 1., (Fall Equinox) : 22-29.
"The Hymn to Demeter" (the Abduction of Persephone). In The Homeric Hymns, translated by Charles Boer. 2nded., pp. 89-135.
Kerenyi, C. Elevsis : Archetypal Image of Mother and Daughter, translated by Ralph Manheim.
(1) M. Esther Harding, "AH Things to All Men," in The Way of All Women (New York : Putnam's, forthe C. G. Jung Foundation for Analytic Psychology, 1970) , p. 4
(2) Harding, p. 16.
(3) Hannah Green, I Never Promised You a Rose Garden (New York : Signet Books / New American Library, by arrangement with Holt, Rinehart, and Winston, 1964).〔H・グリーン『分裂病の少女デポラの世界』（佐伯わか子・笠原嘉訳）みすず書房、一九七一〕
(4) Walter F. Otto, Dionysus : Myth and Cult, trans, with an Introd. by Robert B. Palmer (Bloomington : Indiana University Press, 1965), p. 116.
(5) Autobiography of a Schizophrenic Girl, with analytic interpretation by Marguerite Sechehaye. Translated by Grace Rubin-Rabson (New York : Signet Books / New American Library, published by arrangement with Grune & Stratton, 1970).〔M・セシュエー『分裂病の少女の手記』（村上仁・平野恵訳）みすず書房、一九七一〕

11　錬金術の女神

Tennov, Dorothy. Love and Limerence : The Experience of Being in Love. New York : Stein & Day, 1979.

(1) C. G. Jung, "Problems of Modern Psychotherapy" (1981), CW,vol.16 (1966), p.71.〔C・G・ユング「現代心理療法の諸問題」　『ユング著作集2　現代人のたましい』（高橋義孝・江野専次郎訳）日本教文社、一九七〇所収〕

(2) Daniel J. Levinson, The Seasons of a Man's Life (New York : Ballantine Books, published by arrangement with Alfred A. Knopf, 1979), p. 109.

(3) Toni Wolff, "A Few Thoughts on the Process of Individuation in Women," Spring (1941), pp. 91-93.

(4) H. Peters, My Sister, My Spouse : A Biography of Lou Andreas-Salome (New York : Norton, 1962).〔H・ベーターズ『ルー・サロメ愛と生涯』（土岐恒二訳）筑摩書房、一九八五〕

(5) Robert Rosenthal, "The Pygmalion Effect Lives, "Psychology Today (September 1973), pp.56-62. (Definitive text : Robert Rosenthal and Lenore Jacobson. Pygmalion in the Classroom : Teacher Expectation and Pupil's Intellectual Development (New York : Holt, Rinehart, & Winston, 1968).

12　アプロディーテー

Friedrich, Paul. The Meaning of Aphrodite. Chicago : University of Chicago Press, 1978. ^iS-H-tm^ NtN D V v

Kerenyi, Karl. "The Golden One-Aphrodite." In Goddesses of the Sun and Moon, pp. 41-60.

"The Hymn to Aphrodite," "The Second Hymn to Aphrodite," and "The Third Hymn to Aphrodite." In The Homeric Hymns, Translated by Charles Boer. 2nd ed., rev. Irving, Texas : Spring, 1979, pp. 69-83.

Johnson, Robert. She : Understanding Feminine Psychology. New York : Harper & Row, 1977. (Originally published 1976.)

Mayerson, Philip. "Aphrodite (Venus)." In Classical Mythology in Literature, Art, and Music, pp. 182-210.

Neumann, Erich. Amor and Psyce : The Psychic Development of the Feminine.

Otto, Walter F. "Aphrodite." In The Homeric Gods, pp. 91 - 103.

Zabriskie, Philip. "Goddesses in Our Midst." Quadrant (Fall 1979), pp. 36-37.

(1) Paul Friedrich, The Meaning of Aphrodite , p. 79.

(2) Ruth Falk, Women Loving (New York: Random House ; and Berkeley : Bookworks, 1975).

13　どの女神が黄金のリンゴを得るか

Jung, C.G. "Psychological Types." CW, vol.6〔C・G・ユング『ユングコレクション1　心理学的類型』（佐藤正樹・高橋義孝、他訳）人文書院、一九八六、『タイプ論』（林道義訳）みすず書房、一九八七〕

Mayerson, Philip. "The Trojan War." In Classical Mythology in Literature, Art and Music, pp. 375-422.

(1) Lisle, Laura,. Portrait of an Artist : A Biography of Georgia O'Keejfe , p. 143.

14　女はみんなヒロイン

Adams, Richard. Watership Down. New York : Avon Books, published by arrangement with Macmillan, 1975.〔R・アダムス『ウォーターシップダウンのうさぎたち』（神宮輝夫訳）評論社、一九七五〕

Auel, Jean M. The Clan of the Cave Bear. New York: Bantam Books, by arrangement with Crown Publishers,〔l・M・アウル『大地の子エイラ』（中村妙子訳）評論社、一九八三〕

Auel, Jean M. The Valley of Horses. New York : Crown Publishers, 1982.〔J・M・アウル『恋をするエイラ』（中村妙子訳）評論社、一九八五〕

Tolkien, J. R. R. TAe Fellowship of the Ring Trilogy. New York : Ballantine Books, by arrangement with HoughtonMifflin,1965.〔J・R・R・トールキン『指輪物語1　旅の仲間』（瀬田貞二訳）評論社、一九七二〕

(1) T.S. Eliot. Four Quartets, p.59.

付録　本書に発場するギリシア神話の神々と人間

Zimmerman J. E. Dictionary of Classical Mythology. New York : Bantam Books, by arrangement with Harper & Row, 1964.

訳者あとがき

本書は、米国でベストセラーとなったJean Shinoda Bolen. Goddesses in Everywoman, A New psychology of Women. Harper Colophon Books, 1984 の全訳である。これまでにも微笑している著者の顔写真が雑誌『ニュー・ディメンジョンズ』や『イースト・ウエスト』の表紙になっており、現在五十三歳のユング派分析家で、カリフォルニア大学サンフランシスコ分校医学部臨床教授の彼女がアメリカでは相当の有名人であることをうかがわせる。

日系アメリカ人である著者の家族の歴史は、まさにアメリカン・サクセス・ストーリーの典型と言えよう。父方・母方ともプロテスタントの祖父母は今世紀の初めに米国に移住した。母方の祖父ヤマグチは米国で医師になり、二人の息子だけでなく、二人の娘も医師に育てあげた。ビジネスマン、ジャーナリストの父親シノダと医師の母親メグミ・ヤマグチの間に生まれたジーンは一六歳の夏山でのキャンプのとき、神の存在を経験し、将来の進路が定まった。すなわち、カリフォルニア大学で医学を学び、精神科医になったのである。分析家としての訓練は一九六七年からサンフランシスコのユング研究所で受け始め、一九七四年にユング派分析家の資格を獲得したが、それまでに訓練生の組織を設立してその初代議長を勤め、後にユング研究所の訓練プログラムに大きな影響を及ぼすことになった。

分析家として訓練を受け始めた翌年に前夫のジェイムズ・ボーレンとともに超心理学関係の雑誌を発刊している。この活動がもとになって、『タオ心理学― ユングの共時性と自己性』（湯浅泰雄監訳　春秋社、一九八七年）としてすでに邦訳されている彼女の最初の著書が一九七九年に出版された。

すでに六〇年代の末には大きなうねりを見せていた女性運動に共鳴した著者は、一九七六年から毎年のように女性心理学の講義をおこなうことになり、従来のユング派における一面的な女性観を批判し、家族・文化的期待の観点も取り入れ、女性性の多様性を強調する新しい女性心理学を構想した。一九八四年に出版された本書はそれが結実したものである。なお、本書の男性版と言える『あらゆる男のなかにいる神々― 男性の人生と愛の新しい心理学』(Gods in Everyman : A New Psychology of Men's Lives. & Loves Harper & Row, Sanfrancisco)は、一九八九年に出版された。

著者は精神科医として女性運動に積極的に関与し、「ERA（男女同権修正条項）を支持する精神科医」のネットワークを一九七九年に設立して共同議長を勤め、一九八〇年のサンフランシスコで開かれたアメリカ精神医学会（APA）年次大会で「意識と良心（Consciousness and Conscience）」というグループをグローリア・スタイネムとともに組織した。その活動の具体的な模様については本書で何度か言及されている。現在、著者は中年の移行期のまっただなかにあり、数年前に長年の協力者、助言者でもあった夫ジェイムズと離婚し、しばしばアメリカ各地やヨーロッパの国々の聖地へ巡礼旅行をする。来年には『聖杯と女神と権力の指輪』の出版が予定されている。彼女は本書に登場する女神のなかでも特にヘスティアーに同一化してい

るようである。なお、今年二二歳になる娘メロディーは心理学と東洋の文化を専攻し、心理臨床家を目ざしており、一八歳の息子アンドルは今学期から大学で医学部進学課程の勉強を始めている。

さて、女性の読者の方々は、自分にぴったりの女神の章を「そう、そう。そうなのよね」といちいちうなずきながら、また、もう一つ共感できない女神の章については、「そう言えばあの人はこうだったのか」と、それまで違和感を感じてきた特定の女性を思い描きながら読んだことだろう。この著書は、それほど具体的かつ身近に迫ってくる力を持っている。

これまでの男性の手による女性心理や類型論を読んで、そこに女性の生命力を感じられず首を傾けていた女性たちも、七人の女神の描写のどこかに、あるいはあちこちに、自分に関する記述を見つけ、納得すると同時に、いきいきとした力が呼び起こされるのを感じたことと思う。誰でも、自分のことが正当に理解されていると感じれば、たとえそれが欠点を含んだものであっても、受容されたと感じ、素直に心を開くことができるものである。この著書を読み進むのは、傷ついた心を癒し、あるがままの自分を認め、新たな人生へと歩む勇気を与えてくれるセラピーにも似たプロセスである。

逆に、こうも言うことができる。これまで多くの女性たちは、男性たちあるいは同性である女性たちに（そこには自分自身もふくまれているのかも）どれほど理解されずにきたことか。女性たちの性質は、父権制社会の悪しき影響を受け、しばしば二者択一で捉えられてきた。その場合、自分と違う女性を受け入れることは、しばしば自分を否定することを意味した。少し前、世間では約二年にわたり「子連れ論争」というのが女性たちの関心を奪った。いたるところに整理されない感情が渦巻き、議論はあちこちですれ違い、結局私たちは何を得たのだろうか。あれほど多くの女性に影響力を及ぼし、多大なエネルギーが費やされたのに比べて、得たものはあまりに少なかったと言えないだろうか。仕事を持ちながらも小さな赤ん坊をそばに置いておきたいという気持ち（そこにはたらいているのはおそらくアルテミスとデーメーテールであろう）が、公私混同を嫌い、現代社会の価値観を支持するアテーナーのひんしゅくを買い、小さな子どもが周りにいてもごく自然に仕事ができてしまうヘステイアーに支持されたような形だ。アテーナーとデーメーテールのあいだで常に揺れている平均的な働く母親は、どちらかというと、自分のなかの解決されない矛盾をつつかれたように感じたようだ。さまざまな女性たちが、たとえば「専業主婦は正か否か？」といった二者択一的なふるいにかけられ、「働く主婦」が主張すれば「専業主婦」はみずからの存在をおとしめられたように感じ、（しばしば社会規範や伝統的価値観に則って）「専業主婦」が主張すれば、「働く主婦」は罪悪感もしく反発を感じることになる。女性の時代と言われているいま、本当に必要とされているのは、女性同士が女性の多様性を受け入れ、相互の違いを尊重できるような関係を結べることではないだろうか。それは、互いに固定した役割を押しつけ合うことをやめ、それまでは思いも及ばなかった新たな可能性に自分を開くことでもある。フェミニストも非フェミニストも反フェミニストも、感情的に対立するのではなく、理解し合う作業を通じて、女性のあり方に関する新しいパースペクティブをもたらすことができるはずだ。そのためにも、本書は有効である。

これはボーレンによって語り直された現代版ギリシア神話と言うこともできる。神話はそれ自身の生命をもっており、時代背景とともに変化しながら生き続ける。彼女の語った神話は、

あなたのなかでどんな新しい命を得ただろうか？　どの女神にくみしどんな道を歩むにせよ、この本の最後の章で強調されているように、一人ひとりが自分にふりかかってくる外的圧力、内的衝動に動かされて泣き寝入りするのではなく、自分の運命を切り開き、選び、結果を受けとめていくという主体的な生き方ができるようになればと思う。それは、女性が本来のパワーを取り戻すことなのである。

ギリシア神話の神々や人間の名の片仮名表記は、『ギリシア・ローマ神話辞典』（岩波書店）に従った。翻訳上、不明な箇所に関する訳者からの問い合わせに対して、著者から懇切丁寧な説明を手紙でいただいたおかげで、誤訳や意味の通じない箇所は最小限に抑えられているはずである。最後に、すでに拙訳の、同じくユング派のフェミニスト・セラピーの書物であるポリー・ヤング・エイゼンドラス『夫婦カウンセリング』（織田元子との共訳、創元社）への訳者による解説論文「ユング心理学における女性理解 ― フェミニズムとの接点を探る」を読んで、本書の翻訳を依頼してくださった新水社の村上克江さんに感謝申し上げます。

村本詔司
村本邦子

一九九〇年一〇月

＜著者紹介〉

ジーン・シノダ・ボーレン（Jean Shinoda Bolen）

ユング派分析家、精神科医。分析家として訓練を受けたサンフランシスコのユング研究所で訓練生の組織を設立。女性解放運動にも積極的に関わり、「ERAを支持する精神科医のネットワーク」を設立したり、グローリア・スタイネムとともに「意識と良心」というグループを結成したりする活動家でもある。現在、カリフォルニア大学サンフランシスコ分校精神医学部臨床教授。著書に「タオ心理学」（春秋社）がある。

女はみんな女神

2007年6月27日 PDF版 v.1.0発行　発行所 / 女性ライフサイクル研究所

書籍（絶版）
1991年1月25日 第1刷発行　発行所 / 株式会社　新水社